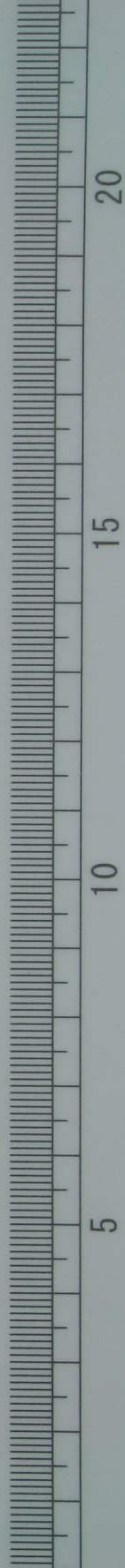
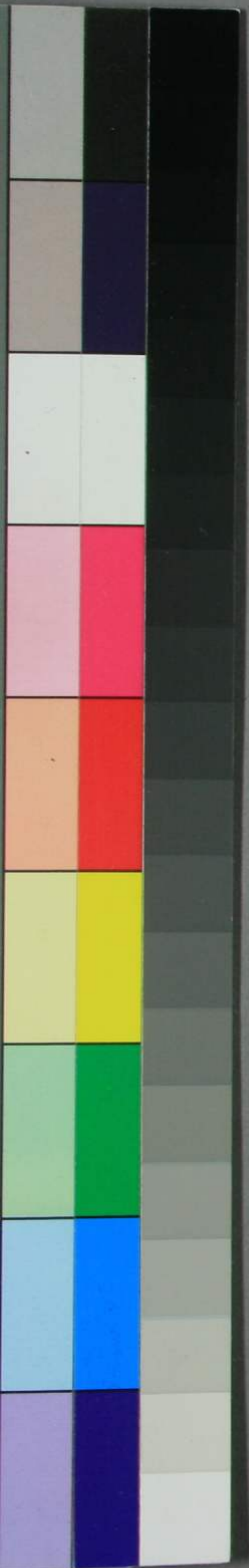


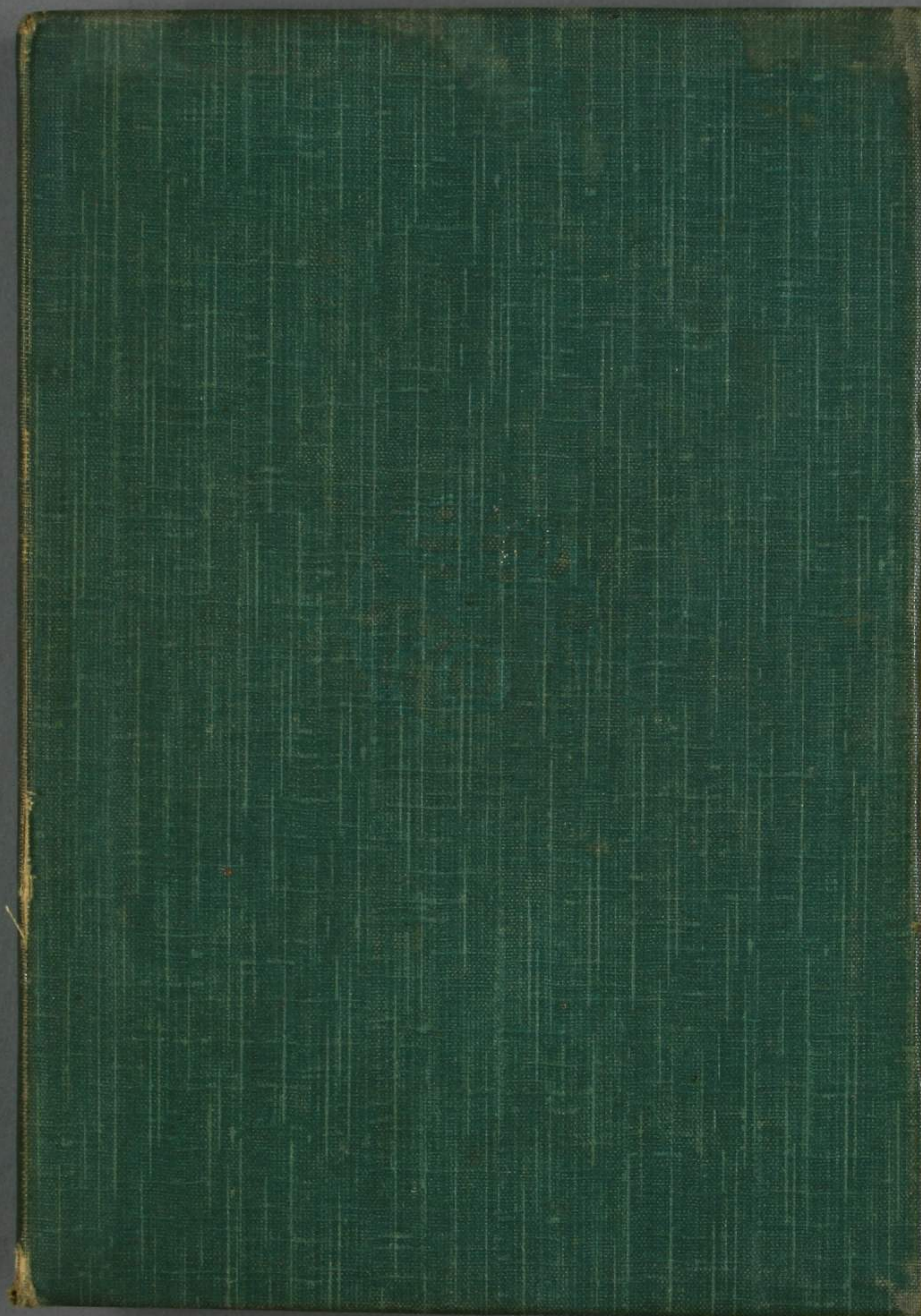
滯歐文談

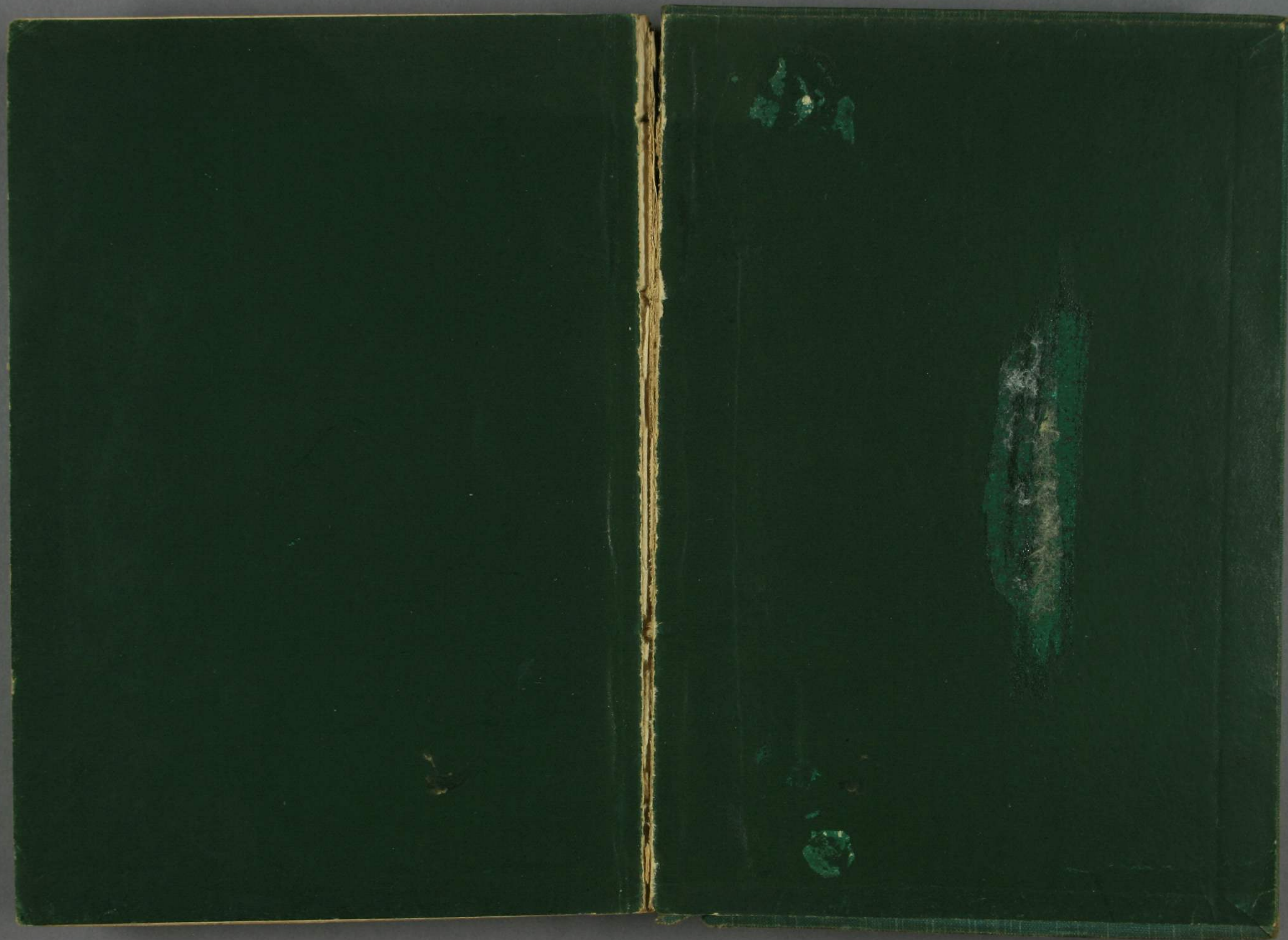




漢
歐
中
談

明
正
德
著





滯歐文談

(英國現在の文藝)



雜. 67.

序

一、本書に收むる諸文章は『讀賣新聞』に投寄したる
二三篇の外、すべて『新小説』滯歐文談欄に掲げたる
ものなり。

一、著者の歐洲に在りしは明治三十五年の春より
三十八年の秋に及ぶまで、約三年半其の間の見聞
を基として、始めの二年半は英國に在り。此の書は
専ら英國文藝壇の一部の現状を平面的に記叙し
たるもの。

一、蓋し外國人に取りては、現在の研究は却つて過

去の研究よりも困難なるの理、精神界の事に於いて殊に然り。書中記する所は多く平明の事實なり。こいへごも、其の現在にわたる限り、必ずしも夫の書冊の間より抜き來たるものに比して價尠なきは言ふべからざらん。

一、現在を觀るに於いて、事象の遠近高低を正しくするは最も難し。眼を遮ぎるの一指頭は必ずしも天上の月よりも大なるに非ず。本書中に存する幾分の苦心は亦た此の邊にあり

明治三十九年七月

著者





『レサレクション』に於けるツリー

去の研究よりも困難なるの理精神界の事に於いて殊に然り。書中記する所は多く平明の事實なり。さいへども其の現在にわたる限り必ずしも夫の書冊の間より抜き來たるものに比して價尠なし。こは言ふべからざらん。

一、現在を観るに於いて事象の遠近高低を正しくするは最も難し。眼を遮ざるの一指頭は必ずしも天上の月よりも大なるに非ず。本書中に存する幾分の苦心は亦た此の邊にあり。

明治三十九年七月

著者



「レサント」の「カチューツヤ」



『レサレグシオン』第一場、ツリーの子クリエドフミアシユエルのカチユーシヤ



アッシュエ



『レサレクション』に於けるアシュエル



『ソノカクシヤ』

ソノカクシヤ



『レサレクション』第三場、ツリーの子クリエドフミヤシエルのカチューシャ



Photograph of a man and a woman in winter clothing.





『レサレクション』第三場、ツリーの子クリュドフミアシユエルのカチユーシヤ





『レサレクション』に於けるブレードン



『ゲシテ』第一場、ア・ト・ボシカのカシ

60. 10. 10. 10. 10. 10.



『ガシテ』第一場、ア一坪シカのカシテ



「ズンテ」第一場アーバクマのズンテ

1907年11月10日

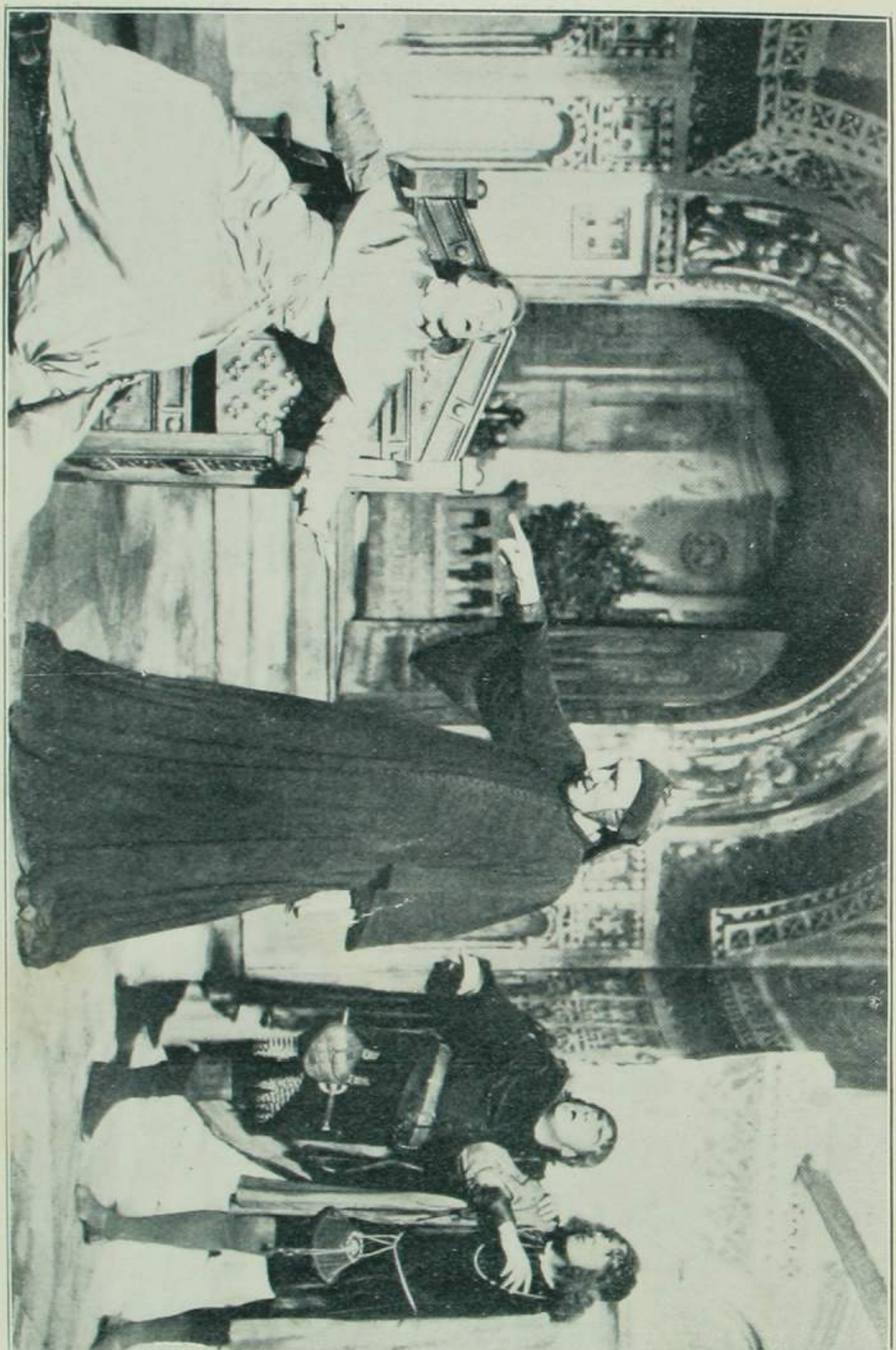


『オランダ』第一場アーギンカのオランダ



第四場、アイザックのガブリエルとモリスのロマンチ

アイザックのガブリエルとモリスのロマンチ



『ダンテ』第四場、アーヴィンガのダンテとモリッソンのコロナ

ダンテとモリッソンのコロナ



「アムステルダム」第四場、アムステルダムのガムナとモリソンのアムステルダム

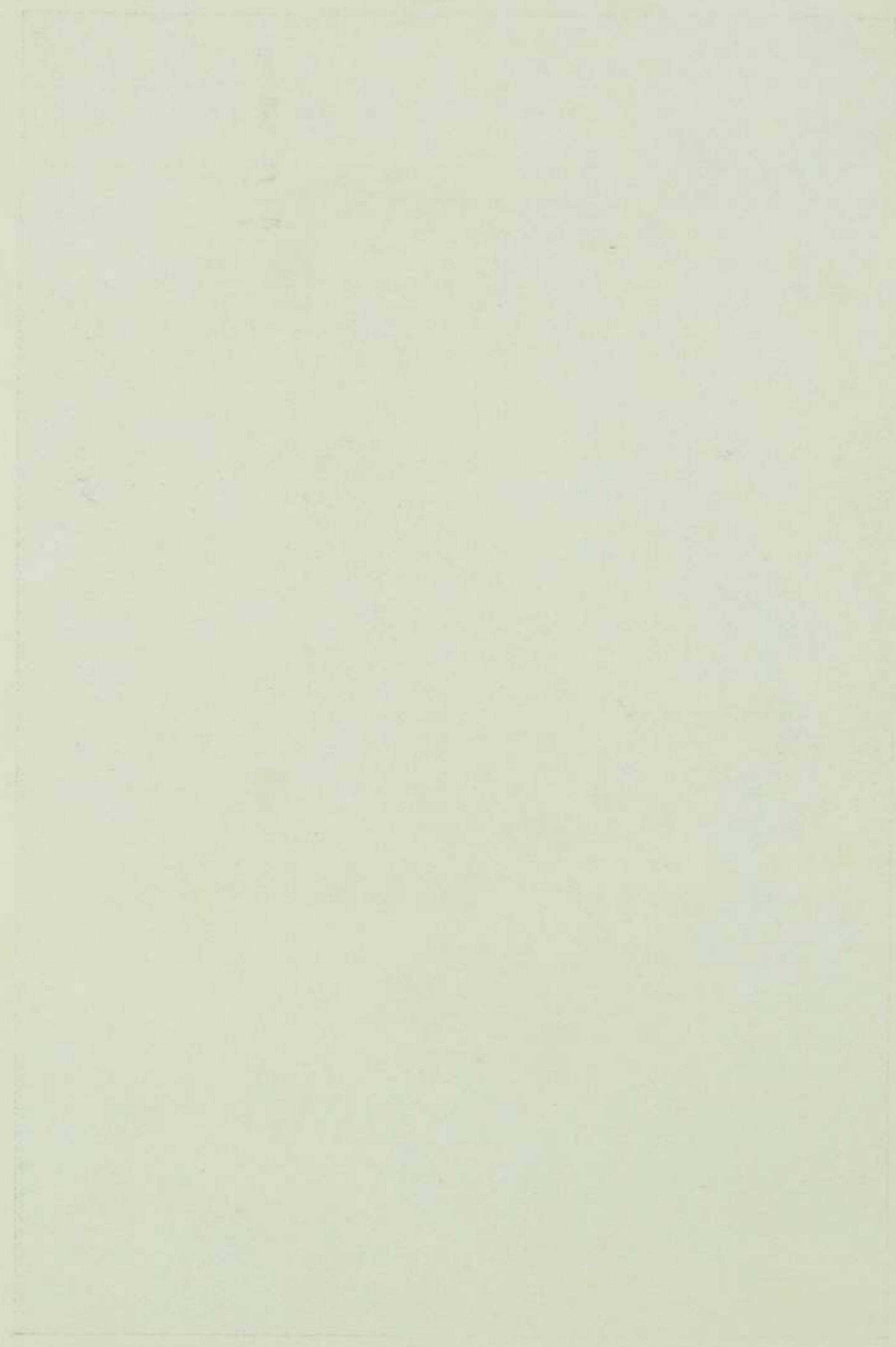
アムステルダム、ガムナとモリソンのアムステルダム



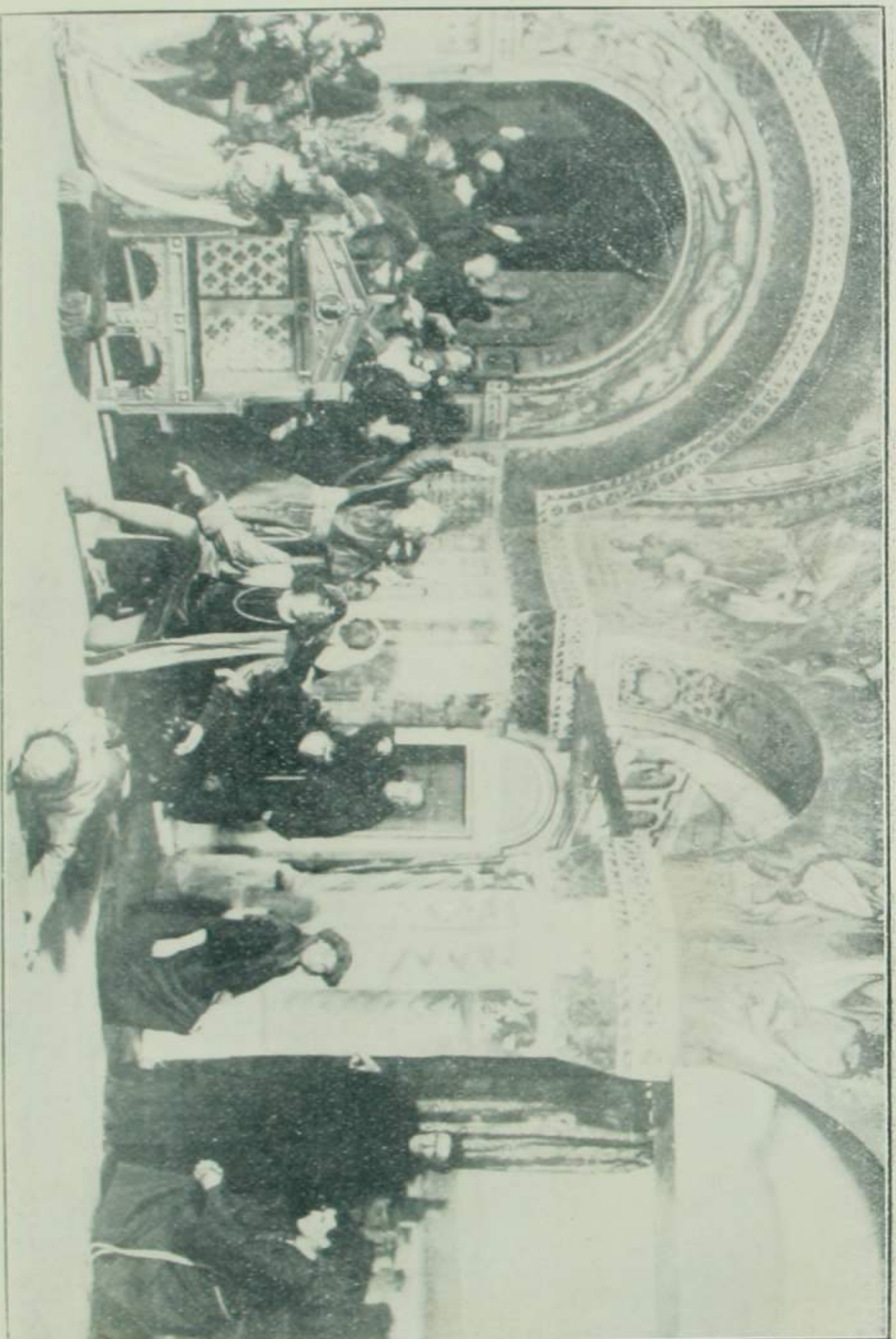
「グレン」第四場ア一井シカのグレンチとモリソンのコロシナ



「オペラ 第四場」アール・ド・フランスのアン・ド・ロマンのトロワ



「オペラ 第四場」アール・ド・フランスのアン・ド・ロマンのトロワ



『セビリアの理髪師』の第四場、アルカザールの入り口

目次

劇壇

- 英國の劇壇……………(明治三十六年三月二日編)……………一
- ツリーの『レサレクシオン』……………(明治三十六年五月三十日編)……………七二
- アーピングの劇『ダンテ』……………(明治三十六年十二月五日編)……………一三七

文壇

- 英國の小説界……………(明治三十六年一月廿七日編)……………二二三
- 英國詩宗……………(明治三十五年編十)……………二四七

雑事 (明治三十五年編)

ピンポン……………二六四

些事二三……………二六六

流行唄……………二六八

取りあつめて……………(明治三十六年八月七日編) 二七二

文壇雑報 (明治三十七年二月十九日編)……………二七二

クリスマス……………二七九

雑誌の事……………二八〇

新刊書……………二八五

思潮

思想問題……………(明治三十五年十月十八日編) 二九九

同進記……………(明治三十九年五月編) 三五四

偶感……………(明治三十九年七月編) 三五六

風光

新嘉坡より……………(明治三十五年三月編) 三六二

海上日記……………(明治三十五年五月編) 三六四

旅中旅行……………(明治三十五年五月編) 三八五

北英山水の概観……………(明治三十五年八月編) 四一一

基督の再來……………(明治三十五年九月十八日稿)……………四一九
(讀賣新聞)
 英米の同情……………(明治三十七年二月四日稿)……………四三一
(讀賣新聞)
 英國で見る日本……………(明治三十七年五月十二日稿)……………四四〇
 凱歌……………(明治三十八年一月十五日稿)……………四七五
(讀賣新聞)

英國劇寫真版十一面

目次完

滯歐文談 (英國現在の文藝)

島村抱月著



英國の劇壇

此の一篇は、著者が彼の地滯在中の見聞を基礎として、英國の劇壇に
 關する現狀を事實のまゝに報ずるものが主ですから、辨析はあまり用
 ひません。成るべく劇壇の全景、遠近が分かるやうに、といふ方針で、

表面の事を記述するのです。一種の劇壇案内記とも見られませう。二
さて英國の劇壇といへば、勿論倫敦の劇壇で、倫敦の劇壇といへば西
倫敦(ウエスト、エンド)の劇壇を中心とするのですが、茲にちよつと西倫
敦といふことの説明を挿みませう。此の地に來た人は誰れも知ッ
てゐる通り、倫敦の地の構へたるや、西より東に一帶のテームス河を
經として、川の向かふ、南倫敦が正に東京の本所、深川といふ形勢にな
ります。而して北のサバーク即ち川よりずつと北に寄つた外倫敦
を牛込赤坂麻布の山の手と見れば、テームスの北岸に沿うて西より
東に長く延びてゐる中央一帶の地が、倫敦繁華の中心、世界貧富の兩
端を集めた即ち西倫敦と東倫敦とで、東京ならば、京橋日本橋から下
谷淺草に續いた一帶に當たりませう。茲に必要なのは此の西倫敦
と東倫敦との事ですが、土地の人は之れを三つに分けて呼びます。

即ちウエスト、エンド。イースト、エンド。シチーと、この三つの名は日
に幾回となく聞く言葉で、東西兩端の間に更らにシチーといふ區界
を設けるのです。此のシチーといふ名が丁度東京で日本橋といふ
やうな意味に響いて、江戸の生粹、倫敦の本場といふやうなものです。
シチー、レデーといへば、濱町あたりに巢くふ婦人といつたやうな意
味も、多少交じつて來ないでは無い。(之れは勿論品行上から言ふの
では無い、氣意風采の上から言ふのです)。それで此のシチーをウエス
ト、エンドに對すれば、ウエスト、エンドは京橋から麴町へかけて、榮華と
權勢とを集めた形ちになり、シチーは實業の中心、財貨の大海といふ
趣きです。ベデカーの案内記の口吻を假れば、東にセント、ポールの
大伽藍を標示とする所、シチーは富の生産所で、西はウエスト、ミンスタ
ー寺院の空に抜く所、ウエスト、エンドは富の消費所とも言ひませうか

前者は英蘭銀行を筆頭として、あらゆる諸會社銀行、後者に王城議會、内閣、畫堂と、大凡の特質は明かに分かれてゐます。さてまたイースト、エンドはと申せば、是れは以上の二者と正反對に、世界の暗黒面、貧民窟の別名となつて居ります。淺草下谷の一部に相當させよう。要するにウエスト、エンドへ買物に行つたといへば、若い婦人等に三越、大丸を想像させ、悴がシチーへ通ふのでは、當世流行の銀行員會社員を子に持つた老人の口癖、イースト、エンドの觀察といへば、貧民事業、社會事業の相言葉と見てよいのです。以上の如き形勢ですから、倫敦の文華、趣味、流行の中心がウエスト、エンドにあるは言ふまでも無いことで、隨つて重なる劇場は悉く此の方面にあります。俳優はウエスト、エンド、シアターの檜舞臺を踏まぬ以上、以て倫敦の俳優といふ價值なく、倫敦の俳優も、ウエスト、エンド、ア

クターとして賣り出したものでなくば、以て何の何某と名のるが程は無いのです。そこで、此の國の劇場に、東力西漸といふことを、近來頻りに言ひます。其のころは、ウエスト、エンドの芝居が段々イースト、エンド的趣味に墮落して行くといふことで、英國劇の現狀が甚だ見劣りのするものなることを言ひ現はしたのです。東倫敦的趣味の芝居とは、どんな物かと言ふに、是れは日本の現狀なごに思ひ比べて、大差の無いもので、茲に當國現存の重なる芝居の種類を數へますと、高尚な劇にやはり悲劇、喜劇、若しくは喜悲劇のごちらともつかぬ、パセチックの劇等がありまして、此等を先づ總稱して眞の劇といひますれば、之れに對して俗受專一の物に、ミュージカル、コマデボー、コミック、オペラ、ファース。及びメロドラマなどいふものが

六
あります。勿論是等は科學的に分類した名では無いのですから、唯
通俗に少しづつの相違で斯やうに區別して呼ぶものと思はねばな
りません。ミュージカル、コメディーとは滑稽芝居に、歌音楽踊りを交せた
ので、コミック、オペラとは専ら歌音楽踊りのみで、滑稽若しくは喜劇的
の筋を演ずるもの、ファーストは通常の芝居の白介で滑稽劇を演ずる
もので、ファーストとコミック、オペラとを散文と韻文との兩端とすれば、ミ
ュジカル、コメディーは之れを搗き合はせたやうなものです。併し既に
根本に俗趣味專一といふ目的を一にしてゐる以上、此等のものが嚴
然區別を立てて存立するといふ必要は無いので、自然ファーストにもオ
ペラの分子が這入り、オペラにも芝居の科白が交じつて、結局調合の
度こそ様々なれ、性質はミュージカル、コメディーといふことに歸するの傾
きがあります。尙ほ便宜のため茲には此等を總稱してミュージカル、ブ

レーといひませう。即ち目下倫敦の劇場で最も客を呼んでゐるも
のは、ミュージカル、プレー（ミュージカル、プレーとミュージック、ドラマとは勿論意味
が違ふ。ミュージック、ドラマは眞面目な本物のオペラの別名に通じてゐ
ます。）といふことになります。
今一つ、メロドラマと此の地の人が呼びますのは、日本の所謂夢幻劇
よりも、少し廣い意味で、眞の劇が人間其の物を中心とするに對し、
寧ろ事柄を主とした所謂出來事の重積、一場々々の刺戟を主として、
變化、興奮、好奇、穿鑿を目的とする作の總稱です。尤もメロドラマと
いふ語は必ずしも悪い意味のみでなく、ロマンチックといふ意味にも、
また音楽のまじつたといふ意味にも用ゆる人もありますが、普通は
メロドラマチックといふ語に文學的價値の卑い、刺戟を主としたとい
ふ意味をあらはしてゐます。故にまた之れをセンサーシヨナルとも

八
稱へます。此の趣味が盛んに西倫敦の劇壇を侵してゐるのです。但し歴史を見ますと必ずしも是れが今に始まつた事といふのでは無いやうですが、近來はそれが段々募つて行くこのことです。斯くしてセンセーショナルの重いものとファーンシカルの軽いものと、即ちメロドラマとミュージカルプレーとが倫敦の俗趣味を代表して、悲劇喜劇の高尙な趣味を壓倒して行く。眞の喜悲劇と銘うつべきものまでが、兎角幾分づつは此の風潮の犯すところとなる。是れは作者が悪いか、見物が悪いのか、座主が悪いのか、そも、時勢が悪いのか、それらの論は他日に譲り、詮する所、多くの芝居が軽いものに寄席、仁和加の趣味を帯び、重いものに夢幻劇、壯士芝居のセンセーショナル、サイドと近づいて来る。大向ふ的、ガラリーの、すなはち東倫敦的になつて行く。之れを彼等が劇壇の東力西漸といふのです。

九
昨年から今年へかけて最も大入りを取つたものは、右の中にもミュージカルプレーが主で、其の中でも去年一年を打ち通して今以て續けてゐるもの『ゼ、トリアドア』(The Toreador 牛使ひ)、『エ、カンツリー、ガール』(A Country Girl 田舎娘)及び『チャイニース、ホ子ームーン』(Chinese Honey moon 支那新婚旅行)の三を以て此の種の代表と見られます。此のうち『トリアドア』は一昨年の書き下しで、去年一月の再興行、『カンツリー、ガール』は去年一月が初興行、いづれも一年を越えて見物を引いてゐるものです。『チャイニース、ホ子ームーン』に至つては既に六百回を超え、一度も休みなく、日曜は凡て音曲停止、打ち通してをり、尙ほ此の先幾日續くか分らぬこのことですから、以前『ドロシー』(Dorothy)の九百三十餘回を重ね、『藝者』(Geisha)の七百六十餘回を重ねたといふのに比して、今は倫敦の話柄の一つになつてゐます。此等いづれも、筋

は極めて單純で、性格といふやうなものは勿論なく、二組か三組のラ
ヴ、アフエヤースが一寸した事情か何かで纏れて、其の間に種々行違ひ
の滑稽などあつて、結局めでたく納まるどいつたやうなものです。が、
臺詞の多分は歌になつてゐて、歌から世話に、世話から歌にと、色々に
變化し、介も并の芝居ほごに賑やかにやります。また歌の間は、例の
舞臺前のオーケストラで、其の歌の性質により、賑やかな者には賑や
かな鳴り物、じめやかなものには、じんみりとした鳴り物を添へます。
歌は大抵、所々離れ〜に歌つても一の唄をなしてゐるやうに出來
てゐて、此れが世間の流行唄の一部となりまゝです。随つて長く打ち通
すものでは、折々新作歌を所々に入れ替へて人氣を繋ぐ。多くは戀
に關したもので、または道化た調子のものです。全體たゞゲーに愉快
に、軽く華やかなものを主とし、ますから、毎場一つ位づゝは滑稽か奇

麗かを旨とした踊りがあつて、歌群といふよりも寧ろ舞踏群が、出で、
例の豊富な色彩の意匠に、翩翻の裾をかへす様は、満目たゞ渦巻く虹
のやうな觀を呈します。踊りや歌の喝采せられる場合には、二度三
度時によると四度も五度も拍手で、其の役者等呼び返し、同じ藝を
繰りかへさせる、随つてたゞ流行唄などを唄ふ場合には、役者が豫め
之れを用意し置いて、引きかへすたびに、かはつた歌を唄ふ。是れは
パントマイムや寄席には最も多くあることです。また西洋の踊り、
殊に此の種の劇に於ける女優の踊りでは、踊りといひ歌といひ概し
てゲーな情調をあらはすを主とするため、重なる女優の顔は常に見
物に向かつて、百媚生ずる底の笑みを絶たない。是等がすべて見物
を惹く要素でせう。
さて右に數へた三つのミュージカル、ブレースのうち、前の二つは田舎へ

派出した組のを當オクスフォードで見たのですが、倫敦で見た「チャイ
ニース、ホ子ームーン」の筋を言ッて見れば、道化た一人の男があつて、
親子ほど年のちがふ若い美人と新婚旅行に支那へ来る。然るに男
には關係深き一人の老寡婦があつて、是れも世をはかなんで支那へ
来て、茲に二人が同じホテルに落ち合ふといふに滑稽がはじまりま
す。一方には支那の天子に扮した人が、好配を求めて、右の新婦たる
英美人に懸想すること、一人の若き英人が支那の王女と相愛するこ
となどあつて、道化役の中心としては、著者の見た時のは、ミス、ソリヴェ
リアンといふ、ちよつと賣り出した女優がホテルの女中に扮して、是
れが右の若き英人に横戀慕するといふ可笑味などあり。滑稽趣味
の歌は多く此の役が唄つて、おのづから一座の巻頭に坐つてゐる。
終りはめでたし〜であるが、其の間に怪しげな支那の婚禮式、外人

が日本の旅行記に必ず書いてをかしがらる、二尺も三尺もある宿屋の
勘定書などいふものを點出して、滑稽を加へ、支那の天子が自由に結
婚の法律を改定するとか、支那の婦人は男の意のまゝになること、奴
隸の如しとかいふ意味で、東洋は男の天國樂土といふやうな調子を
見せる。幕敷はたゞ長い二場で、ホテルの庭と、王宮の中、道具書割は
遠見に堂塔を見せた具合から、朱欄碧櫓、まづ支那と見えるが、熱帯地
方の植物をあしらつて、全體の色の調子を暖色にしてゐるのは、別に
考へた譯ではなく、東洋といふことと、帯色人種といふことと、暖國と
いふことが、彼等俗人の頭になつてゐるからでせう。歌群の
役は支那の宮人、宮女、または新婦に附いて來たブライド、メーヅなど
いふ形ちで出で、歌は凡て十九曲、英歌群で歌ふものには「ゼ、ア、ラ、ガ
ル、イズ、エン、イングリッシ、ミ、ガール」などの調子のももあり、支那歌群で

歌ふものには、チン、チャン、チャイノー。テヤンガ、リంగా、ライノーなどの調子のもあり、こゝでは見事な日本の日傘を車輪に形どって踊ります。また中で一曲は、歌の間に、ツリー。ヒックス。テリスなど名優の声色身振をする所もあります。要するに歌ですから精しいことは書けないが、以上で大體の趣味は察せられませう。右の外純粹のコミック、オペラの意味で好評を博したものに『メリー、イングランド』(Merrie England 愉快な英國純粹のファーストとして好評のものに『ゼ、ニウ、クラウン』(The New Clown 新道化方)があります。前者は見落としたが、後者は、我儘な貴族の若殿が、婦人の話で友人にからかはれ、躍起となつて手を挙げ打たんとするはづみに、窓に腰かけてゐた友人を下の川に突き落とし、友人がそつと水を潜つて外へ行つたとは心づかず、一途に友人を殺したこゝろ信じて大騒ぎするとい

ふに始まり、身を隠す手段につきて、無宿の立ん坊に頼み、其の身代りとなつて、輕業師の道化方は雇はれるといふ可笑味が中心です。是等はファースの體を得たものでせう。俳優のウエルシュといふのが、此の方面の上手だけに、我儘セツかちの若殿の性格が滑稽の中、極めてよく發揮せられました。次にメロドラマの方面では、最も評判であつたのが二つ、ラレイの作でドルーリー、レーン座に演せられた『ゼ、ベスト、オブ、フレンツ』(The Best of Friends) 第一の友人と、マッカーシーの作でセント、ゼームス座に演せられた『イフ、アイ、ウワー、キング』(If I Were King 我にして王たらば) ことです。就中前者は評判のもので、荒筋を言つて見ますと、幕はオクスフォードの景色で開きます。一貴族の若者と杜國の一將軍の伴と、同じ學窓の友達で、たま〜一人の美しい輕業師の娘の馬車

一六
から墮ちたのを助けたが縁となり二人とも同じやうに其の娘に想
ひを懸け、兩人の交りは之れがために破れます。時恰も南亞戦争の
最中で杜國の父は義軍のために伴を呼び返しに來てゐる。杜國の
若者は之れが爲め遂に戀を跡にして歸國する。此の幕でボア將軍
の人物と人として斯程まで博愛仁義の英國民を國として敵よ身方
と血を流す云々と言ふ意味の場あたりがあります。さてまた貴族
の若者の方も義勇兵となつて、いや／＼ながら南亞に出向くことに
なり、輕業師の娘も興行の爲め彼地に來て居て、舞臺はフランスワ
ルとなり、其の間に惡漢が娘等を苦めるなど、色々の纏れありて、其の
うち戦争は愈杜國の敗となつて杜軍降服の場となる。此の一場が
全劇中最も世評に上つたのは、一つは時節柄であつたからでせうが、
杜將軍に少なからぬ同感を寄せた作者の大膽も噂となつてゐたや

一七
うです。即ち殘壘の間に杜國の旗を高掲げて右の杜將軍が死す
るまでもと守りを固うしてゐる。傍らには其の伴が却つて英軍の
間諜なりとの疑ひを受けてゐる。たま／＼降伏の議定まれりとの
知らせと共に、兵器を受取りに來た英軍の士官は彼の貴族で、舊怨を
忘れて、友人の冤を雪ぎ、此の邊記憶がおぼろですが、たしかこんな關
係であつたと思ひます。將軍も兵に命じて國旗を下ろし銃器を投げ
出し天を仰いで悲憤の涙に咽びますが、此の邊は流石に滿場水を打
つた如くでした。忽ちにして將軍は感慨極まつて卒倒し、其のまゝ
瞑目してしまふので、伴が傍に引き下した國旗を取つて死顔を覆ふ、
皆々愁然たるこなしで幕になります。此の幕だけは悲壯劇になつ
てゐました。其の跡の舞臺は再び英國で、輕業師の娘實は某貴族の
跡取り娘なりしことが知れ、彼の義勇兵たりし若者との戀も釣り合

ひて愈めでたく貴族の邸に入るといふ其のお別れ興行として、件の娘が數十間の高檜から繩を口に咬へて下りる。其の興行場が最後の幕です。然るに娘の財産に心をかける悪人があつて、此の興行の途中で上から繩を止め娘を殺さんとする。肉襦袢一つで綱を口に咬へ手を後に括つた美人が舞臺の宙に吊り下がって苦むといふのが見せ物で、眞の見物までがひや／＼する。段々エキサイトメントの激しくなつた頃に、忽ち他の藝人が一方の綱から飛びついて半死の娘を救ふ。謀破れて檜上の悪人は身を遁れんと其の綱に傳うて下る所を上から綱を切られて却つて之れが爲めに死ぬといふ大詰めです。此の邊すべてメロドラマの本性を暴露したものです。通俗趣味の方面の細説は是れくらゐにして、次にうつるのですが、劇場や作者俳優の事をも其の中に一括して述べませう。

此の地の脚本家には、勿論日本の如く何座付といつたやうな事はない。たゞ其の作者が作風からして、おのづから何座向とか何の俳優向とかいふ偏りは多少出て來てゐます。其の他種々の個人的關係から、一時は其座または其の俳優附のやうな形ちになることもあれど、是等は何も一定したものでは無いのです。例へば前に言つたラレイ(Cecil Raleigh)の如きは其の當たり作が此の前の『ゼ、ブライス、オブ、ピース』(The Price of Peace 平和の價)といひ、今回の『ゼ、ベスト、オブ、フレンツ』といひ、皆同じ趣味のメロドラマで、兩作ともドルリー、レイン座で初興行をして、それから地方へも場末の劇場へも廣がるのです。殊に其の妻君がミセス、ラレイといつて、此等の劇を演じた一座の俳優です。従つて、作者と其の一座とは深い關係になる譯です。劇場との關係にしても此の先何回のドルリー、レイン、メロドラマは

此の作者に頼むといふやうな事になるのです。また此のドルリー
ー、レイン座といふのは、御承知の如く倫敦では最も古い最も大きい
劇場で、古来の英國劇史には色々の因縁を持った座です。直ぐ近く
のライシラム座とは相并んで倫敦劇場の元老ですが、ライシラム座
は今や不幸維持の方法つかず、公賣の非運に陥るッて、其の名譽たり
しアーキングの座頭も去年限り、今年はこのドルリー、レイン座に
彼れを見ることゝなりました。ドルリー、レイン座はまた年々ク
リスマスから正月へかけて打つパントマイム即ちお伽芝居、其の實
多分は大人の見物だの本場で、ウェスト、エンドのパントマイムといへ
ば、此の座に止めをさす。また、それらの關係からして、道具、書割に金
をかけ、莊嚴美麗人の目を驚かすことをするのも此の座の特色で、隨
ッてメロドラマなどの、舞臺に觀せ物的大仕掛の入用なものは、最も

此の座で初興行をするに好都合なのです。今ではドルリー、レ
ー、レイン座といふことに、一種目先を喜ばすばかりといふやうな意味の
伴ひかけて來たのも、此等の理由からでせう。勿論斯やうには言ッ
ても、由緒ある劇場だけに、高尚なものも打つ。俗向き一遍とはいへ
ないのです。格からいふと、倫敦第一の劇場です。而してドルリー
ー、レイン座のメロドラマといふことゝ脚本家、レイの名と密に結
合してゐることが、やがてレイの成功してゐる所以です。之れも
前にいつた「イフ、アイ、ウワー、キング」の作者マッカーシー (I. H. Mc Carthy)
是れまた可なり著名の脚本家で、小説も出てゐる。本來此の作者の
物はレイのよりも一層アムピシアスに一層文學的でなくてはな
らぬので、右の作の如きも初めからメロドラマといふ積りでも無か
ツたのでせう。初めはコスチューム、ブレイ即ち時代劇と註してあり

ました。是れはセント、ゼームス座で名優の一人アレキサンダーが演じて百日以上を續けたものです。

さて右の諸家はまだむしろ壯年作者の方で、是れと略ぼ同格の所では、チムバー(C. H. Chamber)、マーシヤル(Captain R. Marshall)、フヰツゼロール(S. J. A. Fitzgerald)、フード(Basil Hood)など重なるもので、更に此等に比して先輩の方を挙げれば、グランデヤ(S. Grundy)、シムス(G. B. Sims)、ジョーンス(H. A. Jones)、マチロー(A. W. Pinero)、ギルバート(W. S. Gilbert)、バーレット(W. Barrett)などがあります。勿論以上の外に漏れたものもありますし、細かい比較も、研究がまだ十分でないから立ちませぬ。右のうちで去年當り作のあつたものには、フード、これが前に言つたコミック、オペラ『メリー、イングランド』の作者で、此の種のものが得意で、ギルバートの一層多くコメディ的なのと對せられる作者です。ジョ

ーンスは佳作はなかつたれど、極めて元氣で、先達ではガリック座が新作を出すにあたり、タイムス新聞の劇評家が日頃自分の作に悪評を加へてゐるといふ所から、之れが入場を拒絶せしめて、劇評家對脚本家事件といふ問題を起こし、斯界に波瀾を揚げた人です。之れを要するに以上の人々は従來脚本家として知られてゐるので、すが全體からいふと、其の脚本家といふ所に、どうも文學的價値が少くないといふやうな意味を持つて來る恐れがある。俗受の方に流れ易いといふ意味を持つてゐます。此に於てか、劇界が若し向上的に佳作を得やうとする日には、勢ひ之れを他の方面に求めざるを得ない。其の方面が二つあります。一つは廣い文壇に之れを求め、そので、一つは外國物を輸入するのです。大陸の多くの現戯曲家が英國のよりも或る點に於いて一步を抜いてゐるといふことは、當國の

識者も認むる所で、嘗に劇のみならず、小説また英國の現狀はむしろ彼れに蹶押されるものなることは、前號の本誌にも論じた通りです。そこで佳作を外國の脚本に求めるといふ中にはまた廣く之れを外國の文壇に求めるといふ意味も籠って來て、結局文學的價値のある小説または脚本を廣く内外に求めるといふ向上的傾向になるのです。此の傾向が突然昨今に始まつたといふ譯ではないのです。が、文壇一部の人々が去年よりも今年の英國劇壇を一層望みあるものとするのは畢竟此の傾向が今年になつて一層著くなつたからでせう。

去年の劇壇で最も文學的價値を有して且つ舞臺にも成功した作といへばバーリー(J. M. Barrie)の『クオリチー・スツリート』(Quality Street)及び『ゼ・アドミラブル・クライトン』(The Admirable Chrichton)とスチーブ

ン、フリップス(Stephen Phillips)の『ユーリシス』(Ulysses)及び『パオロ、エンド、フランチェスカ』(Paolo and Francesca)などであるといふ事實の如きも、一年に於ける此の傾向を示すものと見てよいのです。此等の作者は皆單に脚本家といふよりも、寧ろ詩人、小説家といふ方面から成功したものと見るべきです。バーリーの事は前號にも一言したと思ひますが、兎に角此等の作あつてより、此の二人の聲名は一層高きを致し、キプリング、ワトソンと并んで壯年文士(詩人、小説家)といふ意味の中の四大明星といふ有様になつてゐます。

フリップスの作中『ユーリシス』はヒズ、マゼスチー座でツリーが演じ、『パオロ、エンド、フランチェスカ』はセント、ゼームス座でアレキサンダーが演じ、共に名優の舞臺に上つて喝采を博したもので、俳優の技に負ふ所の多かつたのも勿論でせう。此等の作は、其の名の示す如く時

代的ロマンチックの物で悲劇若くはそれに近いものですが(記者は二作とも見得なかつた)詩劇(Poetic Play)と特に書き出されてゐる。是なぞが矢張り前言った傾向に應ずるもので、今一つ此種の作に恰好な名は、ロマンチックと云ふですが、作者が之を取らずしてわざと拈つた詩的といふ形容詞を用ひたには、理由のあるとせう。即ち目下當國で普通にロマンチック、プレーと呼ぶものには、單に時代物といふ意味が主となつて、其作柄はといへば、千篇一律、日本で言つたら、寶物の紛失、名刀の行衛が戀する女の操立て、分かるといふやうな、コンエンシヨナリズムの作が多いのです。記者の見たうちで『子ル、グヰン』(Zwilling)『なごいふ芝居が、其の好標本ですが、是れは例のチャールス二世の寵姫子ル、グヰンが後宮に入る事を仕組んだもので、チャールス二世が蜜柑賣の娘子ルを見そめる。同時に、娘は王の忠臣某といふに相思

ふ中となりたれど、讒者のために某は謀叛の疑を受ける。されど結局姦黨亡びて、無實の疑ひは晴れるので、女も満足して戀を捨て、後宮に這入る。男は外に以前から自分を慕つてゐた婦人と結婚するといふのが大體の筋です。是れが此の種の芝居に最も多くある型だと思へば大差ないのです。以上の譯で、此の種のロマンチック、プレーと區別したいために、別に詩的といふ名を冠したのであらうと思はれる。外に中世のモラリチー、プレー若しくはミラクル、プレー。子チヴ、チー、プレーなどいふものを復興せんとしたるものもありましたが、是れは不成功でした。また舞臺の装置、就中光線、色彩の使用上に新工風を加へて、道具書割を専ら情の發揮に傾けやうとしたものもあつた。是れは今尙ほ盛んに工風中との事ですが、去年一二箇所を試みた結果は、一部に其の

將來の成功を認められると共に、多數の見物には不受でした。其の人はクレীগ(Gordon Craig)といつて例の當國女優の棟梁エレン、テリの子ですが、今では方々の舞臺の光線道具立などの意匠を専ら引受けてやる。母のエレン、テリは女優の本職は勿論、舞臺の衣裳の工風に長じて、一方に衣裳會社のやうなものを組織し、廣く新作物の衣裳調製にたづさはつてゐる位ですから自然其の子も似た方面に天才を持つて生まれたのかも知れませんが。例へば舞臺の書割をただ色ばかりで塗つて、自然其の場の情が之れがために強まるやうな工風をするとか、凄味の幕には書割に人間界以外の不思議な世界を見せて、之れを其の芝居と調和させるとかいふ様で、つまり舞臺の裝置に寫生よりも寫情の分子を加へやうとするもの、言はゞ音樂の爲す所を道具書割で爲さうとするやうなものです。随つて此の意匠

は寫實風のものよりも詩劇奇蹟劇なごいふものに適し、レグ(R. Legge)といふ作家の作で、エレン、テリーの弟、フレッド、テリーといふ人氣俳優がシヤフツベリー座に演じた「フォア、ソード、オア、サンク」(For Sword or Song)の舞臺裝置は、即ち右のクレীগが意匠として評判のものでした。併し其の不思議な幻のやうな現象を見せた所は、見物受よろしからず、後に省かれたさうです。以上の諸事實に冠するにアーキングがライシラム座に於ける「フォウスト」を以てするとき、英國劇壇の高い趣味に屬する一面が、おのづから一種共通の傾向を有してゐたといふことが明かです。即ち此の方面に漲ぎつてゐる流れは、ロマンチック若しくはポエチック若しくは標現的といふことです。アーキングのは原作の初めの部分だけによつて、マーガレットが獄屋の中に死ぬると共に、天人の樂聞こえ

て、其の靈は上天し、ファウストは其の死骸に取りすがつたまふ、惡魔は之れに先だつて遂に遁竄するといふ纏まりにしてあります。アーギングは惡魔メフリストフェレスに扮したので、慥かにむつかしい役には相違ありませんが、何分にも詩としての惡魔の地位が、沈思冥想に待つて始めて趣味の題目となるべき性質のものだけに、あざやかに舞臺の上に見せては、只の迷信的のものに墮し易い憂があつたやうです。

言ふこゝろは、本來此の詩に於ける惡魔の出現といふ不自然の現象が何故にインプロバブルといふ反感を呼ばないかといふに、主として、我等が之れを標現の意味から味はつて、しばらく其の事實を離れるからでせう。即ち此の場合に惡魔を惡魔として、あんな一種の存在が實に此の世にあると信じやうとすれば、普通の人には忽ち不可

有不自然といふ反抗の感を起こして美を破るし、また斯くの如き反感を起さずして初めから實にこんな物も五官の世界に居るかも知れないと信じ得るとすれば、それは知識の水平線の低い階級を代表するまで、之れを一世に強ゐることは出来ないのです。

から此の場合に我等が安んじて立ち得るには、一種特別の心の状態が必要である。聊か講義めくが、簡單に説明して見れば、それは成る程美術に對する時術の力で、一刹那全く其の眼前の事物にアブソーブせられて、自分の頭に連想を恣にする餘地の無いこともあり得るのです。併し單に斯やうな状態のみを以て美術の目的を達しやうとするのは間違ひで、さやうの極端な状態は概して刹那的のもので、繪なり芝居なりを見てゐるうち、或る刹那は眼前の景に氣を取られてをり、次ぎの刹那はそれを本に自分がさまゝの連想を頭の

中に漠然と編んでそれに思ひ耽ける。且つ向かふのものを見ては、
 且つ自分の頭の中を見るときいふ風の心持が、大きな高尚な美術には
 必要になつて來るのです。只もうスリリングに、息もつがせないで、
 見せさへすれば、中身は何であらうが構はぬといふのは、大美術には
 出來ない事です。大なる觀美心は一直線のもので無いといふ、是れ
 が見落すべからざる根本の事實です。そこで前の論が出る、即ち既
 に美術觀照の間の心は決してたゞ一息のもので無いとすれば、茲に
 其の見てゐるものが可有であるか、不可有であるかといふ知識性に
 感觸して來る餘地がある、理由がある。知識性、經驗性が満足を得ん
 ために因果律の照應を要求して來るのです。であるから、大なる美
 術には此の要求に應ずべき準備が無くてはならぬ。頭から此の要
 求を打ち消す方策を考へるのみでは足りないのです。之れを美術

の一要件たる自然化と名づけませう。
 而して其の自然化の方法は場合によつて幾種もあり得ますが、前
 つた不思議物の場合では、其の物本來が普通の知識から見てすでに
 不自然なので、それから之れを哲學的知識から自然化するの外は無い
 のです。但し哲學的に自然化するといつても、何も哲理で議論して
 といふのでは無い。作者若しくは作者と同程度の見物が、其の不
 然を過去現在の經驗の自然と何所にか調和し連續すと思ひ得るだ
 けの影を添へて置かねばならない。或る程度の頭の中では、其の不
 自然物から廣がり出る想像が、他の自然物と必然抱合し得るやうな
 渡しを豫め、かけて置かねばならぬ。其の渡しのかけ方で作者の技
 倆の一面が見えるのでせう。
 是れが自然化の一法であると共に、今一つの方法は、標現によつて不

自然を自然化するのです。茲に標現といふ語は、假現といふやうな意につかつたのです。即ち其の不自然物を、其の物みづからとして見ればいかにも不自然不可有と感ずるが、それは唯假りの姿であつて決して此のまゝを實在と思へといふのでは無い。唯假りに想像したら斯うもあらうかと思へば、それでよいのである。象そのものには重きを置かず、其の奥に別に自然を貫ける思想を藏して、其の思想を趣味の要點とするのです。それでいよ／＼本題に歸つて、「フアウスト」の中の悪魔メフ井ストフェレスの如きは、此の第二の方法すなはち標現によつて自然化せらるべきものでありませう。芝居でするやうな形相は勿論詩中にある言語動作といへども、あんな事實がひよつとしたら實世間にあるかも知れぬと思ふことは到底出來ない。また作者も右の如く思はせて之れを自然化しやうとはしなかつた

のでせう。此の場合の自然化方は、たゞ之れに人間運命の半面を寓したものと納得させる所にあるのでせう。人間運命の半面に歸趨を求めて、それを人間になぞらへ想像したら斯うもあらうかと思はすれば、其れでよいのでせう。随つて深い趣味の源は、其のメフ井ストフェレスたる所に非ずして、其れが標現してゐる無形の哲理にある。無形の哲理が別項「思想問題」の末に書いた手續によつて美となる所にあるのです。斯う考へて見れば、標現のメフ井ストフェレスは、却つてあり／＼と眼前に體現するよりも、少しく朦朧たる方に趣味が多うさうに思はれます。明瞭に具象してゐる點に要なくして、之れを離るゝ所に味のあつるものですから。右の意味で記者は舞臺のメフ井ストフェレスに不満足を感じたのですが、アーギングの藝として最も感心したのは、其

の事に觸れて全人間を冷笑し小兒視する大驕慢の態度のいかにも
 大きいといふことでした。後に英國オペラで見たメフネストフェレス
 は、勿論オペラですから仕草は少ないが顔の拵らへ、衣裳など凡て略
 ぼアーキングと同型なりしに拘らず、小さい人間としか思はれない
 でした。尙ほアーキングの『ファウスト』は、見物は相應に來たさうで
 すが、批評家受世間受ともに太したことは無かつたのです。

ちよつと茲で俳優と劇場の事を一言すれば、目下當國の俳優で第一
 に指を屈すべきは、言ふまでもなく右のアーキング (Sir Henry Irving)
 です。アーキングの事は日本の讀者にもよく知れてゐるから、多く
 言ふ必要はないのですが、年齢から言つても、地位名望からいつても、
 英國劇壇の棟梁正に日本の俳優間に於ける團十郎といふ格です。
 三十年來ライシナム座に座頭として、ドルーリー、レーン座に次いで

古い此の座をます、由緒あるものとしきました。併し其の由緒あ
 るライシナム座も、今言つた如く金といふ敵には叶ひがたく、去年限
 りとなつたのは是非ない次第です。今年はドルーリー、レーン座に
 『ダンテ』(Dante)といふ大物を見せるこのことで、倫敦中の是れ沙汰、却
 ツて舞臺の装置には一層の存分を盡くすことが出來て、よいかも知
 れません。其の地獄の巻には、忽然墓場の土割れて、中より諸々の史
 上の人、死骸のまゝにせり上げ來たり、眼を開いてこゝに因果を説く
 なごの景もあつて、此の場の道具ばかりにも四萬餘圓を費やし全體
 にては十萬圓を超えるこの噂です。此の芝居は兎に角後に述べる
 ツリーの『レサレクション』と相待つて、今年劇界の兩偉觀と數へられて
 ゐますから、開場の上は、一見して精しく紹介しませう。
 アーキングを團十郎とすれば、是等すべて藝風の上の比較では無い、

番附面の位づけから假りに想像していふのです(菊五郎の座にすわるのは働きの上からいへばツリー (Beerholm Tree) でせう) 元老といふ格からいへばウヰンダム (Sir Charles Wyncham) でせう。ウヰンダムは去年サーの爵を貰ひ、また戴冠式には劇界を代表して式に列なつた。年から言つてもアーギングの六十六歳より三つ許りの年下、藝風は本来コメデアンで軽いものゝ方から出たのですが、今では世の辛酸を嘗めつくした大通人の滋味、自分の心一つで了簡をつけて事を丸く納める人物、誠實の庄屋などいふ役に妙を擅まにして、あツさりとした風味です。時藏などいふ所のも少し捌けたものかも知れませぬ。記者の見たのは『ローズメリー』(Rosemary) といふ芝居で若い朋友のために、ジツと自分の戀を我慢し、女と朋友の去つた後、其の楽しい紀念の家を永く自分の住居に買ひ取つて、五十年の後、頽然たる好

老人となつて、不圖壁の間から昔の手紙の朽ちたのを見出し、うツとりとなつて戀の古へを想ひ出すといふのです。此等が最も箱ツた役なのです。また此の人は俳優中最も多く、劇場を支配してゐる人で、クライテリオン座、ウヰンダム座、新開座の三座に座頭及び座主となつてゐます。全體の傾向から云ふと、保守的で、あまり突飛の物よりは人氣受けのするものを先にといふ具合ですから、一方には喜ばれません。俗な方といつてよいでせう。是れには一つは其の座主として劇場の鍵を握るといふより自然に來る用心もありませう。此の國の座頭といふのには、只のマチージャーとアクター、マチージャーと二通りあつて、ウヰンダムの如き、ツリーの如き、アレキサンダーの如きは皆俳優座頭ですが、只の座頭と一般俳優の仲は、やはり給料を拂ふ拂はぬの關係から、おのづから敵身方の形ちになつてゐるのが多

四〇
いやうです。マナージャーは狼なり、我々俳優は常に其の餌食となり
居る羊なりなど慷慨してゐるのが立派な俳優にあります。また批
評家の方でも劇の進歩を妨げるものは座頭(或は座主)だ。彼等が射
利をのみ目的として俗受けのミジカル、ブレイの如きのみを興行す
るから、自然に興味を墮落させるのだ、之れを救ふの策は佛蘭西など
の如く国立劇場を興こして劇を射利以外に立たしむるの外に無い
など論ずるものがあります。国立劇場の事は此の地でも種々議論
もあるやうですが、中には近時の佛國劇場の紛擾などを例にして、國
立もあてにならぬなどいふものもあり、未定の問題になつてゐま
す。併し兎に角出来れば是れより結構な事はないでせうが、日本な
らば例の監督といふやうな譯で、國定脚本などいふ騒ぎでも起こつ
たら大變でせう。

ウヰンダムに續いての元老はエドワード、テリー(Edward Perry)でせう。
テリー座の座頭で、一方の旗頭には相違ないが、去年はあまり振はな
かつたと言つてよいでせう。此のテリーはエレン、テリー等の一族
とは別です。その他ツール(J. L. Toole)ブラフ(L. Brough)ハア(J. Hare)
などいふ老輩もありますが、此等は多くコメデアンとして、やゝ軽く
見られてゐる氣味です。
ピアボム、ツリーは當年五十一歳の働き盛りで、最もアマビシアな
俳優と目せられてゐる。アーキングの次にすわつて劇界の牛耳を
取るのは此の人でせう。藝風は勿論アーキングなどと同じくキアラ
クター、パーティーが主で活歴、荒事と附け出すところでせうが、和事實
事乃至實惡といふやうな所まで兼ねてゐる。殊に少しく奸惡の氣
を帯びて大きな人物などがうまい。去年の「イターナル、シチー」で男

四二
爵ボ子リーといふ總理大臣を勤めたのなどは、此の方面です。此の芝居は後に田舎興行の一座を見たが、ボ子リーの聲をかすらす具合なご、ツリーをそっくり真似てゐた。また去年の當たり狂言としてツリーが最も好評を博したのは沙翁劇の『ゼ、メリー、ワイヅス、オブ、ウインズル』(The Merry Wives of Windsor)に於けるフォルスタッフで、アーギングの『マーチャント、オブ、エニス』に於けるシャイロックと相待つて、是れがツリーの他の半面でせう。今一つ得意としてゐるのは強い複雑な情を烈しく表現することで、所謂テンペラメントの役者たる所以です。右に言つたボ子リーの最後、また今回の『レサレクション』(Resurrection)復活に於ける主人公などに、皆此の氣味があります。併し概して缺點を言へば、稍わざごらしい所、誇張し過ぎた所のあるのが、此の人の弊で、且つ才の工風の方が利きすぎるため、動もすればメロドラマ的

といふ批難を受ける傾きがあります。

『レサレクション』は作其のものがトルストイといふ大きな名を背負つて居るだけに、出さぬ前からの評判はます／＼高く、トルストイ崇拜者等は、倫敦の真中に世界の福音を布くといふ意氣込で噂し合つたのですが、勿論ツリーは、是れより先き巴里で興行してゐた物から思ひついたので、今回のアダプテーションも同じく佛の作者の手を假りたものです。今一ツをかしいのは、例の抜目のない米國當業者の事として、ツリーが是れを出すといふことを聞いて、直ぐ同じ物をニウヨークの劇場にアダプトさせ、ツリーよりも何日が先を越して蓋を開けたといふ一事です。

ヒズ、マゼスチー座が、ツリーの支配する座で、今回の興行は去る二月中旬の開場、全體の劇として、稍手細工の氣味はあるが、併しあれだけ

の原作を舞臺にコンデンスしたものとては、成功といふ多數の評のやうです。原作が含んで居るだけの高大な哲學的意義を感銘させるといふことは、不十分であつたといふのは一般の評です。併し原作の小説そのものでも、果たして何程まで作者が思つただけの主義をあの作で讀者の胸に泌み込ませ得たかは、決して容易に答へられぬ問題だと記者は思ふ。思想家、説教者として成功した『レサレクシヨン』のトルストイは、文藝家として一方に失ふ所がありはしなかつたか、是は小説の評の上から考ふべきことです。また原作は小説だから幾らでも細かく書ける。随つて半分以下、監獄を叙し囚人を叙した原作の趣味は、人を描いて罪を見、罪を描いては無罪を見る所に社會人生の眞義を味ふといふことであるが、是れは短時間の舞臺の上では容易に寫すことの出来ないものです。強いていへば原作の

此等の箇條が動もすれば細かになり過ぎて文學としての生命たる興趣の一面を殺ぐの嫌ひあるに比して、芝居は却つて其の憂が少ない。要するに深い統一ある感銘を與へることは、小説ほごに行かぬが、一層手軽なものとしては、小説よりも、しまつてゐる。是れが此の芝居の結果です。俳優は名家を集めて居ますが、就中女主人公を勤めてゐるレーナ、アシュエル(Lena Ashwell)といふのが大成功で、此の女優は他の諸優に比して極めて新進ですが、今回の評判は非常なもので、近年の英國劇史に特筆すべき現象だと言はれてゐる。ツリーも蹶をされて、『レサレクシヨン』は此の女優獨りで背負つて立つてゐます。尙ほ此の芝居に就ては精しい見物記を加へて置きますが、三幕目獄屋の場に女主人公の激烈な情の變化をあらはす所で成功したのです。最後にツリーはまた、現詩宗オースチン(此の人の事は嘗

て本誌に書いた。或人は之れを綽名してアルフレッド二世といふ。前詩宗デニズンと同じく名がアルフレッドといふからだから回して来た作をも今年中に演ずるさうです。

さてツリーの事は是れくらゐにして、次に來るべきはアレキサンダー (George Alexander) とフォーブス、ロバートソン (Forbs-Robertson) とでせう。家橋と高麗藏、また新演劇界で伊井と藤澤といふやうな振合で、アレキサンダーの得意の藝はラヴーだと稱せられてゐますが、總じて人氣のある俳優です。随つて往々俗に媚びるなごいふやうな事をも言はれるが、去年の仕事の中では、前にも言つた如く、フリップスの詩劇『パオロ、エンド、フランチェスカ』とマッカーシーのメロドラマ『イフ、アイ、ウアーキング』とが重なるものでした。俳優の登龍門といはる『ハムレット』がまた此の人の當たり狂言の一つで、一部の人には理想的のハム

レット役者ごまで褒められたさうです。目下は獨逸の當たり作『アルト、ハイデルベルヒ』(Alt Heidelberg) を譯して演じてゐます。之れはまだ見ないから筋を話す譯に行きません。序に注目すべきは、斯くアレキサンダーといひ、ツリーといひ、アレキサンダーといひ、また後に述べるエレンテリーといひ、今年頭株の演ずるものが揃ひも揃つて外國文學から抜いて來たのであるといふ事です。勿論外國物殊に佛蘭西物の輸入は過去の英國劇壇にも不斷の事ですが、専ら文學的方面から斯く揃つて外國物に材料を求めるといふのは注意すべき現象でせう。其の他純粹の外國物としては、獨逸俳優の一座が先日まで一季間、ズーデルマンやハウプトマンの作を演じて可なり好評であつたのと、演劇協會が文藝的價値の高くして而かも到底營業的には演ずることの出來ない作を演ずる趣意で時々上場するものゝ中に

外國の名作があるのと、去年の夏サラ、ベルナルが乗り込んだとき、佛蘭西物を数々演じたのと位が重なるものものです。

此等の外國物に對して、目下純粹な英國文壇の物を演じてゐるのは、フォーブス、ロバートソンです。此の人の藝風は、ごちらかといへば高尚な、じみな、随つて稍淋しい氣味で、去年は、リリック座に「マイス、エンド、メン」といふ喜劇を演じて好評、此の作はライレーといふ女作家の作で、稍ファースの傾きはあつたれど、兎に角、バーリーの作を除いては、最も文壇的價値のあるもので、要は哲學者が無教育の娘を孤兒院から貰つて、哲學的に教育して妻にしやうとして失敗する可笑味と、其の娘が却つて哲學者の甥の兵士と相愛することとなり、哲學者は遂に自分の戀と理想とを犠牲にして娘を甥に與へ、再び孤獨の生活にかへるといふベーンソスを組合はせたものです。其の中には女子

の理想教育といふ事に對する諷刺をもこめたものでせう。是れも見たのはフォーブス、ロバートソン自らの組では無かつたが、此の哲學者が正にロバートソンの、はまり役と思はれました。次いで去年の暮には沙翁劇の「オセロ」を出して、これまた中々の評判でしたが、結局オセロが高尙になりすぎ、英國紳士になり過ぎて、フォーブス、ロバートソン自らのオセロになつたといふ批評でした。次いで現に打つてゐるのがキプリングの小説「ゼ、ライト、ザット、フェールド」(The Light that Failed)で、是れも好評です。男女の畫家の戀を中心として、女は男と名譽を競ふ功名心の爲めに戀に冷かになり、男は失望して女を斷ちたる後、一心こめて其の女の像を描きけるが、成るに及んで、嘗て戦争に行き一時明を失ひたる眼疾が、悲しみのために再發し、盲目となる。且つ之れと同時に他の事故にて、右の苦心の畫は、同居の婦人のため

に掻き破られ、茲に全く絶望の底に沈み果てんとするを、友人の知らせにて、女此の事情を知り、暖かき戀に立ち返り、男の許を訪ひて、男に詫び、相擁して、男の熱き唇を女の額にあつるといふにて、最後の幕を下ろすのです。此の結末は、原作では反對に永久の悲劇に了つてゐるのを、芝居で光明的にかへたのですから、批評家には、之れがために、原作の深い悲しみと自然との味が薄らいで、態とらしくなつたといふ批難を受けてゐます。また倫敦俗衆の見物がやくもすれば、原作の如き強い悲哀に堪え得ないで、軽いものにのみ走るのは、やがて其の趣味の低い所以で、之れに媚びるのは、尙ほ宜しくないなどいふ攻撃もありました。打ち見た所、原作の際だつた性格描寫は、芝居には十分移つてゐなかつたやうですが、フオーブス、ロバートソンの主人公が、初め女に戀を拒まれて別れるとき、猛烈な情のために、拒む女を暴

力的に抱きすくめ、額に烈しき接吻を二たび三たび與へて突き離し、死せるが如くなりて椅子に倒れかゝる。女は満面に怒りの血を漲らし、生きて再び相見まじと罵つて立ち去る場は大喝采でした。絶えず血に渴き、戦ひを想ひ、騷擾を想ひ、興奮を想ふが如き、キプリング得意の性格は、此等の動作で幾分か明かになるやう思はれました。大詰、盲目の主人公が、唯一の心やりとしてゐた苦心の畫まで損じたことを知り、全く途方にくれて、悄然としてゐる所へ、旅より急ぎ駆けつけた女が、そつと這入つて來て、聲をかける、男は一念の空耳かと怪しむあたりは、全く夫のシャーロット、ブロンテの小説「ジェーン・エア」の結尾と同巧でした。男が女の爲を思つて容易に其の詫を承知しないあたりは、勿論彼れと異曲たる所以です。次に一言すべき俳優は、エドワーズ (George Edwades) でせう。此の人

はみづから演ずるよりも目下ダリー座及びゲーチー座の座頭といふ點で要路にあつてゐる。即ち諸多の劇場中(倫敦の劇場數はウエスト、エンド及び場末とも合せて丁度六十です)にはおのづから特色があつて、右の二座は恰も前言つた人氣芝居、ミュージカル、ブレイの西倫敦に於ける本家といふ格になつてゐます。去年一年を打ち通してゐる「トリアドア」及び「エ、カンツリー、ガール」は此の二座の興行で、今以て盛んに客を寄せてゐる。昔から此の種の芝居の名あるものは、大抵此の二座から出て、之れも前に言つた「ドロシー」「ゲイシャ」の如きまた其の例です。殊にゲーチー座は、其の名からして愉快座または賑ひ座など譯すべきもので、愉快座物(ゲーチー、ブレイ)といへば直ちにミュージカル、コメディーといふ意に通つてゐます。

また同じやうな賑やかな一座を組んで南亞米利加邊へ押し渡つて

大當たりを取るのも此の人です。ケート、ヴォーガンといふ有名な女優も、同じ一座の旅先で病みつき、先頃亡くなりました。此の女優は英國第一と言はれた踊りの名人で、スカーツ、ダンスといふ長い裳を着けたまゝの極優美な踊りの、此の國に於ける元祖ださうです。彼の跡つぎは誰れであらうなどと早く穿鑿する人もあります。踊りの事のついでに思ひ出すは、ケーク、ウォーク(Cake Walk)といふ踊りです。近時亞米利加から輸入したもので、本は黒人の踊りから出たのださうですが、片足を拵つて、腰をさまゝに突き出し、道化した顔をして踊る、極めて下卑た形のもので、日本で言つたらステ、コ踊りなどいふに似た趣味で、夫の「トリアドア」の中などにも挿んであります。つまりデスガストフルの刺戟力を利用する美の種類で、低いものたるは言ふまでもないので、是れが英國で行はるゝと共に目

下は巴里の芝居にも傳播し、先方の俗趣味を侵しつゝあるので、流石の巴里人も批難の聲を揚げてゐるとの事です。

以上を假りに第一流の男俳優界の大略とすれば、之れに對する女優界の第一流には何んな名前があるか。凡ての點から眞先に指を折るのは、無論エレン、テリー (Ellen Terry) です。此の女優の事は、日本でも既に知つてゐる人が多いでせうが、當年五十六歳父も名ある俳優で、一家に四人まで名優を出しました。第一がケート、テリーといつて、結婚すると共に、早く舞臺を引いたのですが、其の人氣の盛んなりしことは、引き際の記事など讀んで見ると、嘗て青々園君から聞いた八代目團十郎の事など思ひ出します。次が今のエレン、テリーで、姉と殆んど同時に舞臺に出で、姉の去つた後は、就中身に備はつた愛嬌で、世上の人氣を獨り恣まゝにし、遂に英國女優の筆頭となるに至つ

たのです。又三番目の妹はメリオン、テリー (Marion Terry) といつて之れも女優界では大立物の一人です。顔だから聲まで、餘程姉に似てゐるので、似せてゐるのだといふものもあります。さうでは無いやうです。去年はハンフレ、ウオードの小説「エレナー」を演じて評判を取りました。女主人公が自分の戀を人に與へる獻身の苦悶を主とした作ですから、俗受けは勿論しなかつたやうですが、全體に情趣のコンセンションが足りないと思ひ受けました。次に今一人のフレッド、テリー (Fred Terry) といふのが、男優として、これまた壯年の俳優中の錚々たるもので、其の細君ジュリア、チイルソン (Julia Neilson) といふ女優と共に活動してゐます。斯く一時に四人まで成功の俳優を出した家の巨擘エレン、テリーは

三十年來アーギングと一座して、ライシウム座と、アーギングと、エレン、テリーとセークスピア劇と、此の四つの名は離れがたい關係を持つてゐたのですが、今年はライシウム座も閉ぢ、エレン、テリーはアーギングと別かれて、イムペリアル座にイブセンの『ゼ、ヴィキングス』(The Vikings of Helgoland)を演ずる事になり、アーギングの『ダンテ』、ツリーの『レサレクション』と並んで、世間の噂に上つて居ります。イブセンの作は、いふまでも無く直接間接に一時の歐洲劇詩界を風靡したものですが、それだけ反對も激しかつたので、『イブセンの幽霊』などいふ滑稽芝居まで出来てゐます。併し其の割りに英國には、彼れ自身の作は演せられず。勿論折々畫興行に挿まれたり、外國俳優に演せらるゝくらゐの事はあつたさうですが、當國一流の俳優が定めて演じたものには、前にツリーの『エン、エチミー、オブ、ソサイエチー』(An

Enemy of Society) 是れはたしか高安月郊君か誰れかど日本へも譯されたと記憶しますあるのみで、『ゼ、ヴィキングス』は今回が始めてです。それで此の興行にも曩に述べた、子息のクレグが得意の舞臺裝置を意匠するとのことです。其の外エレン、テリーは去年は、アーギングと畫興行の『マーチャント、オブ、ヴェニス』に一座し、ツリーと『ゼ、メリー、ワイルド、オブ、ウインズル』に一座した。

エレン、テリーの次ぎにはミセス、ケンドール(Mrs. Kendal)ウニフレッド、エメリー(Winifred Emery)などいふのが女優界の元老でせう。併し藝の上成功の上から、エレン、テリーの後を受けさうなものは、今の所、ツと後進のレーナ、アシユエル、是れは前に言つた通りの形勢です。さて第二流、すなはち以上の諸家に對しては、比較的後進である壯年俳優の事に移ると、人數の多いたため、其の名を讀者に覚えさすだけの

説明も茲には爲つくせません。且つまだ見ない俳優もあるから、此の方面の精しいことは、他日に譲りませう。時藏、権十郎といふ邊から、染五郎、家橘のあたりまでが此の部で、何れも一座を脊負い、一家の見識を張って進んで行く。ウエスト、エンド劇壇の活氣と人氣とは此の中から湧いて來るのです。最後に最後進僅かに十年來の出身で注目すべき人の中には、前に屢々擧げた女優レーナ、アッシュウェルと、アーキングの子、ブロードリップ、アーキングとの名を一言する必要がある。レーナ、アッシュウェルが眞に其の手腕を認められた始めは、ウキングダム座で、一昨年ジョーンスの傑作『ミセス、デーンズ、デフェンス』の女主人公を勤めた時で、今回の『レサレクション』に一躍して第二のエレン、テリーと指目せられることゝなつたのです。此の夏はアーキングの相手をもするさうですから、それでいよいよ、聲價が定まるでせう。

ブロードリップ、アーキング(H. Brodribb Irving)はオクスフォード學士俳優の一人で、若手としては重要な地位を占めてゐる。是れは一つは名門の伴といふ意味もありませうが、目下デューク、オブ、ヨーク座の大立物として、アイリーン、ヴァンブラフ(Irene Vanbrugh)といふ女優を相手にバリーリーの『アドミラブル、クライトン』を演じてゐます。茲に必要といふのは、此の點から、前々來英國劇壇の俗趣味の方面を述べて文學的方面に入り、其の半面たる詩劇の事から作者俳優の事に及んだといふ順序ですから、次には文學的價値ある劇の他の半面すなはち眞の喜劇の事を述べるのが至當です。而して去年に於ける其の代表はバリーリーの二作たること前に述べたる通りで、中にも右の『アドミラブル、クライトン』は管に喜劇として佳作たるのみならず、昨一年の文壇劇壇にわたりて、ゼームスの小説『ゼ、ウキングス、オブ、ダヴ』と共に

最好評を得た創作物で、或る批評家の如きは、此れあるがために英國の喜劇趣味は世に誇るに足るとまでいふくらゐです。又中には此の作の根本思想は獨逸の某作家から得たものらしいなどいふものもあり、必ずしも獨逸の作家を待たず、直ちにルソーの「自然に還れ」の思想に參じたものだといふもあり、批評はまち／＼です。此の作の筋は、一伯爵の老人が人間平等といふ主義から、毎月一度づつ大勢の奉公人等を客にして饗應する。娘等が之れを厭ひて不取扱ひをすれば、主人が叱責する。奉公人等が紳士淑女の交際場裡に伍する可笑味、率直不作法と輕薄洒脱との不調和、不平等を組み合はせ、華やかな客室に殆ど一杯の男女が登場するに拘らず、凡ての仲が氣まづくなりて、白らけ行く様を初幕に見せてゐます。是れを假りに平等主義の諷刺と見てよいでせう。右の如き調子であるから、之れ

を考へて成程と味はぬ以上、見物までが白らけてしまつて、誠に淋しい、奇異な感に打たれます。此の國でも勿論大向ふなどに受けるものでは無いのです。

さて右の中に主人公クライトンといふ偏屈剛情な従者(パトラー)を點出し、彼れは伯爵の平等主義を嘲つて、伯爵は伯爵、従者は従者たるが、即ち平等なりとの哲理を持ち、其の従者たるに甘んじて、主人の客となるを肯せず、常に黙々として其の職に従ふといふ所に、性格の發揮を勤めて居ます。

次ぎが無人島の場で、伯爵が一家のものど漫遊船を出し、南洋で難破して、此の島に漂着する、即ち前の幕と天地が轉倒して、彼れに文明の人間を見せ、是れに文明以前の大自然の人間を見せるので、此所では食物を得るにも、器具を造るにも、貴女紳士は役に立たず、クライトン

六二
が最上力を見はすので、おのづから一切彼れの指揮を仰がねばならぬ事となり、人々不平がるといふ淋しい可笑味です。(漂流人の遺物といふ心で、此の場に日本の縮緬の振袖の古びたのや、支那の靴など見せる)遂に人々は怒って一旦クライトンと分離すれども、食物がクライトンの手中にあるので、饑の前には貴女も紳士も人間もなく、夜に入りて、クライトンの獨り煙草くゆらして焚火を守り居る背より、瘦せたる犬の如く、食物の煮える香ひを嗅ぎ、この這ひ寄って、哀を乞ふ。文明を諷刺して痛快といはれるのは此の邊です。こゝらも矢張り、淋しい、哀しい、そして人をして何事をか思はしむる底の可笑味です。(總じて此の種のユーモアは、日本従來の作物には極めて乏しいのです)が、可笑味と淋しい哀しさとの調合といふやうなものは、之れを味ひ得るには幾らか修養がいる。心理學者によつては、諸多の

感情の調合が即ち美だともいふものもあるから、趣味の下のだけ其の情の單調で激甚なものを喜ぶことになり、高尚になる程、複雑微妙な随つてぬる風の身を取り巻く如き趣味を解して來る。此の關係はちやうど音樂で單調音に馴れた耳には、ハーモニーが却つて騒々しく聞えるやうなものでせう。勿論微妙な論であるから、下手に悲哀と可笑とを結合すれば、相殺して零に戻る。それで思ひ出すのは、去年本誌に出た藤村君の「舊主人」の結末、作者は意識してか何うかは知らぬが、或る點まで此の調合に成功してゐたかと記憶します。勿論これは其の場かぎりの事で、小説中齒醫者の手つき、山の上の萬歳の聲などいふものには深い因縁がないから、一方の深い悲哀には釣り合はず、若し強く悲哀に同感してかゝれば、あの滑稽は却つて之れを打ち壊すものになるかも知れませんが、僕には前來の悲感

六三

六四
が少しく薄すぎた所へ、結末の油繪的な描寫で、更らに別の感情を強められ、不思議な形ちになつてゐた爲め、末のアイロニーが好い加減に調和し、一種の面白い味ひだと思ひました。是れは餘談です。さて次の幕が同じ島の住宅で一年餘りも立った後になります。此の間に當然行はるべきものは、自然の優勝劣敗則で、クライトンは遂にみづから力めずして君主の地に据わり、昔の伯爵令嬢などいふものは、皆其の臣下となり、ひたすら其のみじめな中に満足を求めんとしてゐる。殊に令嬢等がクライトンの一顰一笑を喜憂にして、奉侍する様の是れまた悲しき可笑味を主とします。此の場に立って初幕を回顧すれば、人世に對する無限の諷刺滑稽、哀傷が湧いて來るのです。而してクライトンは始めから終りまで、にこりとした事もなく、偏屈な眞面目一邊の態度を續けて、從者と生まれては從者に甘ん

じ、君主となつては君主の權を行つて少しも異じまなはいふ性格になつてゐます。此の場でまたクライトンは三人の令嬢のうち、本國で某貴族に結婚約束をしてゐた姉嬢に結婚を申込み他の娘等は之れを羨む。今はたゞ人のよき老僕たる娘の父伯爵が之れを聞いて出で來たり、娘出來したと泣き笑ひの體で、クライトンに娘を妻として呉れる名譽を謝し、遂に祝ひの心で、一同舞踏を始める。此所に至つてユーモアは其の頂上に達し、殊に父なる人がペーソスの中に強いて造る笑謔の滑稽は、よく其の意を見物に呑み込ませたやうです。
此のクライマックスに達した時、忽ち大砲の響きと共に、救護の軍艦が島に着く。世界は又もがんだう返しに元の文明に戻つて、クライトンが暫しの夢作者と見物とが太古自然の夢は破れてしまふ。人々

が狂氣の如く喜び叫んで船の方へ駈け行く跡に、寂然として立ってゐたクライトンは、船長などの來ると共に、今まで君主として纏つてゐた毛皮の上着を脱ぎすて、直ちに黙々石の如き以前の從者に還り、主人等に奉侍して船に乗り組む。

終りの幕は再び伯爵家の客室で、島での出來事は耻辱として堅く秘して漏らさず。姉嬢は再び元の貴族と結婚約束を遂げやうとする。然るに漂流中の長き月日なれば如何なる事のありしかも知れずと、男の母が疑ひて、クライトンを呼びて事情を尋ねるので、人々ひやひやするといふ滑稽、されどクライトンは何事をも言はず、一家の人々を無疵のものにして、さて自分は是れまで長く誠の戀をもて己れを慕へる召使の一女と結婚し、雑踏世界の真中に居酒屋を開くべしとて、改めて暇を乞ひ、再び黙々として去るといふ收場です。

喜劇の事は是れで止め、小説を芝居にしたものでは、原作が文壇的地位を占めてゐる點から、兎も角も前にいったホール、ケインの『イタナル、シチー』とウオード女史の『エレナー』とせう。併し兩作とも思はじからず。前者は見物には受けたやうですが、メロドラマ的になつたといふ批難でした。後者はうまく十分にドラマタイズせられなかつたといふ評です。『イタナル、シチー』を、愛蘭土のダブリンへ持つて行つた時には、舊教徒の多い所として、劇中に羅馬法王の素性に關する事あるため妨害が起るといふ噂でしたが、そんな事も無く興行したやうです。當地などでも、法王の出る幕には盛んに拍手が起る、カソリックの人々でせう。『エレナー』は後にオクスフォードでも演じました。之れは一つは作者が有名のオクスフォード好きですから、わざわざ此の地へ持つて來さしたのでせう。

パントマイムの事も前にちよつと言ひましたが、其の本場のドルーリー、レーン座の近年のパントマイム役者はダン、リーノー(Dan Leno)を推して第一とします。日本で言つたら、鶴屋團十郎などいふ所でせう。

パントマイムは年一度クリスマス興行で、『シンデレラ』とか『マザー、グーズ』とか、小供の耳に熟したお伽話を種として布衍するもの筋よりは、道化と見た目の美しさを主とするものです。大抵のパントマイムには一種の型があつて、張りぬきの動物を用ふること、神女、天人の出ること、重なる男の道化役者が女に扮して滑稽をつくすこと、美しき男女の情人が一對以上あつて、其の男の方はプリンシパル、ボーイと言つて必ず女優が扮すること等は殆ど何れの作にも通じて居ます。

ドルーリー、レーン座は舞臺の飾りつけに金を惜まぬ理由から、殊にそれが目的のパントマイムには、思ひ切つた事をしますから、彼等が世界一と誇るだけのことはあります。其の仕掛の壯大富麗人目を驚かす點はたしかに一見の價値があります。今年の作は『マザー、グーズ』で、百日以上打ちつづけて、二十年來に無い大あたりを取つたこの事です。作意は鷺屋の老寡婦がいろく富貴の人を羨ましがるに附け入り、悪魔が鷺屋に黄金の卵を生ませ、老寡婦を誘惑する。斯くして老寡婦が一躍、錦繡を纏ひ玉樓に住む身となる滑稽が第一で、此の役は即ちダン、リーノーの勤める所です。次には老寡婦が富に飽いて、更らに容貌の若く美しくならんことを想ふ。即ち悪魔が之れを誘うて不老の泉に浴さす。老女が一變して若き娘となるので第二の滑稽を起す。勿論此の間に種々の仕草挿話などあつ

て、満場たゞ笑ひに漂ひ、レデーなどは席に得堪えぬまで笑ひ入ッて
る。最後に金が無くなれば何人も相手にせぬので、後悔して願
け門に願を立てると、神女があらはれて、忽ち昔の鶯鳥屋の老寡婦に
戻すといふ話です。

此のうち、仕草の事などは茲に書く必要もないが、舞臺装置の最もす
ばらしいのは天國の場です。尤も之れは大抵のパントマイムには
付き物で、皆相應に此の場に意匠を凝らすのですが、今年の此の座の
は最後に見せた天人飛行の場が最も盛んであつたやうです。天國
の道具立ては、一々書くも懶いが、二百人から出て来る天人の半分は
肉襦袢肉股引の裸體姿です。天人の衣裳の色と之れに鏤ばめてゐ
る色々の球の光りとか、光線に和して、動作につれ、展開し行くさまは、
殆んど見つめてゐられない程の豊富と變化とを持ッてゐる。殊に

舞臺全面の色を統一して、色と色とのシェーツを巧みに利用すること
は、此方の舞臺意匠家の得意とする所で、つまり舞臺の上に萬様の色
が湧き上り、展び行き、變じ去る。色彩そのものを踊らせて見せるこ
いふ趣きです。

その他、薄紗の幕を一重々々に引きあげて霞の晴れ行く趣きを見せ
るとか、硝子簾のやうなものを繰つて、満天の星の一時に亂れ散る様
を見せるとか、總じてパントマイムに於ける觀せ物の意匠は、淡泊、枯
瘦の方に行き過ぎた我國の趣味には、參考となる點が多い。
天人の飛行はつまり宙乗りですが、舞臺の高いのと、仕掛が大きいの
で、見るものとしては、一層見榮がする。殆ど舞臺の半ばを取りまい
てゐる天人のうち、凡そ三四十人は飛べるやうになつてゐます。勿
論みな裸體で、宙に上つた時は兩手をひろげ、體を斜にする。共に兩

足を重ねてすつと外し、略ぼ鳥の形ちになること、畫にある通りです。それで舞臺の各方面からゆるやかな樂につれ、間斷なく三人四人づつ宙に上つては手を組み二三度回つて元の座に還る。花火の亂發するが如き趣きで凡そ十四五分間は天人歡舞の場です。

(明治三十六年三月二日稿)

ツリーの『レサレクシオン』

(一)

英國第一流の俳優ビアボム、ツリーが演ずるトルストイの小説『レサレクシオン』見物記は下の通りです。

此の芝居にも、一座に多くの名優を網羅してゐるといふのが、ツリーの得意な一點と思はれますが、中心はツリーの扮せる主人公子クリユ

ドフ (Nehudof) 英音ならば、チーリッドフの綴りなれど、エチガクとフとの間に響いて、子クリユドフとなります(とレーナ、アシユエルの扮せる女主人公カチューシャ (Katusha) とに歸します。外には女囚セオドシアに扮せる女優リリー、ブレイトン (Lily Brayton) と、シモンといふ男囚に扮せるアッシュ (Oscar Asche) が就中著名の俳優で、是等は皆一座を指揮すべき格の人々です。レーナ、アシユエルの事は前號に書いたが、リリー、ブレイトンも、彼れについて、目下賣り出し盛りの女優で、レーナ、アシユエルが先日限りアーキングの『ダンテ』の稽古に取りかゝつてよりは、此のリリー、ブレイトンが代つてカチューシャを勤めてゐます。此の芝居はすべて四幕六場、夕の正八時半に開いて、十一時半に了りますから、三時間、一場が三十分づゝの割りです。また序と幕間とにオーケストラで奏する音樂はすべて露西亞のを用ひます。

初幕は一塲、チクリエドフがカチューシャと相通する、作中最もアイデリック
な所謂濡れ塲です。且つ全作の精神たる大良心の復活といふこと
がすべて此の一塲の出来事を回顧する所に發するのであるから、極
めて重大な言はゞ全曲に熱を與ふる血の源でせう。併しトルスト
イは非常な難道を選んだものと言はなければならぬ。假りに之を
作者の術の上から言ふも、多數の作家が其の作に於ける情の集中點
を定めるため、初めに先づ讀者の注意力を虜にする策を講ずるのは
異じむに足らぬことですが、一旦斯くして覘ひを定めた以上は、成る
べく其當初讀者の心を虜にした情、例へば戀愛といふが如きものと
遠く離れぬ範圍に於いて、後の葛藤を結び行き解き行く工風をする
のが最も成功し易い道たるは言ふまでもない。紅葉の『金色夜叉』で
言へば骨牌會の崩れの邊が即ち作者狡猾の存する所で、讀者殊に青

年男女の最も想像し易い景情を擇ぶと共に、それを事情の許す限り
濃厚の度にまで持つて行き、以て讀者の心を酔はせ虜にしてしまつ
たのですから、其れより以後の事柄は、此の情に觸れる限り別様の
光澤を放ち別様の生氣を帯びて讀者に逼り來ることとなつたので
せう。けれども只是れに止まるのみでは、作者おもへらく、想に深所
なく大所なしと。則ち一篇『金色夜叉』の落想は、此の當初の情より出
で隣りの道に入る所に生ずるので、自然之れが生氣の源た
る當初の忘れ難な情とは、間接の關係となる譯です。随つて動
もすれば此の一曲折よりして以後讀者の心は冷淡となり易い、同感
のチャームが破れ易い、是れを取りとめるには作者に一層の骨折りが
いる。是れやがて作者に取つては凡を脱するの道であると共に、難
道たる所以です。而して紅葉も難道を選んだ。トルストイは更ら

に更らに難道を選んだ。失戀の恨みよりして高利貸になるといふ
経過は比較の上から言ッて猶ほ大いに今人に近い背景を持つてゐ
るが、『レサレクション』に至ッては一旦己れが情欲の犠牲にした婦人の
それが爲めに墮落したのを見て茲に麻痺せる良心の覺醒となり消
罪の念となり義務の念となり獻身の念となり而して遂に博愛平等
の大精神に復活し解脱するといふのですから單に其の事柄から言
ッたら眞妄の價値は別とするも是れだけの心的過程に遺憾なく同
感し得るもの今の世に幾人ありませうか或はトルストイ一人の外
ないかも知れぬ。然るに作者は此の難案を掲げて普ねく世上の同
感に訴へんとしてゐる待つ所はたゞ文藝の威權によッて人に逼る
の道を講ずる外無いのです。原作については前に一言したと記憶
しますから以下ツリーの劇が如何に此の道程を経行くかを見物し

ませう。尙ほ後世のため一言レファアして置くべきは鏡花の『義血
俠血』が我が明治の小説中でも或る度まで『レサレクション』と結構を同
じくしてゐるといふことです但し『義血俠血』は難道に進まず超脱を
期せずして『レサレクション』の前半に止まつたといふ趣きかと記憶し
ます。

さて記者が此の芝居を見物したのは開場後一箇月ばかりで定刻八
時半の前には早やすでに十分の入りと見えた。序幕が後にセダク
ションを控へた場であるため英國風の堅い家では若い娘などは伴は
れぬとの批難もあると聞きました別客種に異變は來たしてゐ
なかつたかと思ふ。

時計の針が將さに八時半を指さんとするや先づオーケストラに劉
曉として教會樂が起こる。見物おのづから心耳を澄ますと思ふと、

忽ち棧敷は勿論舞臺の明りまで一時に消えて、満場眞の闇となりま
す。同時に舞臺のがたにあたり露西亞のクワイヤー(讚美歌團)が樂に
つれて復活の讚美歌を歌ひ出す。是れは言ふまでもなく、外題が復
活であるのみならず、作の始めと終りとがイースター即ち耶蘇復活
祭の季節になつてゐるからで、此方の人にイースターといへば、其れ
が既に一種情味の背景を與へることになります。そこで復活の讚
美歌を黒闇々の中に聞くのですから、満場おのづから森となる。凡
そ五分ばかりで歌が終ると共に、縷々として消え行く樂の音につれ、
舞臺だけにぼつと明りがさすと、純帳は上つてゐて、神女浴泉の圖か
何かの布幕が下りてゐる。それを靜かに巻き上げると、露西亞の片
田舎公爵子クリュドフが領地の邸になります。原作を讀んだ人は承
知の如く、此所には子クリュドフの伯母等が住んでゐて、公爵に代つて

此の邊の所有地を宰領してゐる。本來子クリュドフはこの二年許り
前、書生の頃に一度此の地に来て、ふとした縁から小間使のカチュエーシャ
と相愛することゝなつたのですが、當時はまだ純潔な青年のことゝ
て、其の戀を戀のまゝにして歸京する。それより學校を出て軍人の
間に身を置き、茲に全く露西亞軍人社會の野獸の如き風氣に感染し
て、作者の所謂博愛の我れ、精神の我れは、壓倒せられ、利己の我れ、物質
の我れのみと成り了る。其の二年目に昔の戀を想ひ出し、ほく笑み
ながら再び此の田舎に來たのが、則ち芝居の始めです。
舞臺一面田舎大家の居間の飾りつけ、正面上手奥に寄せて寢床を見
せ、海老茶天鷲絨のカーテンを半ば絞りある。直ぐ下手より二間通
しの大窓、硝子戸四枚の開きになり、之れを透かして、外すなはち舞臺
裏は、夕月夜の遠見窓、下一条の路を隔て、遙に墨繪のやうな疎林に

八〇
續いた小流れといふ景色です。書割の面白いのは此の幕と大詰西

比利亞の夜景色の場とです。

家内はすべて夜の體舞臺の中央少し上手に寄せて卓子に椅子二三脚をあしらひ卓子の上には華手やかな大洋燈に青き笠上手下手ともに扉の入口があつて、其他壁の飾りなどよろしく時は四月の始め、イースターの耶蘇祭りの夜。

幕が明くと、一人の下女が後向きのまゝ寢床を直し、そこらを片づけなごして居る。上手の戸を押してハウス、キーパーの老女が同じく白の胸掛といふ拵へで入り來たり、蠟燭立など卓子の上に置き、下女に小言を言ひ、一寸言ひ争ふなど形の如くあつて、老女が今夜はイースターなれば寢に行く前に接吻して神を祝せよといふ、下女がだしぬけに老女の頬に接吻する、といふやうな幕明きです。

八二
其所へ下門口より一人の老僕あわたしく若旦那のお着きと叫びながら、旅靴を運び來たる。聲を聞いて上手口よりは二人の伯母入り來たり、下女、老女は荷物の手傳ひなど、舞臺俄かにさぐめきわたる中へ、老僕の跡よりつか／＼と入り來るのが、ツリーの子クリウドフ、背高く横これにかなひ、肩稍々張つて顔はごちらかといへば四角な方眉宇の間かすかに精悍の氣を見せた造り、服装は薄青地の軍服片襟に金と赤との綬を見せ、帶劔の上に鼠の長外套を羽織つて、軍帽を被つてゐます。要するにマンリーな格腹のよい、それで何所かに精神家の影があつて、一味眞實にして俗と流通せざる所のあるやうに見せんとしたのが、ツリーの腹であつたかと思ひます。されば性格の一致といふ點から見れば、成功してゐる方ですが、其の變化發展の側が、之れがために犠牲に供せられ、始めから既に衷心に或る憂鬱を懷

いて居はせぬかと思はれる氣味でした。即ち今少し快活な言はど
墮落してゐる時の子クリュドフを見せる工風は無いかと思つたので
す。併し生ま中それを行つて後に精神家となる理由を打ち壊すや
うでは勿論やらない方が勝んでせう。察するに右の弊は一つはツ
リーの藝風から來るので、ツリーの藝の缺點は硬ばり過ぎる所にあ
るやうです。又聲は僅かにかすれてゐる。是れはツリーの地聲で
すが死んだ菊五郎ほどには無い。

子クリュドフが這入つて來ると、ハラウ、ドミトリ、ドミトリは子ク
リュドフの名「ハウ、アー、ユー」と二人の伯母が一齊の掛聲つゞいて老女
みな／＼駈け寄り、立派な軍人になつたと大騒ぎして懐かしがる。
先づ一人の伯母が「基督は活きたまへり」と言つて、子クリュドフの左り
の頬、右の頬、左りの頬と三度つゞけざまに接吻すると、次の伯母、老女

同じく皆三度づゝ子クリュドフに接吻する。棧敷のレデーなどには、
覺えず「ハツ」と聲を出すものもあつて、續くものは笑ひ聲、極めて賑や
かな主人公の出になつてゐます。其のうち村の老幼男女多勢がイ
ースターを祝して押し寄せ來たる。其の讚美歌の騒ぎが聞こえる
ので、子クリュドフが窓を開くと直ぐ前の道を一隊歌ひつれて下手入
口の方へと通りすぎる。子クリュドフはなほ外套のまゝ窓の前、上手
より斜めに見物に背を見せて、左りの手を開いた扉にかけ、じつと大
勢の通る様を見込んで立つてゐる。三人の女、老僕等も外の騒ぎに
一時氣を取られてゐると、下手口より早やどや／＼と大勢が入り來
たり、また／＼家内大騒ぎ、イースターの祝ひにと手に／＼一つづゝ
の卵を子クリュドフに捧げ、基督は活きたまへり」とてむさくろしき百
姓等が一々接吻する。子クリュドフは呆氣に取られて之れを受け居

る。其の他かすくの滑稽ありて皆々退散し三人の婦人もまたまた三度づつ接吻の可笑味などの末、蠟燭の明り片手に、それゝ寢室に退く。

あとは老僕と子クリウドフと二人の舞臺になり、茲にも猶ほ小兒の如く甘たれる老僕の可笑味などあり。子クリウドフが上手の椅子に體を落とすと、老僕は跪いて其の靴をぬがせ、旅靴の中から上靴を取り出さんとして、過つて手紙の束を取り出し、子クリウドフに渡す。其の中から一葉の寫眞が落ちるのを、子クリウドフが手に取り上げ、じつと見入つて、始めて思ひ入れの形になり、「リッル、カチュウシヤ」とつぶやく。老僕それを聞いて、寫眞を覗き込み、「さう、これは、若旦那が此の前來た時の寫眞だ。そら、茲に若旦那が居て、是れがカチュウシヤ、是れがカメ」といふやうな臺詞のうち、子クリウドフはたゞ微かに「イエース、

リッル、カチュウシヤと再び咥くのみ、深く思ふ所あるが如き體。既にして立つて老僕を送り出し、下手の戸を立て切つてよりは、子クリウドフ唯一人、舞臺は今までの賑やかさに對照して、極めて森となる。若し舞臺面から言へば、前の男主人公の賑やかな出に對し、此の森とした場に至つて初めて女主人公を點出するのが、技倆のやうであるが、此の芝居では女主人公カチュウシヤは、是れより先き一度雑踏の間に一寸顔を出してゐる寫實の上から言へば、其の方が實際かも知れぬ。それは子クリウドフが着いて伯母などゝの挨拶も一通り済んだ時で、獨りカチュウシヤの姿の見えぬため、伯母が「カチュウシヤ」と呼ぶ。是の呼び聲を出し、「イエース」と答えて、下手口から、刻み足、俯き勝ちに羞らひたる小娘の體で見はれる。満場に拍手の聲が起こる。カチュウシヤの拵へは極めて單純に、白の綿服を上に着てゐるが、其の裾

の中段あたりに古渡唐棧なごいふものに見るやうな縞の荒いのが黒く染めてあるのと胸明の所にちよつと赤い縁をあしらつてあるだけが色ざりです。髪にさくやかな花簪やうのピンを差してゐるのが言ふべからざる可憐の風致を添へて全體にニートな無邪氣な趣きに作つてゐます。顔立は額のやく廣い、どちらかと言へば愛嬌の少ない方ですが動作は力めてシンプルにチャーミングにと心がけてゐたやうです。

這入つて來ると舞臺の中程少し奥に寄つて立つてゐた群の中から、子クリウドフがつかくと歩み出て、「ハラウ。カチューシャ。無事で居て？。生きて居て？」と快活に聲をかけ近づく。カチューシャは少し離れて立ち止まり固くなつたる趣きにて心もち身を屈め、兩手を握り合はせて垂れ伏し目になつて、少しあわてたる、併しながら晴れや

かなる聲で挨拶を返す。それで直ぐ男の前を避け、伯母と二言三言言葉を替はしていきくと出で行く。後姿を見送つて、子クリウドフは昔のまゝのリッル、カチューシャと獨りごつ。途端に窓外で村人等の聲が聞えるといふ段取りです。後に寫眞を見て「リッル、カチューシャ」の思ひ入れは、則ち右の言葉に照應したのでせう。

さて子クリウドフ一人の舞臺となつて、老僕を送り出した後、上手に戻り、椅子に憑り膝を重ねて左側の卓子に肱をつき、復たび寫眞を取り上げて眺め入る。ひっそりとする時、下手の戸を軽く叩く音がする。頭を擧げて誰何すると「カチューシャ」と優しき答へに「カチューシャ。カチューシャ」と立って呼び入れるが如く戸を開けてやる。カチューシャは兩手に赤き寢衣の疊んだの香ひの花一房とを捧げて入り來たり、是をあなたに。」と恥かしげに花房を差し出す。子クリウドフは受け取ッ

て有りがたう、カチューシャ。香ひの花、あゝ、香ひの花と一寸唇にあて、襟に差します。勿論此の時はすでに外套は脱いでゐる。此の邊すべで、ツリーの調子は、何か胸に晴れぬ念ひを持つてゐるといふ趣きで、久しぶり情人に會つた若い嬉しさよりも、寧ろ深い思案の人といふ方を主にしてゐたやうです。

女はすぐ寢床の前に行き、寢衣を其所に置いて、子クリウドフの立つてゐるあたりを一寸避け、顔を見られぬやうにして、下手に廻り、其のまゝ會釋して退かうとする。子クリウドフは戸の方に廻り、女の肩に手をかけ、其のすり抜け去らんとするのを止めながら、上手に歩み、卓子の傍に来て、寫真を取り上げ、是れに話を移す。初めは立つて、肩に手をかけたるまゝ、女の後より顔さし寄せ、寫真を覗きて、當時のおもしろかりし事なご話し興の進むにつれ、何時かカチューシャも片手を子クリウドフの前肩に掛ける、子クリウドフが靜かに右の手にて女の頭を抱き寄せれば、女も素直に横顔を男の胸に當て、見物の方々を向きたる形ち、男の頬もおのづから女の頭に傾いて、舞臺一面恍然として戀に溶けたる趣きです。併し是れは極利那で、忽ちカチューシャは其の身の上

に心づき、驚き飛びさつて逃ぐるが、如く戸の方へ行かうとすると、男其の右の手を取つて種々に言ひすかし、復た上手に引き戻し、此のたびは下手に向いて椅子に腰をかけ、前に立ちたる女の両手を取りながら、下より見上げる形ちにて、またも二年前の想ひ出し話に女を引き留める。下手に何か物音のするに、女愕き逃げんとする。男は立つて窓の前に行き、木蔭を透し見て、小鳥の鳴いたのだといひながら、窓の戸を開くと、例の霞んだ月景色。途端に遠くで大勢の人聲が一しきりするので、子クリウドフは驚いて、一步退くと、カチューシャが、あれ

は先刻の人々が隣り村を祝ひに行つた讚美歌の聲だと説明する。落ちついて女を手招ぎし、善い月夜では無いかと言ひながら、二人半身を突き出して一寸外の景色を見る心地。向き直つて窓の腰敷居に半ば相對し半ば見物の方に向かつて腰かける。茲に到つて書き割が最も活きて來ます。勿論舞臺の奥の方ですから、明りは薄れてゐるし、月夜の青い遠見を背景にして、薄青地の服と白服との男女が對座してゐるのですから、少し遠い席からは、ハッキリ見えない位ですが、其の臙な中に風情があつたかと思ひます。後の川で水の割れる音が微かに聞こえる。氷の溶ける音さへ昔のまゝといふやうな臺詞があつて、終に子クリウドフが、其の折り歌つた歌を今一度歌ひ聞かせよといふ、そこで腰かけたまゝカチューシャが、軽く手拍子撃つて春は溶けます白雪がといふやうな戀の歌を低い声

えた調子で歌ふ。男も軽く手拍子取る。オーケストラでは絲のやうな微かな一條の音を合はせ奏する。最もポエチカルな夢のやうな場です。

而して是れまでは全體に春のそよ風といふ調子であつた舞臺面が、終りに近づくに隨ひ、熱烈の調子に高まつて來ます。晩くなつたのに氣づき、女が立ち去らんとするのを子クリウドフはまたも引き留める。此の時の子クリウドフは、既に全身戀の火に燃えてゐて、女を抱きしめながら、彼の時は斯くこそと接吻する。女は「オ、と叫びながら、少々怒りの聲にて直ちに立ち去らんとす。男、此の胸の響きを聞かずや、我れは斯くまで御身を愛するにと、堅く抱き寄せたるのち、女の身を藻がくまゝに手を解き放ちて、さまでつれなく立ち去らんとす。ならば立ち去るもよしと、女を下手につきやる。カチューシャは激した

る體で小走りに戸の前まで来て、把手に手をかけたまゝ立ち止まり、一寸思ひ入れあつて、遂に本心の底より急き來る情を制し兼ねたといふ心で、稍泣き聲に「オー。アイ、カン、ノット。アイ、カン、ノット、ゴ」と二三歩返り、兩手を舉げて、倒れかゝるが如く、チクリドフの兩肩にかける。抱いてジツと接吻する。幕が靜かに下ります。

此の場からして、カチューシャが一旦無垢な心に植へつけられた戀の芽生を、押へやう／＼と藻がく、外からはそれを生ひ立たせやうと誘惑する、其の表情は極めて巧みであつたやうです。戀の残酷戀の犠牲といふ趣味深い、複雑な経過がよくあらはれて、是れほどの戀をデザートせられた後の恨がよく利きました。戀を得ては鳥の如く歌ふのが乙女の人情であるのに、彼れは戀を得て泣くといふ所に腹を据

えてやつたのでせう。

二幕目は二場あつて、第一が裁判所公判廷の裏會議室の場、正面二枚の開き戸を押せば、公判廷への廊下といふ造り、中央に大卓子があつて、幕明けば二人の小使が十脚あまりの椅子を卓子の周圍に並べなごしてゐる。會議の仕度といふ體、やがて舞臺の後にあたり騒がしき人聲の響くと共に正面の開き戸を裏から廷丁が開くと、今しも公判廷の調べが濟んで、裁判言渡しの會議のため、十人許りの審判官がどや／＼と此の室に入り來たる。元來此の幕は番附にもある通り初幕から十年ほど経た後の事で、カチューシャは十年の昔、クリドフが假りそめの一夜の情に、因果の胤まで宿し、それが元で主人の家は逐はれ、後の情夫には欺かれ、世に誠の少ないことを深くも經驗すること共に、身はます／＼墮落して、遂に賣淫婦とまで成りさがり、客を毒殺

したとの無實の罪を被て今公判廷に引かれてゐるといふ筋です。人も知る如く此の場合の審判官は、其の時々臨時に選任して立ち會はず素人判事で、カチューシャの場合には、子クリウドフが恰も其の一人に選ばれ、公判廷で始めてそれと知るのです。全く忘じ果てゐた十年の昔の事が、此の奇遇であり、胸に浮び來たると共に、始めて己が犯せる罪の大なるに驚き、茲に良心復活の端を開くといふ順序です。今會議室に入り來たる子クリウドフは、既に再び精神の人に歸りかけてゐるのです。恰も心機一轉の間際になつてゐます。がやゝと論じながら十人の判官等が入り來たり、議席に着くまで四五分の間、舞臺は極めて賑やかに種々の滑稽が續出する。全體に此の場は滑稽を旨とし、女性は勿論一人も交じらず。原作者の描いた露西亞裁判の裏面を其のまゝ利用して、軍人僧侶商人などいふ種

々の方面から、愚かな人物を集め、審判合議の馬鹿々々しさを見せる所に滑稽を寄せたのです。其の滑稽と見物の笑ひ聲との中に、子クリウドフの非常な心機の轉變を見せやうとしたのです。演者に取つては、随分むづかしい芝居でせう。裁判長が會議を始めるといつて、着席を促すまで、舞臺の賑やかなのを後に、子クリウドフは正面入口の戸につかまつて半身をあらはしたまゝ、見物に背を見せて、じつと公判廷の方を見送り、石の如くなつてゐる。二三度呼ばれ、始めて氣のつきたる體で、深く溜息しながら舞臺に來て、上手前面の席に身を投げかけ、見物には、やはり背を向けてゐますが、是れは何か俳優に都合のある事と思ひます。衣裳は黒のフロックコート。顔は前よりも蒼白く塗つて眉の間に愁を見せてゐます。

是れから暫くは前言つた滑稽で女といふものを知つてゐないといはれて、いや妻を知つてゐると主張する商人判事や、何を問はれてもおごそかに我等は聖人に非ず、我等は聖人に非ずとのみ答へる教授判事や、要するに有罪であるか無罪で無いかといふやうな事をいふ軍人判事や、激して鐵拳を揮はんとするもの立つて後ろ向きになり、そつとポケットから吸筒の酒をあほるもの。是れらが凡そ十四五分で、子クリュドフは一二度無罪の意見を述べられるけれども、反對者があつて、後には只さげすむ如く席上の狼藉を眺めてゐるといふ心。やがて最後の決を取ると、終に有罪説が多数で、裁判長は彼れを西比利亞送りと定める。皆々席を離れると子クリュドフが躍起の體で中腰となり、正面に席を取つてゐた裁判長に喰つてかゝらんとする。既に判決は了はれりとて、取り合はず。諸君宣告といふ聲の下に、延

丁が扉を開くと共に皆々再び後口から出て行く。

子クリュドフは獨り跡に残つて椅子に憑つたまゝじつと見送つてゐたが、あわたゞしく傍への小使に命じて、一人の辯護士を呼び寄せる。直ちに上手の入口から辯護士が這入つて来る。是れから二人限りの舞臺になつて、辯護士はたゞ聞き役、子クリュドフが大煩悶の長臺詞となるのです。

趣意は右の辯護士に皇帝へ無罪の上訴をすることを托するので、事情を話す必要からカチューシャと自分との身の上話となり、後には全く自分の前行を悔ゆる獨語となるといふ順序です。子クリュドフは身の置き所が無いといふ様に、そこらを行きつ戻りつしながら、息づかひ次第に忙しく、何か呟きては、感情の激し來たる様子を見せる。辯護士が入り來るのを見て、いきなり其の手を握り、上手より

横向きの椅子に引き据えて、自分は隣り正面の外れに席を取り、初めは辯護士の方を見て今日の次第を話し、カチューシャと自分との干係はと聞かれてからは正面に向き、卓子の上に兩腕ついて、目八分に當てどなく瞳を据えてゐますが、折々感極まつては「あ」と言つて兩手に額を支へる。臺詞は初めから殆んど途切れ／＼で、或一節は非常に早口に雄辯であるかと思へば、忽ち舌が乾き咽がつかへたやうに言ひ淀んで、且つ激した時には、じやくり上げるやうな聲を聞かせ、言葉の順序がしごろもごろとなる。

辯護士はたゞ話し鎖々に受け答へをし、ちよい／＼と手帖に何か書き取るといふだけ。子クリュドフが餘りに激した時には、肩に手をかけ、なだめなごする。

子クリュドフが「オー。カチューシャ」と言つて覺えず立ち上り後の入口の

所に行く、辯護士が引き留めながら附いて行く。是れまでの言葉でカチューシャが彼れと干係して以後、現在の状態にまで墮落した十年間の筋が見物にも通ります。子クリュドフは臺詞を續けながら、今度は上手横の前面の椅子に身を落とさし、正面に向いて脚を投げ出し、右の腕を卓子に突いて、其の掌に額を支へた形になります。是れからは聲もすつと沈めて、寧ろ子クリュドフ一人の追想になる。辯護士は立身のまゝ卓子の向ふ側、正面入口の前に残つてゐる。

公判廷の方に人聲が高まるので、辯護士が細目に廊下への扉を開くと、公判廷の聲が手に取るやうに聞こえる。子クリュドフの方を振り向いて、「宣告！ 宣告！」と注意するを合圖に、公判廷で大音に裁判言渡の聲がして、マスローヴ(カチューシャの今の名)といふ語と西比利亞といふ語が殊さら際だつて聞こえます。同時に女の魂ぎる聲が耳を貫

くと、子クリウドフは今更の驚きといふ心地で、マスローヴ。サイベリ
 アー 早口に低く太く叫んで、狂氣の如く戸の前に駈けつけながら、戸
 をしめよといふ。辯護士が手早く廊下の方へ身をすべらして、ひた
 と戸を立て切るの、子クリウドフは戸に憑りかゝつたまゝ正面をき
 り、左の手を延ばして戸を負ひ、右の拳の甲を額にあて肩で息をして、
 絶え入るが如き絶望の見え。それで幕です。
 思ふにカチューシャの三幕目に於けると同じく、子クリウドフには此の場
 が最も骨の折れる所でせう。ツリーも力めたりと言ふべしですが、
 記者には何かまだ物足らぬ所があつた。それは第一前の幕の子ク
 リウドフが餘りに眞面目であつた爲め、それが蔭になつて、精神上の激
 變といふことが榮えなかつたのだ、第二には、子クリウドフの煩悶の表
 情が、じんみり身にこたへるといふ點に至らなかつたのであらうと

思ひます。但し此の第二の點の如きは、外國人たる我れには、批判の
 權利が無いかも知れません。

次の場は同じ日の夜、コルチャギン公爵家の客室、其所の娘は將さに子
 クリウドフと結婚約束をもせんとする仲であるのが、今夜は客を招き
 夜會を催してゐる。茲には露西亞の貴族社會の、豪奢な風俗を見せ
 て、舞臺面の色取りを華やかにし、次の獄屋の慘憺たる場面と對照せ
 しめたものです。こゝで子クリウドフが公爵姫との縁を絶ち、且つ斷
 然財産をも身分をも抛つて、カチューシャを救ふためには、西比利亞まで
 も行くといふ決心を見せます。また前回の裁判官等が體といひ、此
 の場の交際社會の輕薄といひ、すべて今更のやうに子クリウドフの現
 文明に對する厭惡の念を刺戟して、社會主義になり行くといふ所を
 示す意が含まれてゐます。

英國の諺に、ボックス(即ち最上棧敷)に行くものが一番芝居を見ないといひますが、つまりボックスの客には所謂交際社會の紳士淑女といふ輩が多いから、彼等は見るよりも見られに行くほうが主になる。また芝居を見るよりも其の衣裳裝飾の贅澤を見に行く。何か衣服帽子の新流行を工風する種はないかといふやうな事を研究に行く。それで是等の客、殊に婦人客を満足させるためには必ず衣裳乃至室内裝飾の綺羅を盡くした場が必要になる。公爵家客室の場はそれに當たるものとも見られます。

舞臺一面、大廣間を斜に切つた二方の書割り。正面斜に長き一方は、上手に寄せ、薄肉色のカーテンを絞つて入口を見せ、并んで大扉二枚の開き口後に次の間への廊下があつて扉の外には金糸の制服を着た執事が二人、戸の開閉を司つて侍りゐること形の如し。下手の一

方には植物室の入口が見えて、天井高く壁はすべて乳白に金の飾り。中央に燦爛たる電燈の花が輝いて、玉突臺は上手の奥に、其の前が眞紅の切地に房を取つた長椅子。下手にも同じく長椅子、其の他椅子、卓子、置物、植物などよき所にあしらふ。

幕が上がると、貴女紳士の客大勢出て居りて、笑語の聲湧くが如し。男は燕尾服か軍服。女は乳白モスリンの高貴なる拵へ多きが中に、公爵姫は薄オレンヂの天鷲絨に銀の繡、銀糸の房長く裳を曳いて、歩むたびに乳白の雲のやうなレースの蹶出しを見せる、最も高雅な作りになつてゐます。子クリウドフの妹といふ婦人が一人、青地の華やかな色を好んでゐた。

子クリウドフは少し後れて、正面の入口から這入つて来る例の愁ひある顔つき。公爵姫と下手の長椅子に并び腰かけて、暫時何事かを語

らう體。其のうち上手の長椅子に群れる一團の男女中に「社會主義」ハ、ハ、と高く笑ふ聲がするので、子クリウドフは覺えず憤然として立ち上がる。他の男女はそれをきつかけに三々五々相伴ひ笑ひつれ、さぶめき連れて正面口から別間へ出て行く。あとは公爵姫と二人になる。姫はひたすら優しい女に出来てゐます。子クリウドフの様子を心配するので、今日裁判所での出来事からカチューシャを救ふといふ筋をざつと話す。此の邊だれる恐れがありますから、人々が間もなく再び這入つて來ることになつてゐます。椅子の後から姫に話しかけるものがあるのを機に、子クリウドフも立って人々の中にまじりますが、話のついでが今日の女囚の事に移つて、恰も來合はせてゐた裁判長と言ひ争ひになり、子クリウドフが無辜の彼れを罰したるは君なりと言へば、裁判官は我れに非ず、法律なり。我れは唯法

律の命する所に随つて罰したるなりと云ふ。罰する、罰するとは君等が口癖なれど、人生には罰するより外の道ありとて、漸く激するに随ひ、社會主義の氣焔に移り、裁判官と舞臺の中央に相對した形ちになり、精神家としての子クリウドフが感慨を述べます。其の間他のものは、此の口論に氣を吞まれて環視しあるといふ配置です。遂に激し極まつて「文明とは貧民を増加することなり、紳士淑女とは偽善者の集合なり」と言ひ放つや、傍の貴女等が「アツ」と驚きの聲を立て、立ちかゝる。

子クリウドフの妹が走り寄つて兄をなだめる介のうち、人々は再び一人二人と次の間へ去り、姫がひとり傍へに立ち居るのみとなるので、妹はそれに氣を通した體に、子クリウドフと二人を残して出て行く。

此のたびは姫が子クリウドフの手を取つて上手の長椅子に腰かけな

から結婚の事を言ひ出だす。子クリウドフは、全く身を捨てて良心の命する義務を果たし、カチューシャを救ひ出だして彼れと結婚する決心なりとて、断然姫との約束をこころはる。姫は途方にくれ、どうしてよいか分らないと、すすり泣きつゝ立って去らんとする。男も愁然として椅子の前に立つて見送る。其所へ子クリウドフの妹が再び入り來たる。姫は氣を替へ、涙を隠して、妹の手を把り、態と晴れやかに笑ひながら、音楽の聞こゆるかたへ出て行く。

入れかはりに若い才子風の一人が這入って來て、子クリウドフに近づき、交際社會に出て、なせ鬱いでゐるかといふ。子クリウドフは、さげすむが如く其の男を見て、交際社會のお輕薄は聞くも身振ひなり。猿仲間にも行く方が勝なりと嘲けり、ちよつと思ひ入れして、氣を替へ、軽く笑つて、暇乞ひの挨拶し、下手卓子の所に行つて帽子を取る。

其の間公爵姫は、上手カーテン口の蔭より、そつと顔を出して悲しげに見送りゐる。正面入口の前に來て、子クリウドフが再びこちらの男と目禮の見えにて幕。

要するに此の場は主人公の腹を見せるのが主でなくてはならぬのですが、稍々改革家の口眞似ありて、深い感銘を與へなかつたやうです。公爵姫との別れは、一のエピソードとして、却つて情を惹きまゝした。

さて以上二場には、肝心のカチューシャが唯影となつてゐるばかりですが、次の三幕目に至つて、始めて十年振りの女主人公を、極めて變はつた境遇に點出して來ます。今までを子クリウドフの芝居とすれば、是れからはカチューシャの芝居です。

前まへ來らいの三さん場ばで、男おとこ主人しゅじん公こう子こクリュドフが責任せきにんの念ねんを感かんじて良りやう心しん復ふく活かつの第一だいいち歩ぽに入いる次じ第だいと、ツリーツリーの之これに扮はんして如何いかなる程ていど度どまで成せい功こうしたかどを略りやく説せつしましたれば以下いげ大おほ詰づめまでの三さん場ばで、女おんな主人しゅじん公こうカチュ
ーシヤの如何いかに心しん機きを轉てんじ行ゆくかといふこと隨したがつて之これに扮はんしたレ
ーナ、アシユエルが表へう情じやう術じゆつの、ごんな風ふうであつたかといふことを述のべま
す。

三さん幕まく目めは一ひと場ば、監かん獄ごくで子こクリュドフとカチューシヤとが初はじめて逢あふ所ところで
す。正しょう面めんの半はん分ぶんより下しも手てへかけて、女おんな囚しう室しつ石いし壁かべの體てい上かみ手てへ寄よせて隣とな
り男おとこ囚しう室しつの鐵てつ格かく子しを見みせ、つゞいて横よこ手てが鐵てつ柵さくの出で入いり口ぐち傍そばに寄よせて隣とな
粗そ末まつなベンチベンチなごあしらふ。十五じふご六ろく人にんの女おんな囚しうが暴あはれるやら罵ののし
らの騒さわぎで幕まく明あく。片かた隅すみで泣ないてゐるのがレーナ、アシユエルのカチュ
ーシヤで、そばから慰なぐさめなごしてゐるのが、リリー、ブレイトンのセオド

シアなれど、此この時ときは室しつ内ないわごと薄うす明ありにしてあれば、衣い裳しやう顔かほ付つきとも、
はつきり見けん物ぶつの視し線せんを惹ひくに至いたらず。其その内うち獄ごく吏しの點てん呼こで、新しん參さんの
カチューシヤも茲こゝに居ゐることが分わかります。男おとこ囚しう室しつとの言いひ合あひやら、
亂らん暴ぼうを始はじめるものがあつて獄ごく吏しが取とり鎖くわに來くるやら、カチューシヤが
そつと買かつて貰もらつた煙えん草そうを皆みな々々分わけ取とつて吸すふやら、同おなじく酒さけを飲の
み廻ますやら、舞ぶ臺たい一いっ面めんの大だい亂らん雜ざつやがて皆みな々々他た室しつへ引ひき立たてられ出で
て行ゆくと、入いりちがへに上かみ手て入いり口ぐちより子こクリュドフが辯べん護ご士しと連つれ立た
ち獄ごく吏しの案あん内ないによつて這は入いり來きたる。つまり此この室しつが面めん會かい室しつになる
のです。

子こクリュドフの拵こしらへは黒くろの厚あつ手ての丈たけ長ながな外ぐわい套たうに獵らつ虎この襟わりを卷まき、同おなじ
く獵らつ虎こか何なにかの帽ぼうを深ふかく頂いたいてゐる。二ふた人にん舞ぶ臺たいの中ちゆう央やうに來くると案あん
内ないの獄ごく吏し捨すて言ご葉はで出でて行ゆく。子こクリュドフは無む言ごんで稍やうつむいてゐ

ると直ぐつゞいて女囚カチューシャが鐵柵の入口まで獄吏に連れられ、其所から一人で、ぞんざいなあるき振り出て来る。獄吏は鐵の格子戸を音高くしめたまゝ、近くに立ち番してゐます。さて此の場のカチューシャは初幕以來はじめて鮮やかな舞臺に出て来るのですから、先づ既に少なからず見物の注意を呼んでゐる上に、初幕の可憐無邪氣な人物と直反對に、身を自墮落に崩し果てた、非常な轉變を見せる、言はゞ見せ榮えのする地位に立つてゐるのです。衣裳は袴が黒で、鳶色がゝつたコール天の上着、釦をはづして下着の胸を見せ、縞模様ハンカチーフを首にだらりと掛け、外套やうのものを脱ぎかけたまゝ出て来る。總じて下等に、自墮落に見えるこしらへ、顔のつくりは、色をすつと蒼くし、眼の廻りの黒みを殊に眼だゞし、何所かに野卑な所驕悍の所をも含ますなど、當然の用意でせう。髪

は思ふさま縛れさせて、帽子は勿論頂かず。子クリウドフが茲に來たのは、例の特赦願の事などカチューシャに知らずるため、女の方では、まだ子クリウドフの何人たるかを想ひ出ださず、唯自分を鼠負にして呉れる者とのみ思つてゐるのです。カチューシャが上手口から這入つて來ると、子クリウドフが自然、其の方へ向くので、女はちよつと其の自墮落な體を改めて襟かき合はすことなし、同時にわざとらしく、譚笑ひをして、竊むが如く男の顔を見肩を揺すり、卑しげな身振りをする。男が一二歩近づき來ると共に、女もすつと身を寄せんとして、不圖心づいた如く、後の獄吏の方へ振りかへり、男にさゞやくこと、手振りなどあつて、獄吏に金を握らせ遠ざけよといふ。男其の意を得て、立番の獄吏を去らしむると、女は金が一番利きますからね、エ、急へゝと早口に言ひながら、近寄つて、小聲に急が

しく金を少し呉れといふ。男が隠しから取り出ださんとする間、女は絶えず後のかたに氣を配るこなし。先刻より始終舞臺の下手中程に居て此方を見てゐる辯護士は稍手持無沙汰の氣味ですが、是れは此方の舞臺にはよくあることで、寫實の意味から言へば、已むを得ないことですが、一つは概して藝の中心を一人が二人の主人公に集める度が、日本のより激しい結果でもあらうかと思はれます。一座に男優一人と女優一人と心棒になるものがあれば、あとは大抵でよいといふ形ちに、作風が出来てゐます。つまり一層燒點的になつてゐるのです。勿論燒點があるが上にも補充部までが活きてゐれば、それには如くは無いでせうが、力には限りがあつて、皆々さうは行き兼ねる所から、成るべく燒點部に全力を傾けることになるのです。生中全體に力を分けて、却つて散點的となり、役者を見せる筋を入り組ま

す、目先をかへるといふ事より外、何も無くなつてしまつては、詰まらない。是れは小説も同じことです。要するに日本の并び大名などいふものと同じで、主人公の外は、たゞ活きた書割背景として使ふ人物が多いといふことになるのです。

さてカチューシャが此の辯護士の方に目をつけると、また手眞似で彼れをも去らせよといひます。チクリドフが辯護士を男囚室に通ずる廊下口の方へ出て行かすと、あとは二人限りになつて、紙幣を渡すのを、女はぐるりと入口の方に向きながら、手を後さまに出して受取り、世辭を言ひながら手早く袴の隠しに入れます。それから獄丁の見へぬ間にと、隠し持つたるジン酒の瓶を壁の一隅に忍ばすなど、すべて、さもしい事を見せるのが主です。男は其のあひだ愁然として、絶望の體で見送つてゐる。氣をかへて女の方へ進むと、女は下手中程

の所に來て、其所にある腰掛に、少し下手を向いて住ふ。女は斷えず
 竊み見の外、正面からは男の顔を見ないやうにして、そはくんと落ち
 つかぬ體でゐます。男は上手、やう後ろから立ち寄つて、自分を知つ
 てゐるかといふ。陪審官であつたと聞いて、女がお見それ申して失
 禮を、といふやうな世辭を言ふので、男は隠しから、一葉の寫眞を取
 出して見せる。是れは言ふまでもなく、初幕で使つた寫眞です。是か
 ら初めて、カチューシャが激烈に表情を四變する大舞臺になります。
 カチューシャは寫眞を受け取つて、例の輕薄な態度で、見事ですことと言
 ひながら、氣にも留めぬ風に眺める、子クリウドフが説明するのに應じ
 て、分かりました。分かりました、是れがあなたです、ねといふ。「そち
 らがカチューシャ」と聞いても、未だ何の感應もなく、「ハウ、プレテ、井」と輕く
 受けたまゝで見ると、男は進んで、十年の昔、イースターの一夜と、

當時の事を言つて、記憶を呼び起こす。此の一語で、始めて夢の醒め
 たる如く、じつと見てゐた寫眞の面から次第に顔を上げて、傍に立つ
 てゐる子クリウドフの顔を横に見上げ、きつと瞳を定めると共に、寫眞
 を捨て、弾き上げられ、如く立ち上り、拳を固めて、うぬ、惡魔と、叫び
 ながら將さに男の面上を撲たんとする。此の刹那の表情は、全身す
 べて怒りと復讐の念で、女性の疝ば、しつた廣い尖り聲に、狼戾の氣を
 一杯に含ませ、凄じい形相を見せます。
 子クリウドフは、兩手を舉げたまゝ、動かないで是れを受ける。殆んど
 顔と顔を相接する程に、肉薄したカチューシャは、拳を舉げたまゝ、じつと
 男の顔を見こみ、其の手を下げると共に、凄じい復讐の氣を次第に薄
 らげ、怒り一筋になつて、始めは顔を見つめたまゝ、之れを罵ります。
 其のあひだ、肩息になり、罵り極まつて、顔を兩手に埋め、下手の壁に伏

しかる。是れから怒りの勢ひが次第に弱ッて来る。子クリウドフが跡から附いて来て、肩に手をかけ、詫言をいはんとするのを、顔をあげて罵りながら避ける氣味でまた舞臺の中程に来る。子クリウドフも跡に従ッて再び女の肩に手をかけ、子供の事を問ふ。總じて此の場の子クリウドフは、カチューシャの藝を補ふといふに止まッて、是れといふ見せ場が無いのですから、ツリも演じにくいに違ひない、始終沈痛な愁ひを持ッた顔に、カームな科介で、女主人公の跡につきまごひ、其の藝を受けてゐるだけです。レーナ、アシユエルをして其の技を擅まゝにせしめんがため、附き合ッてゐる、是は實に此の場のみならず、此の芝居全體にわたッた釣り合ひです。子供の事を問はれ、それは死んだと言ッて、一寸愁ひを見せ、思ひ入れのあひだ、男憎しの怒の情が次第に我が身果敢なしの悲しみに移り

行き、我が身は所詮捨鉢なりとの述懐やうの臺詞に變はる。それと共に顔の表情がサッドフェイスとなり、動作も今までの烈しい動きかたが、段々弱ッて来ます。遂にぐたりとなり、なせあの時に死んでしまはなかつたか、と泣いて男の胸に顔を伏せ、肩に兩手を投げかけると、男は片手にそれを軽く抱いて、是れも目をしばたゞく氣はひに、許して呉れといふ。聞くに女は身を離して、稍々屹となり、今は御身に關したることならず、我が身一つで勝手に泣くなれば、放ッて置かれよ、と言ひ放ち、悲しきこなしにて顔に兩手をあて、上手のベンチに倚りかゝる。此の時は二人とも舞臺の中央よりも上手に來てゐます。男もつゞいて傍に腰掛け、女の一身を救ひ、我が前非を償ふだけの事を成す決心なりとの意を告げ、肩ごめ女を抱かんとするのを、女は支

へて前非を償ふことゝは何の意味かといふ。御身に結婚する事なりとの答へを聞くや否や女は奮然として再び激しい怒りの顔相となり立ち上がる。見る／＼其の怒りが眼元のあたり將さに泣かんとする表情になると共に口元は鋭い冷笑の氣を見はし、曩の奮然として立つた勢ひは押しつけたやうな冷嘲となつて、公爵様が街道女のわたしに結婚しやうつて。人を馬鹿になさいますな。」と鼻先であざ笑ふ氣合を見せます。蓋し顔面の發相としては此の瞬間が最も注目すべきもので、何の身分も無い田舎娘が而も憂き川たけの流れの身とまで沈み果て、剩さへ今は刑餘の生き甲斐もない境遇であれば、それに公爵が結婚するといふのは、嘲弄とより外は聞こえず。是れ程の身となり果てた上に、それを目のあたり昔の其の人に嘲弄せられる。女のプライドとしては、是れほど腹の立ッことは無

いでせう。されば怒つて夜刃の如く突ッ立ッた顔が怒り極はまつて泣かんとする、それを女の強い負けじ魂で、じつと堪へた口元が凄い冷笑となつてゐる趣きは、見物をして覺えず片唾を吞まするの概

がありました。男が神かけて眞實のことなりと言ひ譯する頃は、こらへし動悸の早や抑へ切れざる形で、肩の息づかひ漸く荒く、フム、神様。ごんな神様の邊まで辛うじて冷やかに言ひ、あなた、そんな事が言へた身では無いでせうと次第に急調になり「ゑ、もう見るのも嫌。行ッて下さい。行ッて貰はう。行け。行けと激しく詰め寄ッて言ひすてたまふ、身内の熱に堪えざる形ちで、茲にある、茲にあると壁の片隅なる彼のジソ酒の瓶を取り上げ、グツと一口仰ります。足元にある低い腰掛に片膝立て、瓶を持ち添へたまふ、両手を其の上

に休めて、わたしは人殺し、あなたは公爵様。用事は無い。行ッて貰はう。行ッて貰はう。」と猶も切れ／＼に罵りながら例の肩と胸とに激しい息づかいを見せ、稍俯ぶしに、フット、ライトあたり眼を据えて、疲れ果てたる介。見て居ても、さながら瞋恚の炎に、満身の汗が湯氣となつて立ち昇るかと思はれる氣味です。

此の次ぎがちよつとチクリドフの藝の入る所で、カチューシャの後から例の肩に手をかけ、曇つた聲に力を籠めて、可なりの長臺詞を言ひます。其の趣意は、御身今は如何に汚れたりとも我れは其の體を問ふものにあらず。其の中に宿れる尊き心霊を得て、それに婚せんとするなり。我が救ひとは、御身の中に眠れる此の心霊を再び呼び醒ますさんとするなり。是れほごに心をつくして詫びる我れを、せめては哀れと見よ。といふ意味です。筋から言へば、此の「一くぎり」が非常

に大切な所で、此の間にカチューシャの心機が一轉するのです。

女は聞いてゐるあひだ、何時ともなく聞き惚れて、胸の息づかひ次第に低くなる。共に俯きし顔やう／＼上がり、死人の如く蒼白く、遂に少し仰むいて、アブスツラクトになる。今までの動的表情が茲に至つて正反對の静的表情に變はるのですから、見物受けは、勿論します。男の臺詞が終つて、屹と女の顔を見込むのを、女は仰いたまふ、うツとりとなつて、ちよつと舞臺の森とした中へ、手から瓶を取り落とす。それをきツかけに、男は氣を更へ、必ず御身を救はざれば、我が任全たからず。重ねて來たらん。とて獄丁の促がすに、任せ、足早に上手口から出て行く。

カチューシャは、知らざるものゝ如く、猶も失神の體に空を見つめて立ッてゐる。顔は全く平和無邪氣の相に復して、天女の立像といふ趣き

です。幕が静かに降りると驚いたやうに、満場の拍手が揺れ渡る。

三度まで挨拶の幕を巻きます。此の場の感じを言へば、勿論レーナ、アシユエルの表情術といふことが、第一に來ます。まだ多く此の女優を見ないから、全體についての藝風は評せられないのですが、是れだけ見た所では、優しい静かな情よりも、猛烈な情の變化を表はす方が得意らしい。インテンスはインテンスだが、例へばエレン、テリーをインテンスといふよりは、少し違つた意味の熱情表白が本領かと思はれます。さて此の場の情の曲折は、單に情のみより言へば此の女優の藝によつて、殆んど遺憾なく發揮せられたと言つてよい、眼を塞いでも、其のスタッライキングにして而も自然な、顔面科介、音調の表情は、あり／＼と浮び出てゐる心地がする。併し静かに其の中の味を咬みしめやうとすると、忽ち前後

の意義の上に注意が向いて、何だか物足らぬ氣持になります。始めカチューシャの情が静から動に變ずる所は、あれだけの事情で、其の意義因縁も十分ですから、情想相待つて、何時までも、我が心を支配するの力がある。畢竟事柄が淺近なからです。然るに後の動から静に移る情の變化は、之れと趣きを異にしてゐる。一たび幕が降りて、忘れがたなの心から、之れを味ひかへすと、なるごとく、どうも事情因縁が、あれだけの情の曲折には、不十分と感ぜられる。即ち想の上に不足を感じる。是れは主として脚本の上の缺點でせう。言ふまでもなく、ドラマタイズする上の必要から、原小説とは餘程結構をかへてあれど、小説で長々と書いてすら、此の種の複雑高尚な情の變化は、容易に讀者の同感を博し得ないのが常ですから、况して之れを一場の舞臺に約めたものとしては、是非ないことでせう。つまり脚本の失敗です。

此の失敗あるがために、全場の情味散漫となり、カチューシャの藝のみヴヰ
グヰッドに、繪の如く目先に残つて引き締まるべき本筋の味が薄らぎ
ました。蓋し筋からいへば、心靈覺醒の變化が此の場の焼點ですか
ら。

次ぎに注意すべきは、幕切です。日本の幕切に馴れた我等には、始め
はごうも此方の木無しの幕切が物足らぬ感がしました。が、馴れて來
ると、さうも無い。今は却つて日本の幕切を想像すると、細工に過ぎ
る、ぎくじやくするといふやうな感じを起こします。併し是れは一
面、習慣が趣味に及ぼす影響といふ美學的事實に過ぎないとも見ら
れます。今一度日本を見直してからでなくては、是非の斷定は
下せない譯です。少なくともオペラ性のもの、時代物など、術の勝つ
た芝居の中には、此方ですら、幕切の木の音か何か、欲しい場合が屢

屢あります。現に時としては、自然に日本流の幕切になつてゐるも
のも、此の種の芝居にあるくらゐです。之れに反して、全くきツかけ
無しの幕切の却つて風情を助ける適例は、此の場などでせう。假り
にカチューシャが瓶を取り落とすのを木の頭としても、はたまた子クリ
ドフが臺詞の尻を木の頭としても、到底あの最後の一刹那のポウズ
が與へる森嚴なイムプレツションと對立することは出来なからう
と思はれます。

四幕目第一場、監獄附屬の病院。こゝはレーナ、アシユエルとリリー、ブ
レートンと、兩花形の舞臺で、カチューシャは、前幕、子クリドフに會つてよ
り、全く身持を改め、酒も飲まねば、烟草も吸はず、西比利亞に送り出さ
るゝまで、同囚のセオドシアと共に、此の病院の看護婦にせられてゐ
る。それを病院の助手に挑まれて再び濡衣着せらるゝといふ、一寸

パセチックな善い場です。舞臺は病院の一室、正面中程を入口の戸にして、三方壁入口の左右に割ってテーブル二つ、椅子之れに合ひ、壁に柵を見せ、テーブルの上には、瓶、乳鉢など善き程にあしらふ。幕上がると、上手の卓子にカチューシャ、下手の卓子にセオドシア。略ぼ同じやうに、白地へ模様を廻はした胸掛で、丸薬など揉みながら、打ち語らひ居る。容貌に於いては、リリー、プレートンの方が一枚上であるだけ、此の場のセオドシアは極めて可憐に出来てゐます。カチューシャを姉と見れば、恰好な兄弟娘といふ趣きで、セオドシアは深くカチューシャの情に懐いた心持、何時までも斯うして二人一緒に居たいなど言ッてゐるうち、軽く戸を叩いて、助手が這入ッて来る。助手はセオドシアに用を命じて出しやツた後、カチューシャの傍に来て、直ぐ口説かふる。カチューシャは他事に紛らし、卓子の下手から上手と、

二三度之れを避けるのを、附け廻はして、遂に手を取り、抱かんとする。驚いて身をかはす機に、卓子が傾いて、瓶など轉げ落ち碎ける。恰も其の途端に入り来るのが、院長と子クリュドフで、此の場の狼藉に、呆然としてゐる。院長が鋭く咎めるので、助手は逆さまに罪をカチューシャに塗りつける。経歴が経歴なれば、カチューシャの辯解せんとするものも聞き入れられず。院長は、カチューシャに對し、不都合の女なれば直ちに監獄へ追ひ返すと言ひ、一步さざつて立ッてゐる子クリュドフに向かひ、御覽の體なれば是非も無し。是れにて用を足されよといひ、二人を残して助手と共に立ち去る。子クリュドフは突ツ立ッたまふ、困ツたものといふ面持で見えてゐると、カチューシャは、おろ／＼しながら、傍に寄ツて言ひ譯せんとする。男は顔を背けて深き溜息を漏らす。女取り端を失ッて、何うしてよいか

分からぬと再び上手に來て、壁に身を寄せ泣く。男は忽ち思ひかへして之れを成すのが我が務めなりと獨りごち卓子の所に來て、特赦願を取り出し、女に向かひて之れに署名し呉れよ。我は決して御身を見ずすといふ。女も泣き顔を隠し、態と氣輕に挨拶して、卓子の向ふに立ち願書に署名し、いろ／＼と瓶のこはれなど取りかたづける。二三の臺詞あつて、チクリュドフが去ると、カチューシャは再び卓子に突つ伏して泣く。そこへセオドシアが歸つて來るといふ順序です。セオドシアが様々にカチューシャを慰めてゐるうち、カチューシャは呼び立てられて出て行く。跡しばらくはセオドシア一人の舞臺となり、上手正面の壁にかけた聖母の像か何かの前に膝を落とし、手を合はせ指を組んで、カチューシャの爲めに祈りをする。其のうちカチューシャが這入つて來て、いよ／＼監獄へ還ることなど言ひ、カチューシャは柵から手

箱を取り出し、上手の卓子の横に正面を向いて腰かけ、セオドシアは下手の卓子に下から横向きに腰をかけます。

是れで再び舞臺面が据つて、セオドシアは丸薬を揉み居る。カチューシャは手箱の中からいろ／＼髪具の飾りなど取り出し、セオドシアに紀念を遣つて、さて後昔の春の思ひ出なる彼の花簪を見つけ、之れを髪にかざし、鏡を取つて映して見ます。此の邊すべて十年前の小娘のあごない態度で鏡に見され、種々に顔を振り向けて、嬉しげに見てゐる間、心は勿論イースターの月の夜さ、若やかなり戀の夢を辿つてゐる氣持です。それで鏡を抛り出しては、忙がしく腕輪を取り上げて、髪に手をやつては、開ちを直し、なごするあひだ何時か歌になつて、例の春は浴けます白雪がの歌を知らず識らず小聲に唄つてゐる。

ます。すると下手のセオドシアも引き入れられて、薬を揉みながら一緒に低唱する。オーケストラでも、微かに糸の音を合はす、満場ひっそりとして浴けるが如き情趣の中に幕が降ります。

此の場は言ふまでもなく遙かに初幕のアイデリクな場と呼應するもので、彼れのひたすら艶なのに對し、是れは一味のペーソスを含んでゐる。彼れを月の前に咲き盛った花とすれば、是れは無慚に散り残った花が、撞き出す暮鐘に、一ひらづゝ落て行くといふ風情でせう。

前幕の狂風林を渡るが如き光景とは、勿論技巧上の對照です。

第二場、大詰、西比利亞の荒村、罪人の一隊が恰も茲に到着したといふところ。子クリウドフも附き添うて來てゐる。茲でカチューシャの赦免狀が届き、自由の身となり、却つて獨り子クリウドフに別かれて此の地に残るといふ筋です。

此の場で最も著しいのは道具書割でせう。舞臺を廣く深く一杯に使つて、上手の前面に假小屋を見せ、其の奥から正面にかけ、舞臺の中央を半ば過ぎまで縦斷して大木の並樹、小さき木をも所々にあしらつて、總べて積雪の趣き、下手は一軒立ちの草屋の軒でじきり、並樹の奥より下手正面へかけて、茫漠たる荒原の遠見地と空と連なつて、始めは血を染めたるが如き一面の天に、西比利亞の入目を見せて幕を明けます。

幕が上がるに、上手、並樹と遠見との間から、コサツク兵の護衛隊が五人三人と先着し、つゞいて種々の裝束、被り物に身を包みたる囚人隊が、ごぼ／＼と同道を曲つて、下手から前面の舞臺に出て來る。是れより暫く賑やかに、假小屋に入るもの、草屋の前に焚き火する者、蹲居して息ふもの、絶息して倒るゝ者、介抱する者、叱咤するもの

なご總べて薄明りの中の混雑で顔は、はつきり見えない位です。其
 のうち夕日が次第に睡んで、月の光りにかはる。雪の白に入日の赤、
 月の青と幼い色を巧みにつかつてゐます。
 混雑が少し鎮まると、子クリュドフが一隊を監督してゐる士官と出て
 来て、士官がしきりに酒の事などを話しかける。子クリュドフは始終
 其の俗悪を避ける氣持で、よい加減にあしらひ、舞臺をあちこちと歩
 行く。士官もそれを追つかけて話を持ちかけるといふ一寸した滑
 稽があつて、士官が去ると病人など介抱してゐたセオドシアが出て
 来て、之れと臺詞がわたり、次いでシモンソンといふ社會黨の囚人が
 出て来る。是れは前の監獄の場にも顔を出します。
 是の時、政府からカチューシャ特赦の書面が届いて、シモンソンは子クリ
 ュドフに自分がカチューシャを愛することを打ち明け、自分と結婚させて

臭れといふ。子クリュドフは是非自分が結婚せざれば義務が立たず
 といひ、カチューシャの心を聞いて見んといふ。シモンソン假小屋の中
 に這入り、カチューシャ代つて出て来る。此のあひだ他の人々は家の中、
 樹の蔭などへ遠のいて、正面に二人が立ち話しの形ちとなりませす。
 子クリュドフはカチューシャに赦免の事を言ひ聞かせ、さて愈二人結婚せ
 んといふ。カチューシャはきつぱり之れを斷り、シモンソンの妻となる
 べしといふ。此のところカチューシャの科介は、始め氣軽く、次第に心苦
 しくなる趣き。子クリュドフは、さてはシモンソンの言へる如く眞實
 彼れを愛し、我れをば嫌へるかといふ氣持にて、では眞實シモンソン
 をといふ。女想つても想はないでも、わたしはもう決心したのです
 から、と悲しげに答へる。男の失望の述懐があつて、愛の再び歸らぬ
 ことを嘆くと、女は遂に堪かねて、「アイ、ラヴ、ユー。アイ、ラヴ、ユー。」と

叫びながら男の胸に取りすがり愛すればこそ、我れは結婚を避くるなれ。我が身の爲に愛する人をも沈淪さするは忍びぬ事なり。我が如何に君を愛するかは、我が君の誠に従ひて、酒も飲まず、煙草も吸はず、今日まで身の行ひを慎めるにても知り給へ、君を想ふが故に、我れは君の生きて世に盡くし神に盡くし給ふ日多からんを願ふ。我れは死せるも同じ身なれば、茲に留まりて、シモンソンと共に、哀れなる此等の人々の爲に力を添ふべし。この臺詞を咽びながら言ふ。男も豁然として悟りたる如く、我れ今にして始めて世に大いなる務めあることを知れり。是に我が新生涯は開けたりといひます。此の時遠方で恰も復活の讚美歌が聞こえる。蓋し此所へ着いたのも、イースターの時としてあるからです。それでいよいよ、收場となつて、二人手を取り、右と左に分かれんとして、慨然たる思ひ入れ、歌に

耳を留めて、男が「ソング、イズ、レサレクション」女が「クライスト、イズ、リズム」と静かに臺詞をわたし、愁ひの介にて幕。此の結末の臺詞は、日本の時代物式で行けば、大きくゆつくりと言ふべきでせうか、此所では勿論、聲を低めて自然に言ひます。此の場も、極めてポエチカルには出来てゐますが、若し男主人公が新生涯の光明を認める所すなはち一篇原作の骨子たり、落想たる心霊復活の點を主として見れば、矢張り不十分です。前の女主人の場合よりも、更に複雑なだけ、更に之れを發揮することが困難なものに加へて、脚本の之れに對する用意は更に不足といふ批難を免れませぬ。随つて、持つて來て附け加へたやうな氣味がある。小説でも、此所は聖書などを借りて來て、補つてあります、が、それですら十分客觀に描出されたとは言へない。此の種の境を想像し得る程度、或は種類の一三五

者が静かに思念して、主観で補足して、始めて味が出るに過ぎないのです。

之れを要するに、前後六場を通じて、必ずしも復活と言はず、一箇氣の利いた、アムピシアスな多趣味な芝居を見たと言つてよいでせう。評判は言ふまでもなく、トルストイの小説、ピアボム、ツリーの名、レナ、アシユエルの藝によつて高まつたのです。終りに此の脚本の作者は、佛のヘンリー、パーテュー。それを英譯したのです。番附の表紙は真中にトルストイの肖像を入れて、上に「トルストイ作復活」下に「ピズ、マゼスチー座、座主兼座頭、ハーパート、ピアボム、ツリー氏」とあります。

尚ほ挿繪に出した寫眞の説明をすれば、第一がツリーの子クリウドフ、初幕伯母の家へ來た所。第二が同じ幕で、ツリーの子クリウドフ

とレーナ、アシユエルのカチューシャと想ひ出話をする所、前文の紹介では此の寫眞の境を書かなかつたかと思ひますが、多分男が腰かけて、女の兩手を引き留めてゐる、其の前の所であつたのでせう。確と記憶しません。第三は三幕目監獄の場で、カチューシャが初めの姿です。第四は同じ場で、カチューシャが子クリウドフの胸に憑りかゝつてゐる所、第五は同じく子クリウドフが心靈の覺醒を説く所、此等は本文に出てゐます。第六は四幕目ツリー、ブレートンのセオドシアです。

(明治三十六年五月三十日稿)

アーギング劇「ダンテ」

(一)
此の芝居に關しては既に日本でも方々に紹介せられて居るらしいければ餘りくどくは書くまい。

五月初めから略ぼ二箇月あまり、ドルリー、レーン座興行。終りまで八九分の入り。秋から田舎を打ち廻つて亞米利加へ渡ること例の通り。但し其の節は、アーキングの外、一座に多少の抜きさしあるは勿論の事。

男主人公の役がアーキング、女主人公の役がレーナ、アシユエル。されど此の劇では、女主人公はあまり重きをなすものとは言はれぬ。其の名の如くダンテ一人の芝居と言つてよい。實はダンテの芝居でも無い。觀せ物がかりでダンテ傳の講釋を聞くやうなものだ。

批評は後にして、此の劇の由來を言へば、作者は佛の脚本家の長老サルドウ。彼れが當たり作の一なる『マダム、サンゼー』は佛の女優でサラ、ベルナルと聲名を争うてゐる彼のラジャーンの爲に書いた者で、其のラジャーが數年前、アーキングの支配してゐるライシヤム座に此の狂言を演じた。此の時がサルドウとアーキングとの關係の端緒といふことである。因に言ふ、ラジャーとサラ、ベルナルとは殆ど年々の如く倫敦へ來る。今年も兩人同時に押し渡つて、間近のガリック座とアデルファイ座に評判を競うてゐた。劇界のフレンチ、インゼーションは、ベッチコートの旗指物だ、是れにインペリアル座のエレン、テリー、新開座のミセス、カムベルを並べて、今年のシーズンに於ける女優座頭の四幅對と言つて善からう。

話によると、其の節アーキングから打ち出して、ロベス、ビールとダンテをやつて見たいが、君に書いて貰へれば此の上も無いとの事に、

サルドゥもでは書いて見やうといふやうな順序で、則ち三年前にライシラム座に見はれたのが、『ロベスピール』、續いて今年の『ダンテ』となつたのである。

アーギングとサルドゥといへば、或る意味に於いて世界の最大俳優と最大脚本家との連合である。或る者は之れを稱して、世界の最大スタージ、マシージャーの連合だともいふ。アーギングを最大俳優といふには、何人も略異論はあるまいが、サルドゥを最大脚本家と云には條件が附く。それでスタージ、マシージャーとしたのであらう。

サルドゥが最も秀でてゐるのはスタージ、クラフト即ち舞臺の智識であるといふことは、定評と見てよい。随つて人物場面の組み立筋のムーヴメントなどいふことにかけては、世界第一の老功たるを失はぬ。廣く言つて佛の狂言作者の筆頭たることは明かである。筋を

考へると共に、舞臺面がひとりでに眼前に浮ぶといふ風であるから本讀稽古の時など、如何なる俳優も此の人にはかなはない。サル、ベルナール程の位を取つた女優でも、サルドゥが本讀の節は、唯々として仰せを聴くといふことだ。舞臺の事情に通ずるといふことは、勿論脚本家に取つて望ましいことではあれど、それは程度問題だ。脚本家は専ら自分の頭を師として、舞臺を之れに従はしむるの力を有せねばならぬ。サルドゥは此の力をも有する。さりながらまた、此の力に知的工風と情的工風と、所謂天才肌と天才肌の別があらう。サルドゥの如きは此の天才肌に落ち着くものらしい。英國で對を求めれば年配は違ふが、ピ子ロなどであらう。たゞサルドゥは更に一步大膽な所を持つてゐる。

サルドゥは當年七十三歳、不遇の頃下宿屋の一室で熱病にかゝつてゐ

るのを、今の妻君、その頃は言葉を替はしたことも無かつた同宿の婦人の介抱で全快し、それが縁となつて、時の名女優デージャザの引立てにより、一躍して大成功の作者となつた。此の話は誰も知つてゐる。筆一本で巨萬の富を作つたのも此の人である。彼れはまたスピリチュアリズムの信者、且つ實行者で、若い時は、しばしば不思議の靈魂に乗りうつられたと稱してゐる。サラ、ベルナルの爲に「スピリチズム」と題する作のあるのも、之れがためとの事。「ロベスピール」にも二幕目に幽霊の出る所がある。「ダンテ」は勿論のこと、地獄の芝居である之れを他方から言へば即ちシムボリズムであらう。サルドッの顔はまた何所かダンテに似てゐると言はれるのも、因縁づくかも知れぬ。彼れはまたアルテールにも似てゐると稱せられる。アルテールには其の沙翁ぎらひの點も似てゐるといふ。其の他ワ

グナーにも肖てゐる、ナポレオンにも肖てゐるといふのは、稍々ひやかしに類する。小説家のホール、ケインがレスタ、スクエヤーの沙翁像の前でひやかされるといふのと近い話だ。サルドッ初めは、反對者も多く、剽竊家といふ誦もあつたが、先年選ばれて榮譽院に位を占めてよりは、悪聲頓に消えて、遂に斯界の泰斗と認めらるゝに至つた。併し今なほ文壇的評價の上よりいへば、此の人の作は殆ど全く劇詩に非ずとの極端なる批難を下す者も多い。作するときの様子は、概ね先づ境が出来て、而して後に之れを書き埋めて行くといふ風らしく、最初境のスケッチを組み立てる間は、力めて頭を冷靜にし、さて書き埋める段になつて、はじめて熱力を一杯に注射する。然らざれば、初めに力を出だし過ぎて、後に熱の冷却する恐れがある。といふのが作者の主義ださうな。

「ダンテ」はまたエミール、モーローとの合作となつてゐるが、モーローは單に史的考證の方面を手傳つたのである。佛文を英譯したのはアーギングの伴の一人、ローレンス、アーギング。書割は三人の畫工の分擔。

此の芝居が出ると逸早く其の筋書に註を加へたやうなものを刷つて賣り出した本屋がある。劇場内でも賣つてゐる。筋書と言つてもあまり纏まつたものでは無く、寧ろ作中の事實の考證と、作の趣意を吹聴したやうなものだ。是れに依ると、サルドウが此の脚本の趣意は史上のダンテを描くのでは無い、即ち史劇ではなくしてダンテの精神若しくは中世伊太利の精神界を之れに標現したものである。シムボリック、アイデアを味はなければ、此の芝居は分からぬとの辯解と見てよい。是れはサルドウ自らの言だ。

文藝界のシムボリズムといふことは現今一面の潮流たるには相違ない。英國で言へば佛蘭西通のシモンズ。ニイチエ好のシヨ一。同じく愛蘭士詩人のイーツなどが専ら唱へて、大陸思潮の一側を吸入せんとしてゐる。日本の最近も同じであらう。併しながら、精しく言へば純粹の標現主義といふものが、深く美の條件に合せんには、更に其の上に何物をか要することを證しつつあるのが、今日の實勢かと思はれる。即ち文藝が美術として成功すると否とは、其が眞理を標現すると否とに非ずして、其の外にあること、猶ほ現實を寫すと否とが、美の最後の判断に非ざるが如くである。若し誤つて美の源を現實の摸寫に尋ねたら、寫實主義は亡ぶであらう。美の源を眞理の標現にのみ求むるのも、同じく理想主義を亡ぼす所以である。なほ標現主義存立の所以については、今少し論があれど後に廻して、

この『ダンテ』のみづから標現主義と榜示するのを幸ひ、此の點から、ア
 ーギング劇の如何に成敗せしかを觀やう。
 序ながら、此の劇が觀察者に重大の意義を持つてゐる點は數多ある。
 第一、右の如く標現美術の恰好な試験場として。第二、アーギングが
 去年の『ファウスト』といひ今年此の芝居といひ引きつゞいて二度
 まで標現的のものを場の上に上り、劇界に於ける此の種の傾向の頂點
 を示せるものとして。第三、純然たる劇として、如何なる程度まで書
 割道具立を利用し得るかといふ問題に、世界の演劇史上空前の事例
 を示したものとて。
 さて其の芝居の組み立、逐場の見物記及び結論は次項の如し

(二)

ダンテ劇といへば、誰れしも先づ彼れが一代の大作『神曲』と、彼れみづ

からの傳と、ごちらが種かご惑ふ。此劇は雙方から取つた者である。
 『神曲』を芝居にするといへば、在來の例から見ると、其のうちの一節を
 材にして布衍する中にも、千古絶好の詩題といふ、彼のパオロ。フラ
 ンチエスカの必中談では無いかと思ふ。たしかにパオロ。フランチェ
 スカは劇中のものとなつてゐる。否、凡そ如何なる人がダンテに
 指を染めても、既に序してダンテといふ以上は、パオロ。フランチェス
 カの名とピアトリスの名とは、必ず其の彩色の中から逸すべからざ
 るものであらう。併しパオロ。フランチエスカは此の芝居では只一
 つの挿話たるに過ぎない。
 又ダンテの傳といへば、自傳の『新生涯』と、ピアトリスと、戀の神聖と、是
 れが芝居の大筋かとも察せられる。ピアトリスの名は勿論つかつ
 てある。けれども劇中のダンテ傳は、それでは無い。さらばボツカ

チオ以下後世の全傳を持つて來るかといふに、さうでも無い。
 斯くの如くして、サルドッの『ダンテ』は、普通の路を離れた。而して傳の
 方面は専ら作者の空想から組み立てた。『神曲』は其の全體の形式作
 者みづからは「全體の精神」と熟語するかも知れない。就中地獄の卷
 の趣きを寫した、要するに『神曲』中から地獄巡りを取り、作者の頭の中
 から傳を取り出して結合したのが此の劇である。
 作者サルドッは、何ゆゑに斯かる奇道を選んだであらうか。
 曰はく標現的高大を其の作中に求めんとしたからである。是れは作
 者みづからの説明で知られる。
 前言つた説明書によれば、作者が地獄巡りの幻想を寫した趣意は、之
 れによつてダンテが精神上の煩悶すなはち現世の罪惡過誤に倦み
 て、人生たゞ善を愛するに至極することを悟るに至れる所以を標現

せんとしたものの。またダンテ其の人としては、當時に於ける政教の
 混亂法王の専恣等を惡んで、遙かに近世の自由思想を豫表した點に
 標現の意義を求めたものである。言ひかへれば、ダンテ傳に自由と
 いふ一思想の權化を見、神曲に人世到頭至善に歸すこの意を見んが
 ために、サルドッは斯くの如き結構を選んだ。「史上」のダンテを描くに
 あらずして精神のダンテを描く也とは作者の宣言である。意氣や
 稱すべしでは無いか。
 さりながら好漢惜しむらくは月を描いて影を成さず、松を描いて風
 來らず、如上の意義に於ける標現劇『ダンテ』は、詩とならなかつた。無
 感興であつた。少なくとも吾人の感納性に對しては、標現的高大の
 意義から來る美快感は無であつた。啻に吾人のみならず、世評も大
 抵は此の點に於いて一致してゐる。

されば此の感納的事實を發足點として、少許の推理をこころ見やうか。

何故に此の一大標現美術は無感興であつたか、概般的に標現美術そのものに失敗の原因があるのでは無いか。但しは特殊にサルドゥ一家の此の場合に限れる缺點であつたか。

概論はこゝに省く。何とならば、其の結論次第で、文藝の様式に制限を立てる譯となる。是れ批評學上の大事であるから。

特殊論をなさんが爲めに、標現といふ語の意義を狭めて置く。即ち假りにこゝに例現といふ對照語を用ひて、是れを彼から引去らう。

例現といひ標現といふ、所詮現の一字は免かれぬ。こゝでは或る「理」が美術と現するの謂ひであらう。而して其の現する「材」と現せらるる理との關係によつて、例現と標現との區別を立てる。

例現とは理と材とが量差の關係であること、標現とは是れが類差の關係であること。量差とは一方が普遍のもので、他方が特殊のものといふだけの差、類差とは其の上に種類の懸け離れてゐる差。前者は理と其の實例といつたやうなもの、後者は理と其の標牌といつたやうなものである。

例現美術にあつては、作中の事象に觸れると共に、人をして遙かに其の奥に貫ける廣汎の理を思ふを禁せざらしむる底の美術であらう。併し此の場合の特色は、斯くの如くして思ふ所の理そのものが、事象と離れたる如くにして、尙ほ離れず、妙に相混じて、知情の調和的満足を成し、以て其の美術に一種幽妙の光澤を傳するにある。一派の理想派美學から言つたら、美の本意は是れに盡きるとも見やう。吾人はたゞ之れを以て美の一と見る。美の全とはなさぬ。

標現美術の特色は、其の標せられる理と、標象そのものと、單に譬喻的
 寓意的關係で繋がつてゐる點にあること前言つた通り、而して譬喻
 的關係の成立する條件の種々なることは、修辭の場合に見ても明か
 であるが、中心は二つのものが、密に關聯してはゐるれど、而かも確かに
 異なつてゐると思はれる所に存する、即ち標現的作品に對する時も、
 其の事象よりして遙かに其の奥の理に思ひ及ぼすをば、禁じ得ない。
 是れは例現美術の場合と同じであるが、思ひ及ぶ次第が違ふ。思ひ
 及びはするが、而かも明かに別なものであるといふ念が、何處か意識
 の隅に残る。是れが標現美術の特性であらう。若し全く此の念の
 忘却せらるゝ刹那があるとするれば、其の時は併せて標象そのものを
 も忘れて、眼は空中の理のみ辿つてゐやう。
 此の特性からして、標現美術には種々の要件を生ずる。

第一は其の標せられる理が、そのものみづから最も現人生に切な言
 ひかへれば趣味深いものでなくてはならぬ。其の理の提起のみで
 も、早や十分に雑多の過去現在の吾等が經驗の感想を撼搖するもの
 でなくてはならぬ。さなくば、其理は只空なる託言冷かなる抽象名
 詞に過ぎざるの結果となるから。而して此の點から作の生命たる
 哲理に對する情味が發する。
 第二には標象すなはち作中の事象は、何所までも寓意標たるの性を
 失はぬと共に、最も適切に其の寓する理を提起するものでなくては
 ならぬ。寓意標たるの性を失ふのは、厭はぬが、さすれば例現的美術
 に近よるまでの事である。適切といふことが缺けたらば、其の美術
 は説明を待つて僅かに分かるものとなるから。而して作者の技巧
 に對する嘆稱の興味は、此の適切といふ事から發する。(學友平野柏

蔭氏は曩に『讀賣新聞』日曜附録に善美關係論を掲げられた中に、技巧
 嘆稱の興味のみならず、美たり得ることを説いて、吾人が舊文中に之を否定
 した箇所あることを示された。今は記憶せぬが、さうであつたかも知
 知れぬ、寧ろ理想派美學に重きを置いた一頃は、自然にさやうの傾向
 を持つてゐた。今日では此の點柏蔭氏の論に異議無し。善美合一
 論はおのづから別である。之れは他日を期する。
 此等を標現美術の重なる要件とすれば、サルドゥの標現劇『ダンテ』は
 兩件ともに之れを逸してゐる。
 第一に作の生命たる所標の哲理が枯瘦である、空漠に失する。曰は
 く「自由が暴力に苦しむ」曰はく「神意に參して人生善を愛するに止ま
 るを知る」
 自由が暴力に苦しむといふことは、政治宗教の狀勢の一變じた近世、

殊に自由といふことの著るく發達した近世では、人々念頭の最大事
 とはならなくなつた。之れに代つて近世の人心を支配するものは
 理と情との乖背といひ社會と個人との衝突といひ、自と他との矛盾
 といふが如き諸概念であらう。此等も何れの點にか自由を暴力と
 の關係に觸れないことは無いが、同感の燒點が變遷してゐる。觀望點
 が變つてゐる。されば自由を描いて同感を得んとならば、是非とも
 標象その者の感興に多分を歸するの例現美術に行くべきであらう。
 殊に中世伊太利の歴史を背景として、史上のダンテを取り、史上の事
 實を髣髴するに如くは無い。即ち普遍化する自由をダンテに標現
 するに非ずして、中世の自由、ダンテの自由を其のまゝ描くのである。
 而して後其の奥に普遍なる自由が不即不離に現はれたらば、作者の
 成功たるや勿論。

神意に參して人世善を好むに止まるを知る是れは空漠に失して我等の感想に切ならざるものとなつた。但し此の點は原作『神曲』の上から一言する必要がある。何とならば是れやがて『神曲』の精神であると共に、『神曲』は萬世にわたりて最も高尚なる人の心に訴ふるの詩とたゞへられてゐるから。

『神曲』の趣味の中心は何であらうか。凡そ世界の典籍中純文學の産物で累世の評釋研究を重ねること『神曲』の如きは他に類無しといふ。併し其の中には、文藝上の感納的事實を離れて徒らに屋上架屋の弊に陥つた所謂腐儒的頭巾の氣を脱しないものも決して無いとは言へまい。是れは實に『神曲』のみならず古今東西にわたつて文學研究の上に絶えず生ずる一種の瘡蓋のやうなものである。『詩經』の例を見ても『源語』の例を見ても此の理は分からう。されば眞に文藝の論

をなさんとするものは、此の瘡蓋を見わけて之れを剃ぎすてる覺悟がなくてはならぬ。即ち斷えず自家が直接の感納的事實に立ち還へるの大切なることを忘れてはなるまい。

併し勿論自家の感納のみを標準とすることの出来ない場合もある。外國文學研究の如きは其の一であらう。今試みにダンテが『神曲』の主なる趣味點を自他に參して數へたらば、(一)實物的(二)事象の宗教的傾向(三)智識の集積(四)詩中の人情(五)詩中の叙景(六)詩の聲調(七)歴史的背景(八)詩中の金言(九)標現的意義、こんなものであらう。

此のうち(二)事象の宗教的及道德的傾向といふことは、中世當時の人にのみ趣味あつて今日は其の感動力のいたく薄れてゐることを忘れてはならぬ。地獄極樂の記事は、地獄極樂の記事として、當時一般の讀者に多大の趣味を供したに相違ない。之れは當時の宗教とい

ひ知識といふものゝ状態から推して察せられる。ダンテは眞に地獄の火に毛髪まで焦して來たかと思へばこそ、地獄の巻が活きて來る。是等は今日の變遷したる智識宗教道徳では、感動の源とは殆どならぬ。たゞ當時の時勢としてはといふ條件の下に、かすかに嘆稱の感を惹くのみである。(三)の智識の集積すなはち當時の最高智識を集めて近世を豫表するといふ點も今日ではさしたる感動の源とはならぬ。(六)の詩の聲調といふことは原作では最も重大な趣味點であらうが、其れは伊太利人乃至伊太利語に熟通すること猶日本人が近松を讀んで其の文中の音楽を味ひ得る如くなるものにして始めて分ること、翻譯文學の上には應用の出來かねるものである。斯くの如くして、『神曲』中より現在有力の詩源を得やうとすれば、寶物的すなはち傳來の有難味なごいふ一種の感情詩中の人情深き挿話、

詩の景趣の妙なるもの詩中に見えたる歴史の味ひ、片言隻句の眞理及び最後なる全曲の標現的意義等を參酌せずばなるまい。事實に於いては、サルドッは此等の件中最後の標現的といふことを除いて、他の諸要素を悉く利用し且つ或る程度まで成功してゐる。原作の寶物的光澤を背に負つてゐるのは勿論のこと、作中の重なる挿話をも集めて全劇を組み立てゝゐる。書割舞臺も多分は『神曲』中の詩景を本としてゐる。髣髴として中世伊太利の歴史を思はせるの利も忘れては居らぬ。さるにも拘らず作者みづからは號して是れ標現劇なり歴史のダンテに非ず、外形のダンテに非ずといふ。言ふこゝろは、『神曲』にダンテが精神的煩悶と變遷とを見て之れを此の劇に標したりその事である。而して吾人は判じて、『ダンテ』劇の趣味此れに非ずして却つて彼

れに在りといふ。而して其の理由は専ら標せらるる所の理そのものが空漠である爲めと斷じた。

ダンテはグーデルに導かれて地獄界と淨罪界とを巡り、ピアトリスに導かれて天堂界を巡った。又到るところに種々の感慨をも述べ、教訓をも見聞した。グーデルは成程理性の標現かも知れぬ。ピアトリスは成程情または愛の標現かも知れぬ。併し元來『神曲』全體の上には明かな一の標現的意義ありと見るのは、果して當を得たものであらうか。而してそれが果してサルドッのいふ如く、人生たゞ善を愛するの外無しといふ理であらうか。是れは頗る疑はしい。片言隻句を集めて抽象したらば、そんな哲理も組み立てられぬでは無からうが、同じやうに他の哲理も組み立てられる。此は推理家に往々ある所の抽象法上の危険である。

假りに百歩を譲つて斯くの如きが『神曲』一篇の落想であるとしても、更にそれが眞に此の詩の感興の要素であるか否といふことは、一層大なる疑問ではないか。吾人はおもふ單に斯くの如き抽象思想は、今人の想像経験を撼揺するに適せず、あまりに手ずれたれば、またあまりに空疎なれば。

以上之れを要するに自由といひ、人生善を愛するに止まるといひ、『ダント』劇が標現せんとして敗れたる所の思想は、思想みづから美術の標現としては、不適當不適切のものである。

次に標現美術の他の要件たる、標象と理との適應といふ事、即ち技巧の感興もサルドッの此の作では殆んど皆無といつてよい。せめて此の感興でもあらば、美術としての地位は保ち得らるべきこと、繪畫などの、比較的技巧の勝つた美術の例でわかる。が今の場合、舞臺の上

のダンテが成程自由といふものゝ權化かと思はるゝ様な面白味は一つも無い。夫の『ファウスト』中の悪魔がいかにも人間の迷ひといふものゝ權化かと思はるゝ所に妙味あるとは全く違つてゐる。また筋の全體乃至種々の出來事の上に、いかにも巧みに人生云々の哲理が忍ばせてあるなどいふ感も起らぬ。是れまた『ファウスト』の場合とは格別の差である。

以上の論據から吾人はサルドッの標現劇『ダンテ』が其の標現といふ點に失敗したものと云ふ結論を確かめる。即ち標現の二字を看板から取り下ろし、單に劇『ダンテ』として之れを見る。

劇『ダンテ』の感興は或る度まで前に擧げて『神曲』中の詩源から生ずる。すなはち『神曲』を崇める情も此の劇の感興の一要素である。其の中の詩景が本になつてゐる舞臺面も感興の一要素である。臺詞中に

原作の名句が出て來るのも感興の一要素である。伊太利の歴史を想ひ起こすのも感興の一要素である。殊に原作中の著名な挿話、たとへばウゴリノの事、ピアの事、パオロ。フランチェスカが事、法王クレメント五世が事等は最も重要な劇中の感興的要素である。

併し是等すら見物の多數が伊太利の歴史を知らず、ダンテの傳を知らず、殊に『神曲』は『ドレーレ』ダンテの挿繪しか見たことが無いといふやうでは、劇の感興は益々手薄とならざるを得ぬ。

然らば結局此の劇の成功は何れにあるか。曰はく全く以上の外に於いて三つある。一は其の地獄の舞臺の書割道具立の人目を驚かしたること。二はアーギングのダンテ其の人の扮し得て絶好と言はれたこと。三は此の劇の最後の一場が單に一場として巧みに戯曲的効果を人に與へたこと而して一は舞臺方の勝利、二は俳優の手腕、

三は作者がドラマチック、コンストラクションの老巧に基るものであらう。讀者は次條に書く此の芝居の概略で、以上成敗の理を味はれよ。

評論の終りに臨んで、一言注意を喚び置くべきは、此の劇の作者が、失敗はしたながらも、單に劇「ダンテ」と言はずして、殊更に標現劇を望んだ所以と、書割道具立の壯嚴を極めたことと、二個の重要な世潮の影が差してゐるといふことだ。

標現劇を望んだのは、一言でいへば、高大を要求するといふ文藝壇目下の一潮流を現はしたものであらう。高大を要求するとは、人心の哲學的進轉に伴ふ文藝上の一要求である。之れには單に文藝上よりするものゝ外、宗教的に實質をも併せ要するものをも混じてゐれど、本意は勿論、哲學的瞑想の喜びを文藝の形によりて得んとするに

過ぎぬ。即ち其の哲學的深奥は快樂の爲めではなくてはならぬ。兎に角、今は假りに之れを文藝壇の哲學的要求とも呼ばうか。是れに對する今一つの要求は、熱情的要求で、熱烈な感情の發表を文藝上に要求する。是れは少くも概念の内容は違ふが大體に於いて悲劇的詩的などいふ名と相通する。感情の熱烈は人生の悲劇を構成する元であるし、情に耽溺した形は詩的である。此の要求は主として現在を悲觀し、現在を不満足とする人心の傾向から發する、更らに是れに對して現在を樂觀し、現在に満足を求むる人心よりは、喜劇的要求が起る。言ふまでもなく、此等の要求が今日新たに生じたのは無い、古來様々の形ちで互に差しつつ引きつしてゐたものではあるが、英國の文藝は特に喜劇的要求で勝れてゐる。それが近時他の一方には、搖りかへして悲劇的要求から哲學的要求に及ぶ形勢を示して

る。劇壇でいへば即ちアーギングが『ファウスト』を取り『ダンテ』を取った所以であらう。何か高大なものをといふ人心の底の要求をあらはしたのである。併し目下英國劇壇の特色はやはり喜劇である。是れは世界に匹なしと言つてよからう。舞臺装置の壯麗といふことは、劇其のものゝ本位を補ふ限り、毫も之れを難すべき理由は無からうと思ふが、勿論其の加減は微妙である。若し一步を誤らば芝居はたゞの觀せ物となり了る。一方に近時英國の舞臺装置の著く壯大になつたと共に他方には之れが排斥論者の絶えざるも、畢竟此の危険を慮かつてのことであらう。難者等はアーギングを以て、斯くの如き形勢を導いた責任者の一人としてゐる。今回の『ダンテ』の如きはたしかに行き過ぎたといふ譏を免れまい。スペキュタキュラル、プレーといふ名は辭し難い。之れに對して目

下開場中のツリーが沙翁劇『リチャード二世』の如きは文字通りのコストューム、プレーである。衣裳道具立の壯大富麗なるは眞に人をして所謂エリザビータン、グローリーの盛事を想はしめる。此等もまた同じ傾向を示すものと言つてよい。

(三)

此の芝居すべて序を併せ五幕十三場、それを三時間か三時間半のあひだに演ずるのであるから忙しいは勿論なれど、三幕目の地獄の巻七場ばかりは、全く覗き目鏡的に進行するから、一場十分間とはかゝらない。加ふるに幕間の嚴重なるは此方の大芝居の大芝居たる所以で、此の劇の如きも、序幕の後に十分間、一幕目の後に九分間と番附に書き出した以上は、一分も違へない。是れは勿論舞臺道具立の性質が日本のと違ふからでもあらうが、一つは所謂稽古があらゆる方

面に十分行届いてゐるからであらう。由來日本の芝居は稽古といふものが甚だ輕薄ではないか。あれ程の大藝術を演ずるには、少くとも三十日や五十日の肝膽は碎くのが當然だ。若し今後素人出の俳優といふやうな團體が起るとすれば、其等の人々は、在來の俳優が長の年月積んだ修業を追ひ越す手段の一として、必ず此の稽古といふ點に十二分の意を注ぐべきであらう。一役を演ずるに、半年の眞面目な準備を重ね、推敲を重ねる覺悟があつて始めて可也であらう。深く一筋に思案を凝らす所には、必ず何等か餘人の及び得ざる悟境の來たること、いづれの事業に於ても同一である。

興行時間について思ふは、日本演劇の外形的改良のうち、最も急なるは此の興行時間の改正では無からうか。古い問題ながら、今日の都合吾人は更に世の識者と當局官府との一考を得たいと思ふ。茲に

官府といふのは、此の種の改良を助けるにこそ、最も官府法令の力が必要なからである。例へば此の種の改良を行はうといふ場合に、いつでも起る妨害は、劇場干係者の私利と衝突するといふこと、延いて之を決行すれば、此等の徒の復讐暴行が恐ろしいといふ、人氣商賣には已むを得ない弱點に基いてゐる。斯かる博徒的妨害に對してこそ、後へに劍と銃とをひかへた官權が、識者の意見を察して腕を揮つて欲しい。暴行があれば何時でも保護してやるといふだけでは役に立たぬ。官府の法令とあれば、官府の外に誰れを怨まうやうも無くなる。是れが必要なのである。

興行時間の改正就中、其の短縮といふ點からは、種々の利こそ生ずる害といふものは生じない。是れは今日大抵の人が同意する所であらう。必ずしも西洋の眞似をして三時間と限らなくともよい。四

時間以内でも或は五時間以内でも悪くはあるまい。要は普通の往復路程を込めてほど半日以内とすれば済む。そして晝興行は一時から六時までの間、夜興行は六時から十一時までの間に随意の開閉時間を選ばすといふ風に制限すれば尙結構だ。時間が短くなれば自然無駄の時間を縮める工風も是れからする。見物の頭痛疲勞も是れがために無くなる。不得要領のものを三つも四つも寄せ集めて見せる弊も之れによつて救はれる。作もおのづから引き締まつたものが出て来やう。俳優も疲れることが少くなる。従つて藝に忠實にもなつて来やう。芝居見物といへば一日がくりと云ふ悪風も消える。場内で晝食を餘儀なくせらるゝ憂も無くなる。費用もすべての點から經濟になつて来る。三時間や四時間では見物が満足せぬとよく反對論者はいふが、それは取るに足らない論だ。八

時間も九時間も場内に立て籠つて夏は氣に蒸し上げられ冬は腰から下が冷えて来る。それでも金を出した以上厭といふまで幕敷を見なければ承知しないといふやうな見物は、事物の改良進歩を圖る時、眼中に置くべき標準の代物ではない。座の算盤から言つても、興行時間の一統縮まつたが爲にこんな見物が劇場に足踏みをしなくなるなどとは有り得べからざる事だ。また昔の大物を通しに演ずることが出来なくなるといふ批難もあるかも知らぬが、それは嘘である。「忠臣藏」十二段でも從來歌舞伎座あたりの幕の長さから推すと工風をさへすれば優に五時間で済まされやう。且つ現在の事實から推せば斯やうな例は將來普通には有るべしとも思はれぬ。ついでに記すべきは、目下英國でやゝ是れと似た劇場問題がある。其れは今月の初め、倫敦で市長が文學者新聞記者などを饗應した、其

の席上、脚本家のピ子ロが提出した、西倫敦劇場の開演時間を早める
 といふ議である。従来は早くて午後八時、通例八時半から、遅きは九
 時開場などいふのもあつた。是れを七時にして十時過ぎには終は
 ることにしやうといふのがピ子ロの意見で、理由は種々あれど、要す
 るに早くはねる方が、夕食のため及び汽車馬車の歸り道のため便利
 といふに歸する。此議は前から多少あつたが、今回は發言者がピ
 子ロといふ、日本で言つたら昔の默阿彌といふやうな地位の人であ
 るため、忽ち世の注意を惹いて、甲是乙非、諸方の話題論題となつて
 る。ツリ、其の他一二の俳優は其の座で投票を募り、新聞紙は座主
 俳優などの意見を續々紹介してゐる。反對論の主なる點は、役所會
 社通ひの人々が大凡そ六時に退くとすれば、宅へ歸つてから芝居へ
 來るまでの時間が一時間では足らぬといふことである。併し大勢

は七時半開場といふくらゐに折れ合ひさうだ。
 斯やうな事までが、私心我執を離れて何人の意見も公平に聽かれ、而
 して善いとなれば直ちに實行せられる。茲が此の國の美しい一點
 であらう。先頃も有名なイトンの學校で、失火の際、少年が二三人
 焼死した。其の理由は窓に鐵柵の張つてあつた爲といふ事が分か
 ると同時に、古風な格子附の窓の危険といふことが忽ち問題となつ
 て漸次取り拂はれることゝなつた。些細の事ながら面白いではな
 いか。英國人は保守だと評せられるが、併し我執の保守ではない。
 聰明な保守である。保守と進歩と甘く調和して行く所に此の國の
 妙味がある。大道の上は十八世紀式の乗合馬車で、地下は二十世紀
 式の電車鐵道が走り、夜は瓦斯燈と電燈と半々に町を照す。箇の中
 の教訓を味はないで、英國は歐羅巴の支那となりはすまいかなどい

ふのは、まだく、至らぬ考であらう。

餘程話の方角が外れたやうだが、改良ついでに尙一つ申したいのは、劇評といふものを今少し何とかしたいと思ふことである。尤も記者が國を出てからも既に二年近くなるから、其の後如何に變じたかは知らず。且つ當時から引き續いて向上の途を歩んでゐる人もあ

るのは明かであるから、茲には假りに三四年の昔を標準として立言する。即ち昔の劇評といふものには、自分の洒落を發表するためだか、近附の俳優に挨拶をするためだか、招待せられた禮心に太鼓を叩くためだか、役者を教へる料簡だか、見物を導く料簡だか、一向に衣體の知れないものがあつた。「よくしてゐたり」的の評判記は、もう大抵にして葬つてもよさうに思はれる。つまり劇評といふものを、今少し標準あり見識あるものにして、今日の劇運進轉に十分の地步を

占めて貰ひたい。もつとすつと文學的になつて欲しいのである。

劇の刷新といへば、脚本も俳優もよくなるべきは勿論であるが、同時に見物も善くならなければ駄目だ。而して見物の進歩を促す唯一の助けは、新聞雑誌の劇評であらう。此の點から言へば、今の劇評は最も見物教育の方面に力を傾けて貰ひたい。文藝の批評といつたら、目的は一つには限るまいが、今の場合否恐らく凡ての場合に於いて、最も貢獻の大なるは、作者を教ふるが爲にも非ず、學理に資するが爲にも非ずして、専ら觀者を刺戟し誘導する點に存するのであらう。

批評の三大効果といふうち、作者の批評によつて悟入する場合も無いが、是れは寧ろ困難且つ少數である。又批評が直ちに美哲學の經驗的方面となるといふのは、すつと専門學に偏しての効用である。結局残る所の觀者に對する刺戟といふことが、文藝批評の

効を爲す大部分たるの理は、之れを近く我が小説史發展の跡に見るも明白ではないか。従つて此の種の目的を達するためには必ずしも批評は分解的でなくともよい。所謂印象的批評の方が一層此の目的に適してゐるかも知れぬ、但し本來批評法を分解的印象的などと分かつのは、大體の論たるに止まつて、進歩せる批評にはおのづから兩者錯綜して用を爲すこと、固より異しむに足らぬ理であれば、法の如きは何れによるも不可なしである。要は其の批評が批評家の眞實なる藝術的感納に基づくことと、一世の趣味を啓發しやうといふ明白な目的を有することと、及び是れに表せる批評家の感納性そのものが一世の水平線以上にあることを示すだけの用意とを具備するを以て足れりとする。されば予輩は切に新聞雑誌の局に當たらるゝ諸家に望む、後の明治演劇史をして必ず新聞雑誌の劇評が

劇壇進轉の半面の要素たりしことを忘れ得ざらしめんことを。

さて愈々『ダンテ』の本文に取りかゝつて、

序幕は伊太利ビザに於ける餓塔、出場人物の重なるはアーギングの男主人公ダンテとレーナ、アシユエルの女主人公ピア、其の他史上の著名な人物では大僧正ルチエリ及び其の敵ウゴリノ。是だけの人名を見ても、此方の讀者には既に十分の想像を廻らす材料がある。たゞ茲にダンテの子までなしたる昔なじみとして、且つ今は他人の妻となつて其れが爲に悲惨の最後を遂げる女主人公としてピアを點出したのは、全く作者の架空で、其の結合法がやゝ唐突なため、感興を薄める嫌ひがあつた。ピア自らとしては、ダンテの『神曲』中他のフランチェスカなごゝ同じく著名な女性の一人で、後世文藝の材源ともなつてゐるが、曲中のピアに關する句は極めて短いものである。寧ろ暗

示力に富んだ、パワフルな句をいってよい。即ち浄界の巻第五節の終りに

一七八

“Ah! when thou to the world shalt be return'd,

And rested after thy long road,” so spake

Next the third spirit; “then remember me.

I once was Pia. Sienna gave me life;

Maremma took it from me. That he knows,

Who me with jewel'd ring had first espoused.”

(Cary)

とある、痛恨極まつた數句がそれである。専ら是れだけの暗示をたよりに、ピアに關する悲劇は組み立てられるのであるが、サルドゥの『ダント』も一面此の暗示に解釋を試みたものには相違ない。併しサルドゥは全く史的事實を避けて之れを解釋した。『ダント』劇では、前言つた如く、ピアをダンテの情婦とし、且つゼンマといふ娘の子まで出來

てゐる。ダンテが時事非にして放浪の身となるや、ピアは此の隠し子を姪と稱して他へ預け、自らは子ロの妻となる。而かもピアがダントに對する歡情は依然として昔に變らぬ。狼戾なる子ロ之れを知つて、遂にピアを瘴毒の中に投げ殺す。といふのが此の作に於けるピアの悲劇である。

是れだけの筋も、ピアを主人公として書いたら、随分立派な悲劇が出来るであらうが、茲には唯之れによつてダンテの精神的煩悶を反映させやうといふに止まるから挿話たるの價値しか無い、描寫が略である。随つて今回の女主人公といふものは、極めて割のわるいものになつてゐる。ダンテ一人、アーギング一人の芝居と見てよい。而も已ならず、ダンテといふ人物の裏に、私通、私生兒、乃至姦通に近いやうな情事を見せたのは、當時の事實あり得べきことゝはしても、二十世

紀の人に訴へる劇として、決して策の得たるものとは言へぬ。況んや其れがわざ／＼作者の作り設けた點であるに於いてをや。如法のダンテが舞臺に出て來るとき、見物は覺えず片唾を吞んで、彼れが嚴肅の氣に打たれる。けれどもやがて其のピアとの關係を知るに至つて、やゝ興醒むる感がする。といふのは、決して偉人傑士の裏面に此の種非常の情事を點するのが悪いといふのでは無い。場合によつたらダンテと姦通といふやうな矛盾的配合でも、書きやう一つでそれを立派に調和させることが出來やう。茲に予輩の提出する批難は、此の書きやうにある。言ひかへれば、單に挿話として疎筆を用ふる場合に、斯やうな矛盾的感情を并舉して、それを調和するだけの準備を與へないのは、結局感情の破壊に過ぬといふ批難である。伯爵ウゴリノと大僧正ルチェリとの話は、これまた『神曲』地獄の卷第三

十三節に有名である。歴史によると、當時十三四世紀の伊太利は、亂麻の世、此の二人も結局權勢の爭奪から敵身方となりウゴリノはルチェリの謀に中たり人民に追はれてグワランヂの塔に逃げ込み、一門數名、九箇月の間其所に隠れて、終に餓死する。是れより幾久しく、此の塔を餓塔タワリ、オブ、ハンガリと呼び、十七世紀の中頃までも後人懐古の種となつて存したといふ。是れだけの史的事實に加ふるにダンテの詩の力を以てした好材料の上に、サルドゥは此の挿話を組み上げたのであるから、史的感興を呼び起こすものとしては、一畧限りに一種の面白味があつた併しあまり深い感銘はなかつた。畢竟今日では、此の慘澹たる光景のみに感傷があつて、其の經過は多く同感の料とならず、随つてごちらかと言へば、時間的よりも空間的の詩境で、繪畫の方に一層よく適して、劇詩には不適當なのであらう。尙

は此のウゴリノの事も劇中の一挿話であるが、ピアの事其の他後の
 パオロ。フランチェスカが事ゼンマ。ベルナーチノが事、牧師長コ
 ロンナが事等もすべて挿話である。要するに此の芝居は種々の挿
 話をダンテといふ一人物で差し貫いたものと見るべし。
 さて大序、オーケストラの樂休むと同時に、幕を靜かに捲いて取れば、
 正面少し下手よりに石と土とを疊んだ岩形の塔の外景を取り附け、
 其の左右が町つゞきの道、上手横は寺の入口で仕切り、尙奥には一帯
 の流れの遠見塔の二階を狭い窓で見せ、下入口には番人の部屋を見
 せる。凡てビザの餓塔のおもむき。時は冬雪のちらつく景。塔の
 前で數人の市民等ががや／＼と立話の體、噂は勿論塔の中なるウゴ
 リノの身の上と知られる。其の内一人が上手の寺をさして、彼處に
 ダンテが居るといふ。是れで見物が一齊に視線を寺の階段の方に

集めると、それに迎へられて、アーキングのダンテが、つと現はれる。
 拍手の音雷の如く起こる。

ダンテの拵へは極めて寂びたものである。着附は柄色の長きガウ
 ンに身を包み、同じ頭巾を被つてゐる。顔の造りは、アーキング一流
 の面長の嚴肅な顔がそも／＼既にダンテ的である上に、彼のダンテ
 の死顔から取つたといふ世上流布の彫塑を其のまゝ寫したのであ
 るから、眞實のダンテ世にあるとも、見分けはつくまいと言はるゝ程
 の肖顔に出來てゐる。例の有名なボツカチオのダンテ傳に書いて
 あるもの、其のまゝであるから、之れを假りて彼れが風貌の説明とし
 やう。曰はく、ダンテは壯年後、少し前屈みに、嚴肅な靜かな歩行きぶ
 りで、常に年配相應の時様の服をつけ、顔は長く、鼻は鷲の爪形、眼は寧
 ろ大に、顎も大きく、下唇常に上唇を覆ひ、肌の色は濁りて、髪は濃く、黒

く縮れ顔相は沈鬱にして考深く見える。問はざれば多く語らず、語れば雄辯また美辯であつた。日本の俳優間に此の發相を求むれば、故園十郎の外得がたいであらう。全體園十郎とアーキングとは、容貌態度及び藝風までが或る程度まで似てゐるのも妙である。ダンテはいまフロレンスの都から追放の身となつて、此のピザに來たり、茲で情人ピアと會見することになつてゐる。ピアの夫子口は出陣の留守。さてダンテが寺の階段を下りて舞臺の中程に來ると、同じく上手からレーナ、アシユエルのピア、青色の勝つた、同じく伊太利當時のゆるやかな服装で出て來る。町の人々は其のうちに退散する。

二人となつて、始めは立たまゝ男女の肩のあたりに軽く手を障へ、後は寺の階段に腰かける。すべて緩やかな動作を交へて暫くのあ

ひだ雙方掛合の述懐となる。昔の樂しかりし戀は、今はたゞ夢なり、我等が戀は、ご果敢なきものはあらじ、この意から娘ゼンマの上に移り、現在の父にすら逢ひ得ぬ子の哀れさよと、暗涙を呑むこなし。清き戀のピアトリスは天にあり、たまゝ情を交はせしピアは人の妻となり、娘は目蔭者己れは遁竄の身、此のときのダンテは殆んど世路の險しきに堪えざらんとしてゐる。此の芝居に一貫の情趣がある。こすれば、其は是れであらう。全曲の出來事すべて此の一點に歸趨し、層々轉ずるに従つて、身の上、人の上に降りかゝる憂き艱難、ダンテをして流涕太息の外なからしめる。而して遂に自殺を想ふに到り、夢の如く幽界の幻想に入つて、漸く徳と愛との悟りに還る。「神曲」地獄の卷の書き出しに「浮世の路半ばにして、我れ暗澹たる森のさ中に迷ひ入りぬ。」といへる前半のころは、此の劇に於いて刻畫の跡明

かと言ッて宜しい。たゞ天堂の巻の初節「愛なるかな、天は之れに則る」以後の情が何處にも出て居らぬため、全篇としては、甚だ心を得ざる劇となつたこと、前條に論じた通りである。

ダンテとピアとの述懐が終らんとする頃、再び塔の下手から多勢の町民が打ち連れ出で來たり、口々に塔の窓に向かつてウゴリノを罵る。蓋しウゴリノは、前言つた如く、町民を虐げたといふ廉で、町民の憎みを受けた上に、政敵の謀に陥つて、二人の子及二人の甥と此の塔に閉ぢ籠められてゐる。町民等は罵るのみで飽き足らず、石泥などを拾つて窓から投げ附ける。あたりの騒がしいので、ダンテはピアに其の理由を聞き、ウゴリノの罪も少からねど、其の惨害は何事ぞやと、愴然たる介。其のうち上手から、俄かに武器を携へたる一隊の暴徒が押し寄せ來たる。之れを導いてゐるのはウゴリノの作の妻で、

夫及び一族を塔の中から救ひ出さうとする。舞臺は忽ち一面の修羅場となる。ピアは傍に避け、ダンテは争亂を鎮めんと其の中に立ちまじる。此等すべて小争鬭の絶え間なかりし當時伊太利の光景を寫實したものと稱せられる。

塔の戸を打ち破らんとする騒ぎに、塔中のウゴリノは、始めて高い窓から、餓鬼の如き顔を出す。辛うじて格子に取りつき、絶えんべの口調で子供等が足下に枕をならべ死にかゝつてゐることを述べる、此の場の光景は、前述べた「神曲」地獄の卷第三十三節が具さに之れを描いてゐる。蓋し「神曲」中最も悲惨なる記事の一つ、否、恐らく古今東西の文學中、最も悲惨なるものゝ一つと見られやう。四人の子供等が、餓に弱りながらも、父の苦痛を見るに堪えず、父上、せめては我等が肉を食みたまはずや。我等何か厭はん。我等が五體に纏ふこの見る

影もなき肉塊、是れみな父上の賜なり。再び之れを我等が上より取り去りたまへといふよりして、其の子供等が次々に餓死はては斃れ行く様を描いたあたり、酸鼻を極めてゐる。芝居の此の場も、勿論右の詩を背景に持つてゐるため、一段慘絶の氣を加へた。

ウゴリノの影が見えずなること、又も入口を破らんと押寄せ騒ぐ半へ下手口から手に、燈明をかざしたる杖を捧げさせ、二三十人一隊の僧を率ゐて、大僧正ルヂェリが這入つて来る。暴民どもは其の威に恐れて退く。ウゴリノの嫁、ダンテ等踏み止まり、或は袖にすがつて嘆願し、或は理非を擧げてウゴリノの赦免を頼む。其のあひだ思案の體に何事をも言はざりしルヂェリは聞き了つて、從僧を顧み、塔の番人から鍵を受取らす。人々ウゴリノの解放かご一寸色めく間に、ルヂェリはつか／＼と上手奥の、川岸に立ち寄り、水心を目がけ、塔の鍵を

投げ込む。それと再び暴徒が駈け寄るのを、僧兵が防ぎ留める小せりあひ。ダンテは進み出で血相かへて、ルヂェリに肉薄し、ウゴリノ一人こそ罪すべくもあれ、無辜の一族まで此の慘禍にかゝらするとは、非義なり、非道なりと論詰する。此の時のダンテは何時の機にか劍を抜き持つてゐる。ルヂェリは冷然として争はず、手に持つたる十字架の錫杖を高くさしあげ、神の名によつて茲に法權に及向ふダンテを破門す、とおごそかに言ひわたし、錫杖を地に伏せる。自餘の僧等之れにつれ一齊に其の法燈を地に撞きて消す。舞臺ひっそりとなる。此の瞬間は流石に人をして法權全盛の世のさまを忍ばしめ、満場森として、莊嚴の氣に打たれた趣きであつた。

ダンテは始め法權に及向ふと聞いて、其の劍を投げ棄て、慨嘆の形ちで横向につつ立ッてゐる。ウゴリノの嫁は氣絶して階段の上へ倒

れる。身方のもの駈け寄って介抱なごする。ダンテが「嗚呼汝ピザの町耻ぢよ。此の麗しき地伊太利の聲聞く處に住ふ人々を云々の臺詞で幕(ダンテ)が先に行きかけて幕であつたか、一足跡に残つて此の臺詞を言つて幕であつたか(記者忘却)。此の結末、ビザの町を罵る臺詞は、原詩中やはりウゴリノの條にあつて、有名な句である。茲には言ふまでもなく之れを臭はせたもの。

以上序幕中での山は第一がピアとダンテの對話、第二がウゴリノの塔、第三がルヂエリの鍵を川に投げ込んでからダンテを破門するまであるが、其のうち最もドラマチックなのは第三である。始めの邊は少し騒しすぎて、舞臺に落ちつきが無いと感じたが、鍵を棄てるあたりから大いにしんみりとした芝居になつた。

次に二幕目は二場、第一は伊太利フロレンスの春祝ひ、序幕から十年

許り後の事となつてゐる。序幕の恐ろしき餓塔に對し、此の場は南國の春といふのであるから、舞臺の華やかなこと此の上もなく、中央に根を張つた大木の花の樹一本及び神女像の紀念碑を見せ、奥深くすべて満林の花、爛熳と咲きさかり、見る限りの紅雲、さながら日本の櫻時の趣、上手はマラテスタ、即ち夫のパオロ。フランチェスカの悲劇に、敵役に立つ人の屋敷でしきり、下手は花光線は極めて晴やかに暖かなのを使ふ。

幕明くと、二三十人の若き男女等、いづれも十四世紀伊太利の緩やかな華手衣裳の裾を春風にかへして花の下を戯れ興じゐる。彼方には戀慕の歌に春の調奏する樂手、碑像の下に倚りかゝつて餘念なく聞き入る美人、今この時と大木の蔭に寫生の畫脚を立るつ畫家、花祭の行列、痴蝶狂英、笑謔、歡語、全力を盡して、當時暗黒時代の眠りから覺

めんとする新伊太利の若やかな人心を描出し、時も春人も春、人生の歡樂たゞ此の時といふ情景をあらはすのが此の場の趣意である。若し舞臺装置の目的がアトモスフィアを見はすにあるとすれば、此の場の如きは最も其の意に合つたものであらう。必ずしも彼のクレーグ流に一抹の色で舞臺を包むといふやうな法を取らず相應に手数をかけて寫實をしながら、而も其の全體が一つに溶け合つて、人をして懐に入る風の捉へ難きが如き感を起こさせるのが、アトモスフィアのよく見はれた所以である。

此の場に出て来る主要人物は、ダンテの外、レーナ、アシユエルが二役として勤める娘ゼンマ、其の情人ベルナーデ、及びピアの夫、子ロ等。また場面の賑ひとして出る人物も、詩人音楽者等みなダンテの知人で、史上に有名な名をつかつてゐる。例へばダンテの詩を樂器にか

けて歌つてゐるのが音楽家のカセラ。寫生をしてゐるのが伊太利畫家の父と稱せられるジオットといふ類である。

人々が浮れ狂つてゐるあひだ、前面上手によつた圓柱の下に蕭然と身を寄せゐる一人の旅僧、姿墨染の衣を長く肩より掛け、同じく黒のモンク頭巾、目深に頂いたのが、周囲の鮮かな光景に反照して、紅を溶いた中に一點の墨を落とした如く、目だつて見える。是れがダンテである。娘ゼンマの恩愛にひかれ、身を僧と窶して、十年のさすらひから再びフロレンスに忍び歸つたところ。

ゼンマ今は十七八歳の娘ざかりとなり、情人ベルナーデ、弟の妹フランチエスカが嫁づいたマラテスタの家に世話となつてゐる。茲で注意し置くべきは、此のゼンマが第一には母のピアと同じ女優によりて扮せられるため、第二には歴史上ダンテの妻となつた婦人の名が

同じくゼンマであるため、往々不注意な見物をして混雑を來たさしむる嫌がある。此の劇に於ける娘ゼンマは全く作者の架空なることを忘れてはならぬ。

女づれの一群が去つて、ジオット。カセラなど三四人の若者のみとなり、舞臺が静まると、始めてダンテが漏らす嘆息の聲が耳につく。人々驚いて、聞き覚えある聲音と、旅僧の顔を覗き込み互に耳打ちして訝がる體、ジオットがダンテ！と押しつけた太い聲で叫び、みなく取り圍んで懐かしがる介白伊太利第一の賢者と當時の若者等に敬慕せられてゐた趣を見せる。

若者のうちにゼンマの情人ベルナーデノが居て、ゼンマの今こゝへ來ることを知らず。恰かも後の方から一群の女が笑ひさぐめいてマラテスタの家の横手奥へ通り過ぎる。其の中にゼンマも交り

ゐて、ベルナーデノに情の笑みを送りながら、マラテスタの家に這入りかけると、ベルナーデノが之れを呼び止め、會せたい人があると言つて、ダンテに引き合はす。ダンテとゼンマと二人限りとなり、舞臺の正面に相觸れて立つ。

此の後しばらくが雷にアーヴングの世話に於ける技倆の見せ場であるのみならず、此の芝居中で最も人情のこまやかな所である。泣いてゐる見物も多い。

ゼンマは自分の父とは更に知らず、始めはよそ／＼しく請け答へたけし、次第にいぶかしく思ふさま。ダンテがそれと明かか兼ねて、餘所ながら恩愛の名のりをする一句一動の表情は斷腸といふ評であつた。動作はさして激しからねど、兩手に己が頭を抱へて悶へるが如く、ゼンマを抱き寄せんとしては抱きかね、さりとして捧げたる手を

引きもしかねたるおもむき、身をかぐめしまゝ、少しづつ地位をかへる等、臺詞の文につれて、絶えず姿勢表情の變化を力めてゐる。斷續はあれど、兎に角相應の長時間、アーゲング一人の舞臺で、しんとした場面であれば、自然臺詞が重に耳につく。聲柄は堅く腹の中から出るやうで、調子は寫實ではあれど、本來が眞面目で大きなものに適した性の上に、ダンテといふ威嚴を絶えず腹に持つてゐるため、半ばロマンチックに聞こえる。つまり世話とも時代ともつかぬ氣合で行く。總じて故團洲を想像するのが最も近い呼吸かと思はれた。終りに覺えずちよつと泣き落とす所など、如何にも腹で泣く藝のクライマックスと受け取れる。

親子愁嘆の後、ゼンマはマラテスタの家に入る。此の前後ふたゝび舞臺騒がしく、夫のピアの夫子ロも出で來たり、ダンテとピアとの干

係及びゼンマの身の上をも聞き知りたりとて、嘆悲やるかたなき趣、ダンテと言ひ争ひし上、此の復讐は先づゼンマよりと齒がみをなし、劍を鳴らして駈け去る。ダンテはゼンマに罪なしと論ずれど、聽かず、引き留めかねて途方に暮れる所へ、忽ちマラテスタが家の奥の方騒がしく、一人の小者慌だしく出て來たり、其所にたゞずむダンテを誠の僧と心得、唯今奥にて人死ありたれば、直ちに入り呉れよといふ。ダンテさてはゼンマがはや毒手に罹りしかと、狂氣の體にて駈け入る。戶外も人々狂奔の體。幕。

次は此の家の奥の間で、ゼンマと思ひしは意外にもパオロ。フランチェスカが枕を并べて刺されたのであるといふ組み合せ。

(四)

前來、初幕第一場、フローレンスの春祝ひにダンテとゼンマとの邂逅

の條まで書いたれば、次は其の第二場、前回の上手に入口ばかり見え
てゐたマラテスタの住居の一室を見させて幕あく。
正面中程を暗い色の大カーテンで仕切り、奥は別間の體けたまじ
い人聲と共に、カーテンの端を分けて刀を提げたまゝ出て來るのが
此の家の主人マラテスタ、歴史の傳へる如く、背むしの氣味にて醜く、
顔は際だつて蒼く塗り、酷薄の中に妬心燃ゆるが如き眉目のつくり。
今しも奥の間で妻のフランチェスカと弟のパオロとを刺し殺して、半
狂亂の趣であらはれる。遂に妻弟をまで殺す身となつたるは無念
至極といふ意味の臺詞動作ありて、下手口よりダンテの入り來ると
引きちがへに、上手口へ足早に立ち去る。
ダンテは自分の娘ゼンマが子口の爲めに殺されしものと思ひ込み
て、疾風の如く下手口から駈け入る。室内を見まはす間に、つゞいて

入り來し廁が正面のカーテンを掲げると、其所にパオロとフランチェ
スカとの死體が横たはつてゐる。ダンテは是れを一目見て驚くこ
なし、死體の側に身を寄せて愁嘆のうち、他の人々も集ひ來たる。其
の中にダンテの娘ゼンマも姿を見せると思ふと忽ち子口の爲に追
ひかけられ、ダンテが、あなやと身を起す刹那に、下手口へ追ひ込まれ、
つゞいて入りし子口は、吐嗟に跡を戸ざし切る。ダンテは覺えず大
音に叫びながら戸際に迫りて、明けんと轟しめく。メロドラマ的混
雑の中に幕であつたと記臆する。
此の場は單にダンテをしてます、所謂世路の險惡を感せしむる
といふより、外筋としてはさして重要な關係はない。此の芝居での
續き合ひは、たゞゼンマが今は友達フランチェスカの縁先たるマラテ
スタの家にあるといふことと、其のフランチェスカの殺されるのと、ゼ

ンマの子ロに捕へられるのが同時で、そこへダンテが落ち合つた
 といふだけ。是等は勿論すべて作者サルドツの架空である。而して
 何故に作者が斯かる疣贅に近いものを附加したかといへば、言ふま
 でも無く、ダンテといひ伊太利といふ名から、此のパオロ。フランチェ
 スカの挿話を切りすてるのは、乙女の髪から紅の簪を抜き去るやう
 なものであるから。且つや是れに見ても如何に此の劇が、歴史傳説
 の上に趣味の源を穿たんとしてゐるか分かる。言はゞダンテと
 いふ寶庫の中なら、伊太利由緒の古錦繡や古寶珠を取り出して、綴り
 合せたやうなものだ。

パオロ。フランチェスカの傳説に關しては、知る人は誰れも承知の通
 り、十三世紀の頃伊太利リミニの豪族マラテスタが、其の妻フランチェ
 スカと自分の弟パオロとの道ならぬ戀を憤り、之れを刺し殺すとい
 ふ、即ち此の芝居通りの事實が残つてゐる。マラテスタは醜く、パオ
 ロとフランチェスカとは類ひ少なき美男美女であつたといふことも
 傳へられてゐる。其の戀の成り立ち、結婚の事情などに關しても色
 々傳説あれど、それは省いて、此の一種の心中談、女敵討が、全歐羅巴の
 文藝に、不盡の源となり、人をして此の名に言ふべからざるフアッシ子
 ーションを感せしむるに至つたのは、主としてダンテが之れを其の初
 めに詩化し、強い鮮かな言葉で世に刻みつけて置たからであらう。

..... One day,

For our delight we read of Lancelot,
 How him love thrall'd. Alone we were, and no
 Suspicion near us. Oft-times by that reading
 Our eyes were drawn together, and the hue
 Fled from our alter'd cheek. But at one point
 Alone we fell. When of that smile we read,

The wished smile so rapinously kiss'd

By one so deep in love, then he, who ne'er

From me shall separate, at once my lips

All trembling kiss'd. The book and writer both

Were love's purveyors. In its leaves that day

We read no more.

(Cary)

即ち『神曲』地獄の巻第五節の末で、フランチェスカの靈が、二人の戀のそもくを思ひ出語りする條が是れである。暖國の燃ゆるが如き若き情緒に見事人世を焼き捨てたる、哀しき戀の本末、此の數行の中に遺憾なく提示せられて、之れを説けば千萬言の心ともなるであらう。蓋し『神曲』全篇の挿話中、推して第一といふも不可なし。古來有名な繪ばかりでも、此の題で想像を役したものが幾らあるか知れぬ。現時の劇では、伊太利のダンヌンチョが作及び英のスチーブン、フリップス

が作など此の題で最も有名なものである。ダンヌンチョの作はフリップスのに比べて長いが、全體の落想は似たものである。即ちダンテが描いた結局を、作者々々の想像で展開するといふに過ぎぬ。ダンヌンチョのは伊太利第一の女優デューゼが先頃倫敦でも出した。フリップスの此の春彼のベンソン一座で演じたが、ベンソン一座は例の沙翁劇専門で賣つてゐるもの、フリップスは沙翁の故郷ストラップフォード、オン、エヴンの人といふ關係から、沙翁紀念座で此の芝居を打ち引きつゞいて處々に之れを演じてゐる。本來此の劇は濡れ場の名人ジョージアレキサンダーの爲に書いたものである(やはり二人花園の露しとどなる中で、ランセロット物語を讀み讀み、戀慕の闇に迷ひ入る場が最も傑れてゐた。最後の場、戀愛が絶頂に達して、此の戀遂げんがためには、煩らはしき此の世より早く我が

魂を清かる方へ伴ひ給へと相抱くに至る、一篇の眼目の所は、此の作も、ダンヌンチヨのも、作者が腕を叩いて鍊った名文句である。突如他行中の夫が歸り來たつて、こゝに悲劇はカタスツロフ井一に達する。勿論夫も悪人とはなつてゐないから、死骸の上に涙を濺ぎ、接吻して二人を同じ墓場に送る。全體に於いて日本の心中談といふものど落想を同じくし、單に是れのみならば、日本では敢て珍しい談柄とするに足らぬ。是れ、一つは東西文明の性質を異にしてゐるからであらう。此の點からいへば、近松西鶴はいふに及ばず、我が國在來の心中談の多くは、傳へて以て西歐の人をして思慕の源たらしむるに足る。日本は最も多くローマンスを實行してゐる國である。たゞ其のやり方が例の通り小スケールで、手短かで單純だ。ちよつと義理人情の矛盾に逢へば、すぐ自暴自棄の結論に達する、死んであの世で

添はうといふ覺悟が誠に早くつく。是れは概して思想が淺薄であつたからでもあらう。されば文藝が若し此の題に觸れるときは、必ず此の淺薄單純を變じて、そこに蜘蛛手八重手の思想路を開き、隨つて煙波無限の感情を是れから引き出さねばならぬ。斯くして冥想の上にも最も長く滞り得る工風をするのが、美の要訣であらう。勿論我が邦古來の作家といへども皆分相應に之れをやつてゐるには相違ないが、偉觀は近松に止めを刺す。此の方面では、彼れは確に時代を超してゐる。但し他方に於いては、彼れといへども人の子である限り、時勢の背景を其の作中に持つてゐるのは、言ふまでも無い。即ち作全體の釣合に於いて、今日から見れば消極に過ぎ、不自然に過ぎ、ツリギアルに過ぎた東洋道德の色が稍々多分につけてあるのは、蓋し周圍の然らしめた所であらう。されば彼れが作に破綻の生ずる

のは常に此の理由からである。西鶴は近松の此の弊を脱すると共に、近松が有せざる弊を有してゐる。寫實かは知れぬが概して淺はかで情性の前には理性が譯も無く暴されてしまふといふ人生が西鶴である。馬琴の人生はちやうど其の直反對に理性の前には情性は初めから全くいぢけてしまふ。何れにしても我等が今日より見る人生の眞趣は、こんな單純なものではあるまい。而して其の複雑さに觸れるのが詩の極意であらう。

第二幕第一場ダンテが情婦ピアの死處はマレンマの瘴毒の城、夫子の爲めに茲に閉ぢこめられ、一室の寢臺の上に横はつたまふ毒熱に冒され、死に瀕してゐる。ピアは例の如くレーナ、アシユエルの扮する所で、室内は薄明りの體、茲へダンテが其の所在を聞き知つて忍んで来る。侍きの女が被ひを引くので、ピアは目をさまし、半身を起こ

すとダンテも身を寄せる。ピアは娘ゼンマが子口の爲に追はれ、サン、ピエツロの尼寺に居ることをダンテに告げ、永訣の臺詞などあつて、遂に落ち入る。ダンテは初めから寢臺に添うて、見物に背を見せたまふ、悲嘆の白介、ピアはダンテと共に、子口の殘刻、ことにゼンマに對する不法などを憤るあたり、ちよつと得意の激烈な調子を聞かせたばかりで、此の場全體に大した藝は無し。

明りを消し、黒幕をおろすと、舞臺は第二場、サン、ピエツロの尼寺に變る。茲ではレーナ、アシユエルが早變りを見せて、二役ゼンマに扮する。母と娘を同じ女優が、而も僅か二三分間に演じ分けるのであるから、浮かとした見物には、ちよつと混雜を來たす。日本では此んな事は屢々やるが、此方では、あまり見ない。さて此の場もあまり大したことは無い。正面、奥深く、中央に幕を絞

ツて神壇を見せ、舞臺上手寄に二三十人の尼、いづれも一様の黒の法衣に白の被きもの列を正して下手向に立ち並び、之れと對して、上手向に卓子を控へて腰かけてゐるのが、同じ拵への尼院主、新道心のゼンマを教誨せんとしてゐる體で、黒幕上がる。

呼び出しの聲に應じて、上手口からゼンマ、俗の拵へで入り来る。尼院主之れを卓子の前に立たせ、其の尼となるのを拒む不心得を誡め、また情人ベルナーデヲノを思ひ切れと勸むれども、ゼンマ固く執ツて聞かず。院主怒ツて、他の尼等に命じゼンマを捉らへて罰せんとす。恰も此の刹那、上手舞臺裏に人聲騒がしく、ダンテ、ベルナーデヲノ等、人數を連れて、こゝに闖入し來たり、ゼンマを救はんと、尼等と押問答などある所へ、更に此の企を聞いて馳せつけたる、子ロの一隊あり。戸外の騒擾に尼等は恐れ遁れる。ダンテの手のものは防ぎに赴む。

き舞臺にはダンテとゼンマとのみ残る。ダンテ急ぎてゼンマを神壇の前に隠す間、はや寄手のものも亂入する様子に、ダンテも續いて神壇の前に潜み、絞つてある幕を内から引く。同時に上手口から敵の手のもの、抜刀にて入り來たり、方々を捜す氣持、刀で隅々を試し、こゝて、神壇の所に及び、幕を隔て、二刀三刀さし通して過ぎる。其のうち追ツかけてダンテ方のもの入り來たりちよつと亂れ合つて立ち廻りあり。敵を追ひ出して、戸をしめきると、神壇の前のカーテンを分けて、ダンテがゼンマの手を引きあらはれる。此の時のダンテは曩の刀で胸を刺された體で、顔も一層蒼白く、よろめく氣味で出る。急ぎベルナーデヲノを靡き、ゼンマを連れて下手口から遁れさせ、二三の人數をも其の跡に従はせて、さて自分は一カーテンの前に尻居に身を落とすと共に、息切の體で胸を搔きくつろげ、血の流れた跡を

見せ、苦しき思ひ入れで幕。日本のそこらの芝居でも見てゐる氣持。蓋しメロの大なるものである。落ちついた藝の見所殆ど無し。強ひて褒めるものは、當時小鬪擾の到るところに絶えざりし伊太利の狀勢を此の場でよくあらはしてゐるなどと、苦しい理窟をつけて居る。

三幕目、七場より成つて、ダンテの地獄巡りを見せる、觀せ物的の大仕掛である。第一場、ダンテが終生精神的戀愛をつないだといふ、ピアトレスの墓のある地、カンポ、サントの夜景。『神曲』地獄の卷の書き出しに「我れ浮世の道のさ中にて、暗澹たる森蔭深く行き迷ひぬ」とあるを利かせて、深山の遠見、ダンテは今、ピアも死しゼンマの生死すら知れず、浮世に倦みて、自殺を思ひながら、此の墓地に徘徊しゐる。舞臺は有るか無きかの明りにして、僅かにダンテの臺詞で、其の影を

目探するくらゐ。前幕の末で、ダンテは死ぬることゝ思つてゐた連中は、是れを見て多分ダンテが幽靈になつて地獄へ行くのであらうと眞面目に言つてゐたのも無理はない。併し作意はやはり生きてゐるダンテで、其の地獄巡りは、夢のつもりでも勿論ない。作者は之れを不即不離なるミスチシズム、シムボリズムで統一した積りであらう。而して此の計畫が不成功であつた所以は前に論じた通りである。此の以下の七場が前後の寫實と調和して、一團の感銘を與へると感じたものは、恐らく見物の中に一人もあるまい。下手に寄つて、小高い所に、忽然一團の白光が射すと、其の中にピアトレスの白衣の姿が浮いてあらはれる。ダンテが自殺の述懐を咎めて、神の大法は此の世のみにては測るべからず云々の臺詞あり。ゼンマの行方は他界にてピアに會はゞ知られん、羅馬の詩人ブーヅル

を案内として他界を一巡すべしと告げる。此の間ピアトレスは端然として立ちたるまゝ動作なく言葉の調子は莊嚴を旨として、稍々棒讀のおもむき。ダンテには別に記する程の事なし。

ピアトリスの姿が明りと共に消え失せるとダンテが感動の臺詞一寸あつて今度は上手奥のかたに同じ仕掛で、ヴァーシルの姿があらはれる。ダンテが其の方へ行きかける所で黒幕。

すぐ變はつて第二場地獄の門此の場も他の五場と同じくすべて微かな薄明で、劇場内の燈火は勿論みな消して見物は此のあひだ全く暗黒中にゐるのである。地獄の門は上手正面に僿道の入口然たる大アーチを、岩石巍々たる中に穿ち、下手半分の正面は、岩石のちどまツた間から、連山の遠見、明るい遠空を見せ、門の上には例の地獄の卷第三節の句、一切の希望を抛てよ、汝等こゝに入る者といふのが掲げ

てある。ダンテとヴァーシルとがこゝに来ると、すぐ道具變り。

第三場、シャロンの渡舟、是れも地獄の卷第三節の光景で、東洋の地獄ならば、三途の川といふところである。シャロンが權を構へて立つてゐると、色々の亡者が悲恨の聲を擧げながら、其の舟縁に攀ち來るのを拂ひのけるなどの趣を、臚に見せ、ダンテ、ヴァーシルは此方の岸に立つて、問答の臺詞など、原詩の意をきかせ、やがて例の通り、ばツと舞臺を暗くすると、道具が變はる。

第四場、焦熱の墓背景に、火炎を見せ、荒原の所々に土饅頭の形、二人がこゝへ來ると、まづ下手の墓がおのづから口を開いて、中から模造の焔と共に亡者の形相が半身をせり上げ來たる。ダンテは戰慄して、ヴァーシルに何者ぞと問ふあひだ、また上手よりも、中央よりも同様の形が見はれ、現し世にありての惡業仲間なるアギノンの牧師長コロ

ンナが五月六日の午後六時に死し、此の焦熱地獄に來たるべきを豫言する。是れは次の幕の伏線、原詩第十九節なる、法王ニコラス三世の事を、舊教徒を憚つて脱化させたのだといふことである。

第五場、氷の地獄、これは原詩三十二節以下の景を本としたもの、岩石大地、すべて氷柱と氷とで、斜めに一條の路を残して、舞臺奥の方は一面の湖水に、厚氷の張りつめた趣き、空からは光線の影を使つて、氷塊の絶え間なく降る景を見せる。それが小息になると、ダンテ、ワージルが岸に臨んで見やる湖水面には、無數の罪人が首ばかりを氷の上に出して、うめきゐる。すぐ變つて。

第六場、石橋、二人が巖石の橋に來かると、下手奥の紫が、つた空の遠景に鮮かな星が一點二點名のりを舉げてゐる。地獄の巻の結尾及び淨罪界の巻の首の句意を見はして、地獄界が茲に終る情景を示す。それで愈。

第七場、アスフォルスの谷に入れば、淨罪界の趣き、上手奥から山の裾を見せて、見わたす限り谷間は新緑の草柔かに、百合の花咲き亂れ、奥深く行くに従つて、光線を強くしたる道具立、種々の亡者の二人が前をゆるやかに往き復りする中に、ピアの姿もあらはれ、ダンテと名のり合ひて、ゼンマはベルナーデ、井ノと共に囚へられて、アギノンにあり、今裁判中なりとの旨を告げ去る。

ダンテは肅然として、天を仰ぎ、大正神明にして慈悲無量なる天帝、願くは我れを導き給へ、窮しては却つて神に非禮を加へたる我が凡夫の罪を赦し給へ、といふ意味の臺詞を述べ、此の時、山のあたりから、曉朗の樂につれて、羽衣の天人降り來たる。幕。

尙ほ以上の七場は、いづれも其の場、其場の情に應じて、極靜かな音樂

を、オーケストラで奏する。是れが或度まで幻想を助けて、唯の視からくりで墮するのを防いでゐるのは言ふまでもない。また種々の史上の人物にて、「神曲」に出てゐるもの、及びパオロ、フランチェスカ、ウゴリノ、ルゼリ等も右七場の中に見はれて、原詩の句をまじへた臺詞を言ふ。フランチェスカは即ち前に抄じた句をこゝで述べる。

さて以上の一幕は、劇としてよりも、其の道具書割の機械的方面に力を盡すことが、如何に極端に達したかを見る點に意味がある。また一方から言へば、此等は、他の二三の現象と共に、大陸オペラの趣味が英國では劇の中にまじつて來てあるものと見てもよい。正劇の想の超自然的なるものあること、ミュージカルプレーの行はるること、道具書割の壯麗をつくすこと等、是れである。併しこれが果たして續くべき傾向であるか否かは別論に屬する。

四幕目、アギノンの法王宮、大廣間の體、正面オー、ビーの方に寄せて一間の出入口、あとは伊太利式の廻廊の圓柱を見せ、中程からビー、エスの方に掛けて、廻廊を透した見晴し、南國の日光強き市街を瞰下したる景。こゝに使ふ市街の遠景は、劇中の人物、ダンテの知人なる畫家ジョットの原畫を寫したものである。室の中央には、玉座に擬した椅子を置き、ビー、エス即ち上手の壁には、一基の大時計が仕掛けてある。

幕は罪人裁判の模様で明く。二番目にはゼンマ及びベルナーデノが呼び出され、瀆法の罪に問はれて磔殺の刑に定まる。當人等の驚きは言ふに及ばず、下手に立ち并んでゐた傍聽人の中から、ジョットの從僧を進み出て、滅刑のことを嘆願する、騒ぎの中に、下手背口から二三の從僧を率ゐて、牧師長コロンナ出で來たり、判官の僧が譲りし席に着く。此の人物は本來彼の史上に有名な亂行の法王クレメント五

世を出したもものなれど、是れまた舊教徒を憚つて、別の人にしたこの事。コロンナが疲弊の體で、投ぐるが如く椅子に身を沈めると、ゼンマ。ベルナーデノ及びジオット等、其の椅子に取り絶つて哀れみを乞ふ。コロンナはうるさこの介にて、之れを斥け、罪人を上手廊下口から引き出さす。ジオットが尙ほも掌を合せて恩典を願ふ所へ、上手口からダンテ、深く何事かを思ふ體、又深く神明の畏に打れたともいふべき様子で出で來たる。蒼白にして嚴肅なる顔を、少しうつむかせ、兩手を組み、例のモンク頭巾に、樺色の長衣をすぼめたる肩より掛け、此の世の人にあらぬが如き足取にて現はれるさまは、是れだけで舞臺が始めて森となる。蓋しこれらは、おのづから名優の體に具つた威徳で場に上るや否や、言はず動かざるに、早や咄々人を壓するの光彩を發射し來たるものであらう。

ダンテの茲に來た目的は、娘等の成行を知らんとするの事、コロンナに恰も今日午後六時には絶命して焦熱の地獄に墮すべしとの事を知らせ、少しにても悔悟させんとするのである。ダンテといふ叫び聲を聞いて、コロンナは驚きのあまり、半身をすべらせんとして、振り向き、顔見合す。ダンテは此の時靜かに立ち寄つて、椅子の横手うしろに佇めり。コロンナは病弱の上に、今ダンテが森嚴なる面持に畏れを感じて、手足の震ふ體、二人の問答になりて、ダンテは靜かなる、而も力ありて憂鬱の氣に満てる調子で、自分が地獄のさまを見、且つコロンナの黨類から聞いた彼れの運命を語り、今日は恰も其の死期なり、せめて生前しばしが間なりとも身の惡業を悔ひよと、おごそかに言ふ。コロンナは動顛して恐怖の體に、聲ふりしぼり、或はダンテにすがり、或は神に哀れみを乞ふなどの大芝居あり。茲に到つて最

も妙と言はるゝは、彼の柱時計である。針は正に午後六時の前數分を指して、其の下に添へたるは、時を權化したる寓意像、あてどなく眼を見張りて手に持ちたる鎌を、一秒毎に動かす。(此の圖は能く人の知る所で、近くは英の長老畫家ワッツが大幅時死判決の中の時の像など其のまゝである)是れと時計とが、不思議に此の場を引き締める綴ち目となつて、コロンナが狂ひつかれて、ちよつと静まると、舞臺の森とする中へ、明かに時を刻む時計の音が聞こえる。何人も眼を其のかたへ外らすと、凄いアブストラクトの眼をした右の像が、刻々に鎌を振つてゐる。一種凄愴の感が場を覆ふ。つまり寓意畫と時計といふ道具と、其の場の燒點的感想とを巧みに綜合し活用して、作者の技巧としては、篇中第一の出来となつたのである。

コロンナが狂ふあひだ、他の人々は、遠く離れて立ちたるまゝ、懼れ驚

くこなし、時々あり。ダンテは始終即かず離れず、コロンナの藝を受けるだけの白介。やがてコロンナは恐れ狂ひながら、ゼンマ等の死罪を赦すゝと叫ぶ。ジオット之れを聞いて、曩にゼンマ等の引かれし方へ駈け出し、兩人を連れ來たり、ダンテに引き會はず。同時に時計は六時を報ずる。コロンナは、嗚呼六時、嗚呼六時と叫びながら、時計の前に身を投げ伏し、其のまゝ息絶える。皆々立ち寄る。ダンテは立ッたるまゝゼンマとベルナーデッノとの頭を抱き寄せ、二人の顔を見おろして、淋しき喜びの見え、危き命助かりしを祝ふ臺詞にて幕大尾。

以上の芝居に對して、記者は冒頭に掲げた如き結論を得たのである。

附言、英國の俳優については、ツリー。アーギングを紹介したか

(明治三十六年十二月五日稿)

二二二
ら、せめて、今二人、ウヰングムとエレン、テリーとを書いて置きたいと思ふが、餘り芝居談がつづくから、復の折に残す。また劇そのものから言へば、英國劇の精華として、他國の及ばぬ所謂イングリツシム、コメディーの妙味を説いた上でなくば、本當に英國の芝居を紹介したとは言へない。是れも他日の事。



英國の小説界

(上)

申すまでも無いのであるが、外國文學の現況を知らうとするに最も困難なのは、其文壇全體のパーヅ、アイ、ゴーを得ることである。此の背景が出来てゐなかつた日には、下手な繪を見ると同然、物の高低が分からないことになります。併し此のパーヅ、アイ、ゴーの背景を作るといふのが、一寸骨の折れる事で、つまり現在を知るは過去を知るよりも難い譯になるのです。

日本文壇目下の流行は、總じて何とかの大勢と言つたやうな事に、亞米利加流の大げさな感情の文句を詰め込んだのでない、人氣に投じないといふ様子ですが、寧ろ急務は其の土臺となつてゐる事實を知ることです。文壇全體若しくは思想界全體の地理を知つた上でなくては、富士山と筑波山の高低を論じたつて駄目でせう。富士山の事を書いた物を讀めば、富士山が日本の真中にあるやうに思はれ、筑波山の事を書いた物を讀めば、筑波山が日本一の名山のやうに思はれる。それは書くもの讀むものゝ人情ですから、自分で眞の智識を得やうとするには、此等のものゝ比較の出来るやう、先づ其の國の全圖から心得てかゝるのが順序です。日本の外國文學研究にも此の方面の工風が大に必要と思はれます。其所で自分が茲に書くのも、右の助けになるためといふので、自然見

ばえのしない事實にわたります。併し議論も少しは加へて置きます。英國の詩壇については、人の上から大體の事を他項に書いた筈ですが、小説界を之れに比べますと、勿論範圍も廣く、頭數も非常に多い。玉石混淆にもせよ、一年に何千といふ新作は、多すぎて却つて小説の前途を害する、小説は是れがために詩の迹を追うて衰微し行くの恐れがある、などいふ議論すら新聞雜誌に見えて、殊に亞米利加邊の雜誌では、斯やうな議論が多いやうです。併し小説の前途が果たして衰微であるか、隆盛であるかは別として、歐洲の小説界、少なくとも英國の小説界が目下質に於いて沈滞の狀であることは、事實です。數ばかり多くて物がわるいといふ形ちです。是れには固より種々理由のあることでせうが、ざつと申さば、第一英國といふ國が、人も知

る通り昔から知情兩面の均衡を保つに長じた國民ですから、文明の潮ざかい、知情の背反、新舊の衝突と言つたやうな革命的時勢には、何時でも跡にひかへて、じつと自重して待つてゐる。而して徐々に利害を観察して、利に就き害を避ける。傍觀者、研究者として、最もソイズな國民であることは、例の佛蘭西革命でよく分かつて居ます。今日の歐洲大陸が直ちに革命に瀕してゐるとは言へないのですが、兎に角或る飛躍を爲さざるを得ない形勢に直進しつゝある、それは宗教、道德の上に見て明かと思はれます。そこで英國は例の通りじみに構へて、其の成り行きを待つてゐるに反し、大陸は盛んに其の活氣を揚げてゐる。是れやがて英國の現文明と大陸の現文明と、何れが前にして何れが後なるかといふ點に二様の見かたがある所以で、本來英國と大陸との文明比較といふことは種々の方面から解せらる

べき大問題でせうが、右の點が其の一解釋であらうと信じます。言葉をかへて申さば、革新の前に必ず破壊ありといふ大陸主義、佛蘭西主義からいへば、彼等が革新に着手した時は即ち破壊の始まりで、進歩の前には退歩ある彼等の特性から、今日の宗教といひ道德といふものには寧ろ退歩、破壊の現象を呈してゐる。即ち國民の氣品からいへば、英國の文明が遙かに大陸よりも高いのでせう。併しそれと共に大陸の破壊退歩には進歩のためといふ活氣を有してゐる。老衰の退歩でなく、若かへつた亂暴であるから、之れを導くものさへ善かつたらば、やがて立派な新文明が是れから生まれ來やう。但し萬一を誤まつたらば、佛蘭西革命と同じく、千歳補ふべからざる慘害を蒙つて、其の創痕なほ癒わざるに、早くすでに次の革命を呼ぶといふ如く、長しなへに狂熱に疲れて、遂に全く其の組織的存在を時空の

間に留めざるに至るかも知れません。
 其れは別問題として、兎も角も目今の大陸思想が活氣あるといふこと、随つて感情の發露も英國より遙かに自由などいふこと、此れが大
 陸文明の一面英國よりも進んで見ゆる所以で、是れはやがて文藝の上
 上に最もよくあらはれて居ります。文藝の上からいへば、今日の英國
 國は大陸の下にあらむ事否難き事實のやうです。無論當國の人
 みづからといへども、是れは認められてゐるのです。
 併し英國は決して無意義に傍觀してゐるのでないから、少し見さか
 ひがつくと、直ちに其の有用な部分だけ吸収に取りかゝる。斯やう
 にして、他が過度の活動につかれてゐる頃には、跡から來た英國が却
 つて新文明の眞つ先に立つといふ始末になるであらうと思はれま
 す。近き過去はさうであつたかと思ふ。つまり英國は此の意味か

らいふと、文明の完成所、仕あげ所といふことになり、斯くして一
 旦新文明がこの國に根を下すと、それから此の國の文藝の光彩を
 發つ時期になるので、此の國の文藝は、結局常に完成した歐洲の文明
 に應ずるものといふことになり、我等は次いで來たる英國の
 文藝が如何になり行くかを此の理によつて見やうと思ふものです。
 また右の一理由からして種々の特色も出て來ます。例へば、ヂツケ
 ンス。エリオット等の流れに漲つた一道の現實思潮(社會的)にも科
 學的にも、文明の進轉と共に漸く感情と離れると共に、英國に取つ
 ては頗る不得意の秋とならざるを得なかつたのでせう。大陸では
 此の缺陷を補うて感情を迎へる方法に窮しない。佛國は例の巴里
 流に思ひ切つた所まで行つて、動搖し彷徨してゐる感情に乗するこ
 とを知つてゐます。獨逸も其所に拔目は無いやうで、寄席にもせよ、

伯林の眞中で、レデーが着物一枚一枚脱いで行くといふのが、舞臺の客寄せとなつて怪しまれぬ世の中ですが、併しこゝには獨逸獨得の長所もあつて、夫の哲學的乃至超自然的なローマンチックの趣味で之れを維持して行く。言はゞ獨逸得意の時代と言つてもよいのでせう。それと共に斯やうな意味でのローマンチックは、極端なポエチカル、即ち想の上からよりも情の上から被せ懸て了うといふ傾向です。多々人の想像にのみたよることは不得策になります。直接に感覺から情に訴へ、四圍の空氣をまで其の情で染めて置かなくては損の作物です。随つて此等はむしろ音樂、詩、劇乃至此等の結合したものに最もよく適して、小説には却つて不適當といふ結果に陥る。大陸小説の振はざる所以を論ずる日があつたら、其の出立點の一は茲にあらうと信じます。而して英國が將さに傾き來らんこ

する方向も是れにあるかと思ひます。佛國流は到底英國の堪得ない所で、『モンナ、ワシナ』の興行の禁せられたのも、當局者の趣意は其の獨逸的なるがためではなく、巴里流の方面を嫌つたのでせう。さらば英國は此の新機運に對して、指を咬へて引ッ込んでゐるかといふに、さうでは無いのです。右の缺陷を補ふためには芝居では奇蹟劇の復興も試みるし、小説では歴史小説も説かれるのですが、是等は何れも未成功です。最も成功に近かつた英國文藝の新方針は、スチーヴンソン流の趣味で、スチーヴンソンが今日まで生き延びて居たら、此の潮流が今少し顯著になつたかも知れないのですが、此の作者以後には、次いで興くるものが無く、徒らに摸倣の人のみ多くて、却つてあらぬ方に之れを導いた氣味です。但しつまり此れは、作中のアドヴェンチュアスを趣味の中心とするのですから、若し是ればかりを

二三二
主とする事になつたら、誰れが書いても空なもの、粗なものになつて、やがては底が出て、世に飽かれるでせう。天才が巧みて之れを用ひれば、功をなすのです。ローマンチックといふ語は重寶な語で、此の傾向をもローマンチックと或る人は呼びます。今日の英國小説の多數は、粗なる冒險談を生命とするか、然らずんば蠟を噛むやうな心理解剖、社會研究といふが如き窮境に陥つてゐるのです。向上一路の縁がまだ熱しないのでせう。要するに小説は文藝の中でも最も現實生活に材を假ることの多いもので、殆んど現實を外にしては大なる作、妙なる作は出來ないのですが、其の現實生活が前にも申した如く、最早爛熟の一段落にでも達したといひませうか、生活の内容が大抵手ずれてしまつて、馴れて珍らしく無くなつて趣味の材料とならなくなつた今日、小説はむしろ不便の地にあるものでせう。隨

つて、社會が一進轉をして、現實生活の内容が再び豊富になれば、其所に再び小説も活氣を帯びて來るのです。勿論如何なる作者でも、自分一個の天地を有してゐないものは無いのですが、それを具象させて出すには、やはり現實の材に縛られるのが常です。若し此の際に現實を脱出せよとか新造せよとかいつたら、其れはユートピアか然らずんば、全く作者の抒情や主張の形ちで具象せずに出て來なくてはならないのです。さうなれば小説よりも詩や樂劇の方がよくなるのです。トルストイの晩作などは、殆んど監獄志、罪惡研究誌、良心復活論といふ氣味です。世の之れに對して稱讚の聲を揚げる者は、七八分まで道德上の意味が籠もつてゐるでせう。文藝としてのエンターテインメントは至つて乏しい。我々は二度讀みかへす勇氣は無いです。今度英國の左團次ともいふべきピヤボム、ツリー(是

れは藝風の上からにあらす地位の上からです、尙芝居の事は前節に述べました、此の作を巴里から持つて来て演ずる筈ですから、何んなに任いかすか見ものです。

論が脇道にそれましたが、今ひとつ、たとひ大體に於いて右の如き論断は下しましても、新天才が出れば、みなそれ、特殊の眼孔を持つて世を覗くのですから、そこに多少の新天地を發見し來たるは言ふまでも無いのです。随つて今日の英國小説といへども、過去に於いてもはた當來に於いても、全く捨てて顧みないといふ理由は決してありません。キプリングあり、バーリーあり、老いたりといへども、メレヂスあり、ハーデーあり、ゼームス(英米兩屬)あり。歐洲の流行に比べて見榮えのせぬといふまで、離れて見る我等から、乃至百年の後、の静かな比較鑑賞からは必ずしも一概に英國小説の今日をのみ外

にする譯はないのです。英國小説には英國小説の奪ふべからざる特色があつて、例へて申さば大陸の小説は概して罪惡(廣義)の後の人間を描き、英國小説は概して罪惡前の人間を描く。前者にあつては初發情のために理を破るは極めて容易に而してのちの煩悶が作の中心となれども、後者にあつては、其の初めて情のために理の破れるまでの葛藤が中心となるといふ趣があります。言ひかへれば、一は感情のために理性の敗れることの如何に容易なるかを寫し、他は感情の爲に理性の敗れることの如何に難いかを寫すのです。そして前者は直に一層廣い道徳を持つて來て其の罪惡の原因に是認を與へる工風をすれば、茲に所謂小道徳を破つて大道徳を建てるといふやうな譯にもなりますし、後者は飽くまでも强健な現在の道徳的性格が情の責め木にかゝつても、がきもがいて、危機一髪の際に踏み

止まらうとする壯嚴な様を書くことにもなります。日本の多數は
 ざららかといへば大陸風でせう。随つて其の哲學的な工風の廣さ
 深さが足りなければ、唯の佛蘭西流や無意味の暗黒小説に了る恐れ
 があります。

(下)

さて英國の小説界で昔の作者のうち、上下に推しなべて敬愛せられ
 るのは、言ふまでもなく Dickens に如くなしです。續いては、スコット
 物が稍俗向きに人氣があるやうです。
 現在の作者では、先進といふ點から先づ Meredith。ハーデーと連稱
 するのは、丁度日本で紅葉露伴と言ふやうなものです。勿論是れは
 作柄の上の比較や順序では無いのですから、斷つて置きます。まづ
 言つて見れば、作の價値に年齢をかけ合はせ、更に出身の順序をかけ

た其の積とでもいひませうか、漠然出來て來る文學社會の一種の地
 位です。日本も同じことでせう。年齢から言へば、日本の諸君は、先
 進といつてもまだ皆壯年であるから、是れからが働き盛りです。之
 れに反して Meredith。ハーデー等は既に頽齡に近づいてゐる。Me-
 rith は當年七十七歳、露西亞のトルストイと同齡です。ハーデー
 は六十四歳、死んだゾラと同齡です。
 Meredith は初作が今から殆んど五十年前傑作といつても「ゼ、オーデイ
 アル、オブ、リチャード、フワレル」が四十五年の昔、「ゼ、エゴイスト」が二十五
 年の昔ですから、何と言つても英國小説界の元老です。一般には其
 の作は讀んでも面白くない、分らないといふ批難ですが、文學的に
 は勿論價値を認められてゐる。先頃も去る文學會で、エリオットとメ
 rith と何れが性格を描くに巧みなりしやといふ討論で、結局はエ

リオット側が七十一人に、メレヂス側が十五人、是れはメレヂスの敗に歸したのですが、兎に角以て其の地位を見るべしです。

ハーデーは初作がたしか三十八九年前、併し其の傑作を『テス、オブ、ゼ、ダーバーギルス』とすれば、是れは十三年前で、割に新しいのです。此の作は例の博愛かたぎ、樂天かたぎの強い一部の英國人から根本思想に批難を受けたのですが、全體からいへば、此の作者は癖の少ない風です。尙ほ右の作は今度梅澤和軒君が早稻田の文學叢書の中に翻譯されると聞きました。

年配の上から言つても、次にはヘンリー、ゼームスを挙げます。六十一歳で初作が三十二三年前、傑作を『ゼ、ポストニアンス』とすれば、是れが十八年前です。併し此の人は老いてますます、壯とも申すのでせう。尙ほ續々名譽の作があります。別項に述べた去年の新作『ゼ、ウ、

ングス、オブ、ダヴ』の如きが即ちそれです。スチーヴンソンの筋や出來事の組み合はせに重きを置く、其の意味でのローマンチック派に對して、寫實派解剖派の例に引かれたのは一昔ですが、今なほ其の方面に雄を稱してゐるのです。例の比較を假りたら、柳浪君などいふ所でせう。聲望若しくは人氣の上から或る部面にメレヂス。ハーデーと對して數へられるのはホール、ケインです。併し其の作柄は、どちらかといへば、少し俗向きの氣味が多すぎる。随つて其の賣れ高は太したもので、七年前に出た『ゼ、クリスタン』是れは一時看護婦社會の反抗を招いて名高かつた作で、二三年前の計算に二十萬部以上の賣れ高、また傑作の一と見るべき『イターナル、シチー』が一年の作で、十萬部といふことです。此の作者はアイル、オブ、マンの島に住んでゐて、容貌がシェイクスピアに似てゐると言はれるので、一寸氣取ツ

て見たくなるといふやうな、無邪氣な逸話のある人。當年五十一歳で、初作が十九年前、日本ならば、水蔭君でもあるまいし、眉山君でもあるまいし、南翠君の世盛りとでもいふ所に持つて行きますか。それから、閨秀作家で例のウォード。五十三歳で初作が二十二年、傑作を『ロバート、エルスミア』とすれば、是れが十六年前にあたります。作柄は寫實派、心理派の側で、今も尙ほ活動してゐる、先づ此の國での女作家の先達です。そこで花圃女史ともいひませうか。五十代の作者が是れでござつと一段落ですが、四十何歳といふ所で、少し方面が變つてコナン、ドイル。探偵小説の本家といふ趣きです。から、やはり涙香君を假りて來るのがよいでせう。歳が四十四で、初作が十七年前、『アドエンチュアス、オブ、シャーロック、ホームズ』を代表作とすれば、十二年許り前です。

探偵小説で想ひ出すのは此の國の刑事事件の殆んど全く小説通りなのがあることです。日本でも天羽何某といふやうな事件には、随分深い秘密があるのでせうが、概して言へば底が淺く、眞の疑獄といふやうなものは割りに少ない。是れは一つは調べる方で手が届くものでもあらうし、また悪人の方が淡泊なでもありません。第一英國の裁判には、日本流の眼から見ると、餘程大岡掬き流の大やうな所があつて、道德的、宗教的な所が多く、それで罪人の方では、又隠すとなれば、偽善的に知慧を凝らしてかゝるから、餘程公廷が芝居がゝつて來ます。目下當國で注目の中心となつてゐる疑獄の一は、近來稀れなものと言はれて、何うしてもシャーロック、ホームズが出なくてはならない幕となつてゐるのです。それはビーゼンホール殺人事件と言つて、倫敦の東北にある小村で、下女奉公をしてゐた村内評判の美人

のハーゼントといふのが去年大あらしの夜、奉公先の臺所で懐胎三月のまゝ殺されて、火をかけ焼きすてられやうとしたのですが、火は消えてしまつた。側にこわれて居た瓶の張紙と、女の手箱から出た手紙、其の夜十二時に、女の寝間の窓から燈火の動くのを合圖に忍んで來るといふ手紙の手跡とから犯人は村での名望家、大工のガーヂナーといふに極まつたのです。所が裁判となると、反證も出て、横戀慕の道化役も出る、匿名の自首書が來る、細君の貞實立て、村の人氣遂に懐胎の子は誰れのも分からなくなつて、十二人の審判官が有罪無罪を定め得ず、未決に了つたのが去年の冬でした。此の一月審判官をかへて更に開廷し、また、有罪無罪兩説に分かれて落着せず。更らに第三回の審判官によつて、此の夏開廷との事で、地方の新聞社は義捐金を募集して、犯人の辯護費にあてゝ居るといふ景況です。

細かい筋がどうしても小説ですから、其の内機會があつたら右の公判筆記を譯して見ませう。検事の一人がチケットと言つて、夫のチャールルス、チケットンスの子であるのも因縁です。序に今一ついへば、此の頃の裁判で見ものは先達つて死刑に極まつた、かの愛蘭士の議員、義に勇んで杜軍に投じたといふカーチルリンシ大逆事件で、數十年來打ち絶えた壯嚴な式であつたといふことです。

また去年の秋、倫敦の繁華の真中郵便局の入口で、晝中にパイロンといふ若い女、シチー、レデーといへば、日本なら江戸ッ兒といふ所ですが、それが内縁の夫に見すてられる悔しさに取り上せて、後からナイフで一刃切りつけたので、男は脆く死んだといふ騒ぎがありました。裁判は死刑と極まつたが、女の言譯は、たゞ一筋に自分は決して殺すつもりでは無かつた。男の薄情が口惜しさに、赫として此に及んだ。

ので、是れ程自分の惚れてゐる男を、何うして本氣で殺せませうといふのでありました。すると此の言譯が戀に浮身をやつす倫敦のレイデー等々にひごく氣に入つたものか何うか、非常に市中の同感を惹いて、死刑減等の嘆願書を國王に出すといふことになる。方々の出張事務所に詰めかけて、其の願書に調印したものが、一朝で二萬人に及んだといふことである。それで死刑は減せられた。こゝらは何うしても開化した江戸という氣味かと思はれます。

話が飛んだ所に外れました。ハガードといへば、少し當たりませんが、弦齋君を并べませうか。一方の名將で、四十八歳、初作が二十二三年前、『ピアトリス』を代表作とすれば、十三年前に出たのです。更に方面をかへて、年齢から言つても大抵四十歳以下、技倆から言へ

ば、英文壇の將來を左右する者が此の中から出るといふ所を見ます。と、矢張り先づキプリングが三十九歳、露西亞のゴルキーよりも二歳の兄、伊太利のダンメンチオよりも一歳の弟、印度で雑誌記者をしてゐて、初作が十六七年前、『ソルチアース、スリー』が十四年許り前に出て、『キム』が一昨年出たことは、誰れも記憶してゐませう。此の作者は印度で生まれて、濠洲から支那、日本へも旅行したことがあつて、殖民地から本國の文壇を撼かしたのです。例の帝國主義的の霸氣で、折々書き過ぎをする。先頃も『ゼ、タイムス』の紙上に今度のエ子ジュエラ事件に獨逸と聯合したのが不平で、獨逸を無慚のハンスと罵つた詩を出し、物議を引いたのですが、早速獨逸の詩人からは、印度の大鼓叩きといふ嘲罵を受けたさうです。此所等はむしろ好漢愛すべきの方でせう。

バーリーは寧ろ脚本に目下の名聲を集めてゐますが、小説の軽いものに本領があるらしいのです。四十四歳で初作が十五年許り前代表作を『エウヰンドウ、オブ、スラムス』とすれば十二三年前です。アンソニー、ホープは歴史小説家ともいひますが、つまり中古物で賣り出したからで、四十一歳初作が十三四年前、九年許り前に出た『ゼ、ブリゾナー、オブ、ゼンダ』が中古物を世にはやらす導火となつた程の人氣であつたのです。併し斯ういふ向きのは動くともすると、俗受けの方に這入り易いのです。日本では天外宙外鏡花風葉等の諸君が此所等の地を占めてゐるのですが、比較はわざと省きます。其の他俗向きと見られる作者では、人氣は太したもので書物も十萬二十萬と賣れるのがあるさうです。例へば女作家でメリ、コレリー。

其の『マイチー、アトム』を讀んで自殺しかけた牧師の忤がありました。同じく女作家でヘンリー、ウッドの『イースト、リン』は非常な賣れ行きだとの評判です。尚ほ通俗作者のことは其のうち別に書きませう。文壇的作者でも、コンラッドであるとか、マーガレット、ウヅ女史であるとか、まだ漏れたのがあります。またごちらに這入るか眞價の分らないのもあります。此等は追々書くことにませう。

(明治三十六年一月二十七日稿)

英國詩宗

小説界に比して詩壇の落漠たるは、近時世界の太勢といつてもよからう。此の英國に於いても、先年テニズン(Alfred Tennyson)詩宗の逝いてより、僅かに一スキンバーン氏(Swinburn)を刺すの外、未だ見て以て

一代の泰斗といふべき詩人をも得ざれば、人心を傾倒する程の詩篇をも得ない。

今年に入つてより、兎も角も詩宗 (Poet Laureate) の詩集といふので批評家の筆に上つたもの、オースチン氏 (Alfred Austin) の『誠の戀の物語』 ("A Tale of True Love") 一篇あれど言はぶさしたるものならず。茲には殊さらに此の詩集を細評するの勇氣も無い。試みに一新聞評家の結論を擧げて、其の一斑を示すに止め、進んで此の作家の身の上より、英國詩宗の歴代と現時に於る此の國詩壇の概勢とに及びたい。四月の『デーリー、テレグラフ』といへば、既に見た人もあらうが、此の新聞の評が最も肯綮にあつたものかと思ふ。其の言ふ所を一括すれば、オースチン氏が『誠の戀の物語』と題した此の詩集は、全然讀者を失望せしむるものであつた。『誠の戀の物語』とは、集中の一長篇の名

で、それをやがて集の名に冠したものであるが、むしろ比較的によいのは、他の短篇にある。併しそれとても平凡といふを免れぬ。此の作者のものとしてすら凡作たるを免れぬ。由來此の作者は、修辭の術に於いて必ずしも人後に落つる人ではない。唯詩の第一義は、彫琢の外讀むものをして覺えず神駭き魄蕩く底の興奮を感せしむるにある。オースチン氏の詩は之れを缺く。さて集中より面白きと思はるゝ一二節を引き來たり終りにスキンバインの舊作中より、其の高調子なる一二節を抜き、相對比して、推讃をスキンバイン氏に歸してゐる。

想ふにオースチン氏の長所は細を歌ひ、優美を歌ふにある。自然を寫すを其の長所と斷じた評家もあれど自然といふ中にもおのづから制限あつて、自然の高所大所は遂に其の筆に入らぬらしい。長さ

よりいへば短いものがよく、情趣よりいへば可憐なものがよい。其の舊作中傑作の例として常に挙げらるゝ『みな月の一夜』(“A Night in June”) をこゝに紹介すれば

Lady ! in this night of June,

Fair, like thee, and holy,

Art thou gazing at the moon

That is rising slowly ?

I am gazing on her now :

Something tells me, so art thou. •

Night has been when thou and I

Side by side were sitting,

Watching o'er the moonlit sky

Fleecy cloudlets flitting.

Close our hands were linked then ;

When will they be linked again ?

What to me the starlight still,

Or the moonbeams' splendor,

If I do not feel the thrill

Of thy fingers slender ?

Summer nights in vain are clear,

If thy footstep be not near.

Roses slumbering in their sheaths

O'er my threshold clamber,

And the honeysuckle wreathes

Its translucent amber

Round the gables of my home :

How is it thou dost not come ?

If thou canst, rose on rose

From its sleep would waken ;
 From each flower and leaf that blows
 Spices would be shaken ;
 Floating down from star and tree,
 Dreamy perfumes welcome thee.

I would lead thee where the leaves
 In the moon-rays glisten ;
 And where shadows fall in sheaves,
 We would lean and listen
 For the song of that sweet bird
 That in April nights is heard.

And when weary lids would close
 And thy head was drooping,
 Then, like dew that steeps the rose,
 O'er thy languor stooping,

I would, till I woke a sight,
 Kiss thy sweet lips silently.

I would give thee all I own,
 All thou hast would borrow,
 I from thee would keep alone
 Fear and doubt and sorrow.
 All of tender that is mine,
 Should most tenderly be thine.

Moon-light ! into other skies,
 I beseech thee wander.
 Cruel thus to mock mine eyes,
 Idle, thus to squander
 Love's own light on this dark spot ;
 For my lady cometh not !

即ち全篇九解より成つて、織巧を極め、恰も六朝の詩を讀む心地がする。現詩宗たるオースチン氏の面目はこの詩によつて窺ふことが出来る。文體鮮麗也、抒情的也との評を聞くのは此等の例からである。予輩は右の以上深く此の詩人の一代を斷じ去るの準備と決心を持たぬ。たゞ反對の側より之れを見るものは此等の詩やがて其の凡才たるを證すとなし、何人も到るべく、歌ふべく、想ふべき、凡境凡地に過ぎずとする。畢竟するに此の人が一躍して詩宗の榮遇を受けたるは、世の以て異數とする所たるに基づくのであらう。多きを求むればこそその不評であらう。

オースチン氏は當年六十八歳、スキンバーン氏よりも二歳の年長である。氏の大作としては、劇詩としての「Prince Lucifer」、若しくは「The Human Tragedy」、「England's Dairing」等名あれど、感興の深きは却つて前

掲其の他の短篇殊に戀を歌つたもの、小歌などに多い。氏はまた小説にも筆を染めて『五年』(「Five Years」)などの作がある。併し之れは大したものではない。要するに詩宗に叙任せられる以前の氏が名は詩人としても小説家としても、未だ第一流として人口に上るものでは無かつた。ブリチンユ、ミューゼアムの圖書館目錄中、千八百九十六年即ち氏が詩宗に叙任せられた年以前の氏が名の下には、括弧の中に「小説家其の他」といふ註が這入つてゐる。それを右の叙任と同時に、あわたゞしく抹殺して、詩宗と書きかへた所などは、前後の状態が思ひやられて面白い。テニズンの死と共に、詩宗の後任は何人ならんぞ、萬人ひとしく腫を凝らしゐる中にも、スキンバーン氏か、然らずんばラスキン氏かなど、衆評はおのづから歸する所ありしに、思ひかけざるオースチン氏が伴の月桂冠を戴くに及んで、

流石の圖書館員も、今更の想ひをしたであらう。而して急にアルフレッド、オースチンといふ名の下を繰りひろげて見ると、單に小説家其他このみ割註してあるので、其の一代の詩宗たるべき大詩人なりしことを知らざりし不明を耻づるが如く、倉皇之れを抹殺して、詩宗と書き直したのであらう。

勿論詩宗といふことが必定一代の最大詩人たることを證するとは限らぬ。たゞ概して言へば詩宗は即ち當代詩壇の泰斗、少なくとも一派一流の巨擘で無くてはならぬ。人のスキンバーン氏を推して寧ろオースチン氏を異とするは、此の點に足らぬ所があるからである。オースチン氏とても決して無下の小詩人では無く、テニズンにテニズン曆あるが如く其の詩を挿んだ曆すら出来てゐる人ではあれど、詩宗としてはたしかに異數であつた。察するに氏はまた一面

雜誌記者として、論客として、殊に其の出身が法律家だけに、政論家として、相應に其の名の聞こえし所より、宮廷若しくは政府の選拔に多少の便宜緣故があつたのも一因か。

詩宗の始めについては、精確の歴史が無いといふことになつてゐる。ペトラルクやチヨースターの昔は姑く措き、近世英國詩宗の始めは夫のエリザベス朝のスペンサーで千五百九十一年より年々五十磅の扶持を得たといふことである。併しまだ之れは叙任といふ程のものでなく、ダニエルを経てベンジョンソンに及び、始めて公然の叙任を得、是れより長く之れが宮廷の一つの官職になつた。尙ほ初學の人もあつたらばと、念のためスペンサー以來の詩宗を列擧する。

Edmund Spenser (1591—99)

Samuel Daniel (1599—1619)

Ben Jonson (1619—37) (中絶)
 William Davenant (1660—68)
 John Dryden (1670—89)
 Thomas Shadwell (1689—92)
 Nahum Tait (1692—1715)
 Nicholas Rowe (1715—18)
 Laurence Eusden (1718—30)
 Colley Cibber (1730—57)
 William Whitehead (1757—85)
 Thomas Warton (1785—90)
 Henry James Pye (1790—1813)
 Robert Southey (1813—43)
 William Wordsworth (1843—50)
 Alfred Tennyson (1850—92) (中絶)
 Alfred Austin (1896—)

年を経ること三百人を更ふること十七、其の間には全く埋没し去つて世人に忘れられた者も多い。一代の大詩人にして却つて此の人物の外に超立した例も多い。詩人の眞骨頭よりいへば、詩宗の職何ものぞ。詩宗シバリの死するや、人あつて詩人グレイに推選の内意を通ず、グレイ辭するに詩は官職を以て強ふべきものに非ずといふを以てす。と史家は傳へてゐる。個人の縁故によつて其の後を受け、たホワイトヘッドは、今説くものも無い。併し之れは一方の例である。若し一代の文明を飾るべき詩宗の官職と、一代の眞詩人の價値とが合致したとすれば、美はます、美を加へる譯で、強いて之れを乖離せしむる必要は無い。スペインサーに於いて、ウィッツワースに於いて、テニズンに於いて、皆例とすべきである。たゞ詩宗の職として、昔は帝王の誕辰と新年とに必ず歌を上り、俗人をして樂に合はして

謠はしめたといふ。是れらは誠に無用の業で、グレーの反對も主として此の點にあつたのである。幸ひにして此の事はバイを打ち止めに、サウシーの時から廢せられ、今では英國の詩宗は無職の官、即ち榮彰保護の官となつてゐる。(尙ほ詩宗の事を見るに最も便宜且つ詳細なのはウキリアム、ハミルトンの「英國詩宗」(“The Poet Laureates of England”——W. Hamilton) また其の昔の事を推究するにはホースキンスの「音樂史」中の記事(“History of Music”——Hawkins)が常に參考とせられる。)

前の詩宗テニズンが恰も女皇ギクトリアと始終じて、所謂ギクトリア文明の花と立てられたに比して、オースチン氏はよく來たるべきエドワード文學の代表者となるべきか。そもくエドワードの英國文明はどうなるであらうか。皆大なる問題である。英國文明史

の花は多く女皇である。さればこそ今回の戴冠式騒ぎに、式場間近かのウエスト、ミンスター橋の欄干が悉く歴代國王の像で飾られた中にも、天人の羽衣うつくしく中央に相對してゐるのは、エリザベスとギクトリアであつた。されど英國民が千古の盛事と誇つた戴冠式は、國王病氣の故で頓挫した。輕卒なる者は、早くも見て以てギクトリア文明の頓挫の兆とするであらうが、來たるべき英國の五十年は眞に眼を刮して見るべきものである。言ふこゝろは、殆んど頂上に達したらしきギクトリア文明が之れから如何に轉ずるか、如何に活路を開くかといふことである。此の事は固より別論に値する。ギクトリア文學は、詩壇にテニズンの外なほブラウニング夫婦を有してゐる。ロゼチ。モリス。マシュー、アーノルドの徒も、一流の人に推讃せられて、當代の飾りとなつた。さればギクトリア詩壇の特色

決して一様とは言ひがたく、或ひは「ロマンチック」の一語を推して、殆んどあらゆる詩人を包括せんとした評家もあれば(Boswell氏の如き)美術上のプレ、ラファエリッといふ稱謂を一派の詩人に冠せんとした評家(Sainsbury氏の如き)もあり、更に此等を別けてロマンチック、センチメンタリズムと呼び子オ、ロマンチックと呼ぶが如き目を立てた評家(Fedman氏の如き)もある。此所には固より此等を論ずるといふにあらねど、今日に於いて予輩の思ふ所を一言すれば、此種の區別所詮十分のものならず、歸する所は情派と知派との差異にして、之れを詩の上に冠すれば、詩は譬へば弦を離るゝ矢の如し、之れを放つの弦はそれ情の力が此の點に誰れか異存があらう。たゞ豫め鍊ひ置くべき弓身を如何に。知は情を弱くす、是れ一半の眞理也。情は知の鹽梅によりて高尚なる、是れ一半の眞理也。此の關

係を如何にすべき。流派はやがて此の根本によつて別れるとも見られる。夫のロマンチズムの反動といふものは姑く措き予輩はテニズンを以て、むしろ十九世紀後半の容與たる英國紳士の詩彫琢あり、修理あり、哲學あり、科學あり、熱情なきに非ざれども常に反省に伴ふ、一言すれば賢にして多感なる人の詩とするに與せんとするものである。従つて其の裏面には、狂熱燃えるが如き態を缺くの批難も起こる。ロゼチやブラウニングやは、若し言ひ得べくんば却つて之れが對岸の人か。而してテニズンは最も恰好なるギクトリア文明の代表者であるまいか。斯の如き形勢よりすれば、スキンプーリン氏の今日は、寧ろギクトリア文學の餘光として、テニズン以外注目すべき一の異彩たることが知らるゝ。詩宗オースチン氏の地位はされども遂に此等の潮流と緊

要の關係を有するまでに特殊でないやうである。俗人は戴冠式に就いても、南亞の平和についても、詩宗の詩の出ることを望んでゐる。併しそれは別の事である。予輩は思ふ、若しオースチン氏が今日のまゝにして止まらば、氏はたゞギクトリア文學のエドワード文學に移るべき中間の空位を埋める役に終るであらうが、さて來たるべき次期の文學とは如何なるものであらうか。

(明治三十五年稿)

雜事

ピンポン

目下當地に於ける流行の一つはピンポン(Ping-Pong)を申す遊戯に御座候、勿論すでに輸入致され居ることとは存じ候へども、つまりテニス、テニスとも申して、テニスの上のテニスに有之、薄き革にて張

りたる、團扇形のおもちやの太鼓の如きラケットにて、杏の實ほどなるガムのボールを打ち競ふこと、ローン、テニスに異ならず、ピンポンとは其の球を打つ音に象取りし名なること、申すまでも無く候。晚餐のあと、食卓をかたづけてより、いざ一勝負と、若き男女等のこれに立ちむかふこと、到るところの流行と見受け候。少しく雑踏を避けたる、しもた屋のダイニングルームに、瓦斯燈あかき雨の夕ぐれなど、所謂ヤングレディーやナイス、ゼントルマン等の晴やかなる笑語の聲にまじりて、ピンポンの音を聞くこと多きが習はしに候。此のも極めて近年の流行とか。されば雑誌店頭を飾る際物類の小説詩歌中にも、物思はしげなる美人が、ピンポンの音する家より二軒目の窓の前に、そと立ち寄りて、または、ピンポンのテニブル形づけて、君がマツキントツシユ乾かして、など物したるを見申候。

些事一二三

女の靴の踵ますく、尖りて前にのめり、男の靴の釦ごめのものは行はるゝ位は誰が目にも留まる流行に候へど、誠のファツシヨナブル、ウアールドの事は微妙にして我等の筆にまかせず。女の晴れ着の肩のあたり袖附に山の如く襷を疊むの流行すたれて、其襷次第に袖口に下り近時にては袖口の廣さ殆んど日本服の如きものを見うけ候。以前一頃袖口の廣きものがはやりしことある由に候へど、兎に角腕首の所に切れを用ふるの度がますます、多く成り行くやうに候。まさかに日本の振袖と進化する過程にも有之まじきが實用と裝飾との動もすれば相背き候こと、何處も同じく候。男の不斷着にては、胴衣の二列釦専ら行はれ襟の明きかた段々狭くなり行きて、殆んどホワイト、シャツの胸は見えず候。勿論此等は今更申すほどにも無

之候へど、襟を高くする人々の心得にもと、宙花君の領分を犯し申候。其他、握手の禮が花車になりて、舊の如く掌をしかと握り合ふ如き不器用のことはせず、互ひの手を眼の上はるかに捧げて、指先だけ鳥渡つまむを、最も氣の利きたる握手の方法と致し候。但しこれまた今日に始まりしことと申すには無之候。目下市中の人氣ものは印度兵にして、新意匠の玩具、裝飾、觀せもの、廣告等に最も多く用ひらるゝ圖は、此れと王冠とに有之候、後者は勿論戴冠式に連なりてのことに候。今一つ戴冠式の結果はコロチーズ(Coronase)するといふ新語を生み、飾りなごして騒ぐ場合に用ひられ候ひしが、戴冠式もあの次第となりて、流行らずしまひと相成り候。英杜戰爭の最中、マフェッキンの圍み解けし祝賀祭の折には、倫敦の市民が狂氣の如く騒ぎ立ちしより、マフェック(Mafek)するといふ新語

出で來たり候由にて是れは爾來漸く行はれ現に去る平和祭の時な
 ども新聞紙上に盛んに用ひられ狂喜すといふほどの意味をあらは
 し申候、恐く今後新版の大辭書には此の語を加ふること存じ候。
 戴冠式延期といふ大打撃は英國の人々に人事無常虚榮頼み難しな
 ざいふ一種の詩的宗教的なる感慨を與へ茲に人生の甚深を味ひた
 りと歌ふ新聞紙あれば茲に神の莊嚴に接したりと説教する教會あ
 り概しての調子が餘程感情的なりしやうに覺え候は其筈にこそ。
 小生案ずるに當市に於ける日本の勢力範圍は岐阜提灯または酸漿
 提灯に極はまりたり到るところに愛用せらるるものは是れならん
 と存じ候。また先夜は二輛の自轉車が物ずきにも我が人力車の所
 謂看板に似たる提灯を點して走るを見申候。

流行唄

年々クリスマス前後に種々の新流行歌出で、處々の劇場、寄席等に
 歌はるるうち最も人氣にかなひしものが翌年のクリスマスまで
 一年間の流行唄として行はれ申し候。而して今年の此の種の唄に
 て最も人氣あるは『忍冬花と蜜蜂』(The Honeysuckle and The Bee)と申す
 ものに御座候。先ころ水晶宮の仕掛花火の題に之れを取りて、忍冬
 花の上を蜜蜂のわたる圖を現はし、割るゝばかりの喝采を博せるも、
 ひとへに其の唄の人氣の故に候。樂譜も併せ示さでは興薄きもの
 に候へど、印刷の都合もあるべければ下に歌詩のみ掲げ申候。

On a summer afternoon,

When the honeysuckles bloom,

When all nature seem'd at rest,

'Neath a little rustic bow'r,

'Mid the perfume of the flow'r,

A maiden sat with one she loved the best.
 As they sang the songs of love,
 From the arbour just above,
 Came a bee which lit upon the vine ;
 As it sipped the honey-dew,
 They both vow'd they would be true,
 Then he whisper'd to her words she thought divine ;
 " You are my honey, honeysuckle, I am the bee.
 I'd like to sip the honeysweet from those red lips, you see ;
 I love you dearly, dearly, and I want you to love me,
 You are my honey, honeysuckle, I am the bee."
 So beneath that sky so blue,
 These two lovers fond and true,
 With their hearts so filled with bliss,
 As they sat there side by side,

He asked her to be his bride,
 She answer'd " Yes " and sealed it with a kiss ;
 For her heart had yielded soon,
 'Neath the honeysuckle's bloom,
 And thro' life they'd wander day by day ;
 And he vowed, just like the bee,
 " I will build a home for thee,
 And the bee then seem'd to answer them and say ;
 " You are my honey, honeysuckle, I am the bee.
 I'd like to sip the honey sweet from those red lips, you see ;
 I love you dearly, deary, and I want you to love me,
 You are my honey, honeysuckle, I am the bee."

戀の歌なれど譯せざるがよかるべく候、其の故は、我が俗謡にあらず
 古歌にあらざる歌調と、戀愛に對する社會の觀念と露骨なる感情の
 發表とが容易に我が國に移すを許さざる類のものに候へば也。茲

にはたゞ原詞を擧るに止めて、是非の論は後日を期し申すべく候。

(明治三十五年稿)

取りあつめて

夏と申すに、おのづから心ゆるみて纏まれるもの書くが懶く候。約東のダンテ論、今一回延し申すべし。

去る七月半ば、俳優協會維持費募集の爲右ダンテの座にて、『マーチャント、オブ、エニス』を一回限りの晝興行に出だし、アーキングのシャイ

ロック。エレン、テリーのポーション。是れは申すまでもなき天下の一品にて、其の他倫敦中の座頭株あらかたを一堂に集め、英國劇壇の偉

観をつくし申候。評は申すも管なれど、其の人氣の般なること、殆んど想像の外に候。殊にアーキング。エレン、テリーの初めての出及

び二人が顔を合す法廷の場の如きは、観呼喝采の聲大地のごよみを

作るが如く、四五分間は俳優も手を止めて見物の方を眺め居り候。

最後に幕が下り候てよりも、凡そ七八回は幕外に俳優を呼び出だし、

尙ほ際限もなく見えしかば、遂に劇場の方にて電燈を消しにかゝり、

其れにて漸く見物が退散致候。勿論これは例によつてアーキング

の收場演説を求むる見物の心なりしこと明かに候へど、幹事が代つて挨拶をなし其のまゝに仕まひ申候。

日本にても川上が慈善演劇に同じ物をやり候とか、因縁に候べし。『マーチャント、オブ、エニス』は前にはオクスフォード大學演劇會が彼

地にて演じたるものを一見致候。此は申すまでも無く學生芝居なれど、併しながら、何れも行く／＼は俳優たらんとする程の熱心家な

り。且つ年々夏期一回づゝの本興行に場敷を踏み來たりたる功の

者多く、なまなかの田舎芝居や、倫敦の場末芝居よりは遙かに立派に候。勿論此の興行は、劇場を借り、見物料も取り、すべて本式にやるもの候。シャイロックを勤めしは、クライスト、チャーチ、カレッヂの三年生なりしが、卒業後は直ちに斯道に入る筈と聞き及び候。俳優學校としては、従来沙翁劇を以て有名なるベンソン一座が、其の田舎廻りの組に見習生を入れて、教育し來たり、已に幾多の立派なる俳優をも出だし候が、來年よりは、ツリも亦た同じ組織を立つる由に候。是れは今春同人が沙翁の生地ストラップオード、オン、エヴンにて、紀念祭の席上演説に、始めて發表したる計畫に候。先頃米國より歸りし女優ミセス、カムベル、藝風地位より申すも、略ぼ源之助など申す所に候はんが、ズーデルマンの『エス、レーベ、ダス、レーベン』英譯『ジョイ、オブ、リキング』及び數年前此の女優が依りて以て名を

成せし『セカンド、ミセス、タンカレー』當時脚本家の筆頭ビチロの作の二つを引きつゞき演じて好評。二つながら似たる節ありて、所謂ウーマンス、バスの悲劇、又此の地にて一時はやりし例のプロブレム、プレーの部に屬すべきものに候が、我等には、日本の小説界の趣味などと思ひ比べて、至極興深く候ひき。ストラップオード、オン、エヴンと申せば、其處の名物は彼の女小説家の豪の者、メリ、コレリーに候が、カーチギー寄附の公衆圖書館を沙翁の生まれし家の裏手に建つるといふ議に反對して、盛んに氣焔を擧げ居り候。犬と猿ほど仲の悪き、ホール、ケインが、其のうち何とか口を入れば面白からんになど申居るもの有之候。一時評壇の噂は彼のカーライルの家庭一件及び彼れが某レデーに對する干係についての、フラウド黨と反對黨との争ひなりしが、目下

やゝ下火のやうに候。併し今後いかに發展し行くやは分らず。或は此の争ひを以て苦々しきこととし折角美しき文學史上の飾りとして保存し來たりし人物に汚點を加ふるものとする評家も候へど、我等思ふに、苦々しく口惜しき出來事たるは勿論たりされど、斯くの如く故に今日事を起こせるもの非なりとは申すべからず。斯くの如く成り行くの事實もし存するに於ては、縦ひ今日之れを蔽ふものあるも、明日焉んぞ其の再び顯はるゝ無きを保せんや。是れ實に理數の然らしむる所に候へばなり。時と申す最上審判の前には、一切のもの皆赤裸々なるべし。毫末の陰翳といへども、之れを剝ぐに百年を賭し、千年を賭して吝まざるは、大法の威嚴に候べし、斯くの如く信する所に、我等が日常安立の半面は立脚するに候はずや。糊塗して以て一時の喜びを竊まんとするは、愚なるかなと存候。

ロイヤル、オペラ座に於ける大陸オペラの季節は先日了り申候。今年の勝觀は「リング」の連演に候ひしが、今月末よりは、更らにムーデ、マンナーの英國オペラの季節相はじまり申候。外に音楽界にて昨年來の二大人氣は、リヒャード、ストラウスと、メーリ、ホールとに候ふべし。前者は獨の作曲家にして、彼のニーチェが「ザラツ」ストラをも樂にせる人、一派の評家よりは、ワグネル以來の大才と稱せられ、是れが一時倫敦の音楽界、樂評界を騒がせしことは、昨年に於ける特殊の現象に候。即ち昨年は英國が始めて眞にストラウスを認識せし年と申すべし。またメーリ、ホールは當年十八歳の妙齡なれど、近年罕に見るヴォーリンの名手にて、是れまた昨年より今年にかけて、はじめて倫敦に其の天才を認識せられ、一時倫敦の人氣を沸騰せしめしこと、ルービンスタイン以來絶えて無き所と稱せ

られ候。是は一は此の女性音楽家の經歷の極めてロマンチックなるにも因り申すべく、十三四歳の頃は一張のワイオリンに市街を流しあるきて、修業とも命の綱ともせりと申候。此等の事が廣く世に知るゝと共に、人氣は益々高まりて、同じ經歷を慕ひ、ワイオリン一つに家を迷ひ出でたる少女なども有之候。

畫界にては、今年のローヤル、アカデミーも去月限り閉場いたし候が、依然サーゼントは世界一の肖像家に候。今年の出來は善くなしとの評なれど、善惡ともに評判は此の人を中心と致すべし。また畫界の奇傑、ラファエル前派の一角、而かもラスキンと一代の大喧嘩をなして名を轟きたるホイッスラーは先日物故いたし候。當國にて最も多く日本畫の影響を受けたるもの、此の人其の隨一に候べし。尙ほダンテを濟ませ候次には、當國畫界の現狀を論じて貴意を得べ

く候。平尾不孤君の懷抱に對する愚見は、登張竹風君に復するの書と共に、其の後あたりに物したく存じ居り候。

(明治三十六年八月七日稿)

文壇雜報

クリスマス

當英國文壇の雜事どもを拾ひあつめて申上ぐべく候。來る二十五日はクリスマス事の市中一般の景氣は申す迄もなく、文壇までが賑やかになりたるやうに候。もつとも著書の方面にては、新刊の大嵩なるものは、却りて當月に入りてより減じたりこの事に候へど、クリスマス物の贈り物を當て込みたるチッケンス物の翻刻や少年物など盛んに書肆雜誌店の鋪頭を賑はし居り候。また雜誌もクリスマス

マス、ナンバーと稱して多くは附録を刷り候事我が新年附録夏期附録などいふものに異ならず。内容も多くは文壇名家の名を并べ候。

雑誌の事

當國にてひろく雑誌と申せば、やはり「エヂンバラ、レゾー」を第一に數へ候ふべし。是等は新聞紙の「タイムス」哲學者の「スペンサー」、銀行の「バンク、オブ、イングランド」、哲學雑誌の「マインド」、俳優の「アイギング」、詩人の「スキンバーン」、小説家の「メレチス」、政治家の「チェインバレン」、滑稽雑誌の「ボンチ」と申す具合に、おのづから株と相成り居り候。但しこゝに株と申すは、必ずしも相傳の謂ひに非ず、また此等のうち目下なほ盛んに活動しつゝあるものも候へば、已に老朽(?)の域に入れるものもあるべきこと勿論に候。たゞ其の社會々々の筆頭と申す義に候。斯くの如き「エヂンバラ、レゾー」は先達つて其の第百十年號を出だ

し、過去百年間に於ける諸方面の變遷を簡叙したるものを載せ候。就中軍事實業の方面にて新進の獨逸が着々新科學思想を應用して規律的に進み行くに對し、英國の將來を警戒したる文など、嶄新の見こいふにあらねど、時務に當たれるものとして、稱讚を得たるやうに候。次いでは一時期「エヂンバラ、レゾー」の敵と見られし「クオタリー、レゾー」。また例のマガと稱して一時は毛蟲の如く思はれしも、終に成功して今は一個の大雑誌たる「ブラックウッドス、マガヂーン」其の他「マクミランズ、マガヂーン」、「コンテンポラリー、レゾー」、「ホールモール、ガゼット」以下數へ盡されぬ程に候へど、大なるものは、大抵社會の諸方面にわたりにて、それも日本の如く片々たる雜感集には無之、研究あり主張ある評論に候。併し此の國にても、雑誌の論文が政界を動かすといふが如きことは、今は稀れなりこのことに候。

昔し「エヂンバラ、レゾー」全盛の頃は、内閣も是れが鼻息を伺ひしこと、人の知る所に候。文壇に取りても、スコット、ワーズワース。バイロンのシエレ。キーツ。悉く當時の文星は一度「エヂンバラ、レゾー」や「クオタリー、レゾー」の手にかゝりて、後に其の光りを放ちしものなること、是れまた人の熟知する所に候。先頃「エヂンバラ、レゾー」の開祖ジエフレが評傳の出でしとき、文界の一部に、彼れを眞の批評家たりしマシユ、アーノードなごゝ同列に論ずるは當を得たるものに非ずとの批難あり。是は畢竟彼れが文學に門外の人たりしのみならず、文學を單に戯作文字のみと輕視するの傾きありしと、其の批評のために當時の文星が悉く傷げられて反抗せりと云ふ一種の文壇的反感にも因り候はんか。事實ジエフレを始め、當時の所謂エヂンバラ、メン等が態度氣風は我等文壇の人には餘り慕はしからぬ

やうに候。

専門雜誌にては、文學雜誌は、やはり「アセニウム」と「アカデミー」に限り候ふべし。此等は週刊にて、雜誌と申すよりも新聞に近く、其の記事また長き論文よりも新書の批評、文壇の時報等を主とせるものに候へど、文壇の機關として重きをなせるは是れ等に候。「アカデミー」は稍々わかしく、我が多くの文學雜誌と似たる節あれど、「アセニウム」は老實にして、重に、専門家向と稱せられ居り候。美術雜誌にては「ステュヂオ」「マガジン、オブ、アート」など、其他數々あるべく、哲學雜誌にては「マイノンド」の外、「フィロソフキカル、レゾー」「サイコロジカル、レゾー」「インターナショナル、ジャーナル、オブ、エシツクス」また今秋第一號を出だせし「ヒツバート、ジャーナル」は重もに宗教の方面より哲學に入るものとして、至つて評判よく候。其の他婦人雜誌、少年

雑誌等の事は今は省き申すべく、其の月々の大なる出来事のみを繪入りにて纏めたるは「スフキアー」。「グラフキツク」など廣く家庭に讀まれ候。例へばカイザー來たれば其の肖像やヤツチの寫眞、ビゴツト基督と宣言すれば其の肖像や教會といふさまにて、此の種の雑誌も數多く、田舎などへ送るには至つて重寶このことに候。また一錢雑誌と申して、短き小説や歌、珍聞の類(勿論ブルガー、テーストをあてにしたるもの)を載せたるもの、幾種もあり。シチーの銀行會社などへ通ふ男女の若者や一般の労働者等がポケットの中に多く忍び居るものに候。販途の大なるものなりと云。新聞にては「タイムス」を首として、「デーリー、ニウス」「デーリー、テレグラフ」以下朝刊のものは申すに及ばず、夕刊にては「グローブ」を最といたし候。政治は知らず、文藝の方面にては、依然「タイムス」の評論は重きをなし居り候。「デ

ーリー、テレグラフ」の實業的なるに對して、「デーリー、ニウス」は文學的と申すべく、此の邊また文壇の勢力に候。固より勢力を申して、人によることに候へば、他新聞にも皆それ／＼に略ぼ定まりたる専門知名の寄書家を有し候。新聞紙の事は茲に悉くすべくも候はねど、概して如何なる方面の社會も平等の地位を保ちて紙面にあらはれ候こと、我が國と趣きを異にするは、社會其のもの、然らしむる所か新聞紙の然らしむる所かなど疑ひ居り候。

新刊書

今年中の新刊書については、既に亞米利加あたりの雑誌に、何か輕便なる統計様のもの出で居るべしと存じ候。「アカデミー」が先きに諸名家に對して最も目ぼしき今年の新著二種を指摘せんことを乞ひし結果も、誌上に出で居り候が、人々の好尚によりて區々のやうに候。

茲には小生が記臆の中より重もなるものを擧げ候はんに、小説類には、新作の数は相變らず非常の高にて、六シリングス物、三シリングス半物、さては六ペン物に至るまで、逆も日本などの比べらるべきものには無之候へど、併し是れは強ち皆賣るゝがためと申すには無之、賣れざるものは五百部の初版も覺束なきこと、日本と大差なきやうに候へど、書肆がそれをも厭はず出版するは、中には著者みづからが費用一切を負擔する類のもの多きが故と聞き及び候。日本にも罕には此の類の事ありと記臆致し候が、此は單に無名の作家が其の才を世に問はんとして社會に拂ふ試験料と申すのみに非ず、此の國の富豪、貴族などの子弟の道樂方面が、日本のよりも多く文藝に向かへるためとも申すべく、此の意味よりいへば、善き事と存じ候。斯く新刊の数は多く候へど、大作としては泰西文壇の水平を抜ける

ものといふが如きは、一も無かりしやうに候。水平にすら達せしもの幾ばくも有之まじく、寧ろ亞米利加に屬するヘンリー、ゼームスが、*"The Wings of the Dove"* を説ものあれど、たゞ他の無味なるに比してといふまでなるべく、バーリーが *"The Admirable Chitchon"* は舞臺にて成功せるものなれば、讀み物として其の舊作「スラムスの窓」にだも比すべきものには非ざるべし。亞米利加のブレット、ハートが *"Condensed Novels"* もまた昔の面影なしと評せられ、キプリングが自畫入りの *"Just so Stories"* はたゞお伽話たるに止まり、且つ其の空想の範圍や、單調の嫌ひあり。ゼロームやコンラッドや、はたまた同じと申すべく、數へ來たれば、是れと申すもの殆んど無之候。終りに亞米利加黑人種中の詩人と稱せられ、先年詩集 *"Lyrics of Lowly Life"* を出して、此の詩集不景氣の世の中に、優に五千部を賣りたりと謂はるゝダンバ

一が小説 "The Jest of Fate" も今年の新刊中に入るべきものに候。白人
 人が黒人に對する待遇の偏頗を動機としたる筋なれど、人種的義憤
 を漏らすものとしては、事柄の平凡卑賤に過ぎて、同感するものも唯
 憐むべしと思ふに過ぎず。威嚴足らずと申すべきか。但し叙事の
 筆力だけは世の評家に認められしやうに候。現詩宗の詩集彼れ
 詩壇また、新著徒らに多くして、大なるもの無し。スキンバインが
 が如く、其の南亞平和の詩も、人の顧みるもの無し。スキンバインが
 チューマを憶ふの詩は「ナインチーンズ、センチュリー」の巻頭に出で候
 へど、極めて短きものに候。恰もアルフレッド、オースチンの南亞平
 和の詩と前後して出で候ため、彼れ此れを比して言ふものは、矢張り
 短きながらもスキンバインの方は詩なりなど申し居り候へど、所詮
 以て詩壇の落寔を破るには足らず候。キプリング歌はず、ワトソン

僅かに其の詩集を再刊すと申せば、それにて詩壇の事は盡き申すべ
 し。序でに詩人の世評を申さば、此の國の人が知るも知らぬも先づ
 指を屈するはシェイクスピアとミルトン是れにワイヅワースを配
 して、此の三人は第一流の詩人たるに疑ひ無きこと、天に日月の懸る
 が如しと考へ居るものゝ如くに候。但しシェイクスピアは姑く措
 き、ミルトンを讀みたるものが所謂一般世俗の側に幾くばくなるか
 は存せず候。ワイヅワースは語は俗なれども想の高き所に至りて
 は、我等もなほ解し得ざることありとは、専門家も往々口にする所に
 候。バイロン。シエレーは一まはり小さく、ロゼチ。モリスは更に
 一まはり小さしと認められ、テニス。ブラウニングは今人氣の盛
 りなれど、申さば之れを第一の組に配するか、第二の組に配するか、研
 究といふ態度に候。ブラウニングに關しては、先頃ブルークの評論

出でてなかくの大冊なれど、評判あまり善からず、我等が讀みても、無理に評論したるが如き嫌ひあり、理窟すぎ、若しくはくど過ぎたる節多し。併し兎に角、聲望ある批評家の手により、堂々たる書冊として出でたるものなれば、ブラウニングの研究を鼓吹するには此の上なき書と申すべく、著者みづからも、ブラウニングの想は極めて難解のものなれば、我れはたゞ世の注意を是れに呼べば足ると申し居りし由に候。其の他蘇格蘭人のパーンスを説くは其の筈なるべく、詩人らしき詩人はシエレーなりと、人々之れを喜ぶさまに候。殊にオクスフォードの人は其の昔例の無神論に驚かされて彼れを追放せしにも拘らず、今はなかくのシエレー最負にて、ユニヴァーシティー、カレッジには彼れが裸體のまゝに横はり居る大理石像有之候。彼れとても溺死するとき裸體にては非ざりしならんをなご冷評する人

も有之候へど、そこは美術の權能とも申すべく、兎に角うつくしく候。但しシエレーを説くものといへども、流石に其の作に對し若しくは其の生涯に對する同感を取りて、直ちに現在生活の規範を論じ去らんとするものは無之候。道徳は詩を壓し、詩は道徳を壓するを事として、眞に其の間に挟まれる人生の難事を研究し解決せんとするもの無き我が思想界に思ひ比べては、ジョンソンの重き萬鈞と申すべし。さて現代にありては前便にも申せし如く、スキンプーを唯一の飾りとし、若手にては兎も角もキプリングの聲望なほ遙かに他を壓し居り候。つゞいてはワトソンに指を屈するもの多し。フキリップスを説きミセス、マーガレット、ウッツの詩才の方面を説くときは、候補者は尙ほ際限もなく出で來たるべく、結局此等はみな未定案にして將來によりて其の眞地位定まるものと存じ候。斯く述べ來た

らば、以て如何に英國詩壇の現状の心細きものなるかは察せらるべく候。流行歌、子守歌等についても、尙申すべき事有之候へど、他日を期し候。

評論の方面にては、夫のマクミラン會社の『英國文人傳』叢書の大抵評判よき(テニズン論不評)外前に申せしブルークの『ブラウニング論』など、大なる評論物と申すべく、ラスキンに關するもの、ダンテに關するものなども一二有之、専ら理論に涉れるものにては、セーントンツベリーの批評史の第二卷前人の未だ到らざりし領域に接し候ため、強く人の注目を惹き、一派の人は其の難解にして奇語多き文章にも、其の快樂的審美説の主義にも、其の傲岸にして冷に過ぐる態度にも、批難を入るれど、嚴然たる大著なることは否むべからずと存じ候。丁度十八世紀まで進み居り候。此の著者は今エヂンバラに文學修辭の教

授を致し居り候へば、其内尋ねて見たしと存じ候。倫理の方面にては、故シジウキツクが遺著『The Ethics of Green, Spencer and Martineau』を最とすべし。三家の倫理觀に對する批評と自家の『Methods of Ethics』に見はれたる主義の辯護とを含める講義集にして、以て最近に於ける英國倫理界の四傑を一堂に見るを得べし。倫理的快樂説と心理的快樂説との關係は如何。快樂的倫理觀と社會的乃至博愛的倫理觀との結局の調和は如何。此の書一冊を繙くも、優にかの人心の倫理的事實を没却して、背理論を超理論と心得る偽悪者流をささすに足るべし。吾人も寧ろ根本に於いては、快樂觀、個人觀を取るべし。されども、今日歐洲思潮の深き部面に流るる快樂觀、個人觀は、豈彼れが如く單純幼稚のものならんや。吾人いま暇を得ず。此の書を梁川君の座右に進めて、病ひ平かなるの時、其の評を公けにし給はんこ

ことを望むものに候。尙ジエームス、マーチノーに關しては、其の詳傳も二卷の大冊となりて今夏出で、是れまた好評なれど、我等には趣味薄く候。次にはウキリアム、ゼームスの“The Varieties of Religious Experience”は、其の書名の示す如く人心の宗教的事實の研究にて、蓋し今年出版物中最も價值あるものゝ一に候ふべく、其の後に出版せられたるマロツクの“Religion as a Creditable Doctrine”また其の教義結論よりも其の前驅として著者が現時のあらゆる教義を破したる所に痛快の知識ありとの稱讃を得たるもの、是れに亞米利加ハーバードの神學教授故エワレットが“The Psychological Elements of Religious Faith”（此の書は極めて初歩なるもの）を合せて、最近英國に於ける宗教心の心理的研究を觀るは最も趣味あることゝ存じ候まゝ、是れは細論を後に期し申候。勿論是れは眞研究の方面のみを取れるにて、此等とむ

しろ反對の側に立ち、初めより宗教を研究の外に置き哲學の外に置き科學の外に置かんとして、己れ却りて一種の研究者となり哲學者となれる類の書は多く有之候へども取るに足らずとして度外に置き候。此等の書多くは彼の説教者の口吻を學びて、宗教は超自然の感情に基づくが故に知識の外なりといふ一案を、語を換へ人を換へて反覆するに過ぎず。超自然を説いては背自然と混雜するも此の種の書に候。一世の科學的知識が不可有と斷ずる所に迷信の境あり、一世の科學的知識が不可知と斷ずる所に宗教の境あるを思はず、哲學を斥くるの筆鋒を以てまた科學的知識を斥けんとするは此の種の書に候。其他ポールドキンが“Dictionary of Philosophy and Psychology”も續々出で、手數のかゝりし有益の書の一に候。また亞米利加のリツデルが“An Introduction to the Study of Poetry”は

英詩の句法を分解的に研究したるものにて、我れ等には少なからず興味を覺え候。キツドの "Principles of Western Civilization" は是れまた今年中の大著の一にて世評も固より申分なく、史家思想家の必ず讀むべき書と申候。後より細評いたすべく候。

譯物にては、トルストイ。ゴルギイ。モーパッサンなど見受け候。但し是等固より日本の如く。我が家を空にして之れに走るわけにはさらく、無之、日本にゴルキイ入りニーチェ入るといふとは、全然意義を異に致し候。過般の一新聞に、イブセンの我が邦に譯せられしことを記して、此の諾威詩人の心理研究が果たしてよく日本に適するか、はた日本人も "The things to read" といふが如き讀物の流行を有するか、そも彼等が盛んに泰西の文明を味はんとするの結果なるか、といふやうの事を書き居り候。日本人は寧ろ如何なる心理

にも餘りに早く適し過ぐるご申すべし。嘗て在獨の學友筑水君は、日本人の弊所を顧みて、巾着切の如しこの事なりしが、是はむしろ其の卑くして小ざかしき智識の上よりのことなるべく、情の上より申さば、六七歳の少女の如し。それすら動

もすれば四十度以上の熱を持ちて、神經の高じたる形と申すべし。泣くも笑ふも法外也。他年若し佛蘭西が所謂文明進轉の犠牲となりて、第二の革命に狂ふことあらば、されども事實は然らざるべし。歴史は繰り返すものに非ず、佛蘭西は日本よりも賢なり。經驗の意義を知れり、其の後へに妄奔してダントン。ロベスピールが餌食となるものは日本人なるかも未だ知るべからず。吾人の學ぶべき經驗は寧ろ英獨にあらずや。

話題本に歸りて、雜著とも見るべき新刊の中にては、彼の杜國のクル

ーゲルが「Memoir」とデウエットが「Three Years War」と最も歓迎せられ、クリスマススの贈物用として多くの書店が店頭で推薦し居るものに候。その他「Encyclopoedia Britannica」第十版増補の部も續々出で、「Oxford English Dictionary」も既にQの部まで進み候。是れ等は何れも世に定評あるものとして評する迄もなく候。

(明治三十七年二月十九日)



思想問題

されば此の國の風氣に染むにつれ、最も先づ我等の心に壓し來たるものは、宗教問題に候ふべし。御承知の如く、目下政治部に於いて、黨のあひだ、人のあひだに火花を散らして戦はるゝ教育案の争ひの如き、やがて直ちに此の國の宗教問題、道德問題、人心問題の現狀を曝露したるものには候はずや。否、延いて歐洲の全局にわたれる思想界亂調のキーノートとも見るべきものに候はずや、思ふに宗教の前途はまことに測りがたう安んじがたきものゝ一つに候ふべし。

吾人が目下の見を以てすれば、少くとも歐洲の基督教は眼前に非常の危機を控へ居るものに候。此の點我等の日本にありて、日本の宗教的狀態に鑑みて推測せるところ、此地に來たりて密に事實に觸れて考ふるところ、大差無し。當英國を標準として申すときは、歐洲の社會といへども、宗教が人心に對する眞實の勢力は決して誇るに足るべきものならず。少くとも吾人が宗教といふ一語によりて思念する、一種超越にして熱力あり莊嚴あり依頼あり鼓吹あるが如き眞個の宗教的信仰が社會の人心を支配し道徳を維持するは夢にも思はれず候。大陸の諸國に比するときは、英國は最も宗教的、道徳的なりと申す、而も其の英國に於ける内面の宗教的勢力が既に甚だ頼むべからざるものたるは、少く洞察の力あるものゝ等しく否む能はざる事實と存じ候。此の事實に異存を挾むものあらば、其

は必ずや天性負け惜みの強き當國人みづからが彌縫の言か、然らずんば此の種の言に聽いて而して事の裏面を觀るの明なき徒が、膚淺の立説と存じ候。

然れども、之れを大陸の諸國に比するときは、茲に英國の没すべからざる特色を保有し居ること勿論に候。現時大陸に於ける基督教の眞地位は、殆んど零と申すも大過無きものゝやうに候へば、舊宗教はかじこに於いて先づ内より崩れたりとも申さんか。固より教會あり、勤行あり、誓文に基督の名を呼び、國に基督教國の名を冠するが如きは、滔々たる習風、今なほ古の如くなるを得んも、此等の事實、宗教の眞生命に何程の價値をか添へ候はんや。覺醒ある人心の奥に於いて、舊宗教はすでに其の積極的勢力を失へりと申すべし。吾人はこゝに積極的威力といふ、其の意、宗教の鼓吹的方面なり、宗教

三〇二
的信仰が積極的に道徳を指導するの謂ひなり。宗教と道徳との關係といふが如き論は、現下なほ日本の論壇にも榮へ居るやうに候へど、歸するところ、從來世人の漠として唱へ來たれる宗教的信仰といふもの若しくは其が威力には、積極消極の二面あり。積極に於いては、彼等は宗教的信仰といふ美しき名によりて、人生不斷の指導者を得、鼓吹者を得、保助者を得んと致す、絶えず人心の一隅に神の名と抱和したる一道の熱火あり、人生の行路すなはち道徳の神秘的直射的なる燈明となり、氣力となると想像致すものに候。また宗教的信仰の消極とは、彼等必ずしも不斷といはず、鼓吹といはず、指導といはず、たゞ暫時隨所に休息を得、安慰を得、没入を得んとするものに候。彼等は決して日常不斷の道徳的行爲に一々神の信念を呼び出だすを須ひず、或は在來習俗の道徳により、或は自家特殊の理見により、たゞ

正直に殆んど自ら是非を疑ふといふが如き境に想ひ到ることすら無くして、此の世を過し行くものに候へど、一朝身世の不如意、人事の蹉跎に遭遇し、煩悶し、嗟嘆し、困憊して爲す所を知らざるに至るや、こゝに仰いで訴ふる所を得んとす。退いて息ふ所を得んとす。これやがて消極なる宗教的信仰の作用するところに候ふべし。神といふ、大樹の蔭に、しばしが程の安息を得んとす。安息し了れば復たび新たなる旅程に上る。而も吾人は安息によりて唯一時の慰藉を得たるのみ回復を得たるのみ新たなる旅程の岐路を之れによりて指導すべき別種の力を得んとは必ずすべからず。要するに宗教的信仰の積極は發動的にして消極は受動的なり、一は鼓吹にして、一は安息なり、一は行住坐臥なるべく、一は隨縁時發なるべし。積極消極の意これのみ。嚴にいふ宗教的信仰の威力はこの外にあるべからずと

三〇三

存じ候。

而して大陸の宗教が事實に於いて其の生命の大半たる積極的威力を失ひ了せりと致さば換言すれば眞實神の爲に戦に赴くの勇卒來世の念敬神の心に信念の基礎を置きて信する所に忠なるの國士神の榮光に接す意識して此の世を樂しく送るの良民此等のもの漸く世の進歩といひ知識といひ自覺といふ社會より跡を絶たんとすと致さば剩すところは知るべきのみ。基督教は唯僅かに消極的生命を敗殘の餘に保つものと申すべし。寂寞たる教會の薄暮冷かなる腰掛の片隅に一人默然として祈禱の頭を得も上げざるものは蓋し半生の罪惡身を責めて神の慈悲に安息せんとするものなるべし。弊衣蒼面の人が仰いて薄運を嘆じ俯して神の慰藉に依らんとするもまた此の處なり。日曜の教會に集まる老幼も教會の重き空氣に

包まれ撫するが如き讚美の樂に心耳を澄ます間は暫く浮世の愛惡を忘れて玲瓏の境に没入するを得。此等は宗教の消極的効果に候をはずや。されど一步教會を出で一旦境遇を異にする時は宗教的態度は忽消了す。教會は畢竟我に清き安慰を與へ、思念反省の機與へて以て遷善改化の緒を作らしむるの道具たり。神の名に於て之れを莊嚴し、音樂唱歌色彩建築等の美術的威力を以て之れを有力にしたる一の道徳的器具たり。其の以上今の教會今の宗教が人に何程の不朽の精神を鼓吹し得べしとも覺えず候。固より少數の無邪無識なる人々に残れる舊信仰の威力は論外と御覽あるべく候。斯くして歐洲の基督教は空なる名と空なる會堂と空なる儀式と空心なる牧師空心なる信徒との外たゞ消極的信仰に其の餘命を保つものと存せられ候。

されど其の消極的餘命と申すものすら大陸は既に之れを亡じたるに近し。彼等基督教徒に取りては一週の聖日たる日曜のさまに御覽せよ前より此の地の人々が論ずる日曜の性質論の如き最もよくこの間の消息を漏らすものに候はずや。大陸の日曜のたゞバンクホリデーたるに止まるは果たして可なりや。日曜は決して娯樂の日にあらず少なくとも其の娯樂は宗教的安息宗教的反省に伴ふの娯樂ならざるべからずとは英國の日曜の性質に候。大陸はすなはち英國民がせめて一週に一度たりとも靜に神を思はんといふ消極的態度をすら既に脱し去りて所謂紳士淑女といふものゝ中日曜の教會にすら行くを必せざるもの多きに非ずや。教會に行かざるも必ずしも神を拒否し宗教を拒否するものに非ざるは言ふまでもなく候へど之れと同時にまた神無しといふ社會に立つも彼等は何

の痛痒をも感せざるべく候彼等が行住坐臥の念頭に宗教の威力なきは、竟畢宗教的信仰の頽然として内より崩れたれば也。此の點に於いて英國はなほ大に持する所あり。併しながら英國といへども決して宗教安泰の國にあらざるは始めに申せし通りに候。唯保守力に富める國民だけに宗教破壊の潮流に後れ居るまでに候。されば大陸が既に經過したりし宗教道德の行程をも猶ほ將來若しくは現前に具有して舊信仰舊宗教の大海に涵湧する、あらゆる波瀾を一國の思潮の中に收めたるはやがて此の國の最も我等が觀察に趣味ある所以に候。老幼と語れば老幼見を異にし僧俗と語れば僧俗説を異にし公園に宗論を闘はすもの食卓に基督を議するもの、凡て基督教破壊の大潮に一水を注ぎ一波を添ふるものに非ざるは無しと申すべく候。我等は如何に宗教的信仰

の生命あるかを見んとするよりも寧ろ如何に宗教的信仰の破壊せられ行くかを見んがために此の國に來たるべし。更に精しく申さば如何に英國民が基督教の破壊を防がんとして苦悶しつつも大潮のために押し流され行くかを見るべく候。

教育案は畢竟國家が基督教の力を初等教育の中に保持せしめんとするものに非ずや。チエームバレンの演説政治上の意義勿論理由は單一ならざるべしといへども之れを思想の上に及ぼす効果より申せば國教の威信やうやく崩れんとして政府之れを少年子弟の教育の上に防がんとするものと申すに不可なし。然れども斯くの如くして果たして幾ばくかよく個人が思想の自然の發展を防遏し得べしと思はざるゝぞ。

はたまた一面にオーソドックスの強き根據を有する當國は他面に

最も反對なるユニテリアニズムの存立をも容認するに候はずや。

英國教會派の中にすら十字架の羅拜を拒むの潮流は漲りつつあるに候はずや。凡そ舊約書を信じ奇蹟を信じ儀式を重んじ十字架を拜し基督を神とするものよりして舊約書を斥け奇蹟を斥け十字架を斥け基督を人にし神を理體とすら見んとするに至るまで苟くも基督教が宗教の名の下に存立し得ん限りの宗派宗論はこゝに集まりて舊信仰破壊の潮流に瀕をなし淵をなす。此等の事象大陸には古くして當國に新しきものと申すべし。はた恐らくは尙ほ幾歲月の間當國にありては此等の事象を常に新しと見ざるを得ざるべし。これやがて此の國の宗教が長く觀察者に趣味ある所以に候。

基督教の斯くの如く崩れんとするは固より一旦夕の事に非ざるの理歐洲の哲學史宗教史を一見せる者の夙に知る所に候はん。縁は

多かるべしといへども、主因は知識の進歩に伴ふ理と信との乖背にあること動かすべからず、十九世紀は十九世紀の知識が是認するの内容を、其の宗教的信仰の中に求めて、此れに合せざるものを毀てるにて候。彼等は先づ宗教的信仰が要とする一種の莊嚴崇拜の情に向かつて、其の客體の人格神といひ不思議力といふが如きものに輕侮の感を挟み、こゝに内心の莊嚴を破り崇拜を破り、宗教の威力をして道徳の上より引き退かしたるに候はずや。之れ實際に於ける舊宗教の敗亡なり。而して更に其の理の鋭きものは、其の殘骸に向かつて解剖の刀を加へ、遂に之れを形實ともに解體し盡さずんば已まざらんとす。舊宗教は實に理の下に崩れたるにて候。

さらば英國國民は宗教の實勢力より獨立して如何にせんとするか。曰はく彼等の尤なるものは其の教育により歴史により天性により

國家によりて造り上げられたる一種の強き性格を有す、之れによりて彼等の道徳は常に鹽梅せられ行くが故に、彼等を以て大陸の國民に比するときは、道徳に於いて正しく一步を抜くの觀を成す。宗教的威力國民の内心より衰へ去るも、彼等は毅然として動かざるの道徳的性格を有す。道徳的性格はやがて道徳的信仰と同義たり。將來の此の國の道徳は知らず、現下において、英國國民は宗教的といふよりも遙に道徳的といふを當たれりと致すべし。夫の單に國教や儀式や宣誓や世に行はるゝものゝ外形によりて、直ちに英國を宗教的國家と嘆美するが如き徒世には間ありと申す。何等の短見ぞや。斯くの如きの徒はまた西洋の結婚の神の名によりて行はるゝを見て、宗教的結婚と驚駭し贊嘆するの徒なるべく候。笑べし。

思ふに英國國民が概しての道徳的傾向と及び、彼等が宗教の形式に突

飛の破壊を企てざる保守性とは、相合して皮相者流に宗教堅固の國といふの念を抱かしむる原因たるべく候。英國民が宗教的信仰以外基督教を一種の國家的觀念歴史的觀念より愛重し保持せんとするの傾きは宗教的國家にあらずして國家的宗教といふの觀を呈し候。彼等が宗派心の強きもまた同じく彼等の固着性を主因とするのみ、宗教的信仰は此の間に幾ばくの生命をも有せず候。翻つて大陸の様を察するに、こゝには宗教の敗類と或は前し或は後して、舊道徳また肆然として亡びんとするものゝ如く候。此は必ずしも宗教敗類の場合と同一にあらざること論なし。原因は極めて複雑なるべしといへども現當の事實に於いて自家を中心とせる感情の勃興が其の最強破壊力たるは認め易き事實と存じ候。即ち現在の事實に於いて、此の種の感情のために夫妻の關係亂れ親子の情

誼沒せんとするもの多きは、大陸道徳の情勢と相見え候、是等の事必ずしも此に實例を引くまでもなく、大陸諸國の社會方面を見聞するものゝ直ちに首肯する所と存じ候、語をかへて申さば個性欲の強梁なるがために、舊道徳の羈絶え果てんとするもの、今日の歐洲大陸に於ける裏面的社會なり。然らば彼等は舊宗教を破り舊道徳を破りてこゝに満足を得飽和を得たりや。曰はく否な。彼等は此の上に更に特殊の要求を有す。蓋し彼等が一切の此の種の行爲は、事實に於いて裏面的なり。竊盜的なり。白晝公然人の妻を姦し、面前人に誇りて胎兒を墮するものは、未だ正當の社會に絶えて無し。彼等の個性欲の跋扈が多くの場合に於いて反對の羈約を感じるを知るなり。茲に於いては彼等の心は悶々の苦みに堪えずして、何れの方面にか解決を要求し來たる。

今日の此等の國民否凡そ斯くの如き道德的過渡に立てるの國民は、何れを問はず此の解決の要求を彼等が最要事の一と感せざるは無かるべく候。或るものは感情の行くがまゝを恣にせんがため、ひたすら之れを是認せしむるの口實を要求す、言ひ前を要求す。これも解決の要求に候。また或るものは此の感情を和げんとて偏へに反對の力を強うするの道を講ず、是れも解決の要求に候。解決の要求とは畢竟人生に對し道德に對する最上原理の要求なり。人心の何れの部分をも満足せしむべき信仰なり。更に申さば頼るに足る主義の要求なり。之れによりて何れにか我が苦悶の斷除を得んとするものに候。今日の大陸國民は眞箇切實に此の如き主義を要求しつゝあるものと申すべし。

此の一事直ちに今日の思想界の現状と相照應す。倫理學を立つる

もの多きも、新宗教の必要を説くものあるも、小説詩歌に主張を喜ぶの傾向あるも、すべて是れ感情理性の今更らの矛盾に悶ふるものが、何れにか解決を得、口實を得んとする所謂主義の要求に反應するものに非ざるは無く候。

なほ此の點の細説に入るに先だつて、後のために一言注意を喚び置くべきは、解決の要求といふことが、正しく斯く意識する一刹那よりして、截然として理性の過程に入れることに候。如何にして安易に斯の欲を遂ぐべきか、如何にして反對の原理と調和し若しくは之れを折伏すべきかと思念するは、直ちに是れ工風なり鹽梅なり。感情豈工風を有せんや。鹽梅を有せんや。必ずしも一系の哲學を成すを要せず、苟くも工風の門を潜りて後に來たれるものは、半行の結論たりとも、理性の共同を拒否する能はず候。

三六
そもく、懷疑とは知識の不足の謂ひなり、何故にと尋究するの意
なり。知識的結論を得て満足せんとするの義なり。されば知識以
外、懷疑を解くの途はたゞ其の懷疑の發足點たる矛盾と苦悶とを事
實の上に除くの外なし。一派の論者動もすれば懷疑と感情の矛
盾とを混同して懷疑そのものが結論の満足を持たずして直ちに感
情の矛盾をも調攝し得るかの如く誤解するものあり。自ら理性乃
至知識を嫌ふと唱へながら何故にと問ふの懷疑を以て感情體達の
道とし、懷疑に入れよ悟るを得ん、而も其の悟りには知識與からずな
ごいふ。理に味き者とは此等の謂ひなり。斯かる徒が悟道ぶりて
禪僧などの套口吻を真似るの言に、何程の眞實と價値とあるかは疑
はしきものに候はずや。此の點に關しては、夫の禪家の術さらに恰
惻なり。彼等は始めより何故にと問ふの懷疑を斥け、全く無念にし

て證悟せよといふ。此の説の實證すら頗るむつかしきものなるべ
きを、始めより疑ひて而して知識の階程を経ざるの證悟に入れとは、
木に縁りて魚の譬へも物かはと存せられ候。
さて歐洲の天地が斯くの如くして主義を要求するにあたり、之れに
應じて出でたるもの大小限りなしといへども、此等みな既に世に公
けにするの主義たり原理たり信仰たる以上は、之れを以て世の檢斷
を受けんと擬したるものに候。一世の何程かよく此の主義を受容
し得るぞ。一世は此の受験者に對してテストファイする所無かる
べからず。斯くして或る主義は捨てられ、或る主義は取られ、或る主
義は變せられたりといへども、而かも疑ひは尚ほ心の奥に消えざる
もの多く、遂に五十年の世路、千卷の讀書も得る所なきを嘆ずるのフ
アウストを實現するに至る斯かるものは、悟れるに非ずしてなほ迷

へるものなるが故に、遂にひとり自ら毒を仰いで死するか、ひとり自
 暴自棄して悪魔の子弟となるの外なし。新宗教若し來たらば切に
 此の苦悶に會するものならざるべからず。將來の大宗教は原罪を
 濟ふの宗教にも非ず、世の罪惡を勸化するの宗教にも非ずして最も
 此の人生の苦悶を救ふものならざるべからず。
 世にある幾多の主義のうち、始めより感情を壓して之れを罪惡視す
 るものは、姑く措き、専ら感情を立て、之れにのみ依らんとするもの、
 即ち個性欲を第一義に置く主義の中には、曰はく、個人中心主義、曰は
 く、快樂中心主義、曰はく、戀愛中心主義、而して個人中心主義は遂に其
 の個人を大なる個人若しくは多數の個人といふ意に緩和し、變形し
 て世の檢斷に合せんとせり。此に於いてか主義の生命は却つて個
 性欲以外の何物にか移行行かんす。快樂中心主義は即ち其の快

樂を廣き快樂、高き満足といふが如きものに限りて是れまた主義の
 生命を固性欲の外に移し、戀愛中心主義は、其の戀愛を更に博愛同情
 といふが如きものに變じて、是れはた固性欲以外に生命を求めんと
 す。世の思慮あるもの、中絶對の戀愛中心主義を實行し、絶對の快
 樂中心主義を實行し、絶對の個人中心主義を實行したるものなく、實
 行して満足したるもの絶えて無し。世の主義に對する檢斷は實に
 斯くの如き結果を生ぜるにて候。
 夫の今以て我が文壇に餘炎を留むるすら奇怪至極なるニイチエ主
 義の如きも、如上の主義の一つに候。
 ニイチエを主義として見るときは、詮する所個性欲を極端にまで伸
 長せしむといふに、要旨は盡き申すべし。而して歐洲に於ける其の
 祖述者(?)が彼れを稱讚する第一の理由は、曰はく、基督教の下にあり

ては前人も流石に斷言するを憚りし近世思漸の暗流を。大膽に世に推薦したるにありと。即ち基督教の下に掩蔽せられたりし個性欲を世に顯示したるを其の効と致すなり。されども斯くの如きはたゞ其の勇氣を讃すといふに止まりて、主義其のものゝ善惡には何の關する所もあるまじく候。主義は當さに之れより世の檢斷を受くべきものなるべく候。而して吾人の見るところを以てするとき、此の主義も必ずまた先きの場合と同じく一部の緩和を得て始めて是認せらるゝものとなるべく候。

其の理由は申すまでもなく、人間心底の一例を見落としたるものなればなり。本來基督教が今日の社會道德に及ぼすの力はさまで大なるものなりやといふこと、根本の疑問なるは前に論せる所の如くに候。即ちニイチエが嘲る所の今の道德は必ずしも基督教の掩護

を假らずまた基督教を源とせずして發し來たるを得べく、是れ實に人間の奥にひそめる性理の聲を説くものに候へば也。基督教は寧ろ斯の如き道德の領内に於いて生を保たざるを得ざるに至らんとせるもの、現時の大勢には候はずや。されば實際道德の上において、基督教は既にニイチエを待たずして壓倒せられたるものに候。

若し今の世の道德界に、個性欲を壓して立たんとするの威力ありとせば、其は基督教にあらずして實に理性なり。神に非ずして人間なり個人そのものなり。少なくとも個人の中に住して個性の半體たるの神なり。基督教の神を倒すに於いてニイチエに何程の効か候はんや。ニイチエが此の點に一步を過てるものなることは、此の地の最負者の或るものゝ如きも之れを認めながら、猶ほ之れを他の論點に移して軽く摩し去らんとするは何ぞ。是れ實にニイチエが効

績に關する要點の一に候はずや。即ち彼れは事實に於いてもまた其の言説中に於いても理性其のものを排却するものに候。されど理性の聲果たして塞ぎつくすを得べきものなりや。之れを迷ひとして斥け去る所に如何の満足か得らるべき。理性も所詮は我が五尺の身體の爲に存するものなること或はニイチエのいふが如くなるかも知るべからず。而かも猶ほ斯くの如くして理性は眞なるを思妨げず候。吾人がニイチエの説の必ず緩和を要するものなるを思ふの根本は到底個性欲と理性欲と兩元の共に眞實なるを否む能はざる點に候。

去りて日本の文壇如何にと御覽あれ。僅かに一部の書一篇の文を讀んで之れに會心の所あれば直ちに全身を之れ吞まれて其の外を回顧するの餘裕を有せず。ニイチエ乃至は美的生活とやらんの事

事じさよ。而して世上また今更らじう是れに追隨するの徒尤らじき口吻もて之れに好意の解釋を附せんとするの輩彼等の前には歐洲の思想界が經歷し來たる經驗は何の意義もなかるべく否な恐らく讀書嫌ひの彼等はろく／＼書物をも讀まずしてたゞ我が佛尊しとのみ騒ぎ上ぐるものに候ふべし思ひ來たれば一面のポンチ畫場試みに其の二三を描き候はんか。

先づ最負連に見るべし。彼等が此の種の説に道理を附する第一の理由は時勢の産物也といふにあり。善し。時勢の産物とは譬へば病める血にわくバチルスの如きものをいふ也。また此のバチルスに反して生ずる一種の毒素の如きをもいふ也。斯くの如くして造化の體制は自治自療の道を有す。欲性主義は其の何れなりといふや。

いふまでもなく彼等は之れを以てバチルスに對するの毒素なりといふべし。即ち人體に對するの藥素なり。さらば此の見は何程の根據を有するや。彼等常に本國獨逸の狀態を口にす曰はく個人の權能蹂躪せらるゝの今の世には此の種の説の要ありと。即ち個人の無視はバチルス也。欲性主義は斯くの如き社會の組織を斃さんとするものなるが故に人生の良藥なりといふなり。假りに此の根據は是なりとするも何ぞ其の根據を見るに竟にして其の結果を見るに偏なるや蒙なるや。記せよ造化は決してバチルスを斃すの毒素が人體をも併せて毒するが如き拙惡の例を人間に示すものに非ざるを。假りに欲性主義を以て今の社會組織、國家組織を破壊し得とするも是れ無謀の破壊也。無思慮の破壊也。建設の豫期なく準備なくして企つるの破壊也。破壊荒廢の後に何物か残ると思ふぞ。靜に

思へ公平に思へ。留まるものは唯自家の欲性に猛り立つ個人のみならずや。是れを豺狼野に相食ひ、鷲鷲空に相撃つ、の狀に思ひ比べて、何所に相違を見んとするぞ。斯くの如くして何所に欲性の満足を得んとするぞ。今日の社會國家も昔は一たび斯くの如くなりしならんか。理性の光り之れを導びいて今日あるを致す今日の社會や國家や、皆存立の根據を有す。病あらば改むべし、破壊も可ならざるに非ず、必ず改造を以て之れに繼がざるべからず。而して感情みづからは唯進むを知りて形を有せず、形を造るといふは常に理性の共同作用といふこと也。結局欲性主義の結論は或は現社會の組織を斃すべしといへども、併せて人生を斃すもの也。個人を斃すもの也、欲性みづから縊死せんとするもの也。此等の理殆ど言を須たざるが如くにして、而かも夫の聰明寛大なる鼠負の徒の參照する

所とならざるは何ぞや。欲性主義の根據に向かつて寛大ならんとするものは、同時にまた之れが結果に向かつても聰明ならざるべからず、彼等もまた多忙なる哉。

然り、彼等の或る者は聰明を忘るゝものに非ず。茲に於いてか曰はく、上の如き結果を恐るゝが故に唯其の一部を取りて之れを緩和すべしと。言ふこゝろは理性によりて之れを鹽梅せんといふなり。

まことに至當の見なり。されども至當化するに共に欲性主義を最負するの根據は瓦解し了するに必づけりや。欲性主義の面目は其の理性を拒斥する所にあり、感情の往々に任す所にあり。之れに理性の案排を加ふるは欲性主義を破毀するなり。何の理由あつてか而かく自ら破毀するものに執着せんとするや。

彼等更に辭を設けて曰はく、唯其の感情欲性にエンフアシスを與へ、

之れを忘れざらしめし所に價値ありと。粗心の至りなり。凡そ世の快樂主義、社會主義といふが如きものゝ中に、欲性に重きを置いて發足し、個人に重きを置いて發足せし主義の儂指に堪えたるものあるを知れりや。而して是等の主義がニイチエ等を待たずして世に存せしものなるを知れりや。はたまたニイチエ出でより其の効によりて世の幾ばくの主義か感情に更に重きを置くに至りしぞ。

否、重きを置くに至りしものは是れあるべし。而も此等のもの能く幾ばくか之れによりて一層多く時代に満足を與ふるものとなりしぞ。之れを要するに、世は彼れが如き無謀無慚の方法に於いて感情欲性を鼓吹するの必要を有せざるなり。世間はむしろ欲性に於いて夫の主義者よりも一步を先んじたる也。

鼠負の徒また曰はく、我等はたゞ之れに同感するのみと、彼等が心の

底に觸るゝものあるに同感するのみぞ。此は畢竟彼等の心幼稚なればなり。世波に搖らるゝこと少なく、書を読むこと足らず、材質空にして唯みづから自家の幼稚なる多感性にのみ顧省するが故に、世上更に高大なる同感の味あることを知らざるなり。そも、心の底とは何ぞや。我等が長へに自家の快樂満足を思慕するの念なるべし。然れども單に之れに觸るゝのみならば、何の讚美ありや。彼等は何故に同一理由によりて貧の盗みするもの、人の妻を姦するものに讚美を捧げざるや。若し此の如きものを以て心の底といはば、其の底は淺きものなり。其の同感は小さきものなり。我等が眞の同感に欲性其のものゝ認諾にあらすして、欲性の上に理性の反對を認諾する所に生ず。即ち大同感は一元の上に立たずして二元の上に立つ二元に同一の認諾を與ふるときは、矛盾を生じて此に人生の

涙あり、此の涙に同感するに至りて始めて眞の同感に非ずや、彼等曲げて此の深き同感を欲性論者の説中にまで羅織し出ださんとするか、何の必要ありてか、かく牽強附會の勞を積みても、毒中に藥を求めんとはするぞ、欲性によりて理性を拂拭する、其の結論に欲性主義の生命あることを忘れざれ。
 遮莫此の種の追拜者流が青年に多きを見て、吾人はうたゝ彼等が讀文力の卑きを思はずんばあらず。文を讀んで眞個に之れを味ふを知らず。少しく筆力の強き文に逢へば、其の筆華に魅せられたりして醉へるが如く、一切の思慮を忘じ去つて顧みず。文に讀まるゝものは此の徒なり、彼等は文を讀んで文の奥に横たはるの文體、其のものに翫味し到る能はず。我が前にあるものゝ眞僞を之れによりて斷する能はざる也。それ文體はやがて筆者の人格に非ずや、文の精

神に非ずや。形に囚へられて精神を見得ざるの讀文者何すれぞ世に多き。夫の欲性主義を唱ふるもの、文辭中、最も有力と目せらるるもの、即ち最も矯飾の文なることを感せざるか。吾人此の種の文に對して常に思ふ。一讀して化せらるるが如し。再讀して即ち矯飾の氣を感じ、卒讀して靜に思念するとき、人格の眼前に髣髴たるを覺ゆ。少くとも我等を動かすの文は必ず眞なるべし一なるべし。寸毫の偽を容れざるなり。

論緒少しく前にかへりて、彼等が欲性主義推讃の理由を世の個性の無視にありといふ中には、管に獨逸の國家、露西亞の國家といふよりも一層多き意義を有す。即ち夫の感情非認主義の道德に反動すといふなり。されども今日の歐洲は事實に於いて感情非認主義の道德が支配する所にあらず。偏狹なる獻身主義や、禁欲主義や今日の

道徳界に弊となる程の地步を占めたるものに非ず。寧ろ欲性の勃興は早く既に之れを破り去りたるにあらずや。今日の歐洲が獻身主義、禁欲主義の抑壓に苦むとは何人の觀察なりや。獻身主義破れ、禁欲主義破れて、獻身主義禁欲主義ならぬものすら是認するを得ざるの獸欲、社會の裏面に横行し、而して尙ほ或る自由を此の上を得んとするは今日の實勢なり。されば今日に欲性主義を唱ふるは、反動にあらずして同意なり、代表なり。むしろ一世の獸欲に媚びて黨與を此に求めんとするものなり。公平に之れを思へ、今日の社會に一層欲性の自由を加ふることが、更に幸福なる時勢を生むべしとは何人か斷言し得るぞ。此の理曩に馬骨人言の記者が事例を擧げ文書に參照し論破して遺憾なかりしにも拘らず、狡獪なるものは辭を設けて之れと争ふを避け、迂愚なるものは己れ之れと同一の結論に陥

りながら、白面の身を以て之れを漫罵し去らんとせり。之れを要するに如上の範圍に於いて、何れの點に欲性主義が現下の道德頽廢に反動して一層幸福なる社會を豫期すべき事實ありや、根據ありや。辯せんとするものは明白なる答へを與へよ。

更に欲性主義の主張者に見よ。彼等の書と文とは、個性欲の敵として啻に在來の社會國家と道德宗教とを指摘するのみならず進んで其の根本を拒斥せんとせり。即ち上來しばしばいふ所の理性の拒絶是れなり。茲に理性といふ語を用ふるは、カント哲學の理性の意に於いてするものと、單に知識性といふ義に於いてするものと、二義を兼ねたりと見て可なり。此の二者を連續せしむる吾人の見解に異議を挾むものありとも、其は今の場合に無用の論たり、何とならば、欲性論者は明かに道德を斥け、知識を斥け、併せて道德の大源たる一

種の非個性欲的意識をも斥くるものなればなり。斯くして欲性論者は理性を斥く、彼等往々にして他の論詰にあふや、彼等の慣用手段たる兩端模稜の辭を弄して、本體の曝露を避けんとすれども、彼等若し欲性の中に一分たりとも理性の混入を許すが如きことを明言せば、立地に其の説の他の部分は自殺し去ることを覺悟せざるべからず。社會の中より個人を取り個人の中より自性欲を取り、而して之れを進化的相對的に見ずして絶對的に見たるの彼等は、如何に辭を弄するも此の埒外に一歩をも移すを得ず、移すは即ち自滅なることを覺悟せざるべからず。

彼等の本領すでに欲性を煽動して理性を呵斥するの一點に集まれり、とせば、而して是れ彼等の信仰なり、結論なり、主義なり、といはゞ、而して彼等の慣用語として體達實踐の外を許さずといはゞ、此に吾人

の要求する所は、説者の速かに之れを實行して世に示さんことなり。何故に彼等は喋々の辯をのみ事として速かに之れを體現せざるや。人格若しくは天才の感化が人生の最大勢力なることは、彼等の最も善く知りて最も之れを説くを好む所なり。何故に彼等は其の美しき道德觀を實踐せざるや。社會の組織之れを沮むといふか。善し。社會の之れを沮まざる部面に於てせよ。日本は幸にして未だ有妻の男子が女を容るゝを禁ぜざるなり。所謂佳人の歡會なるものを妻子の前に於いて恣まゝにし見よ。而して其の結果を採りて天下に布けよ。在來の道德が之れを非難することあるも彼等に取りては固より何の痛痒をも感ぜざるべき也。或は妻子を有するの制度既に非なりといふか。何ぞ速かに之れを去らざるや、而して欲性の狂ふ所更に一女と姦し二女と姦すとせよ。狂人ならざる限り、其の

結果は想像し得べきのみ。彼等何ぞ速かに之れを體現して濟世の大願を成せんとせざるや。若し之れを爲すの勇なしといはゞ、卑怯漢なり。之れを爲すまでの信仰なしといはゞ、信仰ありげに天下に壯語せるもの偽に非らずや。由來我等の疑ふ所は、彼等眞に欲性一面の外に何の聲をも心内に聞くことなく、欲性の満足する所絶えて反對の苦痛を感ぜざる所謂解脱の境を實證したりや否といふことなり。彼等の言を聞くときは、彼等は知識思念によらず實證によりて此の境に入れるものゝ如し。世人は公平に觀察して何と判断するぞ。我等は其の眞の證語ならんことを望むものなりといへども、若し未だ解脱の境に入らず、依然として兩元の矛盾に苦みながら、而かも其の一元を壓して他元を立つるの結論を得たるなりといはゞ、是れ直ちに知識ならざるべから

す。唯彼等呆心にして未だ其の知的工風なりしことを自覺し得ざるのみ彼等が好んで用ふる覺醒といふ語は斯くの如き場合にも要あるものなり。若しまた知識にもあらずして尙ほ決斷なりといはば茲に彼等は魔術師と成り了せるなり。彼等が淺はかなる誤解を以て天下を瞞過せんとせるなり。孺子僞瞞の途を誤れり。何ぞや。世の所謂體達悟道の語は其の信仰する所に身みづから到り得たるの謂なり。自ら之れに居るが故に寸毫の疑をも容れずといふものなり。疑ひこゝに至りて消ゆるなり疑ひの事實失せたる也。然るに彼等は身未だ欲性自足の境に居る能はず而も知識は更らに與からずして或る不思議なる信仰を空より拈出したるといふ。之れを彼等は稱して體達とも悟入ともいふが如し。若し果たして然りとせば何等の滑稽ぞや、何等の淺薄ぞや。眼をどちて恍惚たりし時忽

然として欲性の満足のみ眞也との斷定が腦裡に湧出したたり、彼等此れより不思議に此の斷定に信仰を感じたり、噫彼等の悟入といひ信仰とふいは實に斯くの如きもの也、何ぞそれ世の御夢想といふものに似たるや。禪家の初心者もまた一たびは此くの如き謬見を抱いて隻手の音聲に頭を悩ましたるべし。斯くの如きものを以て主義信仰を天下に呼號せんとは、事も愚かや。之れを要する欲性主義者の説眞實體達の信仰ならば速かに之れを體現すべし。否體現し來たらざるを得ざるの理也。天下環視して之れを待たん。若し體達に非ずといはゞ知識の産物ならざるべからず、則ち知識を排するの失言を天下に謝して推理の前に檢斷を待つべし。若し知識にも非ずといはゞ御夢想を悟入と心得るの名を甘んじて、其の是非を争ふべし。説者は三様の何れを選ぶか。

説者は遁辭に巧みなるもの也。茲に豫め之れを擧げ置くべし。世の鼠負の徒動もすれば曰はく是れ詩也極論すべからず。説者即ち時としては是れに應じて遁路を穿ち、抒情の外に何の目的も無しといふが如き態度を示す。されども是れ最も非なり。詩といふを以て架空といふ義とすれば、説者が主義鼓吹の文、決して架空事にあらず。又詩といふを以て單に抒情の文といふ義とすれば、詩といふを以て責を辭するの謂れ少しもあらざるなり。天下に告白して人を動かさんとしたるものは必ず其の責を負はざるべからず。説者また是等はたゞ慨世の餘に出でたる極端の辭なりといふか。世人往々にして此の口實を以て今の場合に擬せんとす。他より之れをいふは罪淺し。説者みづから若し斯くの如くいふとすれば、輕薄なり不埒なり。一席の話談に殊さらに激語を用ふるが如きは間

間あるの例なりといへども、今の場合は事苟くも主義に關す、信仰と號するものに關す、彼れが如く人前に言質を立てながら、辭屈すれば、是れ自らも大中至正と信する所に非すと辯せんか。天下は之れを何と云はん。説者能く斯くの如くなりや否や。或は我れは天下に説くものに非ずといはんか。卑怯なる言ひ前なり。既に一旦己が感想を文字に記して天下に公けにする限り、天下と其の影響を一にせざるべからざるは言ふまでもなし、且つ既に明かに世の人に向かつて醒悟の道を奨説せる限り、此の如き口實は一切用を成さざる也。或は以上の批難以外に理を有すれども到底知識を以て述べべからずといふか。恐らく理に非ずして所謂信仰なるべし。體達の信仰か、體現すべし。夢想の信仰が此の名を甘諾すべし。説者既に人生

に於いて事を起こせる以上、吾人も人生の一員として説者に之れを迫るの権利を有す。

或は説者の懐抱するところ遂に言辭を以て辯すべからずといふか。しばし例に於ける禪家の故智に遁路を求めたるなり。されども禪家の祖は説者よりも賢なりしことを記臆せよ。彼れは始めより不立文字と銘うちたり。説者は何故に喋々の辯を世に公けにして自家の信仰を之れに託したりや。或るときは説法或るときは不説説、兩端を持して之れを追へば彼れに遁れ、彼れを追へば此れに通る。鮎のぬけ穴といふものに似て笑ふべし。然れども所詮口を噤むといふものは強いて之れを開かしむるに由なし。是れよりしばらく説者に口なきものとして一二を言はんか。

説者が慣用の遁辭はなほ多し。説者の説によれば、其の説に反する

ものは凡て常に説者を解し得ざるものなり。而してまた説者は常に己れを解し得ざるものぞ争ふを好まざるものなり。此の種の言の中には如何なる意味ありや、説者一人若しくは之れと欲性主義を共にするものゝ外は、天下の人凡て説者を解し得ざるの昧者なり。

説者は非常非凡の怪物なり、一代のエニグマなり。噴飯に非ずや。既にみづから自己を一代の題目と自稱する限りは吾人こゝに其の人物の閱歴より推して、其の人格を想望するも可ならずや。

吾人の見る所を以てすれば、説者は年未だ三十を多く超えず。世の辛酸風雨をいかに身にしめたりとも覺えず。而かも彼れは體達悟入の境に入りて我等を瞠若たらしめんとす。而して人の之れを疑ふものあれば、庭前數尺の觀察下宿屋三年の人生も、我れには體達の因縁たるべしといふ。而して同じ人は常に他を罵るとき生ま

若き道學者といふが如き口吻を擬するを好めり。斯くの如きエニ
 グマの人格を世は何と解するぞ。再び噴飯。
 また此の人學窓の生活を了へてより數年を出でず。自からは我れ
 豈理を以て争ふ能はざらんやといふと雖も、其の理論の言といふも
 のには、我等不幸にして甚だ多くの推理を觀取する能はず。而も同
 じ人は一切の智識の價値を否定するの勇氣あるものなり。人は萬
 卷の書をも讀破したる半白の老學究が成れの果てかとも思ふべし。
 三十左右の修業ざかりとは誰れか思はんや。三たび噴飯。
 説者はまた一年ばかりの前、其の所謂悟りに入りてより所説を一變
 したるものなり。變説は必ずしも不可なかるべし。唯其の悟りの
 因縁を重しとするのみ。夫の自家が便宜によりて豹變を恣にする、
 世の無定見者流といへども、時々豹變みな悟りなりといふを得べ

ければ也。説者若し眞の體達豹變ならば、其の前期はこれが準備期
 すなはち體に苦悶を感じるの時ならざるべからず。其の述作に其
 の跡ありや。はた一時の苦悶によりて解脱したりといふか。苦悶
 なくして不思議に解脱したりといふか、何れとするも説者の解脱は
 最も怪しむべきものに屬す。そも、説者は議論を得、思想を得て
 たゞ準據の學説を變じたるものに非ざるか。

歸する所説者等の分際を以て、己れを解せざるものを昧とし、體達を
 説いて己れを暗うすると共に、智識を輕んじて其の價値を否定する
 は、吾人の眼より見るとき、僭上至極の沙汰と斷するものなり。
 説者は曾て反對者の言辭輕佻なるが故に答へずといひて一たび難
 詰を遁れたり。また其の言辭匿名なりしが故に答へずといひて二
 たび難詰を遁れたり。小兒輩と争はずといひて三たび難詰を遁れ

たり。學究先生の知る所にあらずと號して四たび難詰を遁れたり、言説にあらずして人にありと稱して五たび難詰を遁れたり。己れを解せざるものと語るを欲せずと唱へて六たび難詰を遁れたり。何ぞそれ遁るゝの術に巧みなるや。そも顔^{かん}を抗^あげて人と辯^{べん}すること能はず。追ふものあれば直ちに暗所^{あんじょ}に遁^{のが}れて之れを漫罵^{まんば}し餘暇^{よか}あれば同臭^{どうしゅう}の人と三昧^{さんまい}に似たるの言^{げん}を弄^{ろう}し誇耀^{こくごう}して以て己れを高うせんとす。醜^{しゆう}と謂^いつべき也。説者が世間の己れと臭味^{しゅうみ}を異にするものを罵るや、學究先生といひ、道學先生といひ、部門^{ぶもん}的學究^{がくきゅう}といひ、何といひ何といひ、到らざるなし。而して文壇^{ぶんだん}の作法^{さくぱ}を説くものは彼れなり。而して體達^{たいだつ}てし人生の悟道^{ごだう}に入れるものは彼れなり。而して一代^{いちだい}を教へ、一代^{いちだい}に豫言^{よげん}せんとするものは彼れなり。はたまた心あるものが午餐^{ごさん}の用意^{ようい}をもす

る頃に夜明^{よあけ}けたりと大聲疾呼^{たせいしつこ}して起き出づるものは彼れなり。バイブルを讀めばバイブルの口眞似^{くちまね}し、平家^{へいけ}を讀めば平家の口眞似^{くちまね}し、ニイチエを讀めばニイチエの口眞似^{くちまね}し、日蓮^{にちれん}を讀めば日蓮の口眞似^{くちまね}するものは彼れなり。日本國小なりといへども、之れを以て一世の豫言者^{よげんしや}とせんには、餘りに惻憫^{さくきん}ならずや、餘りに矮小^{わいせう}ならずや、また餘りに滑稽^{ごうけい}ならずや。さて以上^{いじやうろん}論^{ろん}はやゝ體^{たい}を失^{うしな}へりといへども、嘲罵^{てうば}の外^{ほか}を知らざるものは、我れまた誅^{ちゆう}するに嘲罵^{てうば}を以てすべし。斯くの如きの徒^とをして一日^{いちじつ}其の驕慢^{けうまん}を強^{つよ}うせしむるは、一日^{いちじつ}少年^{せうねん}をして學業^{がくげふ}を疎^そんじ獸欲^{じゆうよく}を逞^{たくま}じうするの端^{たん}を得^いしむるものに候。我等^{われら}の見地^{けんち}より申^{まを}すとき、斯くの如きは人道^{じんだう}の賊^{ぞく}なり。此の逼促^{ひつそく}の言^{げん}を成^なすに異議^{いぎ}なきと存候^{ぞんこう}。匆々^{さうさう}。

尙ほ思ふに前文は日本の欲性論者を難する方が主になつたれど、ニイチエ其のものに對して吾人が好意を表すれば、唯其の詩人と
 いふことだ。哲學者として、豫言者として、批評家としてといふや
 うな當代批評家の最負觀は、吾人に何程の感をも與へぬ。何とな
 らば、一たび智識の光りによりて之れを見るときは、到底健全のも
 のといはれぬが故である。而も彼れが書を読めば面白い、人生半
 面の事實が詩の特色によつて誇張的に發展し、以て吾人の情に觸
 れて來る。されども此の瞬間の我が心ざまは、審美的である。世
 に若し象を用ふるこそ少くなく、理を其のまゝに用ふるこそ多くし
 て而かも美術的製作たるを得るの方法ありとすれば、即ち是れで
 ある。今の欲性論者の一人が、先年抽象美といふことを論じたこ
 とがある。若しあれを抽象理が或る場合に於いては裸體のまゝ

審美的効果を得ることの趣意とすれば、即ちニイチエの場合なのだ。
 随つて此の場合の抽象理の必然の要件として理の明白即ち論理
 的徹底を缺いて居なくてはならぬ。漠然たるものでなければな
 らぬ。何とならば、抽象理の美となる事情は、其が不定着なる人生
 雑多の事象と漫然連結する所に存すればである。即ち此の場合
 にも實は理が理として美なるではなく、其の理の下に潜んでゐる
 無數類似の事象が、其の理の實例として採用せられんと競争的に
 浮び來たる所に美が生ずるのだ。之れを抽象美といふのは悪く
 はないが、今の論者は悟りを開いて豹變して以來勿論こんなこと
 は忘れてゐるであらう。
 それでツアラッストラの場合などが最もよい例だ。また最も
 其の體を得たものである。何となれば、其の言説が凡て人間なら

ぬ人間を相手にし、また其の修辭が凡て譬喩的に、皮肉な所に一分の滑稽もまじつて、此の種の美文たる資格を具へてゐるからである。日本でいつたら、寧ろ青柳君などの筆脈から這入るべきだ。讀んで面白く、何か甚深の眞理がちらついてゐるやうで、其れで再讀して靜に考へると不條理、寧ろ不可能といふと分かる。即ち初めの場合は審美の力に打たれてゐるのだ。理想派の美學でいつたら、假象の世界に這入つてゐるのだ。それで靜に再考する時は、審美の世界を出て、道德の世界に來るのだ。「石川や濱の眞砂は盡ることも、世に盗人の種は絶えまじ」といふ歌が芝居學問の人の耳に一種の感想を鼓吹したなごも、同じ理だ。されば、吾人が取る所のニイチエから言へば、宜しく人々書齋の中で翫讀してほく笑むべきものであり、假りの世界に這入つて樂むべきものである。ま

た若し其の美感から殘留した實の印銘があるとするれば、其れは何所までも實の印銘として取り扱はねばならぬ。美のために誇張せられた感情を離れての勸考にしないで、是はならぬ。即ち公平なる知識の鑑識に待つべきものだ。審美の世界と道德の世界とは、截然として之れを區別し得るのが我等の性格のプライドでなくてはならぬ。世の感情を説き、信仰を説き、ロマンチックを説くものが、動くもすれば感情の内容に知識あり、理性あるべきを忘れて、美に酔ふの心を直ちに實にせんとするのは、吾人の與せぬ所である。將たまた美に酔へる感情興奮の態度を以て事に足るの要ある場合には、其の感情が必ず知識と乖背せざるの保證を有するものでなくてはならぬ。何とならば此の保證なきものは軌道を逸せる奔車の如く進んで自ら覆滅するを免れぬものであるから。

然るに日本のニイチエはどうである。口には様々の勝手を言ふに拘らず、哲學たり主義たり道徳たる方面のニイチエを眞正面に生まじめに、其のまだ感じ易い天下の青年に實行させやうと煽動してゐる。無方者とは是等の謂である。性格に根據あるものが僅に把翫して可なるべきものを、公衆の前に直ちに行ひ得るまでに曳き下して、説法の材料に供してゐる。現實の世界に行ふべからざるものを行はせんとしてゐる。吾人が彼等に對する批難の中心はこゝにあるのだ。斯やうにして彼等は放蕩無賴を眞理とし強慾非道を理想とするの結果となる。而かも彼等は放蕩といひ強欲といふ名を嘲けつて高く標置せんとしてゐる。譬へばモルヒネも藥だといつて分量知らずに吞ませる輩であらう、アルコホルも酒だといつて其のまゝあほらせやうとしてゐる徒だ。そ

れで毒とは人間が付けた名だ、ンなぞと非人間的なことを言つて澄ましてゐる連中だ。天下にニイチエを會したるものは己れ一人なるが如く大言して、其の實己れがまづ分量違ひをして、毒にあてられて噪ぐものは彼等だ。固陋の見とは是等をいふ、書を讀んで書を解するの道を知らぬとは是等を云ふ。狂人に剃刀とは是等をいふのだ。凡そ斯くの如きの徒に對しては、彼等をして先づみづから其の主義の効果する所を實驗せしむるの外は無。即ち敢て吾人が其の實踐を迫る所以である。ニイチエの哲學としては、其の肉體の外に心なきを説く所に拾ふべき眞理あれども、是れ豈ニイチエを待つべき思想であらうや。彼れの要求する地位もまた是れにあらずして、實は肉體の外といふと共に肉體内の必然の現象としても之れを排却する所にある。

右に廻るが本能の時計のせんまいにですら左から来る制車の齒
が必要な事實を、ニイチエは無視する所に立つてゐる。ダーウキ
ンの、弱肉強食主義のと言つても、之ればかりを道徳主義の上に發
展させた結果は、所詮極致ばかりを一足飛びに見て、時間の囿の中
に徐歩してゐる人生の現實を忘れた非進化論たるを免れぬ。
山は眞直に麓から頂上へが一番近いといふけれども、垂線的に見
あげた山の頂邊へ、一足飛びに駆け上がらうとする馬鹿者があつ
たらごうであらう。

今一つニイチエに人を引く所があるといへば、其れは彼れの人物
性格と其の主張との關係だ。如何にも蛇や鷺を友達にでもしさ
うな顔色の中に、正直一徹な所もあるやうで、持つて生まれた皮肉
もありさうな、此所等を其所説に比べて見れば、此にも審美上の元

素はある。且つ彼れの警句はオリジナルだ。それで恐らく誠實
でもあつたらう。日本のニイチエなどのやうに假聲を使つたり、
悟つて豹變したりするものではない。全體日本のニイチエは餘
りに利巧ではないか。幾多の單純な讀者があんなものに嚇か
されるのは、畢竟これも讀書が足りないからだ。前に本家を見て
置けば、假聲の出た時に吹き出す位で済むのだ。此の後こんな議
論が續くやうなら、量見の据らぬ人は、議論に耳を假す前に先づ原
書を見るがよい。今は上野の圖書館にもあらう。丸善にも來て
居やう。早稲田の圖書館にもある筈だ。獨逸の讀めない人は英
譯でも澤山だ。誰れか此の前英譯で讀むやうではなぞと、大きな
事を言つてるものがあつたかど記憶するが、あれは皆世間の不誠
實な徒が、人を凌がんと爲に駄法螺を吹くのだ。何で今の若い讀書

子が五年や七年日本で獨逸語を習つたからといつて、それで英譯と獨文との間に生ずる文味の相違など仔細に嚙み分けることが出來やう。幾らか手取り早い英譯の方を内々讀みながら、クオテ・イン・シヨンの人に見せる時だけ原書にするといふ手合が多いのだ。こんな人々のいふことに耳をかす必要は無い。それは原書に如くはなからうが、英譯でも今出て居るものは評判のいゝ譯書集の三卷まで出てゐる。何でもお互ひにも少しごつしりした人間になつて、フハフハ吹けば飛ぶやうな文壇の風氣を一新したいものだ。

(明治三十五年十月十八日稿)

(明治三十九年五月追記)此の文が専ら論難の的とせし個人格は故高山樗牛君なりしこと、當時『帝國文學』に於いて登張竹風君の指摘せしに違はず。而も予が此の文を草してより期月、當の論敵樗牛

君は予の文を見るに及ばずして、病を以て逝けり。大澤に長蛇を逸するの憾みは予に於いて無きに非ざりしも、身世蹉跎の感覺えず予をして愴然たらしめき。夫れ紫の朱を奪ふものを惡むは此の文の動機なり。されども生きたる人を撃つと死せる人の思想を破るとは、態度おのづから別ならざるを得ず。故人を評するは理情の并び到るに如くは無し。現人を撃たんとせば、撃つて必ず胸に最後の一刀を加ふるを要す。此の文は實に現人を撃たんとするもの、時處合期せずして論敵の死後に公にせらる。予は之れを思ふ毎に故人に對して一種の悲哀を感ずるなり。黒といひ白と立して相争ふも、所詮は差別の五十年のみ。一たびは我れと他と、鹹淡同味の海に溶け去るべきなり。噫。

偶感

七月八日、國にあらば、露の朝顔曉の風やいかなご。書中にして想を東方の諸君子に致す。倫敦はいま、莓の都、芝居の都、繪畫音楽の都なり。世界の西より南より、此の大都の塵と煙とを浴びんが爲に集ひ來るもの、日に萬人と稱す。豈また盛ならずや。されば擾々の物、一念の風に從ひて、煙の如く揚り、塵の如く混す。それ天に快樂の星あり、地に快樂の泉あり。人間俯仰の際、一念の眼子毎に是れを視る。是れを視て營々として往き且つ復るものは人の世か。手して掬べば甘泉おのづから掌にあり、天上の星華偏へに此の時に會すべし。我等はたゞ靜かに此の理を思はんことを要す。

我等もど生まれて地上の物たり。其の思ふや、境の俗たるを仙たるを問はず、理と事と等しく可要は味つて其の情趣に達するにあり、涙こぼるゝまでに深く思ふにあり。此義を示すものは文藝なり。想ふに一切の人生は割つて二つとすべし。道德其の一側にして、他の一側は文藝なり。道德は勤勞を意味し、文藝は快樂を意味す。人生は只この二途のみ。二途といふ。然れども造物のもの豈二つあらんや。之れを分かつものは一心の觀方なり。我れ若し勤勞の窓より望むときは、山河星辰有情と非情と悉く道德の意義を帶し來たらすんばあらず。萬法何ゆるるに攷々として流轉し行くか。鳥の歌ひ獸の奔る、なほ且つ攷々の姿あるは何ぞ。そもく我等が心を勞して如是の考察に耽る所以のものは何の意ぞ。總べて是れ道德也。斯くの如くして、小は

衣食住の事より、大は政法、學術、宗教の遠きに及ぶまで、之れを勤勞と見るときは、すべて道德の範圍を出でず。文藝も亦た此の窓の前に、は道德の衣冠を着す。然れども、心眼の旋轉は一瞬なり、一たび情趣の門に甕り、快樂の窓を開くときは、是等のもの、忽然として其の姿を變ず。山川禽獸はいふを須たす。衣食、政法、すべて一面の文藝也。科學、哲學も文藝なり。宗教も文藝の一科に過ぎず。道德も其まゝにして文藝の觀を成すべし。天地は展べたる一大文藝のみ。私におもへらく、造物の義も二つ無し。人生の至極はそれ文藝にあるか。然れども人は時間と差別との囚虜なり。今遽に道德を滅し、勤勞を滅して文藝の一味にのみ住せんとするは、迷ひにあらすや。迷へりといふまでも無し、斯の如く將欲するの刹那は、やがて勤勞に

非すや。道德に非すや。勤勞絶つべからず、道德滅すべからざるなり。

かるが故に、達人は常に道德に住して而かも之れを文藝と見んとす。一念の工風とは此の謂ひにあらすや。安立もこれのみ。宗教もこれのみ。古の達人が、あら面白の世と歌へるは、正に第一勝境に居るの覺悟なり。我等若し未熟にして、達人の境に居ること能はずんば、暫く現在を以て修業地と觀せんか。少なくとも日に一たび二たびは、其の道德心を忘れんことを思ふ。神、斯くの如くにして、寛に體、斯くの如くにして、健かなり。之れを第二段境といふ。然れども、此れと相忘るゝは、彼れと相執するの謂にあらす、偏執あれば、茲に排斥無きを得ず。排斥あるは、是れ勤勞の始めなり。道德の

始めなり。文藝は一切の物を排せず、一切の物をもしらく味ひあり
と観ずるの心に、文藝の詮義あり。されば強いて文藝の心に參して、
精進の縁を作せと説く。文藝の心は、げに大自在なり、あらゆる思想、
學說、主義、道德を情化して厭はず、あらゆる感情を快樂にして厭はざ
るべし。

話頭を轉じて以爲へらく、西歐の文藝に觸るゝの機多きと共に、却つ
て想ふは故國の文藝なり。近世日耳曼の文學を説くものは、更に足
利僧院の文學に許多の回顧を寄するの情に堪えざるべし。伊太利
の文藝を説き、自然を説き、バオロ。フランチェスカが夢の如き戀を説
くものは、また元祿の櫻の雲に小袖幕、西鶴、近松が心中物語を忘るゝ
こと能はざるべし。殊に近松は大いなるかな。若し詩的といふの
點を以てせば、ダンテが幻想中の一曲、沙翁が傑作の一つを以て之れ

と同架せしむるも、何の異議かあらんや。不幸、東海の端に生まれて、
言語懸絶、西歐文華の鼓吹となり、源泉となることダンテ沙翁の如く
なるを得ざりしは、近松がために憾みとすべし。日本の文藝は、なほ
長く彼れに參して、神徠の露に霑ふべきなり。

(明治三十六年七月稿)



風光

新嘉坡より

別來二旬、御左右如何、例の滞歐文談と銘打ち候もの、船中にて直ちに
序開きを存じ候へど、思ふに任せず、讀者に對しては、約に背くの罪
淺からず、貴兄并びに編輯局の御迷惑、嘸と存じ申し候、次便よりは、せ
めて有りのまゝなる日記中のふしゝをも、取りまどめて、責を塞が
んと心がけ居り候、今朝當シンガポールに着、赤道を去ること一度、何
分と申す土地の割には、凌ぎよきやうに候、公園といはず、市街といは

ず、人間といはず、すべて天地の色彩形式が太陽の猛烈烈光を中心と
して、之れと苦闘し、之れに虐げらるゝの標現を有し、強く、濃く、逞しく、
目もささむるばかりなる一面と、傷き、疲れ、倒れて、夢の如く眠れる一面
との、奇異なる調和を感じ候こと、今さらながら、初見の眼には、新らし
う存せられ候、人生の意義は、苦闘か、そも、其の終局は、敗殘か、遙に
かの印度の古美術古思想が由來するところなど、思ひやりて、今夜は
甲板の上に例よりも、夜を更かし申し候、ソーファーに凭りて、海風の微
涼を送るに、任すれば、伏し待ちごろの月、檣頭にかゝりて、夜は一時を
も過ぎ、對岸に點々する燈影の赤きのみ、我が世さまの夢をささ
やくとおぼへ候、三等に乗り組みし五十人許りの出稼ぎと見ゆる男
女、當地より上陸致し候ため、甲板のあたりは一段の静けさを加へ候、
月の下に三々五々、若き、老ひたる、男女の打ちむれて、興じ更かすさま、

色々なる人の身のうへ行く末など聞きては、其れも興あることに覺へ居り候ところ、今日限りと相成り候、小話ごもは追つての事、この書面認め了り候とき午前二時、食堂の電燈下にて寒暖計九十度に有之候、諸君へよろしく御傳へ下されたく、上海香港と一覽し來たりて、未だ航程の半ばにも達せず、倫敦に着致し候は五月上旬の豫定に御座候、三月二十八日、宙外兄の几右へ、抱月生。(明治三十五年三月稿)

海上日記

明治三十五年三月八日、わが横濱を出で立つは今日なり。朝早ければさて、三時半といふに夜着より出づ。嗽がんとて、椽の戸一枚くれば、うれしくも晴れたる空に、星影はなやかなり、新しき水にて身内を拭ひなごすること例の如し。タウエルに含める冷水の體

温と觸れて、簇々たる白氣我れを包むの際は、神氣旺盛、まことに咳唾も詩を成し、千卷の經典も聲にしたがひて説くべしとおぼゆ。八時五分前新橋にて人々に別かる。今はなほ行くものゝ悲しき時にあらず。横濱にては汽船問屋に少憩して、十時本船に乗り込む。別を齎らせるの諸氏なほ三十人を剩して小蒸汽の通ひ路もいとにぎやかなり。我が乗り組めるは早きかたなりき。後幾杯かの小蒸汽に、人の乗り込むたび、我れは却りて甲板の上より人の別れを見る身となれるも可笑し。いざ是れが最後の通ひ船なりと、人々を促したつる聲す。惜しき別れもこゝに斷つべし。留まるものは征衣の人、みな舷に倚りて臨む。梯子づたひに小蒸汽に降りゆく中には年わかき細君の人目つらきが中を今一たびとそと振りかへりて

夫と顔見あはせたる。あゝ我れは斯かること書きて、涙無き者と人に譏られやせん。次は頬ゆたかにして半白なれども、さして身分ありとは見えぬ老女の、十ばかりなる女兒の泣きくづれたるを、かい抱きて端艇にかへれる。乳母にやあらん。母はこなたの人にて、父なる外人の歸國するに、この兒血に泣く別れすといふなるべし。御身そも何の宿因ありて、斯かる際には生を享けし。長からん生ひさきも哀しいかな、涙多からずば止まざるの命運、そが血に肉に雕られたらすや。これを想へば、満船の別離多しといへども、未だこの薄命の一女兒より惨なるはあらざるなり。既にして汽笛鳴り、山の如き船體は、一反ばかりも斜めにめぐりて、小蒸汽と別れを惜むこなしさまゝあり、打ちふるハンケチ、帽子の類、海風になびきて、漸く遠く、白く、小さく消えもて行けば、あゝと

いひて、人々はじめて我れにかへれるが多し。この時正午を過ぐるること半。同乗の新しき友、さては事務の人々など、名のりかはして、懇意を頼むも、斯かる旅路はことさらに頼まるゝ心地するこそ、をかしけれ。

夜は食堂にて二つ三つ雑談ののち、ケビンに歸りて、八時半床に就く。スチームに暖を取りたれば、暑くして汗出づ。

三月九日 細雨午後三時半、神戸港に入る。遠州灘、紀州灘、ともに平穩なりき。

三月十二日 晴朝十時半出帆。こゝにて乗りこめる人多し。

三月十三日 雨朝早く門司に着く。夜甲板に上りて、門司と馬關と、

兩岸の燈火星の如く輝くを見る。却りて情多し。

三月十四日 半晴、七時四十分、左に近く六連の燈臺を見、右に遙に長

州の地角を望みて走る。人々本土の見納めなりとて甲板の上より指顧す。この邊海少しく荒る。正午神戸にて合せし時計に三十分餘の差あるを見たり。午後六時甲板に上れば始めて四方陸を見ず渾圓のたゞ中に我が船一つ泛然として弦月橋頭にかぶり星光かすかなり。空の色淺黄にして裾のかた次第に灰がぶりゆく。水黒く波浪長大なれども砥め過ぐるが如く靜かにたゞ我が船脚のさへぐを聞くのみ。

三月十五日 朝霧あり。夕かた黄海に入りて海水黄なり。

三月十六日 霧深く船楊子江口にありて進むを得ず。霧中所々に鐘聲を聞く。繫留して晴を待つ船の相警むるなり。

我等がこの頃の生活朝餐の卓を撤すれば食堂に留まりて雑談に耽けるもの圍碁將碁トランプの思ひ／＼を戦はすもの講談小説

雑書のたぐひに見入るもの出で甲板に立ちて望むもの舷に倚りて語るもの輪投げ球つきのたぐひより遊歩運動倦めば寝ね時來たれば食ふ。たどへば海水浴などいふものに四五十日を過ごすべき一大合宿所の如し。

三等室にスマトラ島とやらんを志す一群の老幼男女あり。苗字は何れ洋名なるべき一婦人の率ゆる所人々の眉目おのづから淋しきは故郷の風の荒きに堪えかねし身なればなるべし。中に容すぐれし十二三の一女兒あり父なるは世にいふ善人らしく母はありやなしやよくも知らねど常に父の側にてじやれ居るさま無心と見えぬ。されど早くも主人の眼鏡にやかなひて扱ひのこの兒のみ別格なるはあはれ如何なる身の行く末となるらん。二等客の三五人こなたに立てるが無遠慮に其を指さして噂しあへる

を彼の兒いかに見けんつと走りて船室に入りしまゝ扉を閉ぢて出で来ず。人々なほも悪しざまに評し合ふ。されど今の彼の兒罪なし戸を閉づるとき振りかへりて人々を見し眼には必ずや怨みの涙にじみたるべし。あゝ曩きの雑種の女彼れは或は財貨の中に泣いて一代を送るの人となるべし。此の女は豈煩惱の前に笑諛を鬻いで身を立つるの憂なからんや。しかも共にこれ差別の世の犠牲なり。あはれならざらんや。

三月十七日 十時頃霧晴る。上海沖にあり。上陸して見物す。舟より望むところ、春河盈々、春帆遙々、砂の色せる沿岸の平地限りなく楊柳烟るが如し。人家あり、烟青く、桃花點綴して一輪車のその中を走るが見ゆ。
午後急ぎて錨を抜きたれど霧また至りて進むべからず。夜月痕

朦朧として甲板の上を照す。

三月十八日 濃霧船依然として動かす。例の鐘の音のみ賑はし。人々つぶやくことしきりなれども是非なし。

三月十九日 船出づ、霧稍晴れたれど風強し、婦人など船暈の氣あるものあり。

三月二十日 風すさむ夜半月檣頭にかゝりて荒涼の景いふべからず。

三月二十一日 晴暑氣漸く加はる。昨日荷物庫を開きたれば夏着の用意なごす。臺灣の沖も過ぎて無事なり。人々航海の安全を喜ぶ。薄暮油頭の燈臺を望む。夕陽團々として眞紅の色燃ゆるが如く、橄欖の雲の末灰色に褪せて黒き水の面と綴ち合はさるゝあたり、切れたる雲のさまゝの形して赤日の前を馳せかふ景趣

見事なり。三等室に尺八を吹くものあり。旅情を惹くこと多し。
 三月二十三日 曇、香港着。上陸。見物。支那人の足ども先を争ひて端艇に來たり、仕事を求む。人々うるさしとて大喝すると共にステッキ傘の類を打ちふりて毆打すれば、四十男が泣顔して手を合はせ容赦を乞ふ。意氣地なことも言はざいふべけれど、國民としての彼等が立脚地も悲しきものなり、おのづから斯くもなるべし。さるにても家には彼れを夫と頼り父と絶るものもあらんを、其れらを見なば如何に心外にや思はん。我れも未だ野蠻人を打ちしことなければ、好き折りと背中をこづき試みたりなど誇り顔に説くものある、我れは與みせず。總じて上海以西數に於いて、また恐らく富みに於いて、帶色人種は未だ白色人種に劣らずといへども、ひとり位に於いては、哀しいかな、彼れ常に主人たり、此れ常

に奴僕たり、彼れは使役動詞に屬し、此れは被役動詞に屬す。こゝに至つて金には換へがたき我等のプライドの、少なからず害せらるゝを感ずるなり。若し夫れ地中海よりあなたにありては、帶色人種はあらゆる意味に於いて、零なり。これ恐らくは我れの之れをいふすら既にあまりに幼しと見ゆるの事實なるべきも、世上何ぞ驚嘆の聲のみ多くして、悲憤の聲の小なるや。追摸の人はあれども、並行の人なく、並行の人はあれども、壓倒の人なし、意氣なし。夜香港の町に色さま／＼の電燈の燦爛たる、赤きはルービーか、青きはオーパール、白きはダイヤモンド、寶石の數をつくして掲げたるに異ならず。

三月二十三日 午後出帆、西洋人の乗り込み多し。
 三月二十四日 今日よりプロメナード、デツキに天幕を張りたれば、

冷し。夜長椅子に倚りて月の東天に浮ぶを見る。一望眞に縹緲として、潮の流るゝかたに銀光落ち、さながら濃き油の湧くが如し。東北遙かに雲のたゞよふあたり、日本にやなご、人々語り合ふ。夜更くると共に風稍々寒ければ、毛布をまとひて月に對す。下には例の三等室の兒女壯丁等幼きは唱歌をうたひ連れて室の周圍を馳せめぐり、若きは三々五々月下に群して語り興す。既にして興つき人散じ、滿船の夜凉水の如し。寢に就きし頃は半夜を過ぎたり。

三月二十六日 暑氣ますますく加はる。海上はるかに飛魚の群を成して跳ること銀鳥の如きを見ること漸く繁し。海風の裡なほ寒暖計九十度の上にある。正午北緯八度餘、新嘉坡を去ること三百七十一海里、昨日正午より二十四時間の船脚約三百里といふ。夜

は例の如く甲板に群れて話しふかす。

三月二十七日 晴今日始めて携へたるケインの「イーターナル」シチ「」を取り出だす。夜十一時半、一道の光り物頭を掠めて飛ぶ。或は流星なりといひ、或は電光なりといふ。

明日は新嘉坡に上陸すとて、三等室の人々壯なるは荷造りに、婦女は髪など結びあひて忙し。

三月二十八日 新嘉坡着。上陸。見物。某旅館に日本料理の晝食を呼びたり。胡瓜もみのうまかりしこと、今に忘れず。例の馬來街といふを過ぎる。怪しげなる洋服して、髪は佛蘭西卷といふにかぶりたる日本婦人の三人五人、店頭に卓を擁して、頬杖せるものあり、居眠りせるものあり。一行の人々車上より指顧して、國辱なりと罵るもあれば、國益なりと笑ふもあり。さすがに得堪えでや、

顔を背くる女ありき。彼等が一代を思ふに、戀にあらす、慾にあらす、頬に血あり、顔に嬌羞あるあひだは、彼等たゞ怨みに熱き涙をや命としけん。其の涙涸れはてこそ、眼元に浮ぶ今の笑ひは死よりも冷かに泣くべき故郷を雲と見て、身は浪枕の揺れつ流れつ、をかじう暮らす月日なり。さるにてもこの地に上陸せる女兒等が、やがて讀むべき身の因果經かと哀し。

三月二十九日 晴、バナナとパイナップルとを買ふ。味よし、七歳の幼年が通學のため倫敦なる親戚の家に寄寓するなりとて一人乗り込む。外に此の地よりの乗り組み中、サイアムのプリンスなりといふ十三歳の少年あり。英人一人扈從す、稻垣滿次郎君を御存じかといへば、然り、菊石のある人にて、ビリヤードが上手なりと、覺束なき英語にて答ふ。

夜、出帆。

三月三十一日 晴、早朝ペナン着。上陸見物如例。新嘉坡は土の色、赤煉瓦を碎きし如くなりしが、此の地のは白く光れり。寒暖計九十七八度に上りしも、夜、猛雷雨鳴ありて涼氣到る。

四月一日 晴、暑氣甚し。灣内に黒鯛に似たる魚多し。人々釣に麴麴を加へて之れを釣る。午後出帆、夜雷鳴しきりにして、海風颯々、劇電さかんに潮を射て、黒漫々の天地、光明倏忽、壯觀言はんかたなし。

四月二日 印度洋に出づ。早旦、朝暾の瞳々として海を離るゝを見らる。初めは朱の沸くが如く、中ごろ黄金の燃ゆるが如し。海波の光を浴ぶるさま、歡呼して、ごよめくに似たり。

四月六日 朝、錫倫島のコロンボに着く。翌日上陸、釋迦の靈地とい

へるカンチーに遊ぶ。

四月八日 若狭丸の歸航するに逢ふ。今夜出帆。總じて印度地方の語音には、我等が毒蟲などの鳴く音に連想すべき一種の音あり。ゲリ／＼／＼と響きて、石を磨するが如し。

四月十一日 晴、兩三日來腕に小瘡を生じて痒きこと限りなし。同船の人この患にかゝるもの多し。或は南京蟲の害なりといひ、或は潮かぶれなりといひ、或は船荷の中なる菓物の蟲の蝨すなりといひて定かならず。今夜檣頭に弦月を見る。

船のコロナボを出でしよりスエズに着かんまでは、日を要すること二週間餘途に紅海の熱風あり、歐洲航路中最難の處なりといふ。且つ海上にありて單調の生活に倦むこと既に四十日、人情誰れかこのときに於いて征衣の重きを思はざらんや。夕月の下、椅子を

并べて相對するもの、話頭すでに盡きて、黙々として海水の走るを眺む。たま／＼遽然として船員の肩を打つあり、ホーム、シックと叫ぶ。

船中に二つのウオッチ、ワーズあり。ホーム、シックと、シー、シックとなり。種々の人によりて、種々の場合に繰りかへさる。然かも言ふもの常に一種の笑ひを帯びて、言はるゝもの多くは否と答ふ。蓋し二つのシックに批難の意あればなり。シー、シックはしばらく措くもホーム、シックは男の耻として批難せらるゝの意微に存すればなり。されど思ふ此の批難あるがために、ホーム、シックは味ひあるものとなるに非ずや。船中に、外國なる夫の許へ行くといふ一夫人あり。他のホーム、シックと言はるゝ人を評して「そりや其の筈ですわね。奥さんをお迎へになつて、間も無いといふではありません

か。それでホーム、シックにお成りなさらなければ、人ぢやありませ
んわと。一結痛切なりといふべし。されどまた、四十年來洋行の
人何ぞ限らん。彼等概ね一たびは此の痛切の事實に觸れながら、
我れホーム、シックにかゝれりと公言するものゝ極めて稀なるは、
豈彼等のすべて偽善者なるがためならんや。齒をくひしばりて
泣かぬ涙に腸を斷つもの、妻を棄て子を棄て、國に命を捧ぐるも
の世に謂ふ義理と人情とは、二つながら眞にして二つながら相容
れざるの矛盾なり。是れ造化が與へて以て最後の宿意とせし所
以、人生の波瀾と趣味とは、一に之れより湧く。遠征の丈夫、家郷の
想ひを人目に包むとき、詩人はじめて泣くに堪えたり。さもあら
ばあれ、今の世、洋行の一語はたゞ名と利との一面のみより測られ
て、羨望の的となれども、絶えて同感の的となることなし。あゝ豈

雷にホーム、シックのみならんや。

四月十六日 曇紅海に入る。却りて暑氣漸く降るを覺えたり。翌
日より初秋の如し。

四月二十日 晴衣服を重ぬ。午後スエズに着き、夕暮より運河に向

かふ。難事業とはいへ、運河はなほ未成工事たるを免れず。

雙岸の荒野、平砂茫茫として、オアシスの形ちせる所には、樹木の
よりかすかに燈光の點々たるを見る。彼所にも人生あるよなご
思ふに、淋しく物悲し。遙かなる砂山の麓より、蒼然たる暮色蔭の
如く蔽ひ來て、悲風何れよりもなく吹きすすみ、天地剖闢の曉、人
間太古の廓寥も斯くやと感ぜらる。原人其の中をさまよふの記
録は、やがて聖書にあらずや。

四月二十一日 朝ポート、セッドに着く午後拔錨。

四月二十二日 晴地中海に入りてより總じて浪高し。寒暖計日中六七十度の間にあり。今夜八時過ぐる頃より月蝕皆既。

四月二十六日 晴此の日體量を計るに百十一磅半あり。依然たる瘠男兒たるをば免れざれど肉食を常としてより氣の餒ゆること少なきが如し。是れ固より後日の斷定に須つべきものなれども文學者に懶癖多きは精力の過勞に由らざらんや。他の體育と共に肉食は正しく精力持續の一法たるに似たり。物心一致を説かぬかそも文學者肉食論を草せんか。呵々。

四月二十七日 朝マルセイユ着上陸見物如例。同船の邦人は大抵この地より去りて獨と佛とに向かふ。残れるものは我れと他の一人とのみ。他は皆外人なり。此の地の畫堂に裸體畫を見る。市街の光景も上調子なり。總じて

て此の地の一瞥が描ける佛蘭西はなまめいたり浮氣なりといふをもて足れり。今はた他を言はんや。

四月二十九日 晴音樂を載せたる小船來たる。樂器はワイオリンと立琴。樂手は二人の壯漢と少年一人少女一人。少女の十六七なるが衣服の窶れたるに帽は固より頂かず。白面の少年と相對して心中の樂を彈すと聞けば興深し。舟を寄せ一曲彈じ了りては、少差を帯びて錢を乞ふ。久しく樂音に飢えし我れは之れをすら可憐と見ぬ。

午後出帆風浪險し船暈の氣あり。
五月一日 夜香港より乗りし亞米利加の宣教師といふもの夫婦我れに基督教を信せよといひて聖書の全然信すべき由と奇蹟は即ち超自然なる由とを論ず。夜半ジブラルタルの海峡を過ぎたり

といへど見ざりき。

五月二日 船首漸く北に向かふ。

五月五日 日本ならば端午なり、この朝風に嘸な鯉幟の翻へるらん

なご、人々噂し合ふ。午後英吉利海峡に入る。

五月七日 曇昨夜テムス河口にあり。今朝六時過ぐる頃、チルベ

リー、ドックに入る。倫敦市までは汽車一時間程なり。十時下安
着。

此の航海に同船せし人々、日本人にては醫界の留學者殊に多かり
き。ペナンより乗りし洋人夫婦に一人の醫師といふ洋人同行せ
り。細君が夫をば全く忘れたらん如く、終日醫師と散歩を共にし、
午眠を共にし、會話を共にするを見て、衆評紛々たり。マルセイユ
より乗りし婦人四人の一行中、主人と見ゆる若き二人は姉妹なる

べし。妹なるは十八九にや、色蒼く眼つりて。はげしき神経質と
見ゆ。これがつのりし疝癰か、失戀の病なごいふものを治せんた
めの世界漫遊なるべしと、人々いふ、猿、小馬、車など携へたり。姉な
るは色は同じく蒼白なれど、眉殊に秀で、鼻高くとへば希臘の
女神像なごを活かしたらん如し、淋しけれども氣高きところある
が、常に愛馬を引き散歩するさま、大百姓の娘なるべしなど評し
たるもあれど、我れはスコットが作中の女姓なご思ひ比べぬ。ス
コットランドのものなりといへば、殊に山水秀靈の氣を帯べるが
如く思はれたり。我が同室にはフレイザー君と呼ぶ英人あり。
性諧謔にして肖像畫を巧みにす。

(明治三十五年五月稿)

旅中旅行

(一)
 八月十四日にかしま立して、初めの二週間は北の田舎に、後の二週間は南の田舎に、倫敦の夏を避けた旅中旅行記の一節が是れである。バンク、ホリデーの季節と云ふので、同行すべて十二人にぎやかな多趣味な旅行隊であつた。勿論一行の十一人までは此の國の人で、彼等が呼んで極東の友といふ日本人は吾れ一人。更に之を品別ければ、牧師が一人、其の細君、女教師をしてゐる姉妹のミス、意匠業の人、其の細君、幾棟かの大家で、家屋賣買の世話もするといふ男、石油會社の役員、小蒸汽の持主、其の細君、建築受負業者が一人、風來の吾れを加へて、締めて十二人である。

此等はすべて、吾が假寓してゐる、牧師の家を中心として、其の懇親な關係から集まつたものたることは、言ふまでも無い。されば牧師は

一行の長老、ガヴナー、チエヤマン、世話役といふ格である。當年五十九歳、半白のでつぷりとした、何所かに稚氣のある、舊のマンチエスタ、カレッツヂに學んだといふ、好人物、今は倫敦某區にユニテリアン教會を持つてゐる。發音の正しいのが自慢で、歌も昔は得意であつたらしく、若い者等が客間のピアノの傍で『ホ子』、『サククル』、『ビー』、『ピコー』、『アイ』、『ラヴ』、『ユー』を謠ふ時には、出かけて來て『ビスケー』、『オー』を謠つたり、『レデー』、『オペ』、『ライオン』、『リヨン』のレシテーションをやる。自作の讚美歌集もあれば、宗教雜誌に小話や雜録の寄稿もする。

此の人が先發として倫敦を立つたのは、十日の夜、日曜の教務を了へての夜、瀛車で指すかたは例のレーキ、ヂスツリクト。ワーズワースの名と共に、人の得忘れぬ湖畔詩人の根據地である。倫敦を北に走ること瀛車にて約七時間程、スコットランドとは山つゞきで、アイル

ランドとは島一つ隔てゝ相接してゐる。
 此の地の形勢をざつと言つて見れば、蜜柑を輪切にした體である。
 一彙の山脈恰も車輪の輻の如く蔓こつて、其の凹み／＼が深藍を湛
 えた湖水になつてゐる。湖畔の名は之から來て、此の水と此の山と
 が相寄つて、當國第一の景勝地を成す。英國の瑞西といふ稱呼で、概
 観は想像せらるゝであらう。
 數ある湖水の中、最も大なるが取りつきのウキンドミアで、長さ十哩、
 幅一哩、湖畔には小町村點在して、湖頭にある、さゝやかな町をアンブ
 ルサイドといふ。我等一行の宿は茲の靴屋の二階と定まつた。し
 めて八間、其の中には食堂も座敷もこもつてゐる。この先發隊から
 の便りであつた。

(二)

されば八月十四日、十時半の汽車に間に合はせやうと家を出たのは
 九時少し前、ウツドのハンドカメラを肩に、鞆の中には、着替一着と、小
 道具一袋、無くてならぬものが、ワイヅワイス集とベデカーの案内記
 であらう。読みかけの書物も外に一二冊。登山用の金剛杖は家の
 人々が先年瑞西に遊んだ時の紀念といふのを、其のまゝ、何れも四輪
 馬車の屋根に積んで、同乗は宅の細君と近所に住む例の二人のミス
 と、都合四人、ユーストンの停車場さして急がした。ユーストンは倫
 敦から北に向かふ線路の重なる發着點で、假りに之れを上野の停
 車場と見たてれば、吾が寓居はやはり牛込の奥あたりである、勿論方
 角はちがへど。
 車中一時間ばかり、三人寄つて、姦ましいレデー等の喋べり競べには、
 吾が廻らぬ舌を挿む餘地も無く、片隅に小さくなつて聽てゐれば、姉

娘は二十二三であらう、女教師で小供の世話に氣をつかへばか、年よりはふけて見え、器量も二の町なれど、氣立ては至つてよし。全體が質素に、じみなる好み、スツロー、ハットは黒のレースにグリーン、リィヴスといふ取りあはせで、鼻眼鏡をかけてゐる。姉のあとから鈴生りといふ形ちで、きやつと一言ひながら車に飛び込んだのが妹で、十七八、色もすつと白く、小造りの十人並のヤング、レデーと見えたれど、顎のあたり少しやくみて、横顔に婆さんめいた所あり。細君の紹介やら、さもく懐かしさうな挨拶やら、形の如くあつて、馬丁は鞭を揚げる。やがて姉娘は袴のかくしから二通の手紙を取り出し、封を切つてざつと眼を通して、ほく笑んだ。

「グッド、ニウス？、スキート、ニウス？」

と細君が打ち込むと、一通は握つたまゝ、一通を細君の眼先きに突き

出して、

「ミス、エーからですよ。フレンチなんかでねえ。こちらにはミス、ビーからですが、フキアンシーと一緒に南海岸の方へ出かけたのです。」

「ミス、ビーの今度のエンゲージメントについては、面白い話があるぢやありませんか。お聞きで？」

「どんな話？聞かして頂戴。ね。ね。」

とせき込んで、向き合つてゐる細君の膝を揺すつたのは妹娘である。「まあ、急つかちな。待つてゐらつしやい。忍耐は徳なり！。教訓になる話ですよ。之れはミセス、ビーから聞いたのだから事實でせう。ミスター、シーが今度の申込みをしたのは、先月の初めの日曜日で、教會の歸りであつたさうですが、ミス、ビーの方では、全たく突然なので、何とも返事をしかねたさうです。併しあの通り心づかりした

女ですから、返事を次ぎの日曜まで待つて呉れと言ひ延して、其の晩はそれなり別かれたさうです。それから家へ歸つて、一週間のあひだ誰れにも話さないで、一人で考へて考へて、到頭承諾することに決めたのです。そして次の日曜の晩、また教會の戻りに一緒になつて、約束をしたのださうですが、是れからがお話しですよ。其のエンデーチメントの發表のしかたが面白いぢやありませんか。月曜のお晝に、家中のものがみんなテーブルに集まつた時に、だしぬけにミス・ビーが「わたしや或る重大なニュースを持つてゐる」と斯う言つたさうです。するとみんなが「何だ」といふ。ミス・ビーが「ミスター、シーの一家に關して」といふと、豫て知り合ひの仲ではあるし、みんながびつくりして、フォークもナイフも投げ出してミス・ビーの顔を見てゐると、ミス・ビーは落ちつき拂つて「ミスター、シーが結婚約束をし

たさうです」と言つたのです。みんな吹き出して、何のことも言つたが、ミス・ビーの顔があんまり眞面目なので、シスターが「誰れと？ 姉さん」と問ふと、ミス・ビーが眞面目くさつて「ミス・ビーです」と言つたので、皆な二度びつくりして、まあ、此の人はと言つた限りで、跡は大爆笑ひになつたさうです。

「だか善い思ひつきね。」

と例の妹娘は言つた。細君は言葉をついで、

「其の午から直ぐミスター、シーは自分の家の帳面をすつかり持つて来て、家の収入が是れ、自分の所得が是れ、と立派に財産の勘定をして見せて、ミスター、ビーとミセス、ビーの同意を求めたのです。」

ミス・ビーといふのは吾れも知てゐる。寧ろ瓜核顔の、あどけない物

の言ひぶりをする、優しい東洋趣味の美人である。速記やタイプ、ライターが上手で、月給の貯蓄も少なからず、全體が思慮ある女といへば、是等はいかにも思慮ある結婚約束である。併し吾はつく／＼思ふ、此の夫婦の行末は果して幸福と極まつてゐやうか。思慮撰擇は大事であらうが、併しそればかりで夫婦といふ縁が圓滿になるかは疑問である。

と斯んなことを考へてゐるうち、馬車は停車場に着いた。こゝで、落ち合ふべき他の一連が一気車後れたので、借切りの一室に吾等四人、列車が動き出すと話し、の緒が切れて例の妹娘が機械のやうに喋べり出して、細君が「チャター、ボックス。チャター、ボックス」といふので、一寸一場の言ひ合ひがあつて、倦んで疲れて、細君が「コナン、ドイルの『デュエット』を読んで、獨り笑ひをすれば、妹娘は六片本の『秘密の家』

といふやうな物を読みかけて、居眠りを始める。妹娘は熱心に刺繍をしてゐる。日本のレデーの噂が出ると、屹度藝者ガールが引き合ひに出る。着物や髪物のことを聞きたがる女の人情は何所も同じだ。妹娘の問ふには、

「日本のレデーはフエヤーの方がよいのですか、ダークの方がよいのですか。」

妹娘が側から、

「わたしはダークの方がよいのだと聞きました、さうですか。」
「といふ。髪の毛の話なら無論日本ではダークの方がよいのだが、肌の色なら両方であらうと吾は答へた。勿論日本人本来の皮膚の色が、白いものでもダーク側の白味で、どちらかといへば、西班牙、佛蘭西

の肌はだに屬ぞくするのであるから、美人びじんの肌はだの形けい容ようにも雪ゆきの肌はだといふことがある。自分じぶんの思おもふには、雪ゆきにたとへた所ところが、寧むづろ冷つめたい白しろさ、蒼あをにつらなる白しろさといふ心こころをあらはして、ダーク、レデーを貴たつとぶ意味いみになる。併しかしまた美人びじんの肌はだの形けい容ように、櫻さくら色いろとカルビーを薄うす絹ぎぬに包つんだやうなとかいふこともあつて、之これは明あきらかに温あたかい白しろさ、紅べににつらなる白しろさを意味いみしたも、即すなはちフエヤー、レデーのことである。と説明せつめいした。但たし之これが當あたつてゐるか否いなかは知しらぬ。そこで此こち方らのはと問とふと、細さい君くんが、

「やはり兩方りやうほうですけれど、わたしはダークの方ほうを好すみます。」
と答こたへた。恰あたかも列れつ車しゃがとある停てい車しゃ場ばに着つくと、茶ちやの廣くわ告こくか何なにかに、大幅おほはの日本にほん婦ふ人じんの繪ゑが無む様さまに畫ゑがかれてゐるのを見みて、一人ひとりが、
「イエロー、レデーも善よいのですか。」

と問とふ。あんな繪ゑではといふと、例れいの細さい君くんが、
「イエロー、レデーでも善よいことがありますとも。ホール、ケインの『イターナル、シチー』をお讀よみなすつて？」
といふ。蓋けだし『イターナル、シチー』の女主人むすめ公こうローマは伊い太た利り一いちの美人びじんで、イエロー、コムブレキシオンともゴールデン、コムブレキシオンとも、そうしてヴィオレット、アイスにレーヴン、ブラック、ヘアード作者さくしやが書かいてゐる。即すなはち黄金がねの肌はだに、董すみれの眼まなこ、濡ぬ羽は鳥とりの髪かみの毛けといふので、細さい君くんが之これを想おもひ出だしたのは、時ときに取とつての頓とん智ちである。さて瀛きしや車しゃは倫ろん敦とんを離はなれてより、ノーサンプトンからスタツフォード。マンチエスターとリヴァールの間あひだを抜ぬけ、プレストン。ランカスターと、蜘蛛くも手てのやうな線せん路ろの中なかを潜くり潜くつて、ウキンドミアに着ついたのが五時ごじ過すぎ、車しゃ上じやうの眺ながめは、ことさらに書かくがものも無ない。茲こゝよ

り乗り合ひ馬車でアンブルサイドの宿に向かふ途すがら、山色水隈は之れより愈々非凡となるのである。

ワーズワースの眼には羊飼ひも羊も百姓も山も水も溶け合つて一つの自然に没してゐたといふが、更に此の邊の山水とワーズワースの間にも區別は無い。此の詩人はやがて此の山水の眼目となり生命となつてゐる。土橋の石垣にもたれて、夕ぐれの風淋しい金髪の少女も、問へばワーズワースが遺蹟を語る。「ウキ、アー、セヴン」の熱き涙は、この少女にこそと思はれる。羊追ふ老夫が諄々としてライドル、マウンツの夢のあとを説くのも、「ゼ、ラスト、オブ、ゼ、プロツク」に、彼れど詩人と同じ生命に活きたればであらう、されば此の地の景色に筆を染める吾れは、ワーズワースを外にすることは出来ぬ。

(三)

煩瑣な紀行は略して、この地、ウキンドミア湖のつぎがライドル。グラミア、何れもワーズワース集で人の知つてゐる名水で、コンストンに沿ふては、ラスキンの舊跡がある。山はヘルズリン。スカフェル、バイク。ラングデル、パーク。瀧はライドル。ダンジョン。ギル。ストツクギル。舊跡にはワーズワースがグラスマアの舊宅、テイドル、マウンツの舊宅、彼れが墓、彼れが學びし學校、彼れが宿りし家、彼れがいたづらせし刻み目の壁や卓子や、ラスキンが墓も、ハリトレイ、コールリツヂが墓も、デクキンシーが住みし所、ハリエツト、マルチノーが住みし所、數へ來たれば限りもない。

ヘルズリンを此の地第一の名山とすれば、登臨俯仰の感は之れに止めてもよい。ウキンドミアを最大多趣の湖水と見れば、明月の夜、露落ちて、艦聲静かなるの興も、之れに止めることが出来る。其の前

に、一夜は晚餐後の食堂の會話をも聞くがよい。護謨管仕掛で卓子の皿を動かしたり、催眠術の真似をして人を驚かしたり、パーミノロジー。フレノロジーから骨牌の物品までしつくと、今宵は人々唯卓子に肱杖ついて話に耽けるといふ、土曜の夜の隅の安樂椅子で小説を読み始めた夫の姉娘を見かへつて、「レデーシッパ！。何を讀んでゐますか。ちよつとまあゐらつじやい。あなたに聞きたいことがある。小説？。うう、小説か、其事だ。家の娘が、いや家の妹が、そのむやみと小説を讀んで困る。わつじや、さう思ふが、若い娘が小説ばかり讀むのは善くないと思ふね。どうでせう。」

是れは建築受負業の、六十左右の赤ら顔で、金は持つてゐるといへど、教育は無いらしい、卑しげに肩をゆすぶり、盛んに手真似をする、一行中最も道化した元氣のよい男である。一人の娘を遺して妻君に先立たれ、内々若い後添を探してゐるといふ形であらう。其れが、むやみと件の姉娘にちやれては、一行のからかはれ者となつてゐる。是等は日本で見なれた光景だ。姉娘は閉口の體で、

「そこをお除なさいよ。暗いちやありませんか。あなたに若いお妹さんがあつて？。あは、若いお妹さんが？。あなたお幾つ？。アングル！。グラント、パー！」

と呼びかけたのは、牧師の細君である。是れは既にしばしば出て來て讀者とも近づきであるが、五十近い、鋭くて心得のよい、聞かぬ氣のしつかりものである。自らは、ミス、ナイチンゲールの跡を慕ひ、政治はむしろチェインバレン、最負で、ミスチンズム。スピリチュアリズムといふやうなものも好き。女は女の社會、家庭の社會にはたられ

ば其でよいといふのは、穏和な女権論で、男は結婚後妻に對して薄情になるもの男は女よりも常にセルフキツシユなものといふのが其の男子觀、自分は如何様の男をもマナージする力を有してゐるこいふが其のプライドで、一週に二回づゝ母に手紙を書くのが何よりの楽しみだといつてゐる。されば好人物の老牧師とは、正さに兩極性の和合で、家庭も美しい。日本の十二支の話して、牧師の歳を辰だと言つてからは、夫を呼ぶに「マイ、リツツル、ドラゴン」といふやうなことを言つてゐる。其れで夫婦議論でも始めると、ルツク、ヒアー。マイ、フレンド」といふ勢ひである。同じ筆法で右の建築業者を嘲けるには常に「アングル」「グラント、バー」の稱呼を以てする。

「あなたのお娘御が小説を讀めばなせ悪い。あなたは何を讀めば善いと思ひます。」

「さうさ、僕は歴史が善いと思ひますな。わつしあ羅馬の歴史が好きだ。だが奥さん、今日のアメリカン、レデーは奇麗でしたね。ゑゝ？、さうは思ひませんか。」

「駄目ですよ。もうエンゲージして居るといふにねえ。わたしがリングを見たのですよ。諦めて、レデーシツプの御機嫌でも伺ひなさい。」

「ひゝゝ。お！、レデーシツプ何所へ行つた。お！、お隣りか。是れはしたり、有り難い。」

とびたり額を叩くと直ぐ向かふの意匠家の方を見て、

「併しどうでせう、小説は唯想像を書くばかりで、教訓に少しもならんでせう。事實で無いから。」

話しかけられたのは三十許りの、舌たるい口の利きやうをする好男

子である。

「わたしはさうは思ひませんね。小説は快樂を興へれば、それが即ち目的で、教訓も同じことです。それに事實でないとおつしやるけれども、有り得ることですから事實も同じでせう。」

と末の方はやく怪しくなつたれども、日本でそこの雑誌でも拜見してゐるといふ氣味。次ぎは細君の番で、

「そこが小説の善いのと悪いのとある所以です。快樂はあつても害になるやうな小説は世の中に必要は無いでせう。快樂もあり教訓もあるのではなくては、善い小説とはわたしや思ひません。」

何所までも英國氣質である。黙つてにこ／＼としてゐた牧師は口を挿んで、

「害があつては悪いが、害さへ無ければ、小説は快樂のために讀むがよ

い。わたしはさう思ふ。わたしはさう思ふ。」

と「思ふ」の「ふ」に力の入つた調子でおだやかに言つた。

「オー、ノー。」

と反對したのは細君で、牧師はやはりにこ／＼しながら、

「オー、イエス。」

「オー、ノー。」

「イエス。」

「ノー。」

「イエス。」

「ノー。」

としばらくは「イエス」「ノー」の太刀打をしてゐた。

「奥さんは小説は何んなのが好きですか。」

と意匠家が尋ねると

「わたしは寧ろローマンスが好きですけれど、ミセス、ハンフレイ、ウオードも好きです。『ロバト、エルスミア』ですか、勿論ですとも。一番の傑作でせう。ライダー、ハガードも好きです。」

「ライダー、ハガードですか、丁度『ピアトレス』を妻が今読んでゐます。」
かたへを振り向くと、若い、ダークな、華奢な細君が、ちよつと會釋をした。是は父は猶太人とかいふので、極めて静かなレデーであるが、病身で瘡持ちといふ趣である。人の見ぬ間にはちよいと亭主を睨んで、何か一言二言さうやいては泣き顔をして見せる。素性の上のひがみもあるか、或る時散歩連の一人が五六尺向かふからさすらの猶太人のやうに、皆な何を愚圖々々してゐるのだと怒鳴ると、此の妻君の額に忽ち青筋の走るのを吾れは見た。見てむしろ哀れに

感じた。閑話はさて置いて、其の細君が會釋ばかりで俯いたので、意匠家は更に、

「わたしは古い所ではスコットも善いのですが、ヂッケンズが一番好きです。おホ、思ひ出しても可笑しいのがある。近頃のではホール、ケインも善うござゐます。」

「ゼ、クリスチアン」ですか。はあ、あれがあの人の名を成した作でせう。『ジ、イターナル、シチー』も善うござゐますね。それからコナン、ドイルですか。やはり『アドエンチュアス、オブ、シアーロック、ホームズ』が面白く思ひます。わたしはガイ、ブリスビーも好きです。『ドクトル、ニコラ』お読みですか。」

傍らの妹ミスがだしぬけに、

「わたし、ガイ、ブリスビーの『ラヴ、メード、マニフェスト』を読んでほんこ

うに泣きましたわ。」

「おゝ馬鹿らしい。イングリツシユ、レデーがあんな物を読んで泣くといふことがありますか。」

一行の取締りといふ權威を具へた、例の牧師の細君が言ふと、牧師は小供をあやすやうな調子で、

「オール、ライト。グード、ジング。」

妹ミスの身方をしてゐる。

「オー、ノー。」

「イエース。」

「ノー。」

「こ、またも押し問答が始まりかけた時、伴で會社に出てゐるのが口を出した。因みに言ふが、此の細君等論争は好きでも、あとは誠に奇麗

なもので、思想の自由。フリー、カンツリー。プロード、マインデッドは紳士淑女の誇りだと言つてゐる。

「僕は『ピアトレス』を三度讀んだ。」

「こゝらが日本ならば浪六物の愛讀者であらう。細君はわたしはシヤロツト、ブロンテの『ゼーン、エヤ』を三度。父がやかましかつたので、内證で、友達から借りて讀んだものですよ。」

「其の外、ジョージ、メレヂスはむづかしい、キツプリングは好かぬ、トルストイはシヨツキングであるといふやうな説もぼつ／＼出かけた頃、話題は他に轉じた。」

「簡單に今一席つゞけると、次ぎは結婚の事である。是れはむしろ吾れが聞き手で、細君か説明者、起こりは、誰れかの金蘭簿の、今の青年觀」といふ項の下に「カラーと子クタイ」と記入し、「今のヤング、レデー觀」の

項下に「金のある夫」と記入しあつたのに基づいて、夫の馬車中の結婚問題が、ふと吾が胸に浮んだので、レデーの前でぶしつけかは知らぬが、英國のヤング、レデーやヤング、ゼントルマンは、何を結婚の標準にするかと問ふと、細君は造作なく答へた。答へる前に日本では何うかと反問した。吾れの答へに、自分の理想は別として、普通には今茲にあつた通り、金や地位を標準にするもの、又は容貌ばかりで結婚するものも随分あるが、本當の所はやはり性質教育といふやうなものであらう。細君の曰はく、性質教育の上に今一つ貴いものがある、其れは戀愛である。戀愛が一番で、性質教育、財産は其上の附けたり、何れが一つあつてもよいと自分は思ふ。結婚はやはりラヴ、マツチのこと。と色々クキンやプリンセスの例など引いて辯じた。こゝが概して東西思想の違ふ一點でもあらうが、味ひある問題だ。夫の極

端を好むものに言はせたら、戀愛だにあれば、思慮撰擇は結婚の面にゼロだともいふであらう。吾が本心はさうは言はぬ。唯しかし戀愛あつての後の結婚と、結婚の後に生ずる戀愛と、どちらが人生の幸福であるかは考へ物だ。

北英山水の概観

英國でも就中イングラントの景色は南と北と全く趣きを異にする。と稱せられてゐる。南は概して圓く滑に、穩かに平かで、北は山水奇抜ちやうど我が中國邊の或る部分と東北地方との差の如きものである。併し是れは英國内での比較に過ぎぬ。今若し我等の目から概観すれば、イングラントの景色全體に一つの調子がある、假りに之れを最もサズセスチヴな言葉で言へば、牧場的とでも名づけんか。

南英は言ふに及ばず、山水奇絶と稱せらるる北英湖水地方ですらも、我等日本の風光に慣れた目には、穏やかなり柔らかかなりといふ感を惹く。

假りに例を我が往時登臨の記憶に取れば、日本の高山といふもの概ね數千尺の上に出でざれば奇と稱するに足らず、山中また巖多、樹木繁く、奔湍飛瀑あるを厭はず、溪谷の勝に富み、風雲の變を藏する所に趣味の中心がある。

翻つて北英の景色を想ふに、決して山が少いではない。スキドウ。ヘルベリンの山々連旦して、大なるもの小なるもの圓きもの尖れるもの、曲折離合の調和に言ふべからざる面白みのあるは、他國の山嶽にも稀なる程と稱せられる。併しながら其の山が三千尺に上るのは甚だ稀れである。また山間に飛瀑の懸かるといふ景色も多少

はあれど、これはた遠く山腹に曳ける銀糸の如く、所謂Y字形W形に全山の平面を象徴するところに最も趣味がある。樹木も山麓なごには生ひ茂つた所もあれど、到底千年の檜杉に日暗く風吼へるといふ趣は見られない。稀れに石青く水澄んだる谷川があれば、兩岸見わたす限りの牧場で馬が悠々と水を飲みに下りてくる。蓋し北英の景色は、山にして牧場水にして湖水、この二大ノートに由つて調子を定められてゐる。平地や丘はいふに及ばず、高山の斜面一體に、水分に富んで青草茂り、頃しも八月の空ながら、草の緑り殊の外、淺く黄に近づいて、我が春の野菜の花頃の酔ふが如き情を持つてゐる。其の中を幾群數知れぬ羊のさまよふ趣き、其の静けさのさけさと言つたら、無い。春の日、南窓の晝寢といふ心地である。更らに之れが夕ぐれとなれば、今まで緑りであつた山々も、裾の方か

ら青くなり黒くなつて暮烟の中を遠くから羊の鳴き交はす聲がさ
 もく悲しげに腸に沁むやうである。振り仰げば所謂イングリッシ
 ュ、サンセット。黄金の入日の眩ゆさもこの時に見られる。半ば春
 きかけた太陽の周に漂ひ来た雑多の雲、さては山の頂巔だけが酔つ
 たやうに染まつて、光つて、後を向くと後の丘が、牧場の一區域だけ、黄
 がうつた緑りから全く柑子色の毛氈のやうに變つて、光澤を持つて
 ゐる。そして自分の立つてゐるあたりは段々灰色に變つて行く。
 今まで景色の中に入らなかつた羊飼ひの家も窓に燈火が見えて、初
 めてあたりの静けさを照すかと思はれる。
 山が以上の如き調子であるから、水も是れに調和せざるを得ぬ。流
 るゝ水よりも溜れる水、浅く白き水よりも深く蒼き水、さゝやく水よ
 りも沈黙せる水の方が、一層よく此景色にかなふ。則ち湖水の無か

るべからざる所以である。總じて此の地方の湖水はあまりに大き
 くはなけれど、周回の曲折甚だ豊かに、水隈の趣きに富んでゐる。ま
 たターンと言つて、遙かに平地を離れた山脈の窪みに小湖水を成し
 てゐるものが多い。殆んど人間と相絶た山あひに、青玉を展べたや
 うな水を湛へ、路踏み迷つた羊の來り飲ふに任せてゐる様は、得も言
 はれぬ平和さである。
 之れを要するに、湖水澤草原一面の連山、牧場、柔和を代表する羊、凡そ
 此れらのものが支配してゐる湖水地方の自然の中に、夫のワーズワ
 ースは極めて平和な家庭生活をしとげたのである。
 世の評論家の云ふ如く、ワーズワースの詩には佛蘭西革命の最後が
 多少の影響を與へてゐるのも事實であらう。また所謂十八世紀文
 學の反動の籠もつてゐるのも明かである、恐らく温厚正直にして情

に篤い天稟の性も其の作にあらはれてゐるに相違ない。さりながら、彼れの詩を讀んで最も思ふのは、其の調子の正しく湖水地方の自然と律呂を同じくしてゐることである。即ち其の詩に存する音楽が周圍の自然と誠によく調和してゐる。此の意味よりいふときは、ワーズワースはげに湖畔詩人である、自然詩人である。湖畔の自然が彼れを作り、彼れの詩によりて其の美なる生氣を呼吸し、彼れの詩によりて其美なる調子を吹奏してゐる。

されど若し自然詩人といふを以て單に花鳥風露といふが如き自然的對象と之れに對する我が感情とをのみ咏するものと解する人があつたら、それは大なる間違ひである。いや單に斯くの如き自然詩人もあり得るであらう。また單に斯くの如き自然詩も美なるを得るは事實である。併しながら一層大なる趣味欲を有するものは到

底自然の景象を受けるの喜びのみに満足して之れに留まることを得ず、振りかへつて更に廣大豊饒の天地に入り、こゝに無限の情趣を味はんとする。夫の自然の情趣を通じて更に冥想の新天地に入るものは是れである。少なくともワーズワースの場合が是れである。且つ湖水地方の風光が我等の情に觸れるの様は、之れを激して撼かすに非ず、撫で、揺かすなり。是れ其の一層容易に人をして内省に入らしめ、冥想に入らしめ得る所以、ワーズワースは實に湖畔の靜な自然に抱かれて、斷えず冥想の天地に彷徨してゐたのである。自然を歌ふよりも寧ろ冥想を歌つたものと言つてよい。所謂ミュージングの樂しみは彼れの唯一の詩源である。彼れの陶然として美なる水に對するが如きとき、其の心は却つて内に向つて冥想の天地を辿つてゐる。而して冥想の天地はやがて彼れみづからの天地で

ある否な自然に對する人間の天地である。さればワーズワースの詩また他の人生詩人と同じく作者の人間作者の冥想を味ふに至つて趣味はじめて湧く。夫のたゞ自然詩人といふ名によつて彼れを乾燥といひ平凡といふが如きは彼れが集の幾ばくをも讀まずまた讀んで味ふの力無き徒が妄言のみ。ワーズワースの眞價は其の冥想の内容特色を検するによつて始めて斷定するを得られやう。予輩は是れを以て恰好なる別の論題とするものである。

詮ずる所湖畔の風光とワーズワースの詩とは互に相負うてゐる。山水は彼れに調子を與へ彼れは更らに翻へつて其の山水に生命を附し人間を添へ以て自然の内容を展開し豊富にしてゐる。

(明治三十五年八月稿)

基督の再來

其の後は御無沙汰益御盛んのことゝ存じ候何かなおたよりもとは存じながら例の通りの疎懶丁度紙上に迷信云々の記事を拜見候より思ひつきて唯今當市にて大騒ぎの最中なるアガベモニー(愛教)のこと一二申上ぐべく候恰も去る七日の日勤行の砌此の宗の教會にて牧師のピゴットと申す人突然我れこそは基督の再び此世に來たれるなれとの宣言をなし此事世に知るよと同時に市中衆俗の人氣一時に沸騰して非常の騒ぎに有之候。

當國は御承知の如く歐米各國中にて少なくとも外形だけは最も宗教に篤き國柄に候へばそれだけ基督生まれたりなど申す事は人氣を惹くこと強く到る所此の噂さならぬは無之有様に候また實際我

等の眼より見るときは、夫の戴冠式など申すものよりも、餘程面白き現象と存じ候、一方には教育案が議會の大問題となりて、教育宗教の關係論を生ずると共に、一方にはユニテリアニズムなどいふ際ごき宗教すらある世界文明の真中に、更に此の奇現象を加へて、我等觀風の人をして轉た興の深きを覺えしめ候、本國のことなど思ひ起こしては、ほゞ笑まれ候ことも多く候、まことに宗教といふものゝ前途は如何、此種の問題に關しては、寧ろ當國こそ研究の便宜多かるべしと存じ候、何れ其の内例の滯歐文談にてなりとも見聞相つくし申すべく候。

アガペ・モナイツの教會はクラブトンと申して北倫敦の町はづれに有之、恰も小生が寓居より數丁の處に候まゝ、去る十四日の日曜には、物すきにも見物に出かけ申し候が、非常の人出にて、容易に這入ること出來ず、數千の群衆教會前に押し寄せて、時々鯨波の聲をあげ候さま、凄まじき光景に候ひ也。

そも此のアガペ・モニーと申す宗派は、今より六十年許り前に、プリンスと申す牧師の開きしものにて、其の名の示す如く、愛を中心とすと號し、其の教會、宗宅をば、愛の住居と唱へ候、唯これだけにては無難のやうなれど、併し無暗に愛とのみ申し居り候うちには、随分危険の分子も入り來たらざるに非ず、聖天のためしなど想ひ起させ候。

聖天様、天理王などゝの比較は存せず候へど、例へば、教會の柱の形に或る如何はしき意味を含むと云ひ、または勤行のうち、全く燈火を滅して、暗黒中に行ふの儀式ありといひ、其の他怪しからぬ噂すら世に立てるを見れば、此の宗派の大凡そは推し測られ候。

宗祖プリンスと申すは、不思議に一種の魅力を有したる人にて、初め

唯の牧師補など勤めし際にも、其の非常の熱力に感化せられて、婦人
 など往々に精神に變態を來たすまでなりきと申せば、一種の人格な
 りしことは事實と見え候。
 されど果して彼れが聖者なりしかは疑はしき次第に候、勿論此種の
 宗派の常として、相手は多く婦人にあり、就中三十四以上と云ふ、年
 頃すぎしスピンスター、すなはち老令嬢が最も多く其の歸依者なり
 といふ、プリンスは最も此の種の信者を引き入るゝに妙を得、また信
 者の手より金錢を取り出すに長じたりと申す、彼れは専ら富める婦
 人の感化に注目せし由に候、されば彼れが生前に集めし財貨は何十
 萬と申す高に上り、其の教會は勿論、自宅にありても榮耀榮華をつ
 し、信者の名を以て、また神の愛、基督の愛といふ名を以て、美女の信者
 を左右に侍らせ、または財貨を得んがためには、富める老令嬢に若き

夫を媒ちして、其の歡心を繋ぐなどのこともあり、場合によりては、輕
 はづみなる日本にも歡迎されかねまじき主義と存せられ候。
 プリンスマツ、基督は再び我が上に來たるべしと豫言し、世界の終極
 は近づけりと呼號して、幾多の信者を得しが、此の時は場所の地方な
 りしたためと宣言の今回ほど仰山ならざりしたため、非常の騒ぎとまで
 はならざりしものか、されど其の常に都會に疎き所をのみ選び、世の
 攻撃と迫害とを避けたりといへば、反抗を呼びしは明かに候、茲に迫
 害といひ反抗といへば、プリンスなり、ピゴットなりの側より申せば、
 如何やうにも解釋はありて、時勢に先だつものは反抗せられ、豫言者
 は迫害せらるるなど申すべく候へども、是れは斯かる場合の紋切形に
 て、一向異しむに足らず、善くも悪しくも、口眞似の出來る重寶語に候、
 現に日本なごにころがり居る、生まわかき豫言者や、時勢の先達を御

覽せらるべく候。

さてプリンスは自ら我等は凡て兄弟たり姉妹たれば結婚してみづから縛し自ら限るの要なし自ら限るは罪の始めなりと主張しながら再婚まで致し我は不朽不死にして汝等を濟ふべしと唱へながら千八百九十九年八十九歳を一期として死し候。次いで此の宗派を率ゐたるはピゴット氏なり之れより先き不死と公言せしプリンスは死しやがて來るべしと豫言せし救ひの神は來まさざるより宗内やうやく動搖を生じさしも凝り固まりの信者すら一人二人と減じ行きて殘るものはひたすら今年は神の來迎ましますか來年はメサイアの約事實となるかと待ち居り茲兩三年が間に何とかせでは宗門の前途にも拘はる大事となるべき形勢に立ち至りたるものと見え候ピゴットは斯くの如き機會に乗じて立ちし

ものに候此の人もとは救世軍英國教會等を涉りあるき終に愛教に投じたるものゝ由にて意志強く野心的に且つ不思議に人を動かす力を有する人物と申せば宗祖プリンスに似たる人らしく見え候。去る七日の夜クラブトンの教會に於いて例規の勤め終ると共に長身瘦軀の一紳士肅然として傍への椅子より身を起こし説教壇に立ちあらはれて其の深く沁み入るが如き口調もて説き出だすやう第一の救ひは必ず來たるべしプリンスの豫言は偽りならず彼れは其の準備のために神の御前に送られたり而して今こゝに神は來迎ましましたり人々の目前に立つ此の我れこそは基督の再來なれ見よ我れは神なり人々を濟はんがために茲にメサイアは現はれたりと、尙ほ數々斯やうのつらね基督の口眞似ありて席に復し頭を兩手に埋めて黙禱の形ちせるあひだ一堂森として水を打ちしが如くやが

て、兩眼に感涙をにじませたる信者等かはるゝ立ちて、之れに見證を與へ、見よ、神は我等の前に現はれ玉へり、嗚呼神よ、基督よ、神を祝せよ、救濟主を祝せよ、なご叫ぶものあり、人々狂喜感激のさまなりきと申す、斯かるためしは我が佛教史には珍らしからざるべく、其のかみ十字軍が初めてゼルサレムの地を踏みし當時の心根も想ひやられて、一派の人より申せば、箇中に眞理ありとも申すべけれど、所詮は外形の論也、感激は眞理なるを得べけれど、稚き感激、稚き信仰は到底稚き眞理たるを免れず、夫の信仰を説き、感情を説くものが、自盲してさながら傍らに信仰感情を拒絶せんとするの敵あるが如く、驚駭し、ひたすら信仰感情の名に拘らひて、其の内容の必然の變遷、進歩を思はず、内發の破壊、進歩の楷梯たるべき破壊をば、外形の回復によりて保障せんとす、愚の極笑ふべきの至りに候はずや、世に進歩あり、進歩は

必ず知識の媒介を要し、知識は必ず事理の兩面より作用す、此の根本の一案を外にして、信仰感情を喋々するも、何の用をか爲さんや、彼等そも、知識は事の一面のみにして成就すと信ずるか、はた進歩は知識を介せずして成ると斷言し得るか、更に進みて一切の進歩を否定し、今を捨てて古生活に復歸するの眞心あるか、彼等若し正氣にして斯くの如しと言はば、速かに之れを躬行すべし、我が徒見物に出かくべき也。

さて議論が枝葉にわたり候へども、七日の夕は右の如くにて了はり、此の事翌日の新聞にあらはれ候より、忽ち倫敦中の評判と相成りたるものに候、其れよりと申すもの、さしも閑靜なりしクラブトン界限は、徒歩に自轉車に、物ずきの見物引きも切らず、去る十四日の日曜に、二回目の宣言式あるべしとのことにて、前に申せしが如き騒ぎと相

成りし次第に候。

此の日は午前十時半よりの開始にて、公衆にも参席を許すこのことに、九時頃には早や満員となり、他は皆門外に群衆せしものに候。數名の警官非常を戒め、二名は教會の入口に立ち、一人の聴問者出づれば一人を入るゝと申す有様に、戸の開く都度、門外の群衆は鯨波の聲を揚げて押し寄せ、後には馬上の警官も見受け候。

されど説教は先づ事無く終はり申候。唯間々に、うしろの方の聴問者より、馬鹿を言ふな、嘘つきなどの妨害起こりしのみ、宣言の要旨は前回と同一にて、我が愛する人々よ、我れは人々を愛するなり、我れに來たれ、斯く言ひつゝある我れに、此の口をもて言ひ、此の眼を以て見、此の心を擧げて人々を愛する我れに來たれ、人々のために死したる我れ、人々を救はんがために再來せる我れ、神來まさんの約を果たせる

我れに來たれかし、人々を見るにつけ、人々の世のさまを思ふにつけ、哀れさよ、闇黒虚洞の現世より汝等を救ひ出したき立願に、我が心は溶くるばかりぞ、されば茲に、人々は神に會向して、死より悲しみより、失望より救ひ出ださるべし、人々たゞ知れかし、我れは人々を愛するなり、神は人々を愛するなり、神の愛とは是れなるぞ、汝等の中には熱き真心もてるもの多し、知れよ、我れは汝等を愛するを、何所に見ゆるも、我れは常に愛なるを、さてはこゝに真心もて我れを迎ふる者に、我れ永劫の平和を與ふべし、嗚呼、平和、平和、平和、人々と共にあれ、平和を、して汝等の上に来たらしめよ。

式の了ると共に、聴問者は騒ぎ立ちて出でけるが、ピゴット氏の立ち出づるを待ち居たる見物は、大浪の如く馬車の周圍に寄せ來たり、罵るもの嘲るもの混雜いふべからず、忽ち杖をあげ傘をあげて頭上め

がけ打ち込みしものあり怪我は無かりしならんも随分の野蠻騒ぎ
 と見受け候、アガペモナイツに取りては是れやがて外道ごもの眞の
 教を迫害するにて昔し基督も猶太人のため石をもて撃たれんとし
 きと申すべく、また何時までも此の辭柄によりて世の非難に對すべ
 しと存じ候へど、反對者の側にては所謂識者と申す際は鼻であら
 ふといふ様、宗派氣質の強き人々と多數の下層社會とが色々の動機
 より斯く騒ぎもし、亂暴もするなれど、兎に角全體に大人しく秩序を
 重んずる當國人に斯かる亂暴をなさしむるに至りしは、以て其の如
 何に人心に撞觸せしかを見るに足るべく候。
 昨十七日の夜も教會に祈禱などありとのことにて例の如く見物押
 しかけしが、今回は前例に懲りて警官の保護非常に嚴に幸に何事も
 無くして散せりと申し候。

尙のちくの事は此の地の新聞にて御覽ありたく、小生よりもまた
 其の内とは存じ居り候早々。
 (明治三十五年九月十八日稿、讀賣新聞へ)

英米の同情

風騒ぎ雲驚く故國の空を眺め候ては、我等飄遊の身も、流石に夢安か
 らぬ夜半多く候、此書面編輯机上に着し候頃は、二月も未定めて和戦
 の事すでに定まりての後と存候へど、他日の御參考とも相成るべし
 と存じ、小生が見聞の上より歸納したる當國人目下の日露觀といふ
 もの、一二申上ぐべく候。
 固より新聞雜誌個人團體百人百様の見解は有之べきも、總じて彼等
 が中心に滿幅の好意と同情とを日本に寄せ居り候事は、申すまでも
 なく、殊に新聞紙の如きは「タイムス」を先鋒として「デーリー、テレグラ

フ「スタンダード」「モーニングポスト」「デーリーメール」など保守黨の新聞はいふに及ばず、反對黨のものといへども殆んど凡て及ばん限りの力を日本の辯護に盡し呉れ候こと、當國にある我等に取りては如何にも嬉しく時としては覺えず讀みながら紙上に感激の涙にじますこと、有之候好辭を喜ぶの心と笑ひ給ふな、感激相應の刹那は、人生これに過ぐるの眞實あるべしこともおぼえず候。

事實、日露が砲火の上に相戦ふの前、歐洲に於ては大陸の諸新聞紙を通じたる露國の外交政策に對峙して、英米の新聞紙殊に「タイムズ」などの有力なるものが盛に日本の爲に奮戦しつゝあるの狀、そゞろに人をして頼みある友誼に感泣せしめ候。

當初露國が半面東亞に對して威嚇と壓迫とを其の政策とせしこと共に、他面歐洲に對しては己れ平和の味方と號して、日本をあらゆる惡

稱の下に歐洲殊に英米人衆の同感より孤立せしめんとせしこと、隠れも無き事實に候はずや、而して此の外交策の根據となれる觀念は下の如く候べし、第一、人道の觀念よりして、平和を貴び、戦亂、殺傷、腕力を厭惡するの情が深く、其の文明に根ざし居ることは、思想の外なること、即ち是れを利用して、日本を好戰の民、血を見て、拊舞するの民、精神、文明的の敵となるべき國民と強いんとする也、第二、日本は支那朝鮮を連ねて、所謂黄色同盟の下に白人と戦はんとする者也、強い以て人種的、反感を煽動する也、第三、宗教的偏頗心に訴へて、日露の争は直ちに基督教文明と非基督教文明との争也、と強辯する也、第四、英國が近く南亞戦争の爲に蒙りし手疵は容易に癒ゆべくもあらず、所謂平和を樂むの念は、目下の英國に於て最も旺盛なりとす、則ち其の再び戦渦中に巻き入れられんを恐るゝの情は、自然に強く、當國人の心

底に潜まざるを得ず、敵すなはち此の弱點を利用して、支那の態度朝鮮の態度みな以て日露の戦を日英對露佛の戦に變ずるの恐あることを説き、英國をして日英同盟を悔るの地に立たしめんとする也。凡そ以上の諸理由に對して、日本が幸に其中傷する所となるを免れし所以のものは、主として英米の新聞紙が、一々辯駁爭議の勞を吝まらずして、民衆を惑はしめざりしに由るものと存じ候、此の點より申さば、此等の新聞紙は我が國光榮の爲に奮闘せし勇者也、國民は事局定まるの後に於いて必ず意氣相酬ゆるの道を講せざるべからずと存じ候。

日本政府の施爲の跡にも、右の如き露の外交策に陥いられざらんと力めたるの影は歴々たりと申すべし、内面の事は小生等の與り知る所に非ず、少なくとも當國の人々が惡を見ずして善を見んとするの心より、日本の施爲を解釋する所によれば、日本が冷靜の態度を以て交渉遷延の間殆んど日本に一利無くして、露國に百利あるの二三箇月を耐へ來たりし心事、ひとへに血に渴き捷に狂ふの惡名を避けんとせるに外ならず、則ち英國民が是非を言はずして先づ此の事實に滿腔の讚意を呈せるは、敵の前、我が友の弱みを見せじとする誠の友愛に候はずや。

然れども、事務局の將來に對する判斷は、此の一事實より來たるものゝ如く候、思慮ある者は以爲へらく結局の事、和にあるべし、何とならば日本の方針始めより和にあればなりと、露國みづから戦を宣せんまで、蜚語する今日、なほ解決の一利、那は平和にあらんと信するものあるは、實に日本の施爲方針の當然の結果、しかあらざるべからずと考ふるが故に候べし、其の理路は簡單に下の如く候べし。

第一、露國の滿洲に費せる有形無形の勞力は如何に大なるかをだに知らば、結局如何なる事情に於いても、滿洲還附の一事のみは、兵火の外、露國をして之れを承諾せしむるの途なきこと、初より明白也。

第二、日本政府が交譲折衝によりて此の一件をも成就し得べしと考へざるときは、全く不可有の事なり。

第三、此の一件だに露の面目を立てなば、他は露に於いて兵火にまで訴ふるの勇氣斷じて無し。

第四、故に和戦の決は初より日本にありて露にあらざる言ひかふれば、和戦の岐頭は滿洲撤兵の一點にありて他にあらざる如何なる形に於いてか、滿洲の領有を露に許すことあるべしと思はざる、是れ和すべしと言ふと同一也、滿洲撤兵は必ず期すべしと言ふは、必ず戦ふべしと言ふに等し、是れ初より日本政府の當さに覺悟したるべき所也。

第五、然るに戦は二三箇月の前に於いてすべく、一日の遷延は一日、日本の不利となるべきこと、何人も異議なかるべし。

第六、日本は不利の途に就いて、遷延彌久を敢てし來たれり。

第七、或は是れ歐洲に對する好戦の訕を恐れたるなりといへど、斯の如きは美なるべきも、愚なる策なり、今日國際の間は猶多く原始社會の狀態を離れず、個人の道德と事情を異にするものあるを忘る可からず。

第八、以上の理によりて、日本は結局平和に到るの途を歩めるものと斷ず、即ち交譲によりて滿洲を露の勢力下に置くを許し、他一切の條件を日本の提案に同意せしむ。

第九、途すでに斯くの如くなる以上は、到達する所また必ず斯くの如くならざるべからず、若し日本にして途と達する所とを矛盾せしむ

るが如きことあらば、吾人は其の結果を豫想して、一片の憂なき能はず。

第十、即ち断じて以爲へらく、日本は和すべし、戦ふべからずと。

以上は勿論、今日にありて露と戦ふは日本に取りて非常の冒險且難戦なるべしとの根底を有しての見に候へど、是は歐洲人に取りては無理ならぬ事にて、日本の力をば認めながらも、尙心の底には露の強方に對してはその惧無きを得ず、我等邦人の心より申さば、何時戦ふも我れに悔なしとも申したけれど、事實は唯時をして語らしむるの外なく候。

此の地の新聞にても、稀れに日本の爲に悪聲をなすもの無きに非ず、勿論多くは好意よりするの苦言なるべければ、我等は是れをも喜んで聞くべく候、先頃の『ペル、メル、ガゼット』は日本の朝鮮經營の亂暴な

りしことを責めて、日本人の來たる所逆まに美風は敗れ、幸福は殺がる、何所に一つ日本の勢力の爲に朝鮮みづからの經營よりも一層文明の福利を増進せりと見ゆる點ありや、朝鮮を費して日本に利すといふ外、日本は遂に朝鮮扶掖の理由を失ふに至らんを恐ると論じ候、又同じ文には、之れより延いて、日本人は西歐文明を研究したりといへど、我等歐洲文明の精神たるレファインメントの眞味、何所にあらはれたりや、日本の政治家などいふもの、品性に見るも、能く我等の紳士社會に伍せしむべきもの、幾人ありや、といふが如き言をなし居り候。

また日外の『デーリー、ニウス』に近頃まで日本の海軍兵學校とかの教師なりきとか申すノーマン君とか申すが、我が陸軍の缺點を論じて、全體に日本人の體力の小さきこと、騎兵の極めて粗なることなど重なる

る弱所なりと論じ候外、重大の一點として、萬一日本が戦ひ敗るゝことあらば、下層と上層との反目、藩閥と閥外との軋轢、士族の餘流などよりして、内亂の起る憂なきか、此は恐らく日本人みづからも、其の期に臨まざれば、夢想だもせざるべけれど、是れ實に恐るべき禍根なりと申居り候、如何候べきか。

芝居などにて、大きな熊めが、いとこしい日本を引つくはへ、いや、引つくはへやうとて、さうさせやうか、ジョンブルがついて居るゝと申すやうなる歌を聞き申候早々。

(明治三十七年二月四日稿、讀賣新聞へ)

英國で見る日本

○丁度開戦前兩三日までの此の地の模様一斑は、去る頃の「讀賣新聞」に書いたれば、茲には直ぐ其の後からの見聞をしるす。

○こまかい事に涉る前に、當英國全體の人氣を言へば、此のたびの大戦が多數の人の注意を惹いてゐることは、南亞戦争の時にも劣らぬと言つてよい。殆んど英國みづから戦つてゐるやうである。随つて其の一勝一敗、根も無き善惡の流説までが、其の日々の人心に影響する趣は、ちやうど、日々の陰晴が風雨計に感觸する如くである。新聞紙などの神經の過敏になつてゐること、驚くの外はない。

○開戦以來の経過を顧みるに、此の人心の晴れつ曇りつする次第が餘程おもしろい。蓋し最近の歐羅巴で、我が日本を眞に知つて呉れやうとし、また知つたと信じてゐる國は、いふまでもなく英國であるが、それですら、歐羅巴の最大最強國の一なる露西亞と比べて何うだと言はるれば、頗る返答に躊躇する。是れは誠に無理ならぬ次第であらう。則ち表面如何に日本の肩は持つても、どうも心の奥には露

西亞が強いからといふ感が抜き去り難い、此の感から日々の天氣が晴れたり曇ったりする。而して兎角戦報などがとぎれると忽ち此の感が強くなつて、人心がグルーミー(陰鬱)になる。少しでも之れを散らすやうな報道があれば随つて世間が冴え冴えする。日本でならば勝てば勿論喜ぶ負けと聞かない限りは息を殺して結果を待つといふのが人情であるが、英國人から見ると勝ちと聞かない限りは、凡ての事が兎角日本の負けのやうに思はれて危険でならぬ心配でならぬ即ち一寸戦地の模様が分らなくなると忽ち例の露西亞は大國といふ黒雲がむら／＼と湧き上がつて来る、人氣が陰鬱になつて来る。其所へ具合よく日軍勝利の吉報などが来ると忽ちからりと晴れて、一時夕立の後のやうになる。併しそれが二三日も續くうち、跡が途ざれると忽ちまた例の黒雲が、そろ／＼とのしあげて来る。

そこへまた吉報が来る、晴れる、とぎれる、曇る、といふのが今までの状況であつた。

○されば愈々戦争と定まつた當時は、勿論陰氣で、人道論者、平和論者ならぬものでも、大抵の人、殊に婦人などが我々日本人に對しての挨拶は「アイ、アム、ソーリー」お氣の毒さまといふのであつた。細君が「何とかねー戦争にならないで納まる法は無かつたのでせうか」といへば、主人は分別ありげの調子でも仕方がありますかい。二つのパワース(強國)が、兩方から同じ方向に廣がらうとしてゐるのだもの、衝突するより外、どうなるものですか」といふものもあつた。

○それが旅順仁川の捷報で、人心を一時狂喜の度にまで沸騰せしめ、やがてまた沈みまた昂りして今日に及んだ。此の通信を書いてゐる今五月十二日は、恰も鴨綠江の大勝、遼東半島の上陸、旅順の閉塞及

包圍牛莊の露兵撤退の噂等で、大景氣であつた跡、例の心理的反動が
と氣づかつてゐる矢先へ、昨日あたりから、旅順の鐵道再び通じたり
この報道に引きつゞいて、色々不安の噂が湧いて來て、再び人心の晴
雨計の沈みかけてゐる際である。

○もつとも今度の心配は、少し今までのよりも調子が違つてゐるか
と思はれる。始めは海陸ともに露西亞を非常の強敵と積つてゐた
のが、先づ海戦だけではと、片安心になつて、次が陸戦の心配となつた。
其の心配が餘程久しいあひだ續いて、殊に鴨綠江の戦のあるまでと
いふもの、殆んど世間は氣疲れして、最早日本はとて、露西亞の陸軍
に面と向かふ勇氣は無いのであらう、朝鮮を守るので満足してゐる
のではないか、とまで人をしてつぶやかした。是れは例の露西亞
は陸軍の國といふ先入見から來る危懼であつた。然るに決戦の

果はあの通りの始末であるから、是れでまた露の陸軍といふ心配は
半ば崩れて、此の後の陸戦は、少なくとも五分々々の戦場、否日本が分
がよさうだといふことになつた。唯、今一つこゝに残つてゐる此
方の人の疑團は、クロバトキンといふ名將に對しては何うあらうか
といふ事である。是れも此の通信の日本に達する頃は既に昔の事
となつてゐるであらうが、目下の晴雨計は、此の低氣壓に觸れてゐる。
是れが即ち以前の曇り具合と違つてゐるといふ所以である。
○其の他、今少し奥の方には、露西亞は人數で勝ちはすまいか、經濟で
勝ちはすまいか、根氣で勝ちはすまいかといふやうな心配も普通に
存してゐる。此等の點は、所詮結局に近づくまで、打ちやつて置く外
に仕方はあるまい。海で止めを刺せば、陸ではと心配し、陸で勝てば、
「クロバトキンには」と案じる。其のうちクロバトキンの軍を破れば

「でも新手を加へたら露西亞は頭數が多いから」といふ。さう自在に頭數ばかり送り出せるものでないとなれば、それなら若し露西亞が遠く引込んで降りもせず急に出もしなかつたら何うする」といふ。是れでは實際がない。或は實際斯やうな事の出来得るものかも知れぬが、そこは我が國の其れ専門の人に成算あることと、我々日本人は信頼してゐる。唯しかし斯やうな信頼の出来ぬ外國人に取つては、此の心配は當然であらう。随つて前言つたやうな好意の人に對しては、其の心根は有りがたい。それと同時に、プロシアン即ち露西亞黨の人々が日本を嚇し英國に水をさふんとする時の言ひ草も是れである。此の言ひ草の存してゐる限り、日本は勝つても、けちを附けられる恐れがある。つまり一方に日本の大勝利を祝ふ聲の中にも、何所か一點不安の濁りがさしてゐるといふのが、此の國に

於ける眞實の人心であらう。

○書生などで今回の戦争に注意してゐる者等が、折々いろ／＼の事を聞く中には、屹度右の二問、すなはち頭數でしうねく來たら「遠く退いて幾年でも和を入れぬ」といふ箇條がある。

○或時二人の書生が、僕の寓所で、此の點から英國政府の政策について盛んに議論をやつた。即ち彼等の常識では、すぐ英國の仲裁といふことに思ひ及ぶ。大抵の所で英國が口を挿み、露をして和を納れしめるといふのである。併し一方は是れを以てあり得べからず、また爲すべからざることとして以爲へらく、それでは露國に取つては、英國が手を日本に貸して露國の敗を全くせしむるものとより外思はれまい。随つて必ず聴くまい。達つて聴かせやうとすれば戦争になる、世界中の戦争になるから、そんな事は斷じて出來ない、といふ

のであつた。僕はそれを取り鎮めて、第一露西亞にそんな事が出来るか出来ぬか、問題であるし、出来るとしても、此方ではまた支那滿洲を利用して持久の策を立てるか、ウラジホストク邊から進んで取り押へにかゝるとか、そこは幾らも日本の政府に計畫があらうから安心したまへと言つて置いた。以て人心の一斑が押し測られる。

○戦捷の第一報が倫敦についた時の模様は目撃しなかつたが、當オクスフォードでは、二月九日火曜の午後、すでに露艦三艘沈めりこの報がぱつとじてゐた。此の地の夕刊新聞もあるが、多く大學に關係ある人は、ユニオンといふ會の俱樂部に取り寄せて電報で承知する。右の報も第一に是れから廣まり、つゞいて倫敦からも夕刊新聞が來、當地の夕刊新聞にも出たのである。

○僕等當地在留の日本人三四人は、この日ちやうど或る寄宿舎の友人の催せる茶會で、落ち合つた。其の時一人が、途すがらの斬髮店で鬚を剃つてゐると、あはたどしく飛び込んだ一人の男が、餘程興奮の態で、主人に軍艦三艘沈没の噂をしてゐた。併し友人はたゞちらと聞いた許りであるから、何所の軍艦であるかは分からぬとの話に、始めて開戦の事を知ると共に、吉凶いづれなりしかと言ふべからざる待遠しさを感じた。其のうちにもまた他の一友が一葉の夕刊新聞をポケットにしなから這入つて來た。當人はまだ何も知らないから、それと右の新聞を引き出さすや否其の留置欄を見ると、露艦三艘日本の水雷のために沈められたりとの電報が載つてゐる。ほつと息づいて、覺えず萬歳と呼びかしたのは、四時少し前であつた。○つゞいて這入つて來た亞米利加の男に之れを話すと、此の男は大

分年嵩であるだけ眉をこはめつくぐと右の新聞を見てゐたが夕刊新聞の記事であるから浮とは信じられぬと考へ込んでゐた。其のあとに來た若い男に話すと是れは飛び上がるやうにしてさうか本當に？そいつは目出たいと握手を求めた。茶の後僕は或る講義を聴きに行つたが歸りには其處の門番が威勢よく驅け寄つて日本の海軍が露西亞の軍艦を沈めましたとさも嬉しさうに他の夕刊新聞を差しつけた。

○さて翌十日の新聞は露西亞の公報を掲げて事の真相が世間に知れると共に、到る處たゞ此の噂ならぬは無き様となつた。朝鐵道馬車に乗つてゐると商店か何かへの勤め人と見える五十恰好の男が外套の襟を高くした間から白い息を吹きながら飛び込んで來て腰を下すや否向ふ側にゐた同じ風體の男にや、お早う。何うです！日

本がやりますせ。ゑゝ！といふ調子。

○開戦後の新聞には、日々流説百端例の上海あたりから來る電報には、随分思ひ切つたのもある。併し最も盛んに日本の不利な噂を出すのはセント、ピーターズバーグで、確報の切れ目前言つた晴雨計の曇りになりかゝる頃を見計らつては、あらゆる言いがかりを捉らへ、あらゆる實らしい嘘を拵らへて、蜚語を放つ、日本の名譽を傷けやうとする、日本に向かふ人氣を腐らせやうとする。若しこんな事も外交といふものゝ一部なら露西亞の外交はゑらいのかも知れぬ。

○露西亞の口先政略に對照して、日本は不言實行主義だとは、まづ一般に認められてゐるらしい。殊に其の軍略方面に於いては、日本の秘密策といふことは、一の驚嘆となつてゐる。唯しかしそれが必ずしも軍機に關しない所まで行き過ぎはせぬかといふ批難が一部に

ある。

オーヴル、レチセンス(無用の隠し立て)といふ批難が聞こえる。現に當國の某日本通の如きは、僕に書を寄せて、餘り報道の出し吝みをすゝると、それが爲め却つて何か其の裏に非常の不幸が横はつてゐるのでは無いかと、一時たりとも、人心に不安を與へる其の結果は、何だかうち恐るべきものとなりはしまいか。且つ外國に對しては、何だか水臭いといふ感じ、いやな振舞といふ感じから、其の同感を冷却せしむる傾きがある、といつて來た。

○新聞などでも、一方に十分日本が秘密を貴ぶ所以を諒として、日本は何も見物に觀せるため戦争をしてゐるのでは無い、非常の大國に對して生死の勝負をしてゐるのであるから、とは言つてゐながら、他方には何となく、餘り隠されると氣まづいといふ口吻が時々見える。

我等の素人考から言つても、一方に大いに隠すと共に、他方に大いに打ち明けた所を見せるのが、政略としても賢い遣り口のやうに思はれるが、ごんなものか。殊に英米人のやうな、獨逸露西亞などと違つて、何でも衆と共にするといふ主義の國民を相手にしては、一層此の注意が必要かと思はれる。

○從來歐羅巴のものが、東洋人—亞細亞人—未開人といふ勝手な評價から、東洋人の悪特性として數へるもの、陰險、狡猾、酷薄、卑屈といふやうな箇條が最も普通で、オリエンタル、ツリーチエリ(東洋的奸黠)オリエンタル、クルエルチ(東洋的殘忍)オリエンタル、サーギリチ(東洋的奴隸心)といふ語は、種々の場合に用ひられてゐる。而して其の標本は支那人と見られ、非常の輕侮を受けてゐる。日本人が罕に貧民町などで小供に跡から囃されなどするのは、大抵この支那人と見

られるからで、彼の「ゲイシャ」と題する芝居に使つてある「チン、チャン、チャ
イナマン」といふ唄を唄ふ。此の唄は三ツ子でも知つてゐる。つま
り従來の日本人は支那人と不名譽を分かつてゐた。日清戦争以來、
一部の人には日本といふ國の支那と別であることが分かつたれど、
今回の戦争までは到底普通一般に我が國の地位を認められること
は出来なかつた。現に僕など、日本は何時から獨立したかなどいふ
間に屢々接した。

○そこで今回の戦争以來、露西亞及び露黨のもの等が種々の口實で
日本の國民性に疵をつけんとする場合には、右の東洋的惡特性に照
合する。何か言ひ係りを捉らへては、是れだから矢張り東洋未開の
人種は仕方が無い、といふやうな筆法を用ふる、夫の露西亞の公文が
日本の水雷夜襲を呼んで、ツリーチェラス、アッタック(奸黠なる襲撃)ツリー

チェラス、フォー(奸黠なる敵)と卑怯な言ひが、くりをつけたのも、即ち右
の理由に基つたのである。當時英國の新聞紙が如何に此のツリー
チェラスといふ一語を氣にして、之れが反駁に全力を盡したかを見れ
ば、此の語が英國人の神經に觸れた鋭さが分かる、此れに味を占めた
露西亞は、其の後機會さへあれば、此の語を繰りかへす、英國の新聞ま
た其のたび毎に之れを反駁する。斯くして此の語は一種の流行語
になつた。勿論露黨にあらざる限り、誰れも眞面目に斯んな訴訟に
同意するものは無いから、此の語も多く嘲弄の場合に用ひられる。
○右の外今回の戦争以來出来た流行語は數あるが、夫の第一回旅順
口閉塞の際、我が石舟を軍艦と間違へた有名な露報の中に、レトヴキ
ザン艦であつたかど傷いてゐながら、右の海戦に功をしたといふの
で、レトヴキザンは光榮をもて自らを飾れりといふ句があつた。然

るに其の沈めた舟は沈まんが爲に來た石舟であつたと知れてより、此の光榮をもて自らを飾れりといふ句は、色々の場合に滑稽の材料として使はれる。其の他普通の論文などに戦争上の言葉の用ひられるのも時節柄の流行である。ボンバードメント(砲撃)ブロッケーデイング(港灣封鎖)ポットリング、アップ(港口に栓をする)リニアリング、オーブ、一、ゼ、マイン、フールド(水雷區域に誘ふ)等が其の例である。

○誰れしも外國人の名の長いのは覺えにくいものであるが、今度の日本の將軍には短い名の人が多いので記憶し易いと言つてゐる。東郷、瓜生、黒木、奥など、皆さうである。殊に東郷といふ名は英語に綴つて、ツー、ゴー、即ち「行く」といふ意であるため、色々の地口の種子にもなつてゐる。「東郷司令官」はなせ勝つか、ツー、ゴー司令官(進行司令官)だからさといふやうな謎もある。

○今までの我が戦跡の、あまりに花々しいので、世間一般の態度は、褒める、喜ぶといふよりも、驚嘆に近づいてゐる。新聞紙などは、あらゆる激賞の言葉を用ひ盡くして、最早言ふことが無いといふ氣味である。蓋し英國が日本の戦捷を自分の事のやうにして喜ぶといふは、政治上の外、いろ／＼の意味があらう。例へば海軍が勝つたといへば、其の海軍は自國を模範としたもので、自國海軍の勝れてゐるのを證するに當たること。自分の弟子の手柄をするやうなものであること。また陸軍が勝つたと言へば、お前が海軍で世界一なら、おれは陸軍で世界一だと角つきあひでゐた露西亞が、其の世界一といふ估券を失ふこと。また今まで日英同盟を、旦那が下女の手でも引いてあるくかのやうに笑つてゐた大陸諸國に對し、同盟國の誠に立派なものであつたことを示して面を起こすといふこと。此等は隠さ

んとしても隠されざる英國人の喜悅の源であらう。
 ○日本兵の全く死を恐れざる勇氣は、西洋の人をして殆んど不思議の念を起こさする様であるが、其の紀律を維持する力、軍略の精妙等は、延いて日本人の腦力の從來普通に解せられてゐたよりも遙に秀拔であることを證據立てたものゝ如く、また其の武器、火藥等の發明によつて、更らに日本人は單なる模倣者應用者たるに止まらず、發明創作の力に於いても歐米に何の遜色あるものならずといふことが一般に認められんとしてゐる。
 ○されば今回の戦争は種々の方面からして、歐米人をして、日本を知らんとするの念を一層切ならしむるの結果となる。精神上にも何か新しい非常なものを此の不思議な東洋の島國から見出ださうといふ豫期となる。是れが我が國の自覺と相待つて、將來の我が國を

あらゆる方面から向上せしむるの縁となることは疑ひあるまい。
 ○めでたく此の戦争に勝ち了すれば、其れが爲め我が國民的自覺を呼び起こすの大なること、日清戦争の比ではあるまいが、それと共に、ジンゴイズムの増上慢も、恐るべき弊であらうとは、此の國の人々が心配する所と見える。敵黨の覘つてゐる隙も、此の邊にあるらしい。
 先頃倫敦で日本の柔術家の谷君とかいふのが、英國で有名な角力家の某と賭の大勝負を試み、見事に勝つて、世界で何人といふチャムピオンになつたが、時節柄ではあり、日本の柔術といふものは、疾くから西洋人間に評判のものであるため、何れの新聞もこのたびの戦争に因みを持たせて盛んに書き立てた。中に某新聞は、其の記事の末に斯ういふ事を附加した、自國のチャムピオンが負けたのに對し、勝つた方の日本人を見物が狂氣のやうになつて、あれ程までに喝采するとい

ふことは此の英國人より外出來ない業であらう。それを何ぞや、おれの勝つのは初手から分かつてゐる、とてもいふ風に、ろく／＼頭も下げなかつた、是れは勿論此の國で凡ての演技者が公衆の喝采を受納する方式から言つたので事實も針小棒大の中傷なることは明らかであるが、つまり何かに寄せて日本にけちをつけんとする露黨の筆法など思ひ比べて、谷君の人氣を毒せんとする此の讒誣が、時節柄ちよつと注意を惹いた。

○英國新聞の外國に對する開戦以來の調子を顧みるに、初めは随分思ひ切つて露西亞の負け方などを嘲罵し、併せて其の同盟國たる佛蘭西にも、とぼしりを及ぼす氣味であつたが、段々時局の進むと共に國際の神經が過敏になるにつれ、戦渦が歐洲にまで廣がり、はすまいかといふ恐れから、佛と英との仲は申し合せたやうに調子がおとな

しくなり、續いて夫の埃及事件の條約など取り結ばれるに及び、茲に全く此の兩國だけは綺麗事を言ひ合ふ關係となり、互に痛い物に障るやうな態度で、所謂歐洲平和の擔保者といふ地位を持ち固めてゐる。

○露西亞に對する英國民の態度も始めは右の如く烈しかつたが、中程から一二度變つた。其の理由は微妙な國際上の事であるから、斷言は出來ぬが、我等門外からの見によると、露西亞が當初こそ鬼百合の天目に傲る勢ひで強がつてゐたが、段々不幸の續くため、心細く感じて、英國に對し幾らかしほらしくなつて來たのが一理由であらう。日本に傷けられた口惜さの毒炎をおとなしい英國の上に吹きかけ、／＼して、自から慰めてゐた露國が、夫の仁川負傷者保護の禮などを、きツかけに、哀訴的、調和的の氣配を見せはじめた。さうなると英國

人の事であるからぐつと料簡して此方も無用の喧嘩は賣らぬ。而して此の傾向の頂上は、一時盛んであつた英露接近の噂となり、英皇仲裁の噂となつた。尤も英皇仲裁の噂については、獨逸が拵へたのだとか、露國最負の二三の英國政治家が目論だのだとか、種々説はあれど、兎に角之れが右の傾向に關連して世に行はれてゐたことは明かである、然るに何ういふ動機からか露國は過般かの激烈な通牒を發して、如何なる事情ありとも日露事件に第三國の容喙は許さぬと斷言した。是れが英國の一派には少からぬ不快の感を與へて、引きつゞき鴨綠江の大敗以後、露國を譏る調子が跡もごりの様子である。○最近はまだ更に日露の接近といふことが稍々人の注意を惹きかけてゐる。古來戦争は國と國とを敵對せしめずして却つて相親しましむる縁となつてゐる。日露の間も、近時露國が漸く日本を知

つて來ると共に、一種の通路が開けかゝつて來た。戦後の日露は却つて同盟しはすまかといふやうな豫測を下すものもある。○英國とても場合によつては露國と近づくのはたやすいやうに見える。英國が目下最も遠ざかつてゐるのは獨逸であらう。此の兩國民は妙に仲が悪い。併し外交などいふものは、門外の我等から見れば、丸で娘ツ子のせり合ひを見たやうなものだ。何時ごんな變が起こるか分かつたものでは無い。○開戦後の露黨の立ち場は、専ら白人と黄人との争ひといふ點に存してゐる。歐洲國中の歐洲國たる此の佛蘭西などが、何で黄人などの肩を持てるものか、といふやうな事を放言してゐるのは佛である。彼等が英國に對して皮肉をいふのも此の筆法である。英國をして、白人中の裏切り者、いち悪者といふ地位に立たしめ、みづから顧みて

きまりわるくいや氣のさすやうな境遇に陥いらしめんとするのが、敵黨の手であらう。併し英國人みづからは、文明進歩の身方が常に自分等の身方で黄色白色といふ如き感情ばかりでは、自分等を動かすに足らぬと言つてゐる。

○たゞ併し支那が目醒まし、印度が目醒まして、其所の英領が危くなるといふやうな事があつたら何うすると問はれると、彼等の心の底に一種言ふべからざる矛盾を感じる、即ち今日英國の政治問題の中央點たる殖民地政策に感觸する來るから、彼等は成るべく之れを論ずることをすら避けんとする。要するに「黃禍」といふ中に、此の一點だに含まれてゐなかつたならば、英國人が容易に黃禍説に動かされる恐れはあるまい。

○英國人が露西亞を批難する中には、普通露の滿洲撤兵に關する食言滿洲を世界の商業より封鎖せんとする不都合等の外、露國の政體其のものに對する厭惡が一つの理由となつてゐる。是れは露國の膨脹的野心其のものを根本から是認せんとする一派の論に對して、彼等の主張する所である、此の露國の野心すなはち強大の國が弱小の隣地に膨脹するのは、歴史の發展上まことに已むを得ぬことで、露國が不凍港を亞細亞海岸に求めに出たのは當然であるといふ議論は、じばく耳にする。

○ユニオンと言つて、當牛津大學の書生教職員など相寄つて組織してゐる政治上の討論會がある。古來有名の政治家に茲で腕をねつた者も多いが、さる第一海戦のすぐ後、露西亞の東洋政策は是認すべしといふ動議が此の會に提出せられた。時が時であるから、結果は勿論百票に對する二十幾票といふ相違で否定の方が勝ちを制

したれど、是認黨の重なる理由は右の、當然の野心といふことで、それなら、日本も當然の野心で之れを拒ぎ止めるのだといふと、併し露西亞は文明擴張のために其の權利を有してゐるが、日本はさうでないといふことで、双方とも随分皮肉なことを言つて、日本と露西亞との惡口競をしたが、結局露西亞の膨脹はやがてオートルクラシー(專制政治)ビエロクラシー(官僚政治)の膨脹であるから、英國人は之れを文明の擴張として同感することは出来ぬといふに歸した。是れ蓋し一般の世論を代表したものであらう。

○保守黨が日本最負で自由黨が露西亞最負と一概には決して言へぬが、たゞ目下此の國での重だつた露西亞最負の個人や新聞は多く自由黨側であるとはいへる。普通の社會では色々複雑の感情や干係からして、日本最負ともなれば、露國最負ともなる。但し數の上か

ら言つて、非日本の傾向を持つたものゝ遙かに少ないことは明かである、社交の間などでも、それと見える人に逢ふことは極めて稀れである。(勿論たまには日本人と見てお世辭に本性を隠してゐるものもあらうが)。海戦のはじめ頃、さる茶會の席で、日本の戦捷の噂が出ると、一人の中年増の婦人が、陸戦はさうは行きますまいよと言つてツンとした。恐らく此れなどが優しいプロ、ルシアン例であらう。それかと思ふと、一方では、宅ではあの晩父の發議で日本のために祝杯を挙げましたなど話してゐる娘もあつた。

○政客で有名な露國黨は、『評論之評論』主筆ウヰリアム、トーマス、ステッド及び國會議員のヘンリー、ノーマン、此の二人は共に今回も露帝に謁見なごして、平和會議とか英皇の干涉とか、色々の目論見をやつてゐた。兩人とも現政府反對側で、以前「ベル、メル、ガゼット」、「デーリー、ク

ロニクル」等自由黨の新聞に關係してゐたことなども似てゐる。南亞戰爭の時はツランスヴールに同感して、プロ、ボア即ちボア最負の賞を得、今回は露國に同感してプロ、ルシアンシヤンの稱を得た。而して今や更らに西藏チベットに同感するプロ、ラマといふ名が生せんとしてゐる。是れも同じ傾向の人々に屬する。勿論其れが一貫の主義信仰であるなら、是非の斷はおのづから或る他の標準に待つべきであらうが保守黨側の固い家などでは、如何なる場合にも自國の敵に組せよといふのが此の派の人の信條であらうと、苦い顔をする。問題は動機に歸することだ。

○英國の新聞で目下最も著しく露臭を帯びてゐるのは、朝刊で『モーニング、リीडァー』夕刊で『ベル、メル、カゼット』次ぎに政見上といふよりは、むしろ廣く平和を貴んで戰亂そのものを惡むといふ態度で其の實偏狹な見解から折々日本に冷い手を觸れるのは、『デーリー、ニウス』また『デーリー、クロニクル』は近來調子が日本に近くなつて來たが、まだ何ちらとも言へない。尤も是等は却つて公平なのかも知れぬ。而して以上は何れも現政府反對の自由黨側である。序にいふが、右の『ニウス』と『クロニクル』とはつい近頃紙幅を縮めて一片賣を半片に値下げした。日露事件から離れていへば、『ニウス』は稍文學新聞の氣味で、『クロニクル』はしまつた新聞である。

○倫敦の大新聞は『タイムス』の三片及び他の一片(四錢位)の新聞である。併し前言つた『ニウス』と『クロニクル』との値下げのため『タイムス』は言ふに及ばず、目下の一片新聞は残らず政府方で日本最負である。『デーリー、テレグラフ』は中でも殊に際立つた日本黨で、先頃死んだサー、エドウヰン、アーノードも此の新聞に關係してゐた。方面は猶

四七〇
太人及び廣く實業界に行きわたる新聞である。此の社の戦争通信員で今東京にゐるパーレー君といふのは、最も當地で評判のよい人である。また「モーニングポスト」は上流社會に廣く讀まる新聞である。是れには戦争評論記者として高評のウヰルキンソン君といふのがゐる。日本人の意見をも日々載せてゐる。「スタンダード」は中流の讀者を多く持つてゐて、他の保守黨新聞に比して、公平といふことを稍餘計に持たんとしてゐるらしい。随つて活氣が少なく不平をいふ讀者もある。無論戦争に關して日本の爲に盡くす。以上が一片の大新聞である。また「タイムス」には無線電信の黄海通信が出て、評判である。

四七一
○半片新聞では保守派の「デーリーメール」折々浮と信じられぬ種子もあるといふ話だが、併し一方に非常に機敏な所のある、且つ面白みのある新聞である。社會の下層から中層にかけてひろく行きわたる、或る人がこの「メール」を評して「大底の人がセンサーシヨナル(刺戟的)だと悪くいふが、併し大抵の人が讀んでゐる」といつたのは、蓋し適評であらう。今戦地にゐるマッケンジー君といふ此の社の通信員はなかく敏腕との世評である。夫の仁川沖で英艦長が他の佛伊艦長と連署して瓜生氏の露艦處分に威嚇がましい抗議を申込んだといふ噂を論説で評して、事實なら同盟國たる日本に氣の毒であるから、右の艦長を取調べて是非を明かにすべしと論じたのは此の新聞一つしかない。論の當否は知らずとするも、こゝまで肩を入れてゐることが分かる。次には「デーリーエクスプレス」是れは「メール」と兄弟の如き體裁を具へて、おのづから競争してゐる。政見は反對であるが、日本に力を入れることは同じである。是れに前言つた露西

亞最負の「モーニングリーダー」を加へて、半片新聞の三幅對と見てよ

い。
○日本軍の爲めに歌ふものは無いか、キプリングは何うしてゐる、なごいふものもあるが、まだ文學といふほどのものに此の戦争のはいつたのは見受けぬ、但し通俗雑誌の續物小説などには屢々之れを見る、其のほか單に日本に關した記事、繪畫等が種々の雑誌類に出でることば夥しい。殆んど如何なる雑誌にも一つ二つづゝ此の類のものゝ載つてゐぬことは無い。例のドーグラス、スレーズン君などいふ、恐縮の日本通なども、なかなかの流行つ兒になつた。畫葉書にも日露事件のポンチ畫藝妓の化粧、文身を見せた裸躍、アイヌ風俗等より將校政治家の肖像に至るまで、さまざまのが出来た。日露戦争記の定期刊行も二三種ある。各種の畫報雑誌は大半戦争で持ち切

つてゐる。日本に關した書物が再版になつて新たに店頭を并ぶ。錦畫張などの華手な日本の日傘を、若い美しい女が盛んにさす。夕刊新聞の、びらに「旅順陥落」と大きく書いて下に小さく「噂」と書けば、目たくく間に其の新聞が賣り切れてしまふ。夫の「日本軍艦四艘旅順沖に沈没」と夜間に呼んであるいた時などは、騒ぎであつた。
○終りに臨んで、日本の軍器をナポレオンに近づくと激賞し、今回の戦争を、新國民の將さに興らんとする歴史上の壯觀なりとするたぐひ、皆以て自家が反省の料となるのは言ふまでもないが、他に精神的にも、自家を知るに足るべき反射をしばゝ、此等の通信員や記者が我等の上に投げかける。たとへば、通信員の或者が日本に来て第一に感じたのは日本人の性格の不思議といふこと。尤も東洋人の性は西洋人には解すべからずとは前から言ふことであるが、是れは

疑ひも無く感情を隠す場合多きを特長とする東洋道德の表面に觸れたものである。苦しいときに笑ふ若し其の一重奥にある綜合點を擲むことが出来なかつたら日本人の性格は凡て矛盾とも見えやう。日本人不可解説は此の矛盾點まで達した見かたである我等は何で此の矛盾を綜合してゐるか。また或る者は日本人の性格に於いて甚しいエーリシエント(古代)とモダーン(近世)との結合を見るといふ。或は中世のロマンチック(小説的)と現代のプロゼイック(平板的)が不思議に共同してゐるといふ。日本人の前には歴史といふことが無くなるやうに感ずる。筏に火を點して水雷艇が曳いて行くといふことは西洋人の頭には美しい矛盾である。日本人はたしかに斯かる矛盾性をも有してゐる。元來我等日本人が平生から行つてゐること考へてゐることを總括したら何といふ言葉になるであらう

か。是れが疑問だ。

(明治三十七年五月十二日稿)

凱歌

冒頭第一に申上置候此の手紙は適宜紙上に御出し被下候て、差支無之候。

さて小劍兄足下先般は日本繪葉書の見本も申すべきものゝ由御惠贈を辱うし多謝本場の獨逸にても繪葉書の意匠は目下ちよつと種子切と申して宜しかるべく候是れ一つは餘りに多く出過ぎて最早何れを見ても目馴れて面白からぬが故にも候べし日本も繪葉書流行と申せば今年の正月あたりは例の恭賀新年に住所姓名のみを黒々と活字にて植ゑ込みたる智慧の無き無用無趣味の葉書の取り遣りは餘程減じ候事と察し上げ候。

此の地の事どもは行く例の新小説にて御意を得べく候、來伯以來已に半年多少は材料も集り候へど、歸期の漸く迫ると共に心忙しきことのみ多く候、英國の事もまだあれ丈にては物足らずと申越す友人あり、勿論にてあれ等は序にも足らず、尙ほ大いに書く所存に候、只當夏より中休み致し居るのみに候。

獨逸は感心なる國なれど、いやな國たるを免れざるやうに候。

目下の戦争に關する、獨逸の中下層の同感、日本に向かひ居れりとは、此の國のもの自らも申す事に候へど、是れは只俗に人氣ありと申す、其れだけの意味に過ぎず候、勿論事情も異なれど、是れを英國人の同感と申すことと同一に見たらば、大間違と存候、併し兎も角も、日本人々々々と囃し立て候だけの範圍にて申さば、それも憎からぬ人情に候べし。

旅順陥落の報は何と申しても、大變の騒ぎにて候ひき、天下を震動せしむるとは、先づあれらの事に候べし、一月二日の正午には、早や新聞紙の號外にて、市中残らず此の噂さに埋もれ居り候ひき。

一月十日は旅順にも凱陣の宴ありと申すに、此の地在留の野田貞川名兼四郎、鈴木梅太郎の諸君發起人となり、同日城西サギニー、プラツクの一亭に、在伯林日本人有志者の祝賀會開かれ申候、會する者四十人に、垂んとして、人々が中心より國の爲に歡喜するの情は、おのづから其の會の模様に見はれ、非常の盛況と見うけられ候、一同陸海兩軍に送るべき賀表の末に署名したる後、杯を擧げ萬歳を唱ふる等、かたの如くありて、終りに、小島少佐の興味ある軍話あり、會は散じ申候、尙當日小生が席上吟唱の料にて、筆を走らせ候もの、詩とも文とも申兼ね候へど、小修を加へて、一粲を博し候。

旅順陥落朗吟歌

(上) 將軍之詞

夕陽に

馬を立てつゝ

見かへれば

あはれ瘦せたり

我が影の

鬢に吹く風

痛ましく

三軍の

將士半ばは

傷つきて

眼を擧ぐれば

西のかた

新塚廢山

限り無し

嗚呼一萬の

子弟斃れて

旅順落つ

此の城取ッて

國のため

今ぞ報ゆる

こゝろざし

されば人々

月の十日は

許せかし

陣に宴の
凱歌の樂は

(下) 凱歌之樂

見よ東海の

曙に

民今興こる

大八洲

八重の若潮

湧きたちて

大風拂ふ

雲の色

晴るゝや亞細亞の

群霧に

朝日子昇る

し

國あり二千
初めて今日の

五百年
歡びや

兵士は銃の
打つよ鼓の
將軍起つて
劍に風雨の

臺尻に
亂拍子
舞ふときは
響あり

嗚呼國興こる

東天の

君が御威を

ことほぎて

山嶽北に

走るもの

來つて茲に

ひれ伏せや

波濤歡呼の

聲を揚げ

天地とどろこ

ごよむ也

目下伯林の氣候、攝氏零下を下ること往々八九度、遙に滿洲の風雪を

思ひやり申候。

小生頑健、貴兄並に諸君子の盛大を祈り上候不宣。

(明治三十八年一月十五日稿、讀賣新聞へ)

滯歐文談 終

5316

明治三十九年七月廿二日印刷
明治三十九年七月廿五日發行

滯歐文談
定價金八十五錢

版權
所有

著者 島村瀧太郎

發行者 和田むね丸

印刷者 金澤求也

發行所 春陽堂

印刷所 東京印刷株式會社

東京市日本橋區通四丁目五番地
東京市日本橋區兜町二番地
東京市日本橋區通四丁目角
電話本局五十一番



行發日一同一月每

新 小 說

錢五拾貳金價買

およそ此の廣告を見たまはむほどの人、文學の意義、美
術の趣味を知りたまはむはなかるべし。もしそれ日の出
づる處に住むで、小説の何なるかを知らざらむは、沐猴
にして冠するもの歟。新小説は豈なる意味を以てして、
文壇の歌舞伎座なり。世の花は露に、仁義を離らして、
凡そ色香の儘しき、心の嬌しき、姿容の美しき、一ツと
してなきはあらず、然も海洋の浪きを漕へ、山岳の高き
を仰ふ、佳人が常住の鏡、紳士が不離の侶伴、これに若
くもあるべからず。月を見よ、其の影圓に満たずして、
明き浮世を照らすや。月の朔日月々の一冊、取つて手
に懸れたまふに、清光輝に浴びて、芳香袖に纏那た
らむ、巻を開けば、月輪の影、捲き三百枚。

春陽堂發行



抱月、宙外
青々園
合著
風雲集

60.SEN

強風來て雲を生子白
雲散して微風來る抱月
氏宙外氏青々園氏の口
角より生ずる強風黒雲
は收めて風雲集にあり

65

5316

b

